公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第568集

堤　遺　跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査（その3）報告書

2013.3

国　土　交　通　省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

堤　遺　跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査（その3）報告書

二〇一三・三

国土交通省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第568集

堤　遺　跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査（その3）報告書

2013.3

国　土　交　通　省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

5号住居跡出土縄文土器

序

東京日本橋を起点とする国道17号は、江戸時代の中山道と三国街道の機能を引き継いで、首都圏と群馬県・新潟県とを結ぶ幹線国道です。近年の沿道地域の発展と物流の増加に伴い、その機能強化が求められ、埼玉県深谷市の深谷バイパス上武インターチェンジから伊勢崎市、前橋市を経由する「上武道路」として整備されてきました。現在、前橋市上細井町まで開通しているこの道路用地内には数多くの遺跡が所在し、その発掘調査の成果につきましては、報告書を公にしてきたところです。

このたび本書で報告します堤遺跡は、一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として国土交通省からの委託を受け、当事業団が平成20年４月から約半年間に亘り発掘調査を実施したものです。

この調査により、縄文時代草創期の石槍製作跡、縄文時代後期の集落跡をはじめ、中近世の土坑群が確認されており、赤城山南西麓の古代史を紐解く上で、あらたな歴史資料を提供できたものと考えております。今後、本報告書が郷土の歴史解明や教育の場で活用されることを願ってやみません。

最後に、発掘調査から報告書の作成に至るまで、国土交通省をはじめ群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、ならびに、地元関係者の皆様には多大なご指導、ご協力を賜りました。本報告書の上梓に際して、関係者の皆様に心から感謝を申し上げて、序といたします。

平成25年３月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理　事　長　　須　田　榮　一

例　　言

1．本書は、一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その３)による、堤遺跡の発掘調査報告書である。

2．堤遺跡は、群馬県前橋市勝沢町923、924、925-1、926、927-1、928、929-1、930-1、975-2、976-2、979、980-1、930-2、981、982-1、小神明町367、370、372、374、377、378、380、381、上細井町1614-2、1616、1618-2、1619-2、1624-2、1625、1625-1、1629、1630、1631、1632-1、1632-2、1634、1636-1、1636-2、1636-3、1651、1653-1、1653-2、1684-2、1677-1、1677-4番地に所在する。

3．事業主体　国土交通省関東地方整備局高崎河川国道事務所

4．調査主体　公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(平成24年４月１日以前は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団)

5．整理主体　公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

6．発掘調査の体制と期間は次のとおりである。

平成20年度　中隆之(専門員(主任))

大塚智央(調査研究員)

遺跡掘削請負工事：須賀工業株式会社

地上測量及び空中写真撮影：技研測量設計株式会社

履行期間　平成20年4月1日～平成21年3月31日

調査期間　平成20年4月1日～平成20年11月4日

調査面積　8737㎡

7．整理事業の体制と期間は次のとおりである。

整理担当　岩崎泰一(上席専門員)

履行期間　平成24年4月1日～平成25年3月31日

整理期間　平成24年4月1日～平成25年3月31日

8．本書作成関係者

編集・執筆　岩崎泰一、石守晃(第５章、第４節)

デジタル編集　斎田智彦(主任調査研究員)

遺構写真　発掘担当者　　遺物写真　佐藤元彦(補佐(総括))

遺物観察表執筆

縄文時代の土器　谷藤保彦(上席専門員)　　縄文時代の石器　岩崎泰一(上席専門員)

平安時代の土器　桜岡正信(上席専門員)　　中近世の陶磁器類　大西雅広(上席専門員)

保存処理　関邦一(補佐(総括))

9．発掘調査および報告書の作成にあたり、群馬県教育員会事務局文化財保護課、前橋市教育委員会管理部文化財保護課の指導と助言を得た。

10．発掘調査の記録資料と出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

凡　　例

1．本文中で使用した方位は、すべて国家座標(国家座標第Ⅸ系)の北を用いた。調査区はX＝46,910～46,970、Y＝－65,700～－65,860の範囲に収まる。

2．遺構平面図や遺構断面図に示した数値は標高であり、単位はメートルである。

3．遺構平面図や断面図、遺物実測図の縮尺は各図に示したとおりである。遺物写真の縮尺は実測図と同一の縮尺を原則とした。また、写真のみ掲載した遺物についてはその縮尺率を(　)内に記した。

4．遺物番号は下記のとおり番号を付した。

草創期石器群：1～通し番号、　　縄文時代住居・配石：遺構毎に1～通し遺物番号

縄文時代土坑出土の土器：1～通し番号、　縄文時代土坑出土の石器：1～通し番号、

縄文包含層出土の土器：1～通し番号、　　縄文包含層出土の石器：1～通し番号

平安時代以降の遺構：遺構毎に1～通し番号

5．本書に使用したスクリーントーンは、次のことを示す。

遺構図　　炭・炭化物　　焼土　　砂礫層　　撹乱

6．遺構の主軸方位・走行は北を基準とし、東に傾いた場合N－○°－Eとした。また、縄文時代住居の床面積はプラニメーターで3回計測し、その平均値を採用した。調査区外に広がる遺構については現状の値を(　)内に記した。

7．縄文時代の石器・石材については、以下の通り略記した。

打製石斧：打石　　加工痕ある剥片：加工痕　　スタンプ形石器：スタンプ

磨製石斧：磨石　　使用痕ある剥片：使用痕

黒色頁岩：黒頁　　チャート：チャ　　粗粒輝石安山岩：粗安　　ホルンフェルス：ホルン

珪質頁岩：珪頁　　黒色安山岩：黒安　　細粒輝石安山岩：細安

8．遺物観察表の記載法は、下記のとおりである。

・石器計測値の(　)は現存値を示す。

・土器観察表については、口径：口　　底径：底　　器高：高、と略記した。

9．本書で採用した遺物の表現法は、下記のとおりである。

・刃部摩耗については縦位定規線、着柄部と想定される部分の摩耗については横位定規線で図示した。

・磨石等の摩耗範囲については縦位定規線で示し、磨製石斧等線条痕の分かるものについては線条痕の方向を定規線で表現した。

・縄文時代の繊維土器については、断面に●印を付した。

・写真図版中の遺物は図版掲載サイズと同縮尺である。縮尺率が異なる場合、その縮率を(　)に記した。

10．下記の遺構については形状・位置等を総合的に検討して遺構から除外、遺構名を変更した。

・A区7号土坑、B区7・18・21・47・52号土坑、C区9・24号土坑、A区Pit 3・6・7(欠番)

・旧2号焼土→8号住居炉1、旧6号焼土→8号住居炉2、旧3号埋甕→8号住居埋甕、旧3号焼土→9号住居炉(変更)、旧C区9土坑→3溝(変更)

11．本書に掲載した地図は、下記のとおりである。

国土地理院　1：25000地形図「前橋」「大胡」「渋川」「鼻毛石」　1：50000地形図「前橋」

1：200000地形図「宇都宮」

前橋市現況図1：2500

目　　次

口絵
序
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
写真目次

第１章　調査に至る経過
第１節　上武道路について……1
第２節　上武道路と埋蔵文化財……1
第３節　調査に至る経過……2
第４節　調査の方法と経過……4

第２章　遺跡の概要
第１節　遺跡の地理的環境……7
第２節　周辺遺跡……9
第３節　基本土層……13

第３章　検出された遺構と遺物
第１節　縄文時代の遺構と遺物
１．草創期石器群……17
２．竪穴住居……33
３．土坑……88
４．その他の遺構……107
５．旧河道跡の調査……113
６．包含層出土の遺物……116
第２節　平安時代の遺構と遺物
１．概要……133
２．竪穴住居……133
３．溝……135
第３節　中・近世の遺構と遺物
１．概要……137
２．竪穴状遺構……138
３．火葬跡……142
４．井戸……144
５．溝……145
６．土坑……146
７．ピット……146
８．遺構外出土の遺物……149

第４章　自然科学分析
第１節　火山灰分析……150
第２節　堤遺跡出土火葬人骨……157

第５章　まとめ
第１節　草創期石器群について……160
第２節　柄鏡形敷石住居について……163
第３節　扇状地地形と遺跡分布……168
第４節　中世遺構について……174

遺物観察表……177
写真図版
報告書抄録
奥付

付図　堤遺跡全体図(1:200)

挿図目次

第１図　上武道路と遺跡の位置
国土地理院発行1/200000地勢図「宇都宮」平成18年発行を縮小して使用
第２図　上武道路８工区の遺跡
国土地理院発行1/50000地勢図「前橋」平成10年発行を使用
第３図　堤遺跡調査区周辺図
（前橋市役所発行1/2500分の1前橋市現形図（平成21年測図）を使用）
第４図　上部道路調査測量グリッド設定図
国土地理院1/25000地形図「前橋」「大胡」平成22年発行、
「渋川」平成14年発行、「鼻毛石」昭和56年発行を使用
国土地理院発行1/25000地形図「前橋」平成10年発行を使用
第５図　遺跡の位置と周辺地形
国土地理院発行1/25000地形図「前橋」「渋川」平成14年発行を使用
第６図　遺跡分布図
第７図　遺跡の基本土層１(台地部)
第８図　遺跡の基本土層２(低地部)
第９図　遺跡周辺試掘トレンチ配置と土層堆積
第10図　草創期石器群の分布
第11図　草創期出土石器(１)
第12図　草創期出土石器(２)
第13図　草創期出土石器(３)
第14図　草創期出土石器(４)
第15図　石器の分布状態１(北側分布域、１～３号ブロック)
第16図　石器の分布状態２(南側分布域、４号ブロック)
第17図　石器の分布状態３(南側分布域、５号ブロック)
第18図　石器の分布状態４(南側分布域、分布域ａ・分布域ｂ)
第19図　石材別分布図１(北側分布域)
第20図　石材別分布図２(北側分布域)
第21図　石材別分布図３(南側分布域)
第22図　石材別分布図４(南側分布域)
第23図　石材別分布図５(南側分布域)
第24図　縄文時代遺構の分布状況
第25図　１号住居跡遺構図(１)
第26図　１号住居跡遺構図(２)
第27図　２号住居跡遺構図(１)
第28図　２号住居跡遺構図(２)
第29図　４号住居跡遺構図
第30図　５号住居跡遺構図(１)
第31図　５号住居跡遺構図(２)
第32図　５号住居跡遺構図(３)
第33図　５号住居跡遺構図(４)
第34図　５号住居跡遺構図(５)
第35図　５号住居跡遺構図(６)
第36図　５号住居跡遺物の接合状態(１)
第37図　５号住居跡遺物の接合状態(２)
第38図　５号住居跡遺物の接合状態(３)
第39図　６号住居跡遺構図(１)
第40図　６号住居跡遺構図(２)
第41図　７号住居跡遺構図
第42図　８ａ・ｂ号住居跡遺構図
第43図　９号住居跡遺構図
第44図　10号住居跡遺構図
第45図　11号住居跡遺構図
第46図　１・２号住居跡出土土器
第47図　４・５号住居跡出土土器
第48図　５号住居跡出土土器(１)
第49図　５号住居跡出土土器(２)
第50図　５号住居跡出土土器(３)
第51図　５号住居跡出土土器(４)
第52図　５号住居跡出土土器(５)
第53図　５号住居跡出土土器(６)
第54図　５号住居跡出土土器(７)
第55図　５号住居跡出土土器(８)
第56図　５号住居跡出土土器(９)
第57図　５号住居跡出土土器(10)
第58図　５号住居跡出土土器(11)
第59図　５号住居跡出土土器(12)
第60図　５号住居跡出土土器(13)
第61図　５号住居跡出土土器(14)
第62図　５号住居跡出土土器(15)
第63図　５号住居跡出土土器(16)
第64図　５号住居跡出土土器(17)
第65図　５号住居跡出土土器(18)
第66図　５号住居跡出土土器(19)、６・７号住居跡出土土器
第67図　８・９号住居跡出土土器
第68図　９・10・11号住居跡出土土器
第69図　１号住居跡出土石器
第70図　２・４号住居跡出土石器
第71図　４・５号住居跡出土石器
第72図　５号住居跡出土石器(１)
第73図　５号住居跡出土石器(２)、６・９・10号住居跡出土石器
第74図　７・11号住居跡出土石器
第75図　土坑(１)
第76図　土坑(２)
第77図　土坑(３)
第78図　土坑(４)
第79図　土坑(５)
第80図　土坑(６)
第81図　土坑(７)
第82図　土坑(８)
第83図　土坑(９)
第84図　土坑出土土器(１)
第85図　土坑出土土器(２)
第86図　土坑出土土器(３)
第87図　土坑出土土器(４)
第88図　土坑出土石器(１)
第89図　土坑出土石器(２)
第90図　土坑出土石器(３)
第91図　土坑出土石器(４)
第92図　ＢＫ１・２号焼炉,ＢＫ１・４・５号焼土遺構,Ｃ区１号焼土遺構遺構図
第93図　ＡＫ１号集石・ＢＫ１号配石・ＣＫ１号配石遺構図
第94図　ＢＫ１・２号埋甕炉出土土器
第95図　ＢＫ５号焼土遺構出土土器,ＣＫ１号配石出土土器,ＢＫ１号配石出土石器
第96図　Ｂ・ＣＫ１号配石出土石器
第97図　旧河道
第98図　旧河道上面出土の土器
第99図　旧河道の土層堆積状態
第100図　包含層出土剥片類の石材別構成比
第101図　包含層出土打製石斧の長幅比
第102図　包含層出土礫石器の長幅比
第103図　包含層出土の土器(１)
第104図　包含層出土の土器(２)
第105図　包含層出土の土器(３)
第106図　包含層出土の土器(４)
第107図　包含層出土の土器(５)
第108図　包含層出土の土器(６)
第109図　包含層出土の土器(７)
第110図　包含層出土の土器(８)
第111図　包含層出土の土器(９)
第112図　包含層出土の土器(10)
第113図　包含層出土の土器(11)
第114図　包含層出土の石器(１)
第115図　平安時代遺構の分布状況
第116図　３号住居跡遺構図・出土遺物
第117図　１号溝
第118図　３号溝・出土遺物
第119図　中・近世遺構の分布状況
第120図　１号竪穴状遺構
第121図　２・３号竪穴状遺構
第122図　４号竪穴状遺構
第123図　５号竪穴状遺構・出土遺物
第124図　６号竪穴状遺構・出土遺物
第125図　１・２・３・４号火葬跡
第126図　１号井戸
第127図　２・４号溝
第128図　中近世の土坑(１)
第129図　中近世の土坑(２)、ピット
第130図　遺構外出土遺物
第131図　火山灰分析サンプル地点
第132図　Ｂ区深掘り地点(99814杭脇)の土層柱状図
第133図　Ｂ区調査区北壁西地点(98014杭脇)の土層柱状図

第134図　B区調査区北壁中央地点の土層柱状図
第135図　B区調査区北壁(北東隅291.5m西)の土層柱状図
第136図　B区埋没谷の土層柱状図
第137図　燃糸文土器包含層相当の土壌資料(№2)と比較土壌資料
(№6,10)のEDXRFスペクトル(Na～Sc)
第138図　燃糸文土器包含層相当の土壌資料(№2)と比較土壌資料
(№6,10)のEDXRFスペクトル(Ti～U)
第139図　B区1号火葬跡平断面図[1/40]
第140図　B区2号火葬跡平断面図[1/40]
第141図　B区3号火葬跡平断面図[1/40]
第142図　B区4号火葬跡平断面図[1/40]
第143図　県内遺跡出土の草創期石斧
第144図　県内遺跡出土の草創期石鏃
第145図　周礎を有する全面敷石した住居(周礎考敷東部田地遺跡J6号住居跡)
第146図　5号住居跡出土縄文土器の垂直分布図
第147図　白川扇状地の地理的地形
第148図　白川扇状地の地形断面
第149図　縄文時代遺跡の分布
第150図　弥生～平安時代遺跡の分布
第151図　B区・中世方形区画想定図

表　目　次

第1表　上部遺路8工区調査遺跡一覧表
第2表　周辺遺跡一覧表
第3表　草創期石器群の器種石材構成1(全体)
第4表　草創期石器群の器種石材構成2(撹乱・表土)
第5表　剥片類の重量別構成比
第6表　北側分布域の器種石材構成
第7表　南側分布域の器種石材構成
第8表　器種石材構成(ブロック別)
第9表　住居別に見た器種石材構成
第10表　土坑計測値一覧表
第11表　土坑出土遺物一覧表(石器)
第12表　包含層出土石器の器種石材構成
第13表　中近世土坑・ピット計測値一覧表
第14表　テフラ検出分析結果
第15表　EDXRF法(半定量)による燃糸文土器包含層相当の土壌資料
(№2)と比較資料(№6,10)の化学組成
第16表　扇状地の地形変換点と勾配率
第17表　草創期石器計測一覧表
第18表　住居出土縄文土器観察表
第19表　住居出土石器観察表
第20表　土坑出土縄文土器観察表
第21表　土坑出土石器観察表
第22表　その他の遺構出土縄文土器観察表
第23表　その他の遺構出土石器観察表
第24表　旧河道跡出土縄文土器観察表
第25表　旧河道跡出土石器観察表
第26表　遺構外出土縄文土器観察表
第27表　遺構外出土石器観察表
第28表　3号住居出土遺物観察表
第29表　3号溝出土遺物観察表
第30表　5号竪穴状遺構出土石器観察表
第31図　6号竪穴状遺構出土金属製品観察表
第32表　遺構外出土遺物観察表
第33表　遺構外出土石器観察表

本文写真目次

写真1　11号住居跡から逆位で出土した深鉢
写真2　B区1号火葬跡全景[南から撮影]
写真3　B区2号火葬跡全景[南から撮影]
写真4　B区3号火葬跡全景[南から撮影]
写真5　B区4号火葬跡全景[南から撮影]
写真6　5号住居跡周礎の確認状況1(南から)
写真7　5号住居跡周礎の確認状況2(北～東壁)
写真8　5号住居跡周礎の確認状況3(南～西壁)
写真9　Pit2周辺の周礎検出状況1
写真10　Pit2周辺の周礎検出状況2
写真11　Pit5周辺の周礎検出状況
写真12　Pit6周辺の周礎検出状況
写真13　連結部西側周礎の検出状況(1)
写真14　連結部西側周礎の検出状況(2)
写真15　連結部東側周礎の検出状況

写　真　目　次

PL.1　1　上空からみた赤城白川扇状地1、南東から
2　上空からみた赤城白川扇状地2、東から
PL.2　1　遺跡遠景1、東から
2　遺跡遠景2、南から
3　A1区調査区1
4　A1区調査区2
5　A2区土層堆積(北壁)
6　A1区土層堆積、2トレンチ
7　A1区土層堆積、1トレンチ
8　A1区土層堆積、3トレンチ
PL.3　1　石器の出土状態(北側分布域)1、西から
2　石器の出土状態(北側分布域)2、西から
3　石器の出土状態(南側分布域)1、南から
4　ローム層の堆積状態(グリッド)
5　旧河道跡の確認状況
6　旧河道跡、上位の土層堆積
7　旧河道跡、上位の遺物出土状態
8　旧河道跡、下層の土層堆積
PL.4　1　B区全景
2　1号住居跡、敷石確認状況
3　同、柱穴検出状況、東から
4　同、石囲い炉
5　同、奥壁側敷石と住切り石の検出状況
PL.5　1　1号住居跡、炉周辺の遺物出土状態
2　1号住居跡、張出部の遺物出土状態
3　2号住居跡、敷石確認状況
4　同、柱穴検出状況、東から
5　同、張出部Pit4遺物の出土状態
6　同、張出部Pit4土層の堆積状態
7　4号住居跡、遺物の出土状態
8　同、石囲い炉
PL.6　1　5号住居跡全景
2　同、遺物の出土状態
3　同、炉跡
4　同、箱状石囲い施設
5　同、張出部・住切り石の確認状況
6　同、敷石・周礎の確認状況1
7　同、軽石製石製品の出土状態
8　同、敷石・周礎の確認状況2
PL.7　1　5号住居、Pit2・周礎の確認状況
2　5号住居、Pit2遺物出土状態
3　6号住居跡全景

PL.7 4 同、石囲い炉の裁ち割り調査状況
5 7号住居跡全景
6 同、遺物の出土状態
7 8ａ・８ｂ号住居跡全景
8 同、炉跡１の上層堆積状態
PL.8 1 9号住居跡全景
2 10号住居跡全景
3 1号埋甕炉確認状況
4 2号埋甕炉確認状況
5 B区１号焼土遺構確認状況
6 B区４号焼土遺構確認状況
7 A区１号集石確認状況
8 B区１号配石確認状況
PL.9 1 A区９号土坑全景(東から)
2 B区１号土坑全景(南から)
3 B区２号土坑全景(南から)
4 B区36号土坑全景(東から)
5 C区14号土坑全景(南から)
6 C区22号土坑全景(東から)
7 B区46号土坑全景(北から)
8 B区24号土坑全景(南から)
9 B区４号土坑全景(南から)
10 B区58号土坑全景(南から)
11 B区54号土坑全景(東から)
12 B区12号土坑全景(南から)
13 B区53号土坑全景(東から)
14 A区10号土坑全景(東から)
15 B区５号土坑全景(南から)
PL.10 1 B区８号土坑全景(南から)
2 B区13号土坑全景(東から)
3 B区30号土坑全景(南から)
4 B区32号土坑全景(南から)
5 B区33号土坑全景(北から)
6 B区42号土坑全景(南から)
7 B区11号土坑全景(南から)
8 B区16号土坑全景(南から)
9 B区37号土坑全景(南から)
10 B区35号土坑全景(南から)
11 B区50号土坑全景(東から)
12 B区48号土坑全景(東から)
13 B区49号土坑全景(東南から)
14 C区１号土坑全景(南西から)
15 C区18号土坑全景(東から)
PL.11 1 B区61号土坑全景(南から)
2 C区17号土坑全景(南から)
3 C区４号土坑全景(南から)
4 B区57号土坑全景(南から)
5 B区57号土坑・土層堆積状態(南から)
6 A区８号土坑全景(南から)
7 C区16号土坑全景(南から)
8 B区62号土坑全景(南から)
9 B区60・64号土坑全景(南から)
10 A区斜面部の遺物出土状態
PL.12 1 3号住居跡全景(西から)
2 同、カマド全景と遺物の出土状態(西から)
3 同、掘り方１(南から)
4 同、掘り方２(南から)
5 １号溝全景(南西から)
6 同、土層の堆積状態(南西から)
7 ２号溝全景(南から)
8 同、土層の堆積状態(南から)
PL.13 1 竪穴状遺構の配置状況
2 １号竪穴状遺構全景(西から)
3 ２号竪穴状遺構全景(西から)
4 同、土層の堆積状態
5 ３号竪穴状遺構全景(北から)
6 同、土層堆積状態
7 ４号竪穴状遺構全景(北から)
8 同、南東側コーナー出入口部の土層堆積
PL.14 1 ５号竪穴状遺構全景(北から)
2 同、土層堆積状態(A-A')１
3 同、土層堆積状態(A-A')２
4 ６号竪穴状遺構全景(西から)
5 同、土層堆積状態(西から)
6 同、鉄斧出土状態
7 １号火葬跡全景(東から)
8 同、土層堆積状態(南から)
PL.15 1 ２号火葬跡全景(西から)
2 同、土層堆積状態(南から)
3 ３号火葬跡全景(西から)
4 同、土層堆積状態(南から)
5 ４号火葬跡全景(西から)
6 同、土層堆積状態(南から)
7 １号井戸全景(南から)
8 同、土層堆積状態(西から)
PL.16 1 A区３号土坑全景(北から)
2 同、土層堆積状態(南から)
3 A区１号土坑全景(南から)
4 A区２号土坑全景(南から)
5 B区10号土坑全景(南から)
6 同、礫の廃棄状態(北から)
7 B区26号土坑全景(南から)
8 B区27号土坑全景(南から)
9 B区34号土坑全景(南から)
10 B区26号土層堆積状態(南から)
11 B区27号土層堆積状態(南から)
12 B区34号土層堆積状態(南から)
13 B区19号土坑全景(東から)
14 同、土層堆積状態(東から)
15 C区26号土坑全景(北から)
PL.17 1 A区１号Pit全景(南から)
2 同、土層堆積状態(南から)
3 A区２号Pit全景(南から)
4 A区４号Pit全景(南から)
5 同、土層堆積状態(南から)
6 A区２号Pit土層堆積状態(南から)
7 A区５号Pit全景(南から)
8 同、土層堆積状態(南から)
9 A区９・10号Pit全景(南から)
10 A区８号Pit全景(南から)
11 同、土層堆積状態(南から)
12 A区12号Pit全景(東から)
13 A区11号Pit全景(南から)
14 同、土層堆積状態(南から)
15 A区13号Pit全景(東から)
PL.18 草創期石器(１)
PL.19 草創期石器(２)
PL.20 草創期石器(３)
PL.21 １・２・４号住居跡出土の土器
PL.22 5号住居跡出土の土器(１)
PL.23 5号住居跡出土の土器(２)
PL.24 5号住居跡出土の土器(３)
PL.25 5号住居跡出土の土器(４)
PL.26 5号住居跡出土の土器(５)
PL.27 5号住居跡出土の土器(６)
PL.28 5号住居跡出土の土器(７)
PL.29 5号住居跡出土の土器(８)
PL.30 5号住居跡出土の土器(９)
PL.31 5号住居跡出土の土器(10)
PL.32 5号住居跡出土の土器(11)
PL.33 5号住居跡出土の土器(12)
PL.34 5号住居跡出土の土器(13)
PL.35 5号住居跡出土の土器(14)
PL.36 5号住居跡出土の土器(15)
PL.37 5号住居跡出土の土器(16)
PL.38 6～11号住居跡出土の土器
PL.39 9・11号住居跡出土の土器、１号住居跡出土の石器
PL.40 1・2・4号住居跡出土の石器
PL.41 4・5号住居跡出土の石器
PL.42 5・6号住居跡出土の石器
PL.43 5・7・10・11号住居跡出土の石器
PL.44 土抗出土の土器(１)
PL.45 土抗出土の土器(２)
PL.46 土抗出土の土器(３)、土抗出土の石器(１)
PL.47 土抗出土の石器(２)
PL.48 土抗出土の石器(３)
PL.49 B区１・２号埋甕炉出土の土器
PL.50 B区5号焼土遺構・C区1号配石出土土器、B・C区1号配石出土石器
PL.51 旧河道出土の土器・石器、包含層出土の土器(１)
PL.52 包含層出土の土器(２)
PL.53 包含層出土の土器(３)
PL.54 包含層出土の土器(４)
PL.55 包含層出土の土器(５)
PL.56 包含層出土の土器(６)
PL.57 包含層出土の土器(７)
PL.58 包含層出土の土器(８)
PL.59 包含層出土の土器(９)
PL.60 包含層出土の土器(10)
PL.61 包含層出土の土器(11)、包含層出土の石器(１)
PL.62 包含層出土の石器(２)
PL.63 包含層出土の石器(３)
PL.64 3号住居跡、3号溝、5・6号竪穴状遺構、遺構外出土遺物

第１章　調査に至る経過

第１節　上武道路について

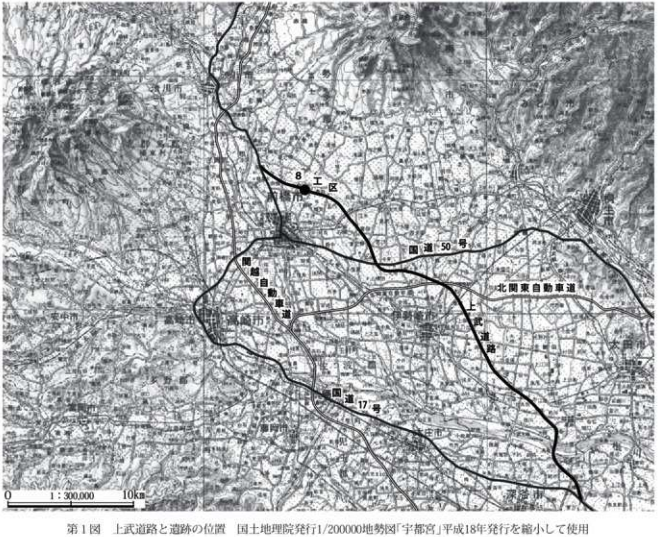
上武道路は一般国道17号の交通混雑に対応するために計画された大規模バイパスで、埼玉県熊谷市で深谷バイパスから分岐、群馬県前橋市田口町で現道に接続する延長40.5㎞の道路である。現道の西には、前橋渋川バイパス、その先には鯉沢バイパス、また計画では上信自動車道が続いて、県北西部の新たな交通幹線網整備事業として期待されている。平成10年には、前橋渋川バイパスを含めて地域高規格道路『熊谷渋川連絡道路』として計画路線の指定を受け、群馬県では『幹線交通乗り入れ30分構想』の中で主要幹線のひとつに位置づけられている。

上武道路の建設事業は、昭和45年度から着手され、平成４年２月までには起点から国道50号までの延長27.4㎞区間が供用された。その後、供用区間が延伸するとともに交通量は増大し、平成元年度に着手された国道50号から前橋市上泉町までの4.9㎞区間（７工区）が、平成20年６月に暫定２車線で供用された。

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（その３）が対象とする８工区は、平成17年度に事業が着手され、平成24年度に主要地方道前橋赤城線までの4.7㎞区間の暫定開通を果たし、全線開通までの最終3.5㎞区間の発掘調査と工事が進められている。

第２節　上武道路と埋蔵文化財

上武道路が通過する地域は、群馬県内でも有数の埋蔵文化財包蔵地の多い地域である。群馬県は、昭和48年に



第１図　上武道路と遺跡の位置　国土地理院発行1/200000地勢図「宇都宮」平成18年発行を縮小して使用

文化財保護室を文化財保護課に拡充して調査にあたり、昭和53年度からは財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（現公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）が調査事業を受託して、現在に至っている。

上武道路の建設事業は起点側から段階的に進められてきた。その工程は概ね①埼玉県境から国道50号まで、②国道50号から前橋市上泉町まで、③前橋市上泉町から前橋市田口町の現国道17号までの３つの区間に分けることができ、現在は③の中程まで供用が開始されている。

埼玉県境から国道50号までの区間では、35箇所の遺跡の発掘調査が行われ、調査の成果は26冊の発掘調査報告書として刊行されている。この区間の事業が完了した平成７年には、埋蔵文化財調査の成果をより広く公開するため、冊子総集編『地域をつなぐ　未来へつなぐ－上武道路埋蔵文化財22年の軌跡－』が刊行された。この総集編では、「弥生時代の開拓者」といった平野部での発掘調査や「芳郷」の墨書土器出土で話題となった古代勢多郡の芳賀郷、東山道駅路のひとつにも推定されていた「あずま道」など、この地域の歴史的課題に対する検討の結果がまとめられており、今後取り組むべき考古学的課題も特記されている。

国道50号から前橋市上泉町までは７工区にあたる。ここでは17箇所の遺跡が発掘調査の対象となり、16冊の発掘調査報告書が刊行されている。この区間の発掘調査では、荒砥川の東で検出された古墳時代の集落が周辺の今井神社古墳や大室古墳群の築造と関連する可能性があること、荒砥前田Ⅱ遺跡では県内でも希少な巴形銅器破片が出土したこと、女堀の調査では浅間粕川テフラが確認されたことで開削年代を特定する手掛かりが得られたこと等が成果としてあげられている。荒砥川の西では、帯状低地に分断された台地ごとに縄文時代前期の集落が立地し、旧石器時代の遺物も暗色帯および上位の複数の土層から出土したこと等が注目されている。

前橋市上泉町から現国道17号までは８工区にあたり、31箇所の遺跡、約40万㎡が埋蔵文化財の調査対象となっている。工区名称は県道前橋赤城線を境界にして東が８－１工区、西が８－２工区と呼ばれている。調査は、平成18年度に８－１工区の東端から始められ、工事工程との調整により、平成23年度からは８－２工区の西端である終点の田口下田尻遺跡の調査も開始された。

８－１工区は、これまでと同様に旧石器時代や縄文時代の遺構・遺物が多いのに対して、８－２工区では縄文時代より新しい遺跡の存在が続々と明らかになっている。遺跡の実態が未知数であった赤城白川流域の白川扇状地では、予想外の縄文時代の埋没谷や旧石器まで含まれていることが判明している。特に最西端の田口下田尻遺跡では竪穴住居280棟が検出された大集落が調査され、従来の広瀬川低地帯の遺跡分布の理解を見直す資料が得られている。

これまで、群馬県内の上武道路関連で発掘調査を実施してきた遺跡には、ＪＫを冠した遺跡略号が付されている。Ｊが上武、Ｋが国道を指しており、南側の起点から順次算用数字を１から付している。８工区も、７工区の最終番号ＪＫ52に続けて、この略号を記録類作成に際して使用している。ＪＫ52だけは、上泉唐ノ堀遺跡が供用部分の関係で７工区と８工区で分割されたことから、８工区分の上泉唐ノ堀遺跡にはＪＫ52ｂをつけて７工区と区別している。また、ＪＫ59鳥取塚田遺跡は、水田遺構の存在が想定されていたが、試掘調査で遺構の無いことが判明し、発掘調査対象から除外したものの略号は欠番とせず、そのままとした。（第１表）また、当初関根遺跡群で一括されていた遺跡が田口下田尻遺跡、関根細ケ沢遺跡、関根赤城遺跡に細分されたこと、平成23年度に開始された田口下田尻遺跡を先行して82としたことから、関根細ケ沢遺跡は81ａ、関根赤城遺跡は81ｂとした。

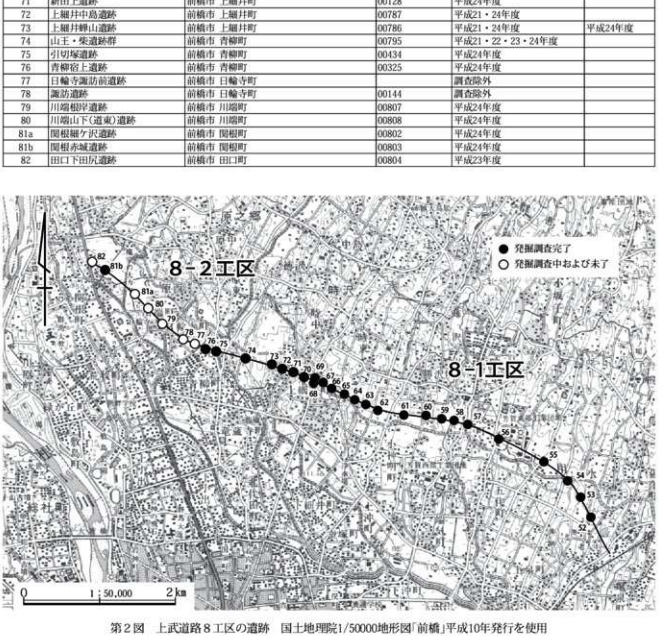
第３節　調査に至る経過

上武道路７工区の発掘調査は、上泉唐ノ堀遺跡を最後に平成16年度末で終了した。その後の工事は順調で、県道前橋大胡線までの供用が間近に迫っていた。さらに同16年度には、国道17号の現道から西の前橋渋川バイパスが着工されたことから、８工区は、開通部分と前橋渋川バイパスとの間に残された格好となり、早期着工を待ち望む声が一段と強まった。

８工区が建設に向けて動いたのは、平成18年度に入ってからである。国土交通省による路線測量、関係機関との調整や地元への協力要請を経て、用地取得等の工事着工準備が起点側から始まった。これまでの調査状況からみて、埋蔵文化財が用地内にあることは明確であったことから、埋蔵文化財の発掘調査を実施するための調整がおこなわれた。

第１表　上武道路８工区調査遺跡一覧表

ＪＫ№	遺跡名	所在地	市町村遺跡番号	調査年度	報告書刊行年度
52 b	上泉唐ノ堀遺跡	前橋市 上泉町	00774	平成18・19・20年度	平成23年度
53	上泉新田塚遺跡群	前橋市 上泉町	00775	平成18・19・20年度	
54	上泉武田遺跡	前橋市 上泉町	00773	平成19年度	平成24年度
55	五代砂留遺跡群	前橋市 五代町	00772	平成19年度	平成23年度
56	芳賀東部団地遺跡	前橋市 五代町・鳥取町	00357	平成18・19・20年度	平成24年度
57	鳥取松合下遺跡	前橋市 鳥取町	00776	平成20年度	平成23年度
58	駒城遺跡	前橋市 鳥取町	00041	平成19・20・21年度	
59	鳥取塚田遺跡	前橋市 勝沢町		調査除外	
60	堤遺跡	前橋市 勝沢町	00034	平成20年度	平成24年度
61	小神明勝沢境遺跡	前橋市 小神明町	00778	平成20年度	平成23年度
62	小神明富士塚遺跡	前橋市 小神明町・上細井町	00403	平成20・21年度	
63	東田之口遺跡	前橋市 上細井町	00125	平成20年度	平成23年度
64	荘子遺跡	前橋市 上細井町	00134	平成20年度	平成24年度
65	上細井五十嵐遺跡	前橋市 上細井町	00777	平成20・21年度	平成24年度
66	天王・東則屋谷戸遺跡	前橋市 上細井町	00131	平成20・21年度	
67		前橋市 富士見町	90094	平成20・21年度	
68	上町・時沢西則屋谷戸遺跡	前橋市 上細井町	00798	平成21年度	平成24年度
69		前橋市 富士見町	90097	平成21年度	
70	王久保遺跡	前橋市 上細井町・富士見町	00794	平成21・24年度	平成24年度
71	新田上遺跡	前橋市 上細井町	00128	平成24年度	
72	上細井中島遺跡	前橋市 上細井町	00787	平成21・24年度	
73	上細井畔山遺跡	前橋市 上細井町	00786	平成21・24年度	平成24年度
74	山王・柴遺跡群	前橋市 青柳町	00795	平成21・22・23・24年度	
75	引切塚遺跡	前橋市 青柳町	00434	平成24年度	
76	青柳宿上遺跡	前橋市 青柳町	00325	平成24年度	
77	日輪寺諏訪前遺跡	前橋市 日輪寺町		調査除外	
78	諏訪遺跡	前橋市 日輪寺町	00144	調査除外	
79	川端根岸遺跡	前橋市 川端町	00807	平成24年度	
80	川端山下(道東)遺跡	前橋市 川端町	00808	平成24年度	
81a	関根堀ケ沢遺跡	前橋市 関根町	00802	平成24年度	
81b	関根赤城遺跡	前橋市 関根町	00803	平成24年度	
82	田口下田尻遺跡	前橋市 田口町	00804	平成23年度	



第２図　上武道路８工区の遺跡　国土地理院1/50000地形図「前橋」平成10年発行を使用

埋蔵文化財の発掘調査について実施に向けての協議が、国土交通省関東地方整備局長と群馬県教育委員会教育長、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長との間で行われ、平成18年２月16日付で「一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（その３）の実施に関する協定書」（以下、「協定書」という。）が三者の間で締結された。これによって、群馬県教育委員会の調整を経て、埋蔵文化財の発掘調査を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が受託することとなった。

協定書では、協定の適用区間、発掘調査の実施場所・対象面積が示され、平成18年10月１日～平成29年３月31日に発掘調査を完了させることが明記された。なお、「協定書」は、平成18年６月20日付で、調査期間の開始を３ヶ月前倒しとする変更のための「変更協定書」が締結されて、現在に至っている。この「変更協定書」に基づいて、平成18年７月から東端の上泉唐ノ堀遺跡・上泉新田塚遺跡群の発掘調査が開始された。

また、各遺跡が発掘調査に入る前には、調査範囲と調査面積の確定、調査期間や経費算定のため、群馬県教育委員会文化財保護課により、平成18年４月25・26日、同年５月17・18日、同年８月11日、同年12月５～７日、平成19年８月16～27日、同年12月10日～14日、平成21年１月6日～８日、同年４月20日～５月７日、同年９月25～29日、平成22年12月６～20日、平成23年５月12日、同年８月22日～24日、同年10月18日、の13回（23年度末現在）にわたって、８工区の試掘調査が実施された。

本遺跡の発掘調査は、平成19年８月の試掘調査の結果から調査対象面積は8737㎡、半年の調査期間が算定されていた。試掘調査の所見では、台地上に縄文時代集落、東側低地部に水田跡（As-Ｂ下）が存在するものとされ、平成20年４月より本調査が実施されることになった。

第４節　調査の方法と経過

１　調査区、グリッドの設定

本遺跡では、調査地を分断するように市道・用水路があり、これを境に調査区を東側からＡ－１・２区、Ｂ区、Ｃ区と呼称した。

グリッドについては、国家座標系Ⅸ系（世界測地系）を用いて上武道路８工区全域がカバーできるようにＸ＝45.000、Ｙ＝－63.000（前橋市上泉地内）を起点に１㎞四方に区切り、１～９地区に分けた。各地区とも100m単位で区切り、それぞれ１～100の区名称を付した（第４図）。各区においては区の南東隅を起点に５ｍ単位で分割し、これを最小のグリッドとした。なお、グリッド呼称については区の南東隅を起点にＸ軸に１～20、Ｙ軸にＡ～Ｔを付して、南東隅の交点（例えばＡ－10グリッド）で呼称することとした。

２　調査の経過

本遺跡の発掘調査の進捗について、以下その概要を記していきたい。

４月　試掘調査では浅間Ｂ軽石下に水田跡が想定されていたことから遺水期の調査が妥当と考え、遺跡地東端のＡ区から調査を開始する。

５月　台地縁辺から低地部に縄文時代の遺物包含層が確認されたため、これを調査する。

６月　Ａ区・縄文時代包含層を継続調査、併せて台地部の土坑調査を開始する。低地部包含層の調査は出水して調査は難航した。Ｂ区の表土掘削開始。

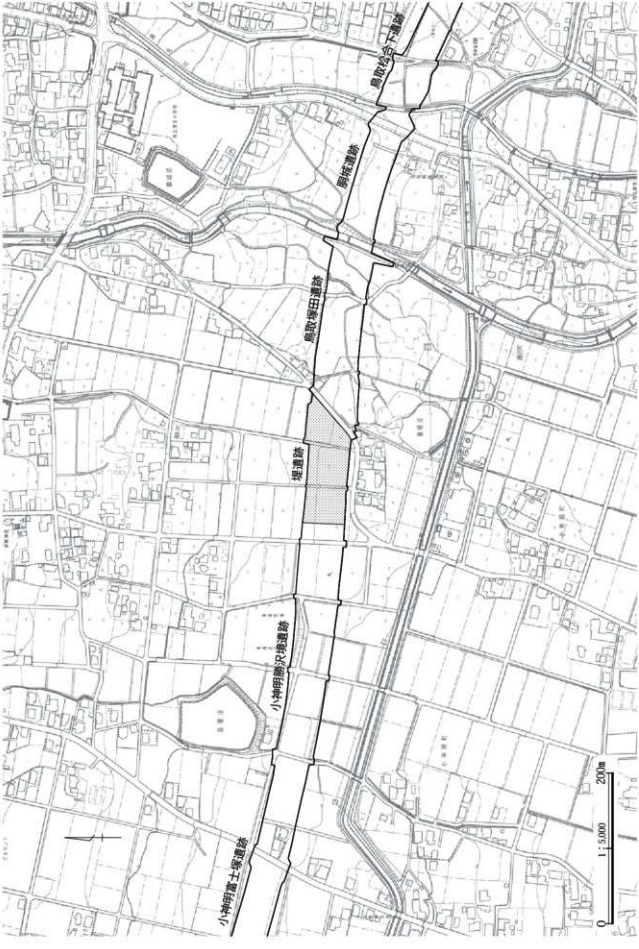
７月　Ａ区・縄文時代包含層の遺物を取り上げる。Ｂ区において、遺構精査段階で旧石器時代終末から縄文時代初頭の石槍多数を確認、下層に同時期の石器包含層の存在が確実となる。縄文時代後期の敷石住居・土坑が確認され、その量的把握を急ぐ。Ｃ区の表土掘削を開始する。

８月　縄文時代住居の調査と石槍の分布範囲確認を並行して進める。

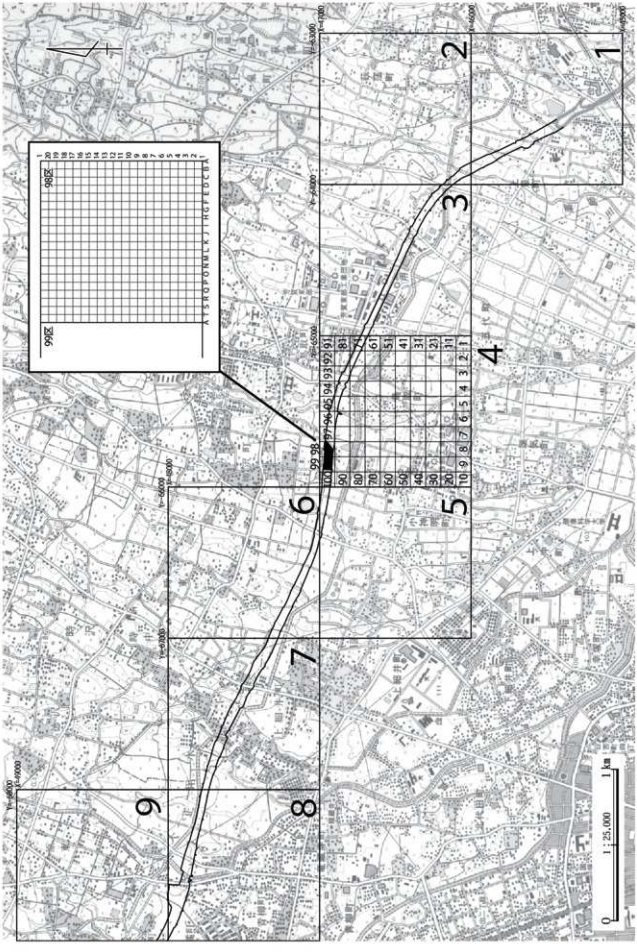
９月　前月同様、縄文時代住居・土坑と石槍調査を並行して進める。石槍の分布は当初の予定より広がり、1000㎡弱に達した。調査途中その存在が明らかにされた北東隅（Ｂ区）の河道調査開始。

10月　Ｂ区の南西側は黒色土が厚く、包含層調査と並行して遺構検出を行う。焼土遺構が確認され、竪穴住居の存在を想定して調査を進めたところ、柱穴多数が確認された。Ｃ区においても黒色土は厚く、南東隅で柱穴を確認、竪穴住居の存在が明らかとなった。旧石器の試掘調査を行う。

11月　全調査を終え、撤収作業を行う。



第3図　埋蔵文化財調査区周辺図（前橋市役所発行2500分の1前橋市現形図（平成21年測図）を使用）



第４図　上武道路調査測量グリッド設定図　国土地理院1/25000地形図「前橋」「大胡」平成22年発行「渋川」平成14年発行「藤岡」平成15年発行を使用

第２章　遺跡の概要

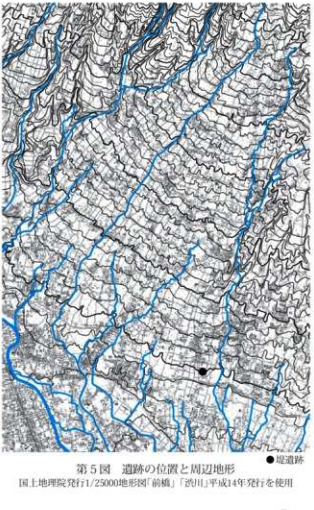
第１節　遺跡の地理的環境

本遺跡は前橋市の北東、勝沢町981番地ほかにある。前橋市は平成の市町村合併により旧勢多郡４町村(大胡町、富士見村、粕川村、宮城村)を合併、赤城山南麓に市域を大きく広げた。旧前橋市の地形学的・地質学的特徴は、旧利根川の形成した広瀬川低地帯を挟んで、これより南側の前橋台地と北側の赤城山南西麓に大きく区分することができる。旧市街地を載せる前橋台地は低平な台地で、前橋砂礫層を基層に前橋泥流が厚く堆積している。台地内を流れる小河川(藤川・端気川)が南東方向に流れていることや、古墳時代の小区画水田が北西－南東を軸に区画されていることから分かるように、台地は緩く南東方向に傾斜している。前橋台地の北東側は広瀬川低地帯と接し、旧利根川により段丘化したものとされており、群馬県庁北から広瀬町に崖線が続いている。

広瀬川低地帯を挟んだ前橋台地の対岸に、赤城山南西麓があり、広く長い雄大な裾野が形成されていることで知られている。大胡火砕流や梨木泥流など山体崩落に伴う堆積物が放射状に分布、これによる火山麓扇状地が発達している。赤城山南麓を流れる荒砥川－藤沢川間には、基層に大胡火砕流の堆積する火山麓扇状地があるほか、赤城白川流域に砂礫層主体の扇状地が広がる。赤城白川の扇状地堆積物は前橋市(旧富士見村)大河原付近を頂部に、藤沢川－細ヶ沢川間に堆積する。現在、扇状地は新旧二時期の扇状地からなるとされ、新しい時期の扇状地は広瀬川低地帯に張り出して形成されていることが指摘されている(群馬県史1992)。一方、古い時期の扇状地については$Hr_{-}HP$の堆積する地点、$As_{-}BP$の堆積する地点、$As_{-}YP$の堆積する地点があるとされている(群馬県史1992)。この記述からも分かるとおり、扇状地内の地形区分は難しいようであるが、扇状地内を流れる河川や浅い谷地形が特徴的で、本遺跡および周辺遺跡の調査成果を踏まえ、これについてその概要を述べていこうと思う。

本遺跡は白川扇状地上にあり、藤沢川右岸に広がる低地に接している。遺跡地は山麓崖線より約1.3kmの地点にあり、標高140m付近にある。本遺跡の東側を流れる藤沢川に匹敵する扇状地内の河川は、西に1.1km離れた鎌倉川までないが、両河川間には本遺跡を含め６遺跡(小神明勝沢境、小神明富士塚、東田之口、上細井丑子、上細井五十嵐遺跡)がある。各遺跡ともその居住地は扇状地内の谷に接しているが、比高差の乏しい浅い谷が大半である。遺跡地の両側を刻む谷についてその浸食・堆積過程の詳細は明らかでないが、$As_{-}C$以後の降下テフラが流出したことを示すデータはなく、それ以前の原型面の凹凸を反映した地形ということになろう。

白川扇状地は$As_{-}Sr$の時期には大部分が離水、その原型が成立したようであるが、現白川の下流域には新しく扇状地が形成されるなど、扇状地は累積的に形成されるものであるという。そうしたことの１つの証として、本遺跡北東隅の河道跡(Ｂ区、縄文時代早期)がある。詳細は本文中の記載を参照していただくことになるが、河道の断ち割り調査で、河道跡下部において$As_{-}BP$の堆積が



第５図　遺跡の位置と周辺地形
国土地理院発行1/25000地形図「前橋」「渋川」平成14年発行を使用

確認されたことや、河道跡上層から縄文時代早期土器片が出土したことから、ある程度までその堆積時期が絞り込めることが判明した。河道の構成礫は粗粒輝石安山岩が円礫化したもので、土石流堆積物だろうという指摘(早田氏教示)があり、本遺跡東の谷が上流側で深く侵食されていることや、本遺跡より北に続く台地は比較的勾配が急であることから、扇状地の形成過程に藤沢川が関与した可能性も否定できないだろうと考えている。縄文期河道はＢ区のみで確認されただけであるが、Ａ区においても河床礫が顔を出しており、この河道が南東方向に続いていたことは確実である。そして、この河道の東には低地部が接しているが、土石流が堆積したのち、再び台地が浸食されたことで低地化し、後世に至り水田化したものと考えられる。

本遺跡より西には、小神明勝沢境・小神明富士塚・東田之口・丑子・上細井五十嵐遺跡と続いており、本遺跡と同時期の河道こそ確認されていないが、ローム層から大きな角礫が顔を出している地点(小神明富士塚遺跡)や、ローム層下がシルト質になる地点(丑子遺跡周辺の露頭)があり、堆積状況は複雑である。このような堆積状況を示唆するように東田之口遺跡ではAs-YPとAs-BP間に泥流堆積物が確認されている(事業団、第523集)。これに対して、低地部は浅く、下刻作用に伴う浸食等が著しいという状況は見られない。上細井五十嵐遺跡では白川扇状地内の遺跡としてはじめてAs-B下の水田跡が発されている。同遺跡の水田跡は鎌倉川の流れる谷筋にあり、台地と低地の比高差が大きく、比較的浸食が進んでいる。現在、鎌倉川は上流側にある時沢小学校の東で龍ノ口川より取水、下流域の水田に水を供給している。現状で、取水開始時期について明らかにすることはできないが、取水地付近で龍ノ口川が大きく南西に流路を変えていること、龍ノ口川－鎌倉川の分水点以下は「ハ」字状に開いた地形観を呈しており、累積的に形成された小規模扇状地のひとつということになり、龍ノ口川の旧流路としての可能性が浮上してこよう。扇状地内の湧水の在り方については不明だが、扇状地内は基本的に欠水地帯であり、その取水開始期は中・近世に遡る可能性を想定しておきたい。As-Bの堆積した谷として、本遺跡と小神明勝沢境遺跡の間の低地があるだけであるが、調査対象外とされており、詳細は不明である。その他の地点の谷ではAs-Bが撹拌されていることが多く、中世以後の水田耕作により撹拌されたということになろう。

第５図として、白川扇状地を中心とした地域のコンタ図を示した。これによると、扇状地西側(現赤城白川の両岸)や扇状地南東部(藤沢川と龍ノ口川の間)の浸食が乏しいことが分かる。これに対して、前橋市時沢付近より北の扇状地中央部では河川浸食を伴う狭長な谷地形が発達することが明らかで、扇状地内の浸食状況の差により地形的に三分して捉えることが可能だろうと考えている。次に、扇状地内を刻む谷を見ると、谷の浸食状況に差があり、谷の深浅に気付く。例えば、扇状地内の鎌倉川・龍ノ口川・観音川クラスの河川が流れる谷と、比高差の乏しいごく浅い谷である。前者は浸食力の高い傾斜変換点を除いて比較的平坦な低地部が形成され、これが水田可耕地として利用されたのであろう。後者は湧水起源の谷か、扇状地原型面を反映した凹部ということになる。

群馬県内最大の大間々扇状地を扇状地内の浸食の度合という点で見ると、大間々扇状地Ⅱ面(新期扇状地)に比べてⅠ面(古期扇状地)の浸食が著しいことは良く知られている。このことを前提に白川扇状地内の谷地形を見る必要があるだろうと考えている。地質学の研究者も判然としないという扇状地の地形発達について詳述することはできないが、上述したように白川扇状地は地形的に三分して捉えることができ、いずれにしても扇状地は複数期に及び形成されたことは明らかである。加えて、扇状地内の中島遺跡(当事業団年報11)では、縄文時代の河川氾濫(観音川)が明らかにされている。現在、調査中の引切塚遺跡でも同時期の河川氾濫が確認されており、激しく流路を変える赤城白川の姿が明らかにされようとしている。近年、赤城山南麓の神沢川流域や鞘川流域で縄文時代の河川氾濫層の発見が相次いでおり、その発生時期解明が期待されている。

なお、扇状地端部は旧利根川により浸食され、現状で高さ10m近い崖線が形成されている。崖線下を走る県道76号(前橋－西久保線)の工事の際、山麓端部に乗り上げた前橋泥流が観察されたという(新井房夫元群馬大学教授の教示)。

第２節　周辺遺跡

前節で述べたとおり、赤城山南西麓には白川扇状地と呼ばれる地形の若い扇状地がある。扇状地内は、基本的に欠水地帯であり、いわゆる農耕発達史的な視点で扇状地内の遺跡分布の動向が注目されるところである。扇状地内の遺跡分布は、このことを念頭に理解されなければならないだろうと考えている。以下、時代毎に遺跡分布の概要を述べる(第６図、第２表)。

旧石器時代　扇状地内の旧石器時代遺跡については、上細井蟬山遺跡(46)、山王柴遺跡群(47)、小暮東新山遺跡(39)、龍ノ口遺跡(41)が知られるのにすぎない。蟬山・山王柴遺跡ともAs-Ok1を含む硬質ローム層から数点の石器類が出土しただけであり、いずれも剥片類を伴う石器ブロックは確認されていない。小暮東新山遺跡ではAs-YP下、As-OK降下前後、As-BP下に文化層３枚が確認されている。第１・３文化層(As-YP下)は分布域も狭く各ブロックとも孤立しているが、第２文化層として報告された石器群は比較的広範に分布、13ブロックが確認されている。第２文化層として報告された石器群を構成する石器群には小規模礫群が見られるほか、ブロック１においては住居状遺構とされるものがある。当初住居状遺構の上面にはAs-SPが堆積せず、これを掘り込んで住居状遺構が構築されていたのではないかとされたが、最終的に住居は平地式住居だろうとされた。龍ノ口遺跡では、ホロカ型の細石核が出土している(群馬県立博物館1911)。その出土層位はAs-YP下のローム層で、計111点の石器・剥片類が出土した。同遺跡は白川扇状地における最初の旧石器調査として知られ、遺跡が高標高(約444m)にあり、同段階の遺跡立地を考えるうえで重要になるだろう。

白川扇状地内の旧石器遺跡については未だ調査例が少なくその実態は明らかではないが、いずれも後期旧石器時代の後半期石器群とされるものであり、群馬県内に多い前半期石器群(暗色帯中の石器群)ではないことが注意されよう。このことは従来の旧石器遺跡の増減傾向に矛盾するものではないが、地質学者の「扇状地は累積的に形成される」という指摘があり、これを念頭に置いた調査が今後の課題となる。すなわち、扇頂部に近い小暮東新山遺跡では扇状地堆積物(大形礫を含んだ暗色帯様の粘質土)を基盤にAs-MP以上のローム層が堆積し、その形成年代が示唆されているところであるが、白川扇状地内には扇状地堆積物の下位に榛名八崎火山灰(Hr-HA)が堆積する地点や、本遺跡のように浅間白糸軽石(As-Sr)が堆積する地点があるなど、その形成過程は複雑であることが予想されている。このため、これを明らかにしたうえで遺跡立地や分布を考えることが必要であり、これに応えるためにも、地形発達の理解が欠かせないというべきである。

縄文時代　縄文時代の遺跡として、現在まで73遺跡(包蔵地を含む)が確認されている。扇状地内の縄文遺跡は分布密度に差があり、藤沢川－龍ノ口川間の標高200mより低い扇状地端部に遺跡が濃く分布する。次いで、扇状地内では細ヶ沢川左岸の分布密度が高い。旧利根川の浸食した扇状地末端にも遺跡は分布しているが、開発に伴う発掘件数の差を踏まえてなお、遺跡は扇状地内を流れる小河川に規定されているといえよう。時期別に見ると、前期遺跡が最も多く(25遺跡)、中・後期の遺跡は半減、各12遺跡が知られる。

草創期の遺跡は少なく、本遺跡(１)において石槍類の製作跡が確認されたほか、小神明勝沢境遺跡(２)や小神明湯気遺跡(22)で有茎尖頭器が断片的にあるだけである。扇状地内における草創期の遺跡立地については不明とせざるを得ないが、断片的だが上記石器類が出土しており、将来的には土器を伴う集落遺跡の発見も充分期待されよう。

早期段階の遺跡には本遺跡や上細井五十嵐遺跡(10)・上細井中島遺跡(45)で撚糸文土器が、丑子遺跡(９)・西堀遺跡(16)で条痕文系土器が出土しているほか、詳細は不明だが、赤城白川右岸の青柳引切塚遺跡でも条痕文系土器が多量に出土している。量的には断片的で全貌は不明だが、扇状地末端では撚糸文系・条痕文系段階の集落が確実に出現するといえ、今後どのようにその分布が広がるのかが問題となるだろう。

前期遺跡は25遺跡があり、このうち12遺跡で住居跡が確認されている。住居１棟のみが確認されている遺跡として本遺跡のほか、端気遺跡(18)・寺間遺跡(37)・白川遺跡(61)、集落遺跡として芳賀西部団地遺跡(19)・小神明西田遺跡(20)・芳賀北曲輪遺跡(32)・広面遺跡(38)・上百駄山遺跡(33)・久保田遺跡(60)がある。扇状地内に

第６図　遺跡分布図

第２表　周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	旧石器	縄文						弥生	古墳			奈良・平安	中世	近世	備考
			草創期	早期	前期	中期	後期	晩期		前期	中期	後期				
1	堤		○	○	●		●						●	●	●	
2	小神明勝沢境		○			●			●	●						
3	小神明富士塚											●	●		●	
4	小神明遺跡群				●		●						●	●	●	昭和57年度調査
5	南田之口											●			●	
6	東田之口				○	○	○				●	●	●?	●		
7	上堀井北遺跡群Ⅰ				●	○					●	●▲	●			
8	上堀井北遺跡群Ⅱ			○	○	○					●	▲	●			
9	荘子				○	○	○			●	●	●	●	●		
10	上堀井五十嵐			○	●	○	○						●			
11	天王・東財屋谷戸	○										●	●	●		
12	東財屋谷戸			○	○	○							●	●		
13	上町・西財屋谷戸											●			水田	
14	王久保											●		●		
15	新田上	●			●	●	●									
16	西堀			○	○							●				泥流上にBP
17	谷端											●	●			
18	端気遺跡群Ⅰ				●					▲	●	●		▲		
19	芳賀西部田地				●	○	○					▲		●		板碑伴出
20	小神明遺跡群Ⅱ(西田遺跡)				●						●	▲				
21	小神明遺跡群Ⅱ(倉本遺跡)								●						●	昭和58年度調査
22	小神明遺跡群Ⅳ(端気遺跡)		○		○				●		●	●	●			昭和60年度調査
23	小神明遺跡群Ⅱ(大明神遺跡)											●			●	自然河道(FA前)
24	小神明遺跡群Ⅱ(谷向遺跡)															昭和59年度調査溜井？
25	小神明遺跡群Ⅴ(九料遺跡)												●			昭和61年度調査旧河道跡(BF)
26	小神明遺跡群Ⅴ(九料南遺跡)				●	●						●				
27	小神明遺跡群Ⅱ(九料遺跡)				○		●					●	●			硬玉製大珠１
28	時沢西高田B												●?			
29	時沢西高田												●			
30	組之木原				○							●	●			旧河道跡
31	組之木原Ⅱ															住居時期不明
32	芳賀北曲輪			○	●		●					▲				
33	上百駄山		○		●	○	○						●	●	●	
34	上百駄山Ⅱ				○								●			
35	孫田				○								●			諸磯土坑
36	小暮孫田B												●			
37	寺間				●	○	○						●	●	●	
38	広面				●								●			旧河道跡、溜井
39	小暮東新山	●														
40	皆沢金山												●			隠し穴
41	龍ノ口	●														
42	時沢中谷															住居時期不明
43	時沢猿													●?		
44	小暮北新地												●			隠し穴
45	上堀井中島	○		●		●							●		●	
46	上堀井鞠山	○			●							●▲	●			
47	山王・柴									●		●▲				
48	時沢上里					○										
49	引切塚					○						●▲	●			
50	引切塚Ⅱ									●		●				
51	旭久保Ⅱ・Ⅲ					●?							●			
52	旭久保C											●?	●?			
53	旭久保					●						●	●			
54	旭久保B				○	○						●				
55	原之郷東原				●?											土坑
56	原之郷白川B									●?						
57	原之郷搦沢				○								●			前期
58	小沢殿治原															諸(時期不明)
59	小沢的場						○						●	●		
60	久保田			○	●	○	○			●		●	●	●		
61	白川				●		●			●		●	●			
62	由森			○	●	○	○						●			
63	長泉寺				●	●							●			
64	赤城				○										●	溜井？
65	石井柴山															隠し穴
66	大河原B															隠し穴
67	青柳寄居											水田	●	●		10ｃ～11ｃ
68	南橋東原				○							●	●	●	●	６ｃ～９ｃ

<縄文時代>●集落遺跡　○包含層　　<弥生以降>●集落遺跡　▲墓

ある前期集落の継続性については検討できていないが、広面遺跡・芳賀北曲輪遺跡・小神明西田遺跡・芳賀西部遺跡が藤沢川の右岸に、久保田遺跡が細ヶ沢川左岸に立地、継続的に集落が維持されている。上百駄山遺跡は、例外的に扇状地内に立地しているが、同遺跡も鎌倉川上流部にあり、自然河川に規定され立地しているように見える。扇状地内の前期遺跡は自然河川に立地が規定されることが明らかであり、扇状地の東西を流れる旧河川に臨んだ台地上に分布する傾向が指摘されよう。

中期遺跡は、12遺跡がある。住居跡がある遺跡として小神明九料遺跡(27)・芳賀北曲輪遺跡などがあるが、遺構を伴う遺跡は少ない。土器片類のみ出土した遺跡には芳賀西部団地遺跡・東田之口遺跡（６）・南田之口遺跡（５）・丑子遺跡・上細井五十嵐遺跡(10)・寺間遺跡・上百駄山遺跡・久保田遺跡・旭久保Ⅲ遺跡(51)がある。前期の遺跡に比べ遺跡数が減少するのは明らかであり、また、これと連動するように集落遺跡も数を減じているが、藤沢川右岸の芳賀北曲輪遺跡は継続性のある伝統的集落としての可能性があり、また、未報告だが赤城白川右岸にも大規模遺跡(旭久保遺跡53)があり、拠点集落と周辺の小規模遺跡という地域構造を示唆するものと捉えておきたい。

後期遺跡は14遺跡があり、集落遺跡５遺跡・遺物のみ出土した遺跡９遺跡である。集落遺跡には本遺跡のほか小神明遺跡群（４）・小神明九料遺跡・芳賀北曲輪遺跡・白川遺跡が、土器片類のみ出土した遺跡として芳賀西部団地遺跡・東田之口遺跡・丑子遺跡・寺間遺跡・上百駄山遺跡・久保田遺跡・小沢的場遺跡(59)などがある。本遺跡と小神明遺跡群は同じ台地上にあり、200mの至近距離に位置すること、両遺跡とも同時期の集落であり、同一集落として捉えるべきであると理解している。中期段階から継続する可能性のある遺跡としては芳賀北曲輪遺跡があるが、大部分は後期段階に至り、出現する集落である。

現状で、晩期遺跡は扇状地内に確認されていないが、白川扇状地に至近の晩期遺跡として赤城白川と龍ノ口川の合流点付近の微高地、広瀬川低地帯の微高地上に立地する西新井遺跡が知られている。同遺跡では千網式期の土製耳飾り100点が表採されており、遺跡立地が低地部にあることが特徴的である。

弥生時代　扇状地内には、３遺跡で住居跡が確認されている。小神明勝沢境遺跡・小神明遺跡群の２遺跡(倉本遺跡21、湯気遺跡22)において住居跡１～２棟があり、いずれも扇状地の南東側末端部にあり、まず弥生期に入り開発されたのがこの地域ということになろう。

古墳時代　69遺跡が確認されている。４世紀代から続く集落は少なく、６世紀からはじまる集落が多い。

４世紀代の集落は、扇状地の南東側末端にある小神明勝沢境遺跡・丑子遺跡や赤城白川左岸の山王柴遺跡(47)、同右岸の青柳引切塚遺跡(49)、細ヶ沢川左岸にある白川遺跡(61)が知られている。このうち、継続性のある集落として丑子遺跡があり、その可能性のある集落として端気遺跡群(18)がある。この段階の遺跡立地は弥生期遺跡立地と変わらず、小神明地区など扇状地末端が可耕地として開発されたのであろう。この段階の集落は扇状地内においては継続しないようであるが、扇状地内は基本的に欠水地帯であることが原因していると考えている。

これに対して、中期（５世紀代）からはじまる集落がある。東田之口遺跡や小神明遺跡群(西田遺跡20、湯気遺跡22、上細井北遺跡群７)がそれで、いずれも扇状地末端の比較的平坦な地形面に遺跡が立地する。この立地傾向は前代と同様で、後期（６世紀代）集落として継続する。

６世紀代の集落は、25遺跡がある。遺跡の立地傾向は扇状地末端にあり、これについては従前と変わらないが、東田之口遺跡や上町・西紺屋谷戸遺跡(13)、小神明遺跡群(九料遺跡)などでは住居が数十棟を超え、集落規模の拡大傾向が著しい。また、扇状地内には、この段階になり群集墳が形成されるようになり、小神明地区の西田遺跡や芳賀西部団地遺跡、藤沢川右岸の芳賀北曲輪遺跡、赤城白川流域の山王柴遺跡や青柳引切塚遺跡に古墳群が形成されるようになる。集落規模の拡大と併せ、地域の開発という点で画期とすることができ、その背景として集落の生産性向上が想定されることになろう。このほか集落遺跡として南橋東原遺跡(68)がある。同遺跡は、新期白川扇状地内にあることが確実だが、これについては扇状地内の開発というよりも、広瀬川低地帯の開発という視点でみる必要がある。

奈良・平安時代　集落遺跡として30遺跡が、溝・炭窯などの遺構のみ確認されている遺跡が10ヶ所ほどある。各遺跡とも住居は数棟が確認されている程度であり、特に

規模の大きな集落はないように見える。集落の継続性という観点で見ると、前代から継続する集落14遺跡、これとほぼ同数の新規集落13遺跡があり、生産域の拡大を背景とした集落としての拡大傾向は明らかであるが、全体的に集落規模は小さくなるようである。集落立地も扇状地末端の平坦面や細ヶ沢川左岸にあり、前代と同様に特に大きな変化は見られないが、強いて言えば、組之木原遺跡(30)・上百駄山遺跡・寺間遺跡など小神明地区から続く谷の上流部の生産域開発が行われたようである。上流域には藤沢川が流れ、その関連性が検討されねばならないだろう。水田をはじめとする生産遺跡の発掘例は少なく、上細井五十嵐遺跡でAs-B下水田が発見されているだけであるが、集落の拡大傾向からみて、生産域の拡大なくして集落の拡大もあり得ないのであり、水田が発見されない理由を考える必要もあろう。標高250m付近にある広面遺跡では溜井だろうとされる遺構が確認されており、生産域拡大の手段として注目しておきたい。

中・近世　23遺跡がある。本遺跡には火葬跡や張出つき土坑・溝があり、同種遺構が確認されている遺跡として天王・東組屋谷戸遺跡(11)、小神明遺跡群(４)、芳賀西部団地遺跡ほかがある。また、館跡として丑子遺跡・久保田遺跡(60)、近世屋敷跡として小神明富士塚遺跡(３)・小神明遺跡群がある。小神明遺跡群では近世の環濠が確認されたとされているが、環濠は幅3.5m・深さ1.2mを測る薬研堀で、形態的には中世に溯る可能性が高いことや、環濠の西側に張出つき土坑が群在しており、中世屋敷としての要素を備えている。本遺跡においては環濠こそ確認されていないが、遺構としての構成要素は酷似しており、同一遺跡として本来的には捉えるべきであろうと考えている。

館跡については防御機能を備えた居住空間として理解されるのであろうが、これとは別に戦略的施設としての城館跡がある。報告(富士見村教育委員会1995)には、細ヶ沢川流域と藤沢川流域に城館跡群があるとされる。前者には金山城・新井館、後者には嶺城・鳥取城・勝沢城などがある。藤沢川流域の城館跡は、赤城山南麓端部の丘陵部に立地しているが、生産域を控えた地点にある。これら低標高に立地する城館跡については、居住空間の延長として機能したものであり、戦略的要素のみの理由で築かれたのではないということだろう。

第３節　基本土層

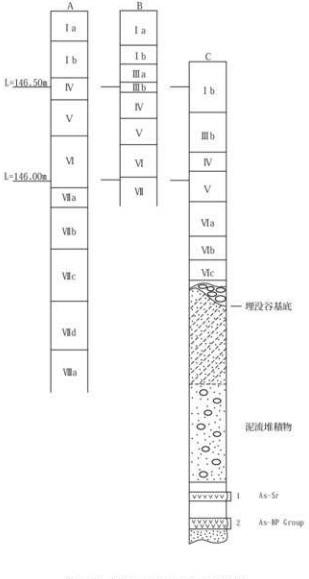
本遺跡は台地部と低地部からなり、地形的に二分して捉えることができる。台地部と低地部では土層堆積が異なることが通例だが、本遺跡では台地部の土層が比較的良好に堆積しており、台地部と低地部にかかわらず同一の層序名が付されている。

ここでは、まず遺跡の土層堆積について概要を述べ、次いで遺跡の地理的環境を補い、さらには周辺域の地形発達史的理解を深める目的で、県教育委員会文化財保護課の試掘データを掲載しておこう。

<遺跡の基本土層>(第７図)

Ⅰ層	表土層
Ⅱ層	灰褐色土(As-Bを含む。やや還元気味だが、下層に斑鉄層が形成されている。)
Ⅲa層	黒色土(As-Bを含む。Ⅲc層よりやや明るい。)
Ⅲb層	黒色土(As-Bを多量に含む。Ⅲc層より明るい。)
Ⅲc層	黒色土(As-Bを多量に含む。砂質。)
Ⅲd層	黒色土(Ⅲc層と同質だが、色調が暗い。)
Ⅲe層	As-B(最上位に桃色火山灰が堆積する。)
Ⅳa層	黒色土(白色パミスを含む。)
Ⅳb層	黒色土(白色パミスを多量に含む。As-C・Hr-HA起源のパミスが混在する。)
Ⅴ層	黒褐色土(褐色土を斑状に含む。縄文遺物包含層)低地部ではⅤa層(黒色土、白色パミスの混入は土壌撹乱が原因)、Ⅴb層(黒褐色土、粘性が強い)、Ⅴc層(黒褐色土、Ⅴb層と同質だがやや明るい)に細分することができる。
Ⅵ層	ローム漸移層(褐色軟質土、河川性堆積物のⅥb層を挟んで堆積する)
Ⅶa層	黄褐色ローム層(As-YPをブロック状に含む。)
Ⅶb層	黄褐色ローム層(As-YPを少量混入する。)
Ⅶc層	灰褐色ローム層(やや粘性を帯びる。パミスの混入は見られない。)
Ⅶd層	灰褐色ローム層(Ⅶc層と同質で粘土化が著しい。)
Ⅷ層	泥流堆積物
Ⅸ層	褐色ローム層
Ⅹ層	黄色軽石層(As-Sr)
Ⅺ層	灰褐色ローム層
Ⅻ層	褐色軽石層(As-BP)

以上が、遺跡の基本土層である。台地部には低地部に堆積していたⅢc～Ⅲe層、Ⅳb層が欠落していることや、低地部ではⅤ層より下位が未確認であるため、詳細は不明である。台地部のⅠa層が現在の耕作土・低地部のⅠ層が現代の水田耕土、台地部のⅠb層が圃場整備前の耕作土、低地部のⅡ層が近世から圃場整備以前の水田耕土に相当するものだろう。Ⅲ層がAs-Bの混じる黒色土で中世遺構の埋没土と、Ⅳ層中の白色パミスはAs-CおよびHr-FA起源のパミスと見られ、これにより平安時代の住居は埋没していた。Ⅵb層は縄文期遺物の主たる遺物包含層となっていた。Ⅶ層より下位がローム層である。その全体像を把握したわけではないが、黄褐色ローム層(As-YPを含む)下のⅧ層が扇状地堆積物に相当するものと理解している。



第７図　遺跡の基本土層１(台地部)

＜台地部＞

Ｂ・Ｃ区の土層堆積を第７図に示した。遺跡周辺の地形は見た目には平坦だが、Ｂ区№１付近では耕作が深く及んでⅢ層(浅間Ｂ軽石の混じる黒色土)が確認できない地点がある。また、台地西側ほどⅤ層(縄文時代の遺物包含層)が厚く、やや西側に傾斜していることが分かる。加えて、Ｂ区№３においては縄文時代早期以前の河川性堆積物が確認され、この堆積物の上層から撚糸文土器が、下層から石槍類を主体とした石器群が確認されており、その堆積時期の想定が可能な状況にある。写真図版(PL．３－５)にあるとおり、河床礫は西側の端が盛り上がる傾向があり、土石流だろうとされている(早田氏の教示)。河川性堆積物はＡ・Ｂ区の境界付近で北西－南東方向に確認されているが、隣接するＡ区においては低地部に河川性堆積物はなく、浸食されて段丘化したということであろう。この河川性堆積物は藤沢川ルートで運ばれたことは確実で、遺跡地東端の低地を藤沢川の旧流路が流れていた可能性も浮上してこよう。

＜低地部＞

Ａ区の土層堆積を第８図に示した。試掘調査ではAs-B下に水田が想定されており、これを受けて水田の確認が行われたようである。低地部にはトレンチ４本があり、１ヶ所(４トレＢ地点)を除いてAs-Bは確認されず、水田跡はないとされた。コメントを土層の堆積状態に限れば、３トレＡ地点のⅡb層や４トレＢ地点のⅢb～Ⅲe層(As-Bの混じる黒色土)が厚く堆積するなど、地点毎に土層堆積が異なり、地形は東側に低く傾斜しているようである。また、Ⅱb層の下位は比較的平坦(№３地点を除く)であり、水田耕作が原因していることが確実である。明治13～17年に測図した迅速測図には本遺跡低地部・東の農道から藤沢川の間は水田として利用されていたとされ、Ⅱb層の堆積状態を見る限り、本遺跡低地部も水田として土地利用されていたのではないかと考えている。本遺跡は旧勝沢村と旧小神明村の境界付近にあり、周辺域には近世溜池３ヶ所(東堤沼・中堤沼・西堤沼)があり、下流域の灌漑用水として機能、近世における水田利用は確実視していい状況である。それでは、いつ水田開発されたのだろうか。本遺跡では中世の竪穴状遺構や火葬跡が確認されているほか、平安期住居が確認されている。周辺域に中世城館跡が集中していることから、中世

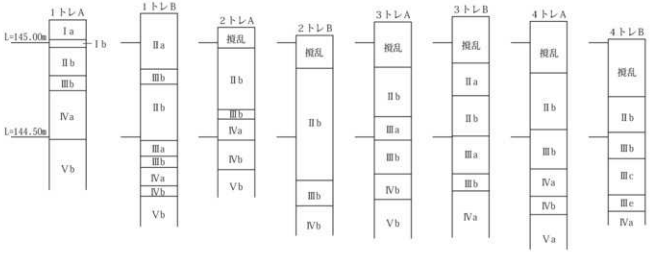
段階の水田開発ということも想定可能で、農耕発展史的立場に立てば古代まで遡る可能性もあるということになろう。

＜試掘データ＞

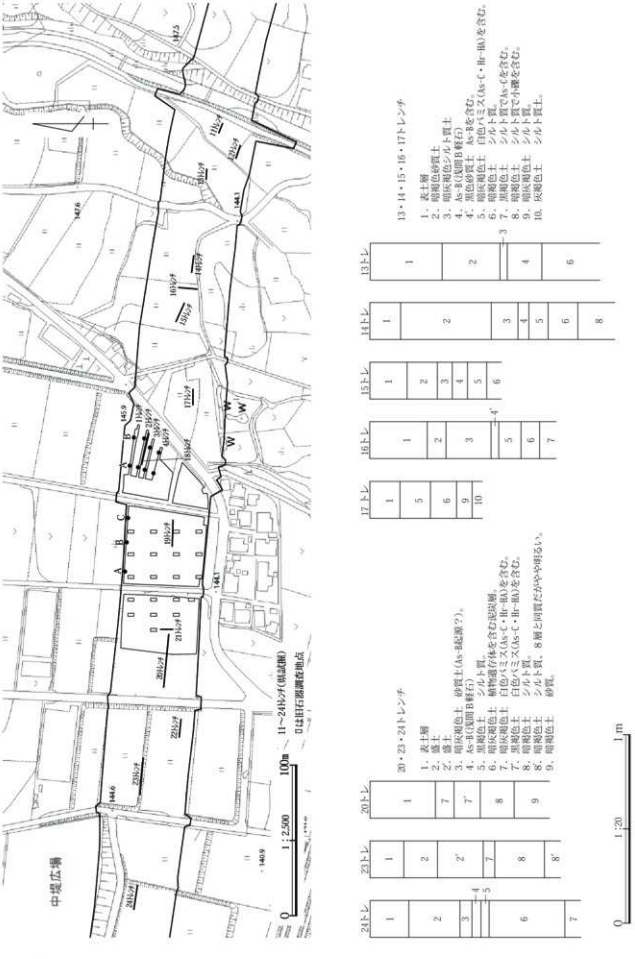
本遺跡を理解するその第一歩として、地形的理解は欠かせない。ここでは、本遺跡の地理的環境、地形発達史的理解を深めるため、県教育委員会実施の試掘データ（第９図）を掲載しておく。本遺跡の東にトレンチ11～17が、西にトレンチ21～23があり、いずれも調査対象地から外されている。

まず、遺跡地東側のトレンチからみていこう。各トレンチとも土層の記載は簡潔であり、理解は容易である。トレンチ12では４層より下位が砂層となり、水田耕土として可能性のある土壌は確認されていない。トレンチは現藤沢川右岸の氾濫原にあり、水田等が存在した可能性は極めて低い。これより西のトレンチ14～16においても現水田耕土下にトレンチ12と同質の砂～シルト質土壌が堆積することが確認されているが、それ以下の堆積は本遺跡Ａ区の低地部と変わらない土層の堆積状態にあったようである。トレンチ14 ～ 17ではAs-Bの堆積が部分的に確認できていたが、記録には遺跡から除外した理由としてAs-Bが傾斜して堆積する点が指摘されている。添付写真類を見る限り、シルト質土壌と黒色土（As-Bを含む）の境界は明瞭で、漸移的に変化するものではないように見える。明治期の迅速測図では、トレンチ14～17の地点は水田とされ、この意味で水田が近世までさかのぼるのは確実視されていいが、調査所見と明らかにギャップが生じている。

次に、遺跡地西側の土層堆積をみてみよう。トレンチ23においては厚さ40cm程の盛土が表土下にあり、旧地形は現在より起伏に富んでいたことが分かる。同トレンチでは白色軽石を含む黒色土が確認されているが、それより下位はシルト質土とされており、谷の堆積土としての典型的特徴を備えている。トレンチ24は遺跡地として認定され、小神明勝沢境遺跡（事業団、第524集）として報告されている。この遺跡では遺跡地の東端にAs-Bで埋まる、南北方向に走る浅い溝１条が確認されている。この溝に続く東側の谷（トレンチ23－24の間）は調査対象から外れているが、この谷は中堤沼（現在は埋められて運動場として利用されている）から続く谷であり、地域の水田開発の実態を明らかにするうえで重要な谷地というべきであった。



第８図　遺跡の基本土層２（低地部）



第９図　遺構検出状況図・トレンチ配置と土層模式

第３章　検出された遺構と遺物

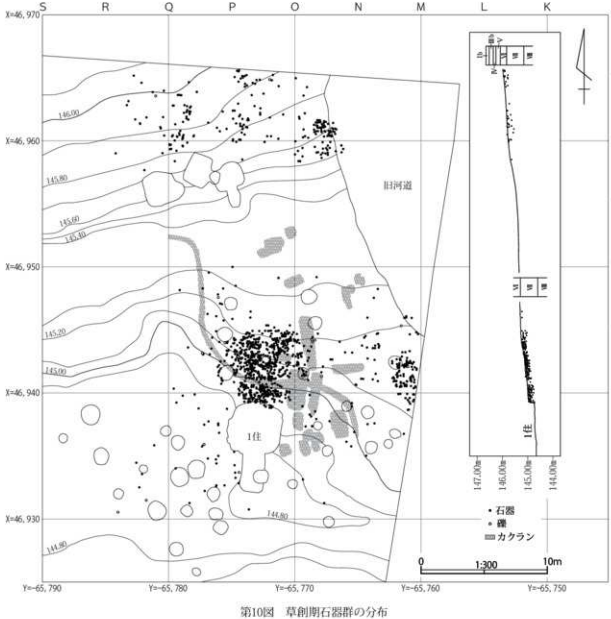
第１節　縄文時代の遺構と遺物

１．草創期石器群

ａ．概要

当該期石器群は、上層遺構の精査段階で石槍類が多量に出土したことでその存在が明らかになった。石槍類は縄文時代住居の北側周辺域に分布することが当初から判明していたので、その分布範囲を押えることを優先させ調査を進めた。すでに調査を終えて埋め戻されていたＡ区の試掘調査は行われていないが、Ｂ・Ｃ区では扇状地堆積物の上層（Ⅶd層、As-0k相当層）まで試掘調査が行われている（第９図）。最終的には、石槍類主体の石器群のみが確認されただけであり、細石刃石器群そのほかの旧石器時代石器群は確認されていない。

第10図に、当該期石器群の分布を示した。石器群は東西25m・南北35mの範囲に分布していたが、石器分布は調査区北と東側の現道下に延びることが明らかであり、また、石器分布域は上層遺構に重複分布しており、これにより石器分布・組成とも残存時の様相を留めていない



第10図　草創期石器群の分布

ことが分かる。加えて12ライン付近が削平されており、石器包含層を欠いていることも石器組成その他を考える際の制約要素のひとつになるものと考えている。全体として石器群は1,500点以上がとりあげられているが、取り上げ台帳に「カクラン」と出土層位の記されたものや、層位(Ⅵ・Ⅶ層)のみ記されたもの、表土層と記されたもの335点があり、これを除いて分布図を示した(第10図)。

PL.４－１は石器群の出土状態を写したものであるが、石器群が長方形土坑や溝と重複分布することが分かる。その重複関係については図に明示すべきであるが、図としてデータ化されていないため、ここでは石器群と土坑類の位置関係が分かるように概念的に表現(土坑・溝の位置関係は全景写真から起し、概念的であるので敢えて輪郭を明示せず網掛してみた)しておいた。また、削平による分布域の欠落については、コンタ図と垂直分布図から判断できるよう配慮した。分布を理解する際の参考程度のデータとしていただきたい。以上は石器分布・組成を考える際の人為的要素としての制約条件だが、地形発達に伴う分布域の欠落という要素も確定的である。石器分布域(１号ブロック)の北東側は旧河道に重なり、部分的に浸食されていることが明らかである。この石器群の出土層位はⅤ～Ⅶ層とされているが、Ⅵ層(ローム漸移層)から66点74.2％が出土したことや、旧河道を埋めた土石流起源の礫より下位に剥片類が出土していることを踏まえれば、相当量の剥片類が土石流で流出したということなるだろう。本遺跡ではローム層中のテフラ分析を委託、その成果については第４章に記載してあるとおりである。柱状図作成時の掘り下げ不足や石器分布域の拡張不足などの不備があり十分なデータを提示できていないが、その後の検討で分析者から下記の見解を得た。それによるとローム台地の浸食がローム漸移層(Ⅵ層)の形成期に始まり、この谷が埋まり始めたころ土石流が発生、それにより埋没したのではないかということである。そして、この時期の台地の浸食は県下全域で見られる現象であるという。後者については、藤沢川が関与しているのではないかと個人的に考えているが、複雑な地形発達が垣間見えるようである。

石器群を支えた主体的器種は石槍類であり、石鏃様の両面加工石器類である。組成的にはこれに少量の削器類が加わる程度で、器種組成としては極めて単純である。石槍類は黒色頁岩製のものが主体を占め、これに少量の黒色安山岩製石槍類が加わるというものであるが、石器

第３表　草創期石器群の器種石材構成１(全体)

	石槍	石鏃	楔形	削器	加工痕	使用痕	石核	縦長	剥片	砕片	敲石	総計
黒色頁岩	3	1		4	1	3	5	3	270	613		903
頁岩										1		1
珪質頁岩					1				9	3		13
砂岩										1		1
黒色安山岩			1						31	53		85
黒曜石										1		1
チャート		2			9		2		39	165		217
ホルンフェルス				1	1				2	2		6
細粒輝石安山岩									2	10		12
粗粒輝石安山岩											2	2
変質安山岩									1			1
珪質変質岩										1		1
デイサイト凝灰岩										1		1
不明										1		1
総計	3	3	1	5	12	3	7	3	354	852	2	1245

第４表　草創期石器群の器種石材構成２(撹乱・表土)

	石槍	削器	加工痕	石核	縦長	剥片	砕片	敲石	総計
黒色頁岩	21	2	6	2	1	111	117	1	261
珪質頁岩						1	1		2
砂岩				1					1
黒色安山岩	3		1	2		20	15		41
チャート				1		13	10		24
細粒輝石安山岩						3			3
粗粒輝石安山岩								1	1
変質玄武岩							1		1
デイサイト凝灰岩							1		1
総計	24	2	7	6	1	148	145	2	335

凡例
楔形石器　：楔形
加工痕ある剥片：加工痕
使用痕ある剥片：使用痕
縦長剥片　：縦長

群にはチャート製の石核や剥片類があり、石鏃様の両面加工石器３点中２点がチャート製であることに注意しておきたい。両面加工石器には押圧剥離により作出され、加工技術は石鏃と遜色ないように見える。これと石槍類の共伴関係については、層位的な出土状況から見れば、否定的にならざるを得ない状況にある。

ｂ．出土石器

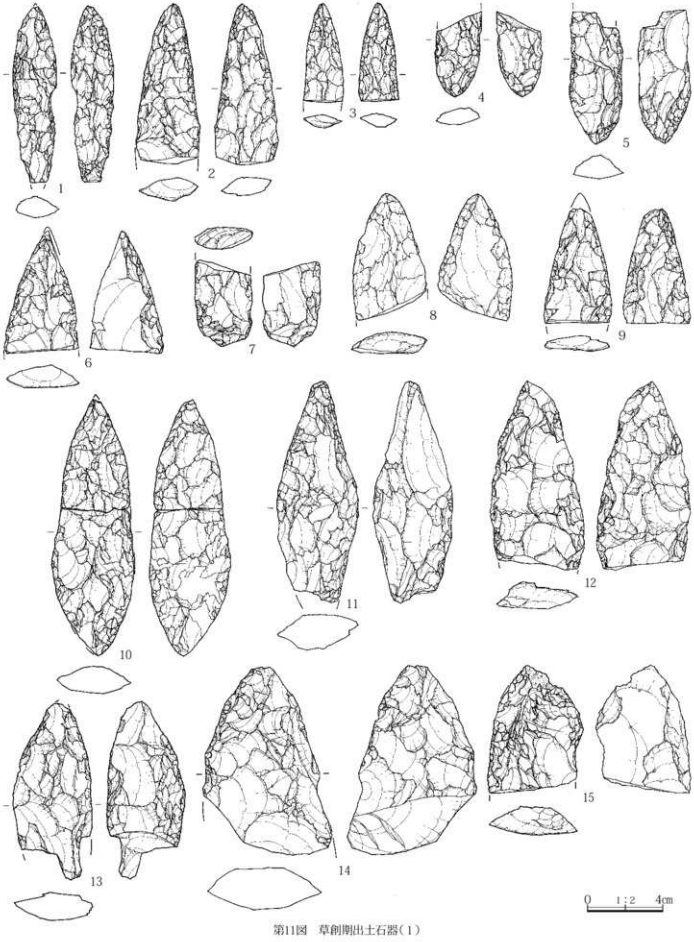
総計1,580点の石器・剥片類が出土した。出土した主な石器には石槍27・石鏃様石器３・楔形石器１・削器７があるほか加工痕ある剥片19・使用痕ある剥片３がある。このほか、出土層位が「カクラン」「表土」とされたなかにも相当量の石槍類がある（第３・４表）。

第11図１～５・７は、細身・柳葉形状を呈する石槍である。１は、先頭部から石器基部まで形状が分かる資料で、製作途中に石器基部を、調査時に右辺側エッジを欠損する。背面・先端側を除いて、エッジは階段状剥離となり完成間際に製作を放棄したものと見られる。Ⅶ層。５号ブロック西（分布域ｂ）から出土。黒色頁岩製。２は、器体中央より下半を製作途上に欠損したもの。個々に見た剥離は微細で石器形状を整える段階にあるだろうが、器体は捩れ、石器としての完成度は低い。黒色頁岩製で、表土層から出土した。３は、薄身で柳葉形状を呈する。加工は丁寧で、石器としての完成度は高い。器体の下部を欠損する。黒色頁岩製で、表土層から出土した。４・５は柳葉形状を呈し、石器先端部を欠損したもの。４は薄身で、加工も丁寧で完成状態に近い。５は裏面側を薄く平坦に剥離、背面側を厚く剥離したもので、断面Ｄ字状を呈する。４・５とも基部は並行する側縁から絞り込まれており、尖り気味である。４は黒色安山岩製で５号ブロック内の撹乱、５は黒色頁岩製で５ブロック西の分布域ｂ（Ⅶ層）から出土した。

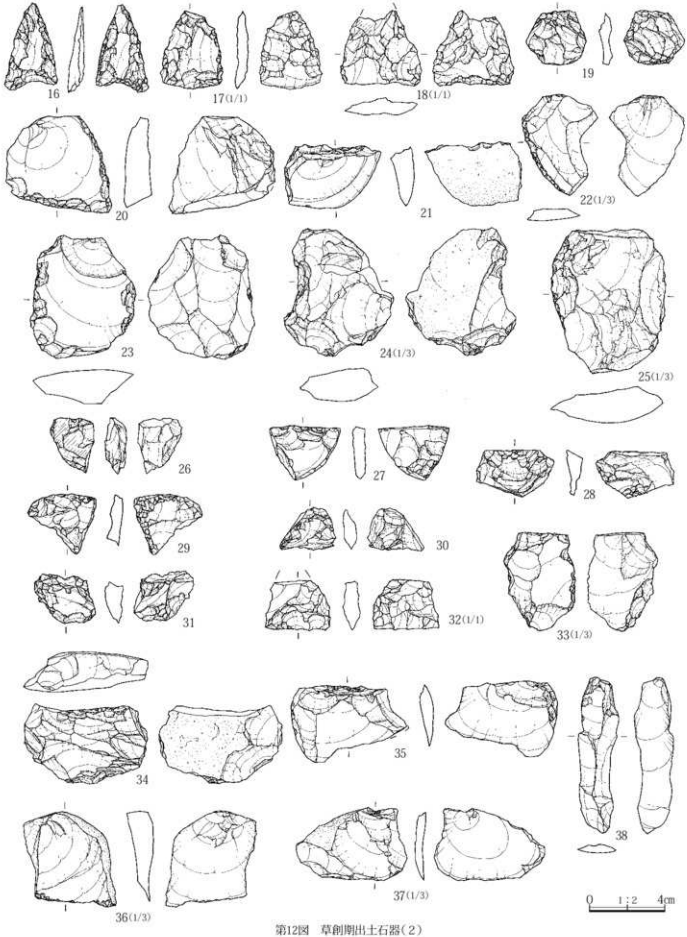
第11図７～９は幅広タイプの石槍。７は、製作途上に破損した石槍の基部破片。裏面・基部側加工は周辺加工に止まり、製作段階としては最終段階より前というべきかもしれない。６・８は木葉形状を呈す幅広タイプの石槍で、２点とも裏面側に素材面を大きく残す。６の加工は最終段階のそれで、サイズ的にも見ても完成状態と捉えることができる。右辺先端部の破損は剥離に先行する打撃痕であり、先端部機能に支障がある破損というよりも、先端部機能としては補強されたというべきで、これが原因して廃棄したものではなく、廃棄原因を探れば器体中央付近の破損が廃棄の理由となるだろう。これに対して、８は径上面で対称性に欠け、裏面側加工（特に、裏面側左辺）が粗く、形状作出の初期に破損したものとすべきであり、素材に内包した打撃痕が破損原因とすることが妥当である。黒色頁岩製。６は表土層から、８は５号ブロック西の地点（分布域ｂ）の撹乱から出土した。９は、黒色安山岩製の石槍である。薄身で側縁が直線的に開くタイプの石槍であり、柳葉形タイプと幅広・木葉形タイプの中間的な形状ということになる。加工状態は完成状態とするには粗く、これ以上加工されるとすれば、柳葉形タイプの石槍ということになる。黒色安山岩製で、表土層から出土した。

第11図10～15は、大形で木葉形状を呈するもの。10は、器体中央で破損した石槍２点が接合したもの（接合資料－２）。下膨れ気味だが、これは背面側左辺が膨らむためで、未だ完成状態にないことを示している。剥離は形状修正的で、膨れた左辺エッジを取り去る直前で破損したということであろう。黒色頁岩製で、上端側が表土層、下端側が５号ブロック内の撹乱から出土した。11は、石槍の未製品。裏面側を加工する前に破損したことが確実で、片側のみここまで加工を進める理由が分からない。そうした目で加工状態を見ると背面側左辺の加工は丁寧で、側縁からみたエッジは弱く湾曲していることから、削器として捉えることも可能と考えている。石槍としては明らかに未製品とすべきであるが、途中器種転用した可能性を想定しておきたい。黒色頁岩製で、表土層から出土した。12は、器体中央で破損した石槍未製品。背面側・先端右辺の加工が甘く、また、先端側左辺が厚く、加工状態・形状とも完成状態には遠い。背面側左辺には砕片２点が接合することが確認されている（接合資料－１、第14図）。白味の強い黒色頁岩（黒色頁岩－１）を用いており、５号ブロック西（分布域ｂ）の撹乱から出土した。

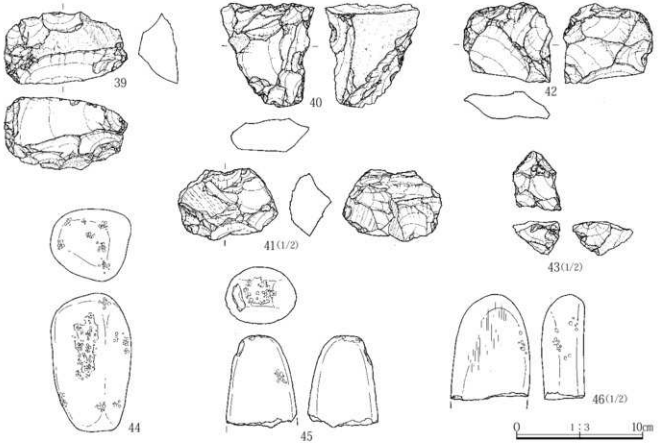
第12図16～18は、石鏃様石器としたもの。包含層出土の遺物であるならば、いずれも石鏃の未製品として報告されるものだが、出土層位がⅦ層とされるものや、チャート製剥片類に伴い出土したものがあり、こうした出土状態を重視、便宜的に石鏃様石器と捉えた。16は、浅く「抉



第11図　草創期出土石器（１）



第12図　草創期出土石器（２）



第13図　草創期出土石器（３）

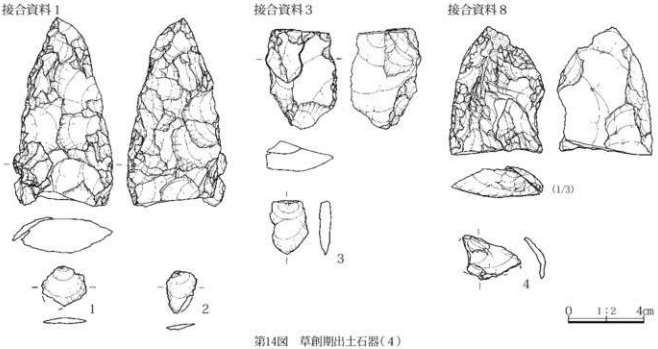
り部」を作出したもの。表裏面とも第一次剥離面が残り、加工は周辺加工に止まる。先端加工には至らず、石器先端部の作出以前に石器製作を放棄している。黒色頁岩製。５号ブロック（Ⅶ層）出土。17は、表裏面とも押圧剥離で覆われたもの。石器先端部には衝撃剥離痕に似た剥離が生じているが、石器が製作途上であることは明らかで、使用時に生じたというより製作時のアクシデントによるものと理解しておく。裏面側基部には素材剥片のエッジが残り、ヒンジ状を呈している。チャート製。５号ブロック東の地点（分布域ａ、Ⅵ層）から出土した。18は、石材内にある脈が影響して先端部が破損したもの。表裏面とも加工は両側縁から薄く深く入り込んでいるが、裏面側基部の加工は浅く連続的に施され、直線的基部が形成されている。チャート製で、北側分布域・1号ブロック（Ⅵ層）から出土した。

第12図19は、小形剥片製の楔形石器。六角形状を呈す各辺に対向する小剥離痕がある。下端側に礫面が残り、両極剥離の適用は剥片厚を減じる意図があるだろうと考えている。黒色安山岩製。５号ブロック東の地点（分布域ａ）から出土した。

第12図20～25は、幅広剥片を用いた削器である。20は、裏面側右辺・剥片端部に粗く加工して刃部を作出する。黒色頁岩製で、５号ブロック西の地点（分布域ｂ）内の攪乱から出土した。21は、裏面側打面・左辺を粗く加工したもの。背面側に礫面を大きく残す。黒色頁岩製で、２号ブロック（Ⅵ層）出土。22は、背面側左辺を粗く打ち欠き刃部を作出したもの。刃部は弧状を呈す。ホルンフェルス製で、２号ブロック（Ⅵ層）出土。23は、裏面側の両側縁を粗く加工して刃部を作出したもの。刃部のエッジは新鮮で、使用されたようにみえない。黒色頁岩製。４号ブロック（Ⅵ層）から出土。24は、左側縁を打ち欠きノッチ状の刃部を作出したもの。剥離面構成からみて石核転用の削器とすることができる。黒色頁岩製。

１号ブロック（Ⅴ層）から出土。25は、背面側右辺を隠して刃部を作出したもの。刃部は下端側の加工が丁寧で、弧状を呈する。黒色頁岩製。２号ブロック（Ⅵ層）から出土した。

第12図26～35は、幅広剥片を用いた加工痕ある剥片で



第14図　草創期出土石器（４）

ある。26～29は、表裏面とも浅い剥離面で覆われたものである。当初は石核として分類したものであるが、剥離が薄く、これにより加工痕ある剥片として再分類した。いずれも剥離は周辺平坦面から行われ、剥片厚を減じるように意図されているように見える。27はチャート製で５号ブロック西の分布域ｂから出土､26･28は赤色チャート製で１号ブロック出土、29は赤色チャート製で５号ブロック出土。30は、背面側下端部を除いた各辺を加工したもの。裏面側端部には小片を剥離した痕跡があり、これと背面側加工の前後関係は不明であり、加工意図は明らかでない。赤色チャート製で、１号ブロック(Ⅵ層)から出土した。31は、小形剥片の周辺部を粗く加工したもの。剥片内部に脈があり、剥離時に脈が影響して縦位破損した剥片を素材としたものであるが、その加工意図については明らかではない。赤色チャート製。５号ブロック東の地点(分布域ａ、Ⅵ層)出土。32は、略三角形状を呈する。先端部を欠き形状が不明瞭であるため加工痕ある剥片としてみたが、裏面側加工は押圧剥離に近く、石鏃様石器とすることもできよう。赤色チャート製。２号ブロック(Ⅵ層)出土。33は、表裏面とも側縁を粗く加工したもの。裏面側加工を先行したのち、背面側加工が続く。このほか、背面側・右辺中央が浅く加工され、刃部として使用されている。背面側に小形剥片１点が接合する(接合資料－３)。黒色頁岩製で、２号ブロック(Ⅴ層)出土。34は、加工途上の破損品を破損部から再加工したもの。加工は粗く、その加工意図は明らかでない。黒色頁岩製。35は、背面側上端・裏面側右辺を粗く加工したもの。打面は剥離時に弾けたものと見られ、この部分に加工が集中している。加工意図は明らかでないが、便宜的石器ということになろう。

第12図36・37は、エッジの小剥離痕により使用痕ある剥片としたもの。36は、剥片端部に刃部がある。剥片としては側面に礫面を大きく残しており、打点を大きく左右に振り剥離した幅広剥片である。黒色頁岩製で、北側分布域(２号ブロック)から出土。37は、剥片端部に刃部がある。背面側に礫面を残した幅広剥片を用いたもので、剥片端部の直線的形状を利用したのであろう。黒色頁岩製で、２号ブロック(Ⅵ層)出土。

第12図38は、縦長剥片である。背面左辺側と右辺側の剥離面の風化状態が異なることや、その剥離面構成が異なることからみて、同型の剥片を量産するタイプの剥離法は想定できない。黒色頁岩製。

第13図39～43は、石核を図示した。39は、大形の幅広剥片を素材としたもので、裏面側で幅広剥片を剥離したのち、打点と作業面を入れ換え、背面側の剥離作業を終えて石核を放棄している。黒色頁岩製。２号ブロック(Ⅴ層)出土。40は、大形剥片を素材とするもの。表裏面で小形幅広剥片を剥離しているが、背面側端部に近い剥離

は刃部作出に伴う加工と見られ、器種転用しようとした可能性も否定できない。黒色頁岩製。５号ブロック東の地点(分布域ａ、Ⅵ層)から出土した。41は、板状剥片を素材とするもの。剥離面構成を踏まえ作業面を移動するタイプの剥離法を想定することができるが、石核内の脈に邪魔されて、目的に適う形状の剥片は剥離できていないように見える。チャート製で、南側分布域５号ブロック西の散漫な石器分布域内の撹乱から出土した。42は、幅広剥片を素材としたもの。小形剥片を剥離したものであるが、裏面側の左辺には小剥離痕が並んでおり、便宜的石器として二次転用した可能性がある。黒色頁岩製。３号ブロック(Ⅴ層)出土。43は、石核を消費する過程で得た不要剥片を素材としたもの。やや厚で、断面三角形状を呈し、最終的には小口部で小形剥片を剥離して、剥離を終えている。赤色チャート製で、１号ブロック(Ⅴ層)から出土した。

第13図44～46には、敲石類を図示した。44は、角柱状を呈した河床礫を用いる。小口部両端に打痕があるほか、表裏面とも中央より上端側に偏り打痕がある。粗粒輝石安山岩製。３号ブロック(Ⅵ層)出土。45は、棒状礫を用いたもの。上端側の小口部に打痕がある。下端側を大きく欠損する。46は、扁平礫を用いたもの。小口部に近い礫面が光沢を帯び、石製研磨具として理解すべきものかもしれない。黒色頁岩製。

第14図には、接合資料を図示した。接合資料には石槍にポイントフレイクが接合したもの２例、加工痕ある剥片に剥片１点が接合したもの１例があり、これらが遺跡内製作されたものであることが分かる。接合資料－１は、石槍(第11図12)にポイントフレイク２点が、接合資料－８はポイントフレイク１点が接合したものである。撹乱から出土したものや、表土から出土したものが大部分だが、１点(接合資料－１のポイントフレイク２)のみ５号ブロックから出土したことが確認されている。２例とも黒色頁岩製。接合資料－３は、加工痕ある剥片に剥片が接合したもので、剥片は加工前に剥離されたものである。黒色頁岩製で、２号ブロックのⅤ・Ⅵ層から出土した。このほか、出土資料には剥片類が接合したものが６例あり、これについては写真図版に写真のみ掲載してある。

以上、出土石器についてその概要を記した。石器群を支えた主要石器として石槍類や石鏃様石器があるのは疑いようもないが、両者の共伴関係が問題となるだろう。ここでは、石槍類の製作跡であることが確実な５号ブロックの剥片・砕片類を手掛かりにして、２号ブロックのそれと比較して、その異同について検討していきたい。

５号ブロックには剥片砕片類795点があり、このうち黒色頁岩製・黒色安山岩製のそれは計769点(96.7%)を占める。その内訳は黒色頁岩707点・黒色安山岩62点で、1.91ｇ・1.42ｇが平均重量である。重量構成比を見ると、１ｇ未満のものが圧倒的多数を占め、以下暫時その数を減じていることが分かる(第５表)。剥片類は打面が弾け飛んだものもあるが、両面加工石器の裏面側を部分的に取り込んだものや点状打面のものがあり、ポイントフレイク特有の剥片端部が大きく反り変えるものが主体である。

一方、２号ブロックには剥片類55点があり、黒色頁岩31点・チャート22点ほかがある。黒色安山岩については２点のみ出土しただけであるが、３石材のみ重量構成比を示した。これによると、３ｇ未満のものが半数を占める一方で、20ｇ以上の大形剥片類も多く含まれ、５号ブロックとは様相が異なることが分かる。実際、剥片類を見ると、大形剥片には平坦打面から剥離され、バルブが大きく発達するもの(10点中４点)があるようである。先にも述べたように、石槍類と両面加工石器については出土層位が異なり、調査時の層位的所見は石器群の同時性に否定的である。上述したような通常の剥片生産が行われていたとすれば、ますますその蓋然性は高まることになるが、ポイントフレイク様の剥片６点があることも事実で、これについては慎重に検討すべきであろうと考えている。

第５表　剥片類の重量別構成比

５号ブロック

	黒頁	黒安
～１ｇ	497	38
～３ｇ	128	16
～５ｇ	32	5
～10ｇ	36	1
～20ｇ	12	1
～40ｇ	3	1
総点数	708	62

２号ブロック

	黒頁	黒安	チャ
～１ｇ	8	1	9
～３ｇ	8	1	6
～５ｇ	1		3
～10ｇ	1		3
～20ｇ	6		1
～40ｇ	2		
～60ｇ	2		
～80ｇ	1		
80ｇ～	2		
総点数	31	2	22

ｃ．石器分布

石器が南北35m・東西25mの範囲に分布することは、すでに述べたとおりであるが、石器分布は11ライン付近の空白域を挟んで南北二群の分布域からなる。先にも記したように、これが後世の削平で生じたものか断言できないが、垂直分布をみる限り、北側分布域の南が部分的に削平されていることは確実視されるものの、石器包含層の削平は部分的であり、石器分布は南北二群に分け理解することが妥当と考えている。

ｃ－１．北側分布域

北側分布域には石器ブロック３がある。東から西へ１号から３号ブロックが並ぶ。１号ブロックの分布域は旧河道に切られるほか、２号ブロックについても調査区外に分布が広がることが明らかである。

＜１号ブロック＞（第15図）

位　　置　98区Ｎ12・13

分布範囲　1.1m×1.1m

出土層位　Ⅴ層21点・Ⅵ層66点・Ⅶ層２点

器種構成　石鏃様石器１点・削器１点・加工痕ある剥片３点・石核２点・剥片19点・砕片63点

石材構成　黒色頁岩13点・チャート71点・黒色安山岩１点・ホルンフェルス３点・珪質頁岩１点

所　　見　北東側と南東側で分布密度が高く、ブロックの細分も可能である。黒色頁岩製の剥片類が南東側に集中する傾向がある。これに対して、チャート製の剥片・砕片類は強いて言えば北東側に集中域があり、この地点でチャートを用いた石器製作が行われたことが分かる。チャート製の石鏃様石器は評価が難しい石器だが、同種石材製の剥片類が集中分布しており、状況的にはこれに伴う石器として理解することができる。ブロックの東側が旧河道で切られており、これにより欠落した器種や石材も当然あるだろうことを指摘しておきたい。

＜２号ブロック＞（第15図）

位　　置　98区Ｏ・Ｐ13・14

分布範囲　長径1.1m×短径1.1m

出土層位　Ⅴ層11点・Ⅵ層51点・Ⅶ層２点

器種構成　削器３点・加工痕ある剥片３点・使用痕ある剥片２点・石核１点・剥片33点・砕片22点

石材構成　黒色頁岩35点・チャート24点・黒色安山岩２点・ホルンフェルス１点・珪質頁岩１点・変質安山岩１点

所　　見　南北両地点に剥片類に集中域があり、細分も可能な状況にある。北側集中域は調査区外に延びることが確実である。黒色頁岩（35点、54.7％）・チャート（24点、37.2％）の石材二種で90％以上を占め、両石材を用いた石器製作は確実である。黒色頁岩・チャートは砕片より

第６表　北側分布域の器種石材構成

	石鏃	削器	加工痕	使用痕	石核	礫長	剥片	砕片	蔵石	総計
黒色頁岩		3	1	3	3	3	61	27		101
珪質頁岩								2		2
黒色安山岩							7	4		11
チャート	1		5		2		29	65		102
ホルンフェルス		1	1				1	2		5
粗粒輝石安山岩									2	2
変質安山岩							1			1
デイサイト凝灰岩								1		1
総計	1	4	7	3	5	3	99	101	2	225

第７表　南側分布域の器種石材構成

	石槍	石鏃	楔形	削器	加工痕	石核	剥片	砕片	総計
黒色頁岩	3	1		1		2	209	586	802
頁岩								1	1
珪質頁岩					1		9	1	11
砂岩								1	1
黒色安山岩			1				24	49	74
黒曜石								1	1
チャート		1			4		10	100	115
ホルンフェルス							1		1
細粒輝石安山岩							2	10	12
珪質変質岩								1	1
不明								1	1
総計	3	2	1	1	5	2	255	751	1020

凡例
楔形石器　：楔形
加工痕ある剥片：加工痕
使用痕ある剥片：使用痕
礫長剥片　：礫長

剥片が多く、また、削器類(加工痕ある剥片を含む)が多出しており、通常の剥片生産と石器製作が行われたということになろうが、黒色頁岩製剥片類にはバルブが大きく発達するもの４点以外に、リップ状の打面を持つ剥離角の大きなポイントフレイク様の剥片類６点があり、注意しておきたい。チャート製の剥片類については通常の剥離に伴う小形剥片類で、石鏃の製作に伴う砕片類は見られない。これに対して、ホルンフェルス製の削器は単独出土が確実視されるだろうが、珪質頁岩や黒色安山岩は砕片のみの出土であり、その存在理由については断言できるだけの根拠がない。

＜３号ブロック＞(第15図)

位　　置　98区Ｐ・Q12・13

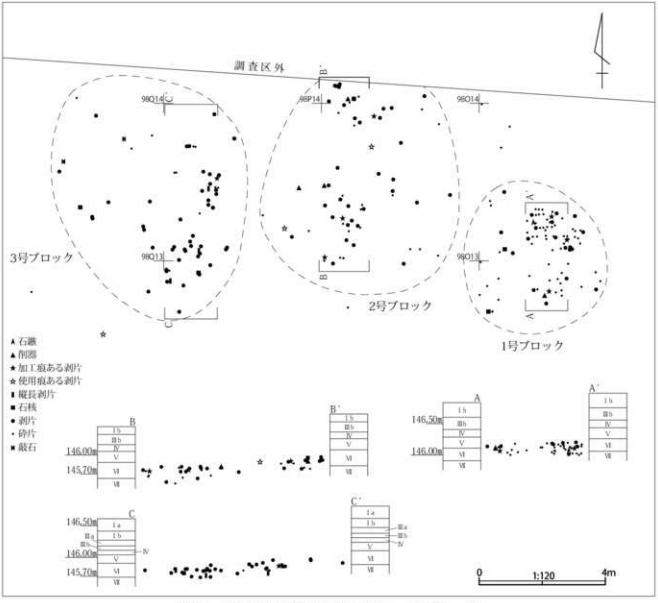
分布範囲　1.1m×1.1m

出土層位　Ⅴ層16点・Ⅵ層50点

器種構成　加工痕ある剥片１点・縦長剥片３点・敲石２点、石核２点・剥片47点・砕片11点

石材構成　黒色頁岩50点・チャート５点・黒色安山岩８点・ホルンフェルス１点・粗粒輝石安山岩２点

所　　見　ブロック北東側と南東側で分布密度が高く、西側が薄い分布状況は、各ブロックともよく似る。黒色頁岩の石器製作は確実だが、剥片に比べ砕片の出土量が少なく、「剥片生産を目的としたものか、石器製作を目的としたものか」が問題となるだろう。現状で、剥片類はバルブの発達するものが主体で、通常の剥片生産を示唆しているが、接合資料－１に良く似た白色を呈した剥



第15図　石器の分布状態１(北側分布域、１～３号ブロック)

片類（黒色頁岩－１）にはポイントフレイクとしての属性を有するものがある。同様に、黒色安山岩製の剥片類７点も点状打面となるものが少量だがあり、石槍類から完全に分離できる状況にはない。

ｃ－２．南側分布域

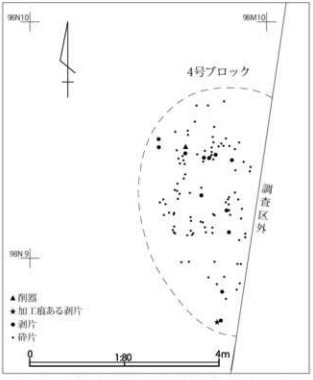
南側分布域には石器ブロック２がある。このほか、５号ブロック周辺域には散漫に石器が分布しているが、校正の長方形土坑や溝などがあり、初期の分布を留めていないことが明らかで、ここでは５号ブロック東の分布域ａ・同西の分布域ｂとして大きく捉えておいた。４号ブロックについては現道下に分布が延び、器種石材構成等について全様は把握できていない。

＜４号ブロック＞（第16図）

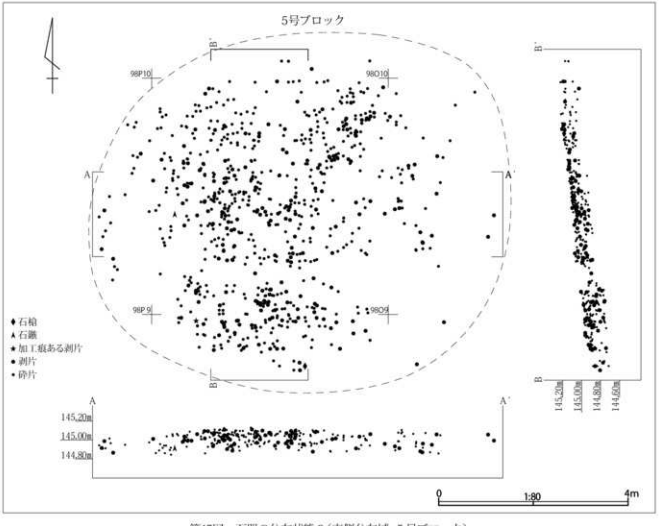
位　　置　98区Ｍ９・10

分布範囲　長径1.1m×短径1.1m

出土層位　Ⅵ層107点



第16図　石器の分布状態２（南側分布域、４号ブロック）



第17図　石器の分布状態３（南側分布域、５号ブロック）

器種構成　削器１点・加工痕ある剥片１点・剥片12点・砕片93点

石材構成　黒色頁岩18点・チャート82点・黒色安山岩２点・頁岩１点・砂岩１点・細粒輝石安山岩２点・黒曜石１点

所　　見　ブロックとして砕片類の集中性が高く、石器製作跡としての様相を色濃く残している。剥片類は12点と少量だが、ブロックの北側に偏る傾向を示している。黒色頁岩・チャートを用いた石器製作は確実だが、出土量の少ない石材５種(黒色安山岩・細粒輝石安山岩は剥片・砕片が各１点、頁岩・砂岩・黒曜石については砕片類が１点のみ)があり、現状ではこれらについての存在理由を断定するのは難しい。

＜５号ブロック＞(第17図)

位　　置　98区Ｎ～Ｐ８～10

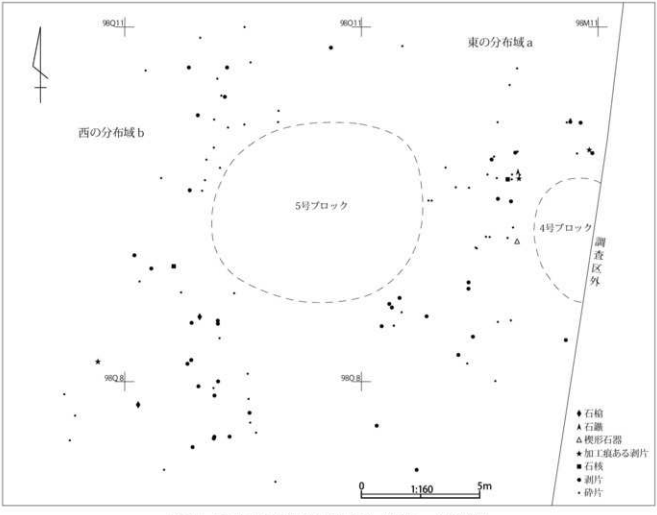
分布範囲　長径1.1m×短径1.1m

出土層位　Ⅵ層24点・Ⅶ層774点

器種構成　石槍１点・石鏃様石器１点・加工痕ある剥片１点・剥片203点・砕片592点

石材構成　黒色頁岩709点・珪質頁岩９点・チャート８点・黒色安山岩62点・ホルンフェルス１点・細粒輝石安山岩７点・珪質変質岩１点・不明１点

所　　見　黒色頁岩・黒色安山岩については石槍類の製作に伴う剥片・砕片類が主体を占めるのは確実である。チャートは少量だが砕片類が主体を占め、小形剥片類の生産が行われたようであるが、細粒輝石安山岩については小片であり、性格づけられない。層位別の出土点数は上述したとおりであるが、概要で述べたようにⅥ層より上の包含層を欠いている。石器分布域には攪乱から出土したもの294点があり、また１号住居覆土から相当量の黒色頁岩製ポイントフレイクが出土していることから、Ⅴ・Ⅵ層中には相当量の剥片類が含まれていたことは断言してよさそうである。石器垂直分布を図示しておいたが、竪穴状遺構等の存在は否定的にならざるを得ない。



第18図　石器の分布状態４(南側分布域、分布域ａ・分布域ｂ)

＜５号ブロック東の分布域ａ＞（第18図）

位　　置　98区０～07～10

分布範囲　長径1.1m×短径1.1m

出土層位　Ⅴ層６点・Ⅵ層32点・Ⅶ層19点

器種構成　石鏃様石器１点・楔型石器１点・加工痕ある剥片２点・石核１点・剥片20点・砕片32点

石材構成　黒色頁岩29点・チャート21点・黒色安山岩５点・珪質頁岩２点

所　　見　第10図にあるように、長方形土坑と重複分布しており、初期の分布状態を留めていないことは確実であるため、ブロックと呼ばず分布域ａと仮称した。剥片類の集中性が高い４・５号ブロック間にあり、分布密度は概して散漫である。石器石材４種があり、黒色頁岩・チャートを用いた石器製作が行われていたのであろう。チャート製の石器には石鏃様石器としたものがあり、４号ブロック周辺域が製作地点ということになろう。

＜５号ブロック西の分布域ｂ＞（第18図）

位　　置　98区Ｍ～07～10

分布範囲　長径1.1m×短径1.1m

出土層位　Ⅵ層８点・Ⅶ層50点

器種構成　石槍２点・加工痕ある剥片１点・石核１点・剥片20点・砕片34点

石材構成　黒色頁岩46点・チャート４点・黒色安山岩５点・細粒輝石安山岩３点

所　　見　分布範囲は７～11ラインに及び、分布密度は散漫である。分布域は９ラインを境に、北の分布域と南の分布域に分けてもよさそうである。器種石材構成から言えば、黒色頁岩を用いた石槍類の製作が予想されようが、その他の石材については少量であり、詳細は不明とせざるを得ない。

第８表　器種石材構成（ブロック別）

１ブロック

	石鏃	削器	加工	石核	剥片	砕片	総計
黒頁		1			4	8	13
珪頁						1	1
黒安						1	1
チャ	1		3	2	14	51	71
ホル					1	2	3
総計	1	1	3	2	19	63	89

２ブロック

	削器	加工	使用	石核	剥片	砕片	総計
黒頁	2	1	2	1	20	9	35
珪頁						1	1
黒安						2	2
チャ		2			12	10	24
ホル	1						1
変安					1		1
総計	3	3	2	1	33	22	64

３ブロック

	加工	石核	縦長	剥片	砕片	敲石	総計
黒頁		2	3	37	8		50
黒安				7	1		8
チャ				3	2		5
ホル	1						1
粗安						2	2
総計	1	2	3	47	11	2	66

４ブロック

	削器	加工	剥片	砕片	総計
黒頁	1		5	12	18
頁岩				1	1
砂岩				1	1
黒安			1	1	2
黒曜				1	1
チャ		1	5	76	82
細安			1	1	2
総計	1	1	12	93	107

５ブロック

	石槍	石鏃	加工	剥片	砕片	総計
黒頁	1	1		171	536	709
珪頁				8	1	9
黒安				21	41	62
チャ			1	1	6	8
ホル				1		1
細安				1	6	7
珪変					1	1
不明					1	1
総計	1	1	1	203	592	798

６ブロック

	石鏃	楔形	加工	石核	剥片	砕片	総計
黒頁				1	14	14	29
珪頁			1		1		2
黒安		1			1	3	5
チャ	1		1		4	15	21
総計	1	1	2	1	20	32	57

７ブロック

	石槍	加工	石核	剥片	砕片	総計
黒頁	2		1	19	24	46
黒安				1	4	5
チャ		1			3	4
細安					3	3
総計	2	1	1	20	34	58

凡　例

楔形石器	：	楔形	黒曜石	：	黒曜
加工痕ある剥片	：	加工	チャート	：	チャ
使用痕ある剥片	：	使用	ホルンフェルス	：	ホル
縦長剥片	：	縦長	細粒輝石安山岩	：	細安
黒色頁岩	：	黒頁	粗粒輝石安山岩	：	粗安
珪質頁岩	：	珪頁	変質安山岩	：	変安
黒色安山岩	：	黒安	珪質変質岩	：	珪変

ｄ．石材別分布

石器群は東西25ｍ・南北35ｍの範囲に分布しており、その一部が調査区外や現道下に延びることについては概要の項で述べたとおりである。加えて、分布域の北東側を旧河道で浸食されるという環境史的な制約条件があることや、石器包含層が削平されるなど人為的要素として制約条件があることについても概要の項で述べたとおりである。すでに指摘したとおり、石器群は石槍類と石鏃様石器の二群からなることが予想されるものであるが、石槍類製作に伴うポイントフレイク様の剥片が南北の両地点にあり、その評価が難しい。通常、器種別・石材別分布は同時性を担保したうえで記載されるべきであるが、同時性について判然としないこともあり、本書では12ラインを境に、便宜的に北群と南群に分け記述することとした。

＜北側分布域＞（第19・20図）

本分布域には石材８種225点がある。黒色頁岩(101点)・チャート(102点)が90.2％を占め、このほか黒色安山岩・珪質頁岩・ホルンフェルス・デイサイト凝灰岩・粗粒輝石安山岩・変質安山岩がある。粗粒輝石安山岩２点は敲石で、その他は剥片類である。出土点数の少ない珪質頁岩・デイサイト凝灰岩・変質安山岩製の剥片類は存在理由が明らかではないが、黒色安山岩11点とホルンフェルス５点は少量の剥片生産が行われたということであろう。

黒色頁岩は101点があり、このうち９点について同一母岩(黒色頁岩－１)として認定した。分布域は各ブロックにあり、２号ブロックの北や３号ブロックの東に集中する傾向がある。剥片類はバルブの発達する通常剥片とされるものが主体を占めているが、ポイントフレイク様の剥片が少量だがあり、石槍類・石斧類の製作を示唆している。ポイントフレイク様の剥片は大型例が多く、仮に、これが石槍類の製作に伴う剥片類であるとすると、製作初期段階のものであるということになろう。

チャートは102点があり、このうち39点について同一母岩(チャート－１)として認定した。１号ブロック及び２号ブロックの南に集中して分布した。チャート－１は「赤チャート」とされるもの(チャート－１ａ)で、途中変色するものがあり、これをチャート－１ｂとして細分しておいた。チャート－１の分布域はその他のチャートの分布域に重なり、複数個が個体消費されたようである。母岩消費が２地点あることについて、それが地点を変え消費されたものか、似た母岩が同時に消費されたものか、断定する根拠はないというのが実態である。

＜南側分布域＞（第21・23図）

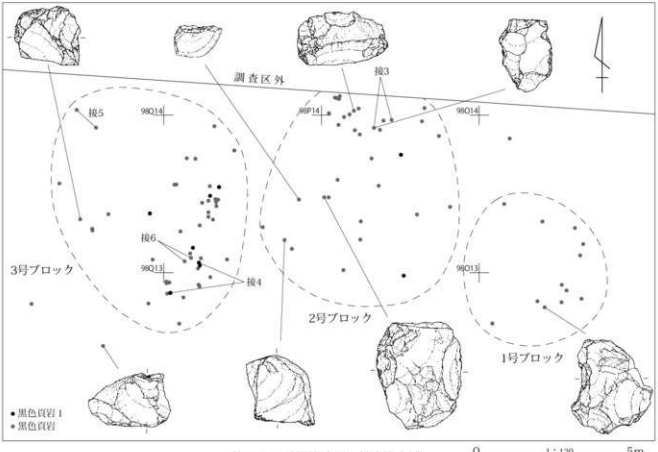
本分布域には石材10種1,020点がある。黒色頁岩(802点)・チャート(115点)・黒色安山岩(74点)が主たる消費石材で、97.2％を占める。その他の石材として珪質頁岩(11点)・細粒輝石安山岩(12点)、黒曜石・頁岩・砂岩・ホルンフェルス・珪質変質岩が各１点ある。細粒輝石安山岩12点には砕屑物多く、確実な剥片類の数は少ない。出土点数の少ない石材について詳細は不明だが、混入の可能性も否定できない。

黒色頁岩は802点があり、石槍の製作に伴う剥片類とすることができる。北側分域で認定した白色・緻密質の石材があり、これを黒色頁岩－１として認定した。量的には46点があり、５号ブロックに大部分が分布した。砕片が攪乱から出土した石槍に接合したことから、この母岩を用いた石槍類の製作が確定した。４号ブロック内の黒色頁岩は通常剥片であり、石槍類の製作に伴う剥片類とは明らかに異なる。

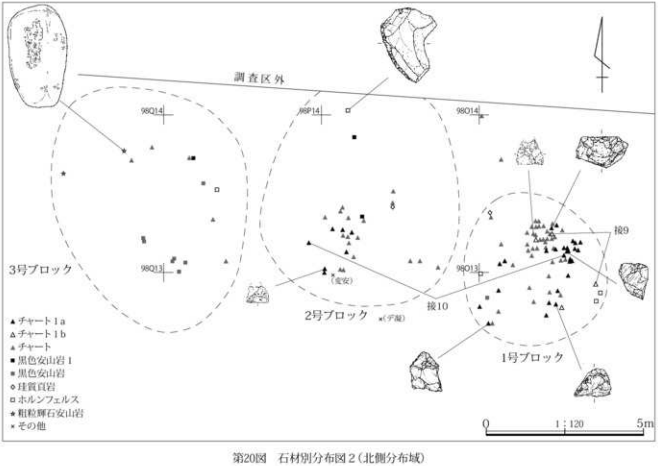
チャートは115点がある。南側分布域においても北側分布域のチャートと同様の「赤チャート」があり、これを同一母岩(チャート－１)と認定した。試料点数は９点と少量だが、南北両地点の石器群を評価する際の目安となるだろう。チャート－１の剥離地点は４号ブロックとすることができるが、分布域は広く、５号ブロックに１点と、隣接する散漫な分布域ａに３点が分布した。未分類のチャートが４号ブロックに集中するほか、周辺域に散漫な分布域を形成しているが、チャート－１の分布も同様であることが分かる。

黒色安山岩は74点がある。黒色安山岩は母岩分類の難しい石材だが、ここでは斑晶の抜けた痕跡が列点状に並んだものを同一母岩に認定した。分布域は５号ブロック全域に広がり、未分類の黒色安山岩の分布と重なる。分類が妥当か、不安が残る。

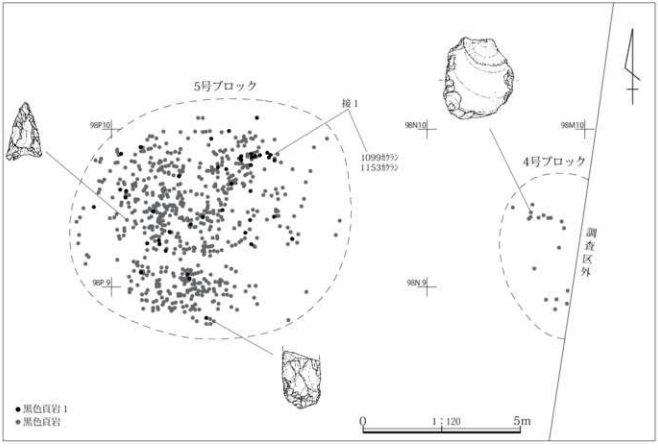
珪質頁岩は１がある。肌色・流紋質の石材で、５号ブロックの南西側に分布する。打面が弾け飛んだものが多く詳細は不明だが、強いて言えばポイントフレイクに近い。



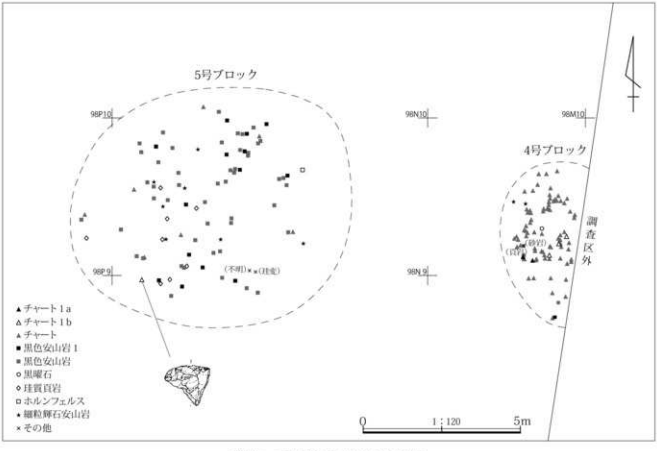
第19図　石材別分布図１（北側分布域）



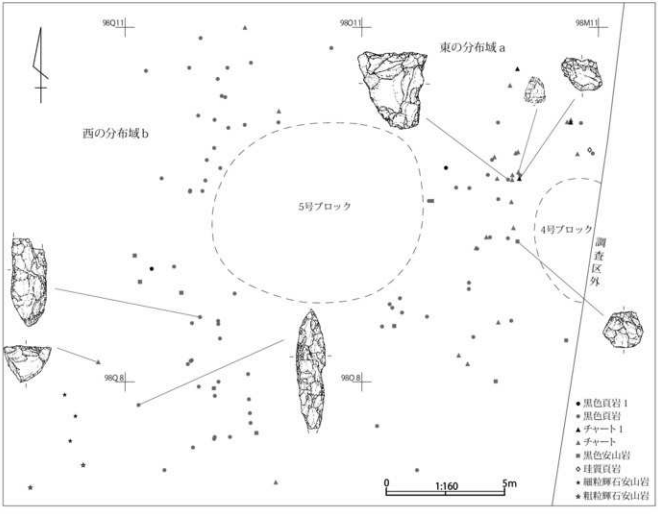
第20図　石材別分布図２（北側分布域）



第21図　石材別分布図３（南側分布域）



第22図　石材別分布図４（南側分布域）

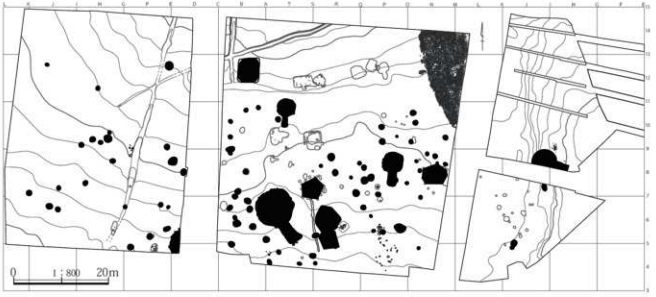


第23図　石材別分布図５（南側分布域）

２．竪穴住居

竪穴住居は計11棟が確認されているが、台地平坦部（Ｂ区９棟、Ｃ区1棟）に10棟、台地斜面部（Ａ１区）に１棟がある。その内訳は前期竪穴住居跡１棟、後期竪穴住居跡９棟である。前期竪穴住居跡は１棟が尾根上に単独で確認されているのみで、これに伴う土坑等は確認されていない。後期竪穴住居は柄鏡型敷石住居跡が４棟、円形状の竪穴住居跡１棟、柱穴から復元した住居跡４棟からなる。各住居とも確認は容易でなく、最終的にローム上面で漸く確認されたというのが実態である。柱穴から復元した住居は浅く掘り込んだものであり、このうち８号住居跡については整理段階で住居２棟が重複したものとして捉えた。調査区外に掛かるものが多く、詳細は明らかではない。台地斜面部（Ａ１区）にある柄鏡型敷石住居跡は調査時に配石・埋甕とされていたが、遺物分布の平面・垂直分布を検証するなかで、その存在が想定されたものである。残されている写真や遺物の取り上げ状況を見ると、当初は遺構として扱おうとしたようであるが、土層図等の記録が残されていないことからみて、最終的には住居として認定することを避けたようである。

出土遺物は、パン箱に約150箱がある。草創期石器群を除いてその大半がＢ区５号住居跡から出土したもので、同住居跡では40個体を超える器形復元された土器が確認されている。住居関連で出土した石器類は、計278点がある。柱穴のみからなる住居跡も多く、そうした住居跡では相対的に石器類の出土量が少なくなっているが、概ね中・後期遺跡としての器種組成を備えているということができ、打製石斧類が多く、石鏃類が少ない傾向はあるものの、住居毎の組成上の差はないというのが実態である。



第24図　縄文時代遺構の分布状況

第９表　住居別に見た器種石材構成

	打斧	磨斧	石槍	石鏃	石錐	楔	削器	石核	加工痕	凹石	磨石	石皿	敲石	台石	多孔石	石製品	石棒	研磨具	総計
１号住居	6			5	1		4	1	6	4	5	2	7		5		1	1	48
２号住居	2		1				1	1	3	2		1	6	2					19
４号住居	1			1		1		1	4	2	4	1	1		4	1			21
５号住居	24	1		1		3	7	11	27	22	14	6	3		14	4	2		139
６号住居				2					1										3
７号住居	3			3			3	2	9	4	5		1						30
８号住居								2	1										3
９号住居	1			1															2
10号住居											1				1				2
11号住居	2			1				4	1		2	1							11
総計	39	1	1	14	1	4	15	22	52	34	31	11	18	2	24	5	3	1	278

１号住居跡(第25～26図、PL.４)

位　置　98区Ｏ７・８

方　位　Ｎ－７°－Ｅ

規　模　主体部(長軸4.3m・短軸4.2m・深さ0.17～0.20m)、張出部(長軸3.0m・短軸1.9m・深さ0.10～0.25m)

面　積　主体部14.5㎡、張出部4.0㎡

形　状　柄鏡型敷石住居。隅丸方形状の主体部に長い張出部が付く。

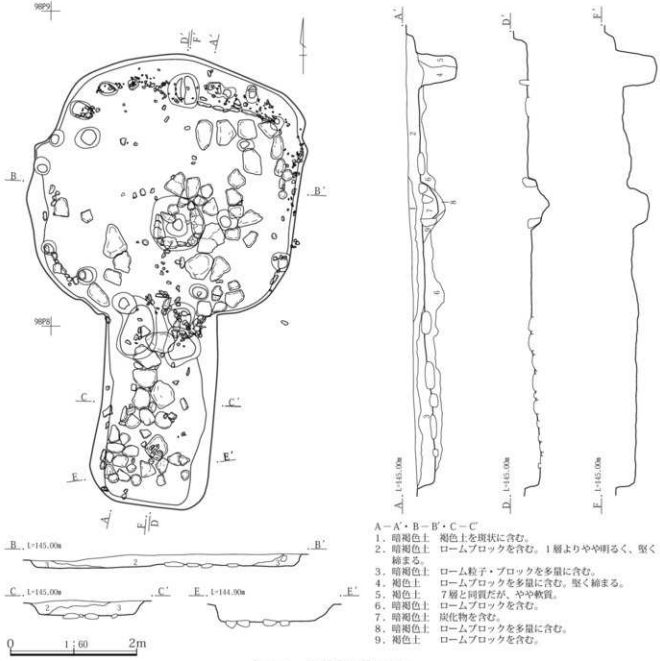
重　複　張出部が37号土坑と重複する。

床　面　炉周辺東側に敷石が比較的良好に残る他、住居の南西側に若干の敷石が残る。敷石は中心部では炉の形状に合せて円形に礫を並べ、徐々に住居プランに合せて礫を方形状に配置する傾向にある。

炉　石囲い炉。主体部中央よりやや南側にある。略方形状を呈する。炉石は敷石と同じ粗粒輝石安山岩の盤状礫を用い、南西部コーナーに片岩製の棒状礫を配しているが、北西部コーナー炉石は炉内に崩れていた。炉石は被熱してひび割れ、南西部コーナーに配した立石状の棒状礫も脆弱化が著しい。

柱　穴　六角形状に廻る周礫のライン上や、周礫と奥壁の間に柱穴11ヶ所(Pit３～６、Pit９、Pit11～16)が、周礫内に柱穴４ヶ所(Pit２・７・10・11)が確認されているほか、連結部Pit３ヶ所がある。周礫上や奥壁間にあるPitは東西の壁柱穴が50～60cm、北壁中央のPit５(深さ59cm)を除く北側の壁柱穴が30cm前後と規則的である。これに対して周礫内のPitはPit11(深さ45cm)を除いて深浅(Pit２：23cm、Pit７：34cm)があり、位置的には主柱穴と見られるものであるが、壁柱穴に近過ぎることを考えるならば、Pit10・11を壁柱穴とすべきかもしれない。

周　礫　東壁中央から北壁に扁平礫の側縁を上に仕切り石状に並べ、これと北壁間に小礫を充填する。このほか南東部・南西部コーナー付近に仕切り石状に礫が並ぶ。小礫は土に混ぜ込んだ状態で出土しているが、上部構造を含めてその全体像は不明である。



第25図　１号住居跡遺構図(１)

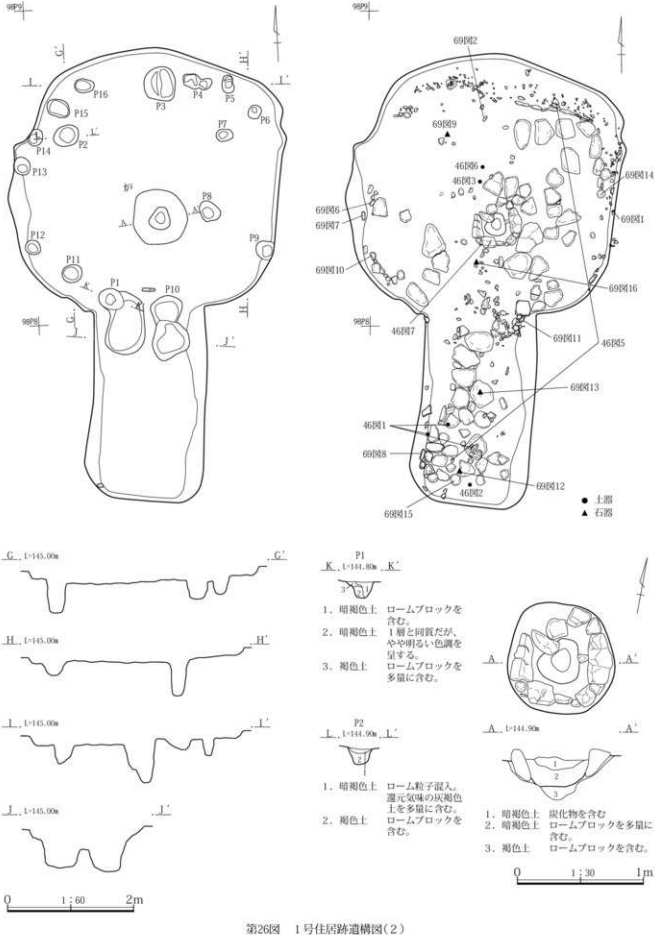
連結部　対ピットがある。この対Pitは深さ60㎝前後で、西壁際のPitは土坑状を呈する。ピット上面の小礫は東壁際に並んだ周礫が崩れ落ちたものと見られる。

張出部　部分的に敷石が取りされているが、南辺の敷石に比べ連結部に近い敷石は大きく、レベル的にも高い位置にある。

埋没土　ロームブロックを含んだ暗褐色土で埋没していた。主体部中央や張出部には上層から礫が廃棄状態で出土しており、人為的な埋め土として理解すべきだろう。

遺物の出土状態　主体部中央に床面から浮いた状態で、大小の礫が廃棄状態で出土したほか、張出部には相当量の礫が廃棄状態で出土している。本住居では237点が取上げられているが、大多数は床面より浮いた状態で出土した。

所　見　土器類は小片が圧倒的であり、住居の帰属時期を明らかにすることのできる炉体土器や埋甕はないが、第46図１が張出部の敷石直上から出土した程度である。これにより本住居の構築時期は後期初頭期(称名寺Ⅱ式期)とすることができる。



第26図　１号住居跡遺構図（２）

２号住居跡(第27～28図、PL.５)

位　置　98区Ｔ９～11

方　位　Ｎ－３°－Ｅ

規　模　主体部(長軸3.85m・短軸3.80m・深さ0.17m)、張出部(長軸2.25m・短軸1.35m・深さ0.17m)

面　積　主体部10.6㎡、張出部2.1㎡

形　状　柄鏡型敷石住居。六角形状の主体部に長い張出部が付く。

重　複　確認されていない。

床　面　主体部南東から炉にかけて敷石が残存するほか、北壁付近に散漫に敷石が残存する。敷石の配置状況は不明瞭だが、住居周縁部では六角形状の住居プランに規定されるように礫の長軸が各辺に並行するよう配置されたものと見られる。

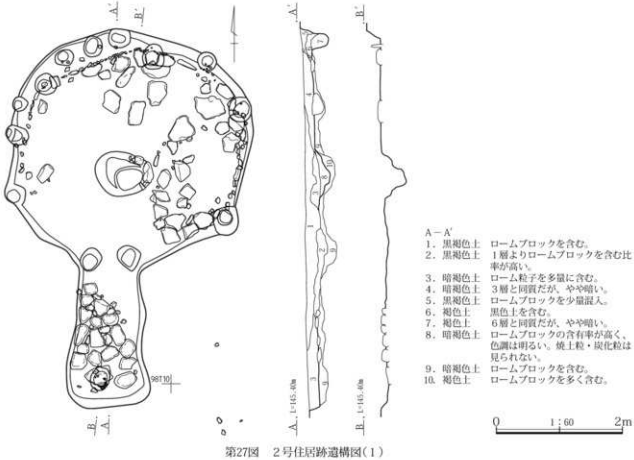
炉　石囲い炉。主体部中央付近にあり、不整楕円形状を呈す。短軸側の東壁側に炉石を残し、西壁側に炉石の抜き取り痕を確認することができる。炉石は被熱して礫面が剥落している。

柱　穴　周礫の交点毎に柱穴(Pit１・２・４・８・11)があるほか、北～西壁際に柱穴(Pit３・５～７・10)が確認されている。各Pit間には深浅があり、Pit１（深さ40㎝)・Pit２(36㎝)・Pit３(34㎝)・Pit４(43㎝)・Pit５(25㎝)・Pit６(37㎝)・Pit７(16㎝)・Pit８(36㎝)・Pit９(25㎝)・Pit10(22㎝)・Pit11(20㎝)・Pit12(15㎝)・Pit13(23㎝)・Pit14(16㎝)を測り、前者と後者の柱穴で深浅に大きな差があるわけではない。

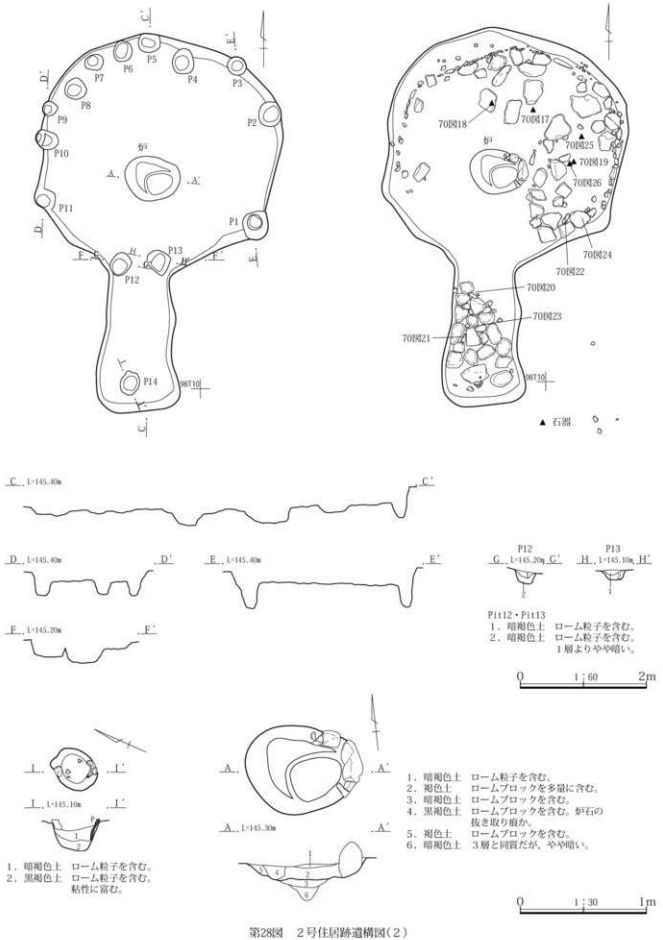
周　礫　東壁、及び、北西側から西側の壁際に周礫が残る。奥壁側の仕切り石の形状は多様だが、扁平礫の側縁を上に並べているが、東西の壁際では仕切り石が抜き取られ、直線的に小礫が並んでいるのが確認されただけである。現状では、この仕切り石と壁の間には小礫少量が混じる程度で遺存状態が悪く、小礫を混ぜる行為が意識的か判断できない。

連結部　対ピット(Ｐ12・13)がある。この対Pitは敷石の上面から30㎝である。連結部周辺には敷石がなく、既に抜き取られていた。

張出部　連結部側の敷石が抜き取られていたが、比較的良好に敷石が残存していた。出入口部側の敷石が下がり



第27図　２号住居跡遺構図(１)



第28図　２号住居跡遺構図（２）

気味で、その下位にPit14が確認されている。このPitの壁際には深鉢胴部下半の土器片が挿し込まれており、Pitの対辺には礫片が出土(第28図)、調査所見では埋甕とされている。これについては、位置的には埋甕の埋設されるところではあるが、通常埋甕は底部が抜かれるということはなく、埋甕とするのは難しい。

埋没土　最上層にはロームブロックを含む黒褐色土が堆積、全体としても褐色土を含む割合が高く、土器類の廃棄行為は見られないものの人為的に埋め戻されている可能性がある。

遺物の出土状態　土器・石器類が48点取り上げられているが、全体的にその出土量は少ない。土器片類は掘り方より出土したとされ、敷石が抜き取られたあとのものということになる。

所　見　主体部の敷石は大部分が抜き取られ、本来の状態を留めていない。周礫は東壁際では間仕切り石様に配置されるのに対して、北東壁際(Pit２－Pit４間)では間仕切り石に代えて大型の棒状礫が、また、Pit ３の前には小礫が充填され、北西壁際(Pit４－Pit８間)では小礫で間仕切り、それよりやや大形の礫を小礫の上に重ねる傾向にある。西壁際(Pit８－Pit11間)にもPit４－Pit８間と同様だが、間仕切り礫が抜かれてないが、常識的には周礫間の交点にある柱穴が住居の主柱穴ということになる。周礫のラインより後にあるPit ３・５～７・９・10は、どのように評価されるのであろうか。素直に柱穴が同時に機能したと見る見方があり、張出部Pit14－炉－Pit４を軸とする住居プランと、連結部12・13－炉－北壁際Pit５を軸とする住居プランを時間差(建て替え)と見る見方があるだろうが、このことについてはどちらとも言い難い。本住居の構築時期を示唆するものとして張出部下のPit14から出土した埋甕様の土器片が唯一のものであるが、縄文(LR)を縦位に施文した加曾利系の胴部破片(未掲載)であり、後期初頭期(称名寺式期)の土器片であることは確実だが、細別型式まで断定するのは難しい。

４号住居跡(第29図、PL.５)

位　置　98区Ｒ５・６

方　位　Ｎ－32°－Ｅ

規　模　主体部推定径5.5m・深さ0.15m

面　積　主体部推定面積24㎡

形　状　炉の周辺に敷石が部分的に残る。住居プランは不明だが、住居プランは円形を基調としたものか、多角形状を呈するものとなろう。炉周辺に部分敷石があることや、本住居南壁に近接して数点の礫があることから(PL５－７)、可能性として柄鏡形の敷石住居になることも想定されよう。

重　複　確認されていない。

床　面　炉石を確認した段階で住居と認識されたものであり、少なくともこの段階で床面が露出していた可能性が高い。

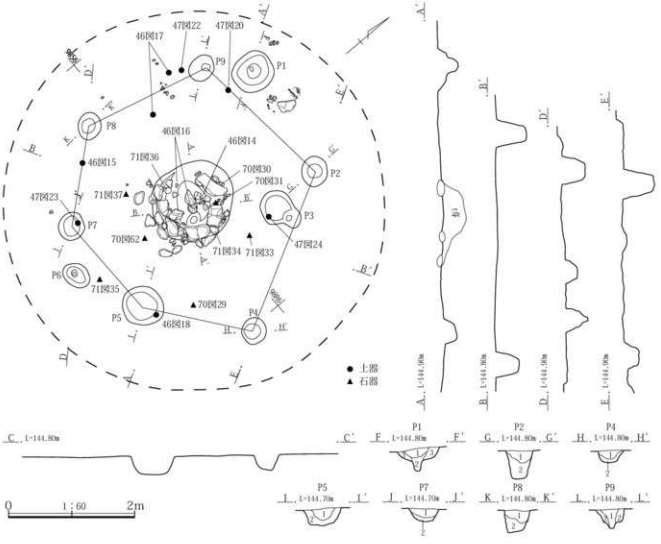
炉　石囲い埋甕炉。主体部中央付近にあり、楕円形状を呈す。北東側の炉石が抜き取られており、石囲い炉の片側が開いたように見える。長さ30～50㎝の柱状礫を四面に並べてその間を小礫で埋め石囲い炉としたもので、炉石は被熱して破損しているものが多い。炉体土器は胴部下半を欠いており、内外面とも口縁から５㎝前後が被熱還元され、器面が荒れている。

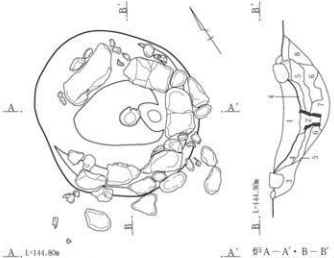
柱　穴　柱穴９本が確認されている。住居構造は主柱穴６本からなるものと見られ、位置的にはPit２・４・５・７・８は確定的である。残る主柱穴１本はPit １かPit ９ということになるが、どちらとも言い難い。南西側Pit７と南東側Pit４は深さ９㎝と浅く、これ以外の柱穴は深さ15～21㎝を測る。

埋没土　炉石が確認されたことでその存在に気付いたことでも分かるように、埋没土は地山に似た褐色土で埋没していたのであろうが、詳細は明らかではない。

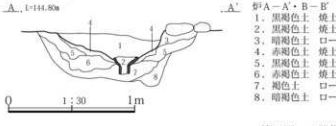
遺物の出土状態　礫・礫片類の出土量が多く、土器片類の出土量は概して少ない。北側の壁際には平坦面を上に扁平礫が出土しており、敷石としての可能性を想定してみたが、炉石のレベルより５㎝ほど高く、これだけで敷石として認定するのは難しいだろうと考えている。

所　見　当初、方形住居として調査されたようであるが、最終的に部分敷石のあることやPitの位置関係などから住居プランは円形あるいは多角形状を呈するものと理解している。出土土器は深鉢の土器片が主体を占めているが、壺型土器１(第47図24)が含まれており注目されよう。本住居の構築時期は、炉体土器からみて明らかなように後期初頭期(称名寺Ⅱ式期)のものとすることができるだろう。





Pit1　1．黒褐色土　ロームブロックを含む。
　　2．黒褐色土　１層と同質だが、褐色土を多く含む。
　　3．褐色土　ロームブロックを多量に含む。
Pit2　1．灰褐色土　還元気味のローム土を含む。
　　2．暗褐色土　１層と同質だが、やや色調が暗い。
Pit4　1．暗褐色土　ロームブロックを含む。
　　2．暗褐色土　ロームブロックを含む。１層よりやや暗い。
Pit5　1．暗褐色土　ロームブロックを含む。砂質。
　　2．暗褐色土　ロームブロックを含む。１層よりやや暗い。
Pit7　1．暗褐色土　ローム粒子を含む。
　　2．褐色土と黒色土の混土層
Pit8　1．褐色土　砂質で均質、ローム粒子等の混入は見られない。
　　2．褐色土　ロームブロックを含む。
Pit9　1．暗褐色土　還元気味に灰色を帯びたロームブロックを含む。
　　2．暗褐色土　１層と同質だが、やや明るい。



炉A－A'・B－B'
1．黒褐色土　焼土粒子を含む。
2．黒褐色土　焼土粒子の混入は確認できない。
3．暗褐色土　ロームブロックを含む。
4．赤褐色土　焼土ブロックを多量に含む。
5．黒褐色土　焼土を多量に含む。
6．赤褐色土　焼土粒を含む。
7．褐色土　ロームブロックを多量混入。
8．暗褐色土　ロームブロックを含む。

第29図　４号住居跡遺構図

5号住居跡(第30～38図、PL.6)

位　置　98区S・T5～7、99区A5～7

方　位　N－37°－E

規　模　主体部(長軸7.8m・短軸7.5m・深さ0.45m)、張出部(長軸4.5m・短軸2.3m・深さ0.40m)

面　積　主体部41.0㎡、張出部9.5㎡

形　状　柄鏡型敷石住居。六角形状を呈する主体部に長い張出部が付く。

重　複　35号土坑を切り、本住居が構築される。

床　面　壁際の敷石を除いて、大部分の敷石が抜き取られており、床面の残存状況は悪い。

炉　主体部中央付近にあり、これに接して皿状の「落ち込み」がある。長さ0.95m・深さ0.39mを測る。略方形状を呈し、南北端に大型礫を配しているが、北側の大形礫は炉を構築する際の炉壁として先の「落ち込み」に埋め込まれたもので、これが炉石として機能したものか、断定は難しい。また、北側の炉石に接してその東側にはこれと似たサイズの大型礫が出土しているが、これを炉石としてみた場合、明らかに原位置を逸しており、上方から落ち込んだということになる。炉石は被熱、礫面の剥落が著しい。

柱　穴　壁際を廻り主柱穴7本(Pit 1～7)、連結部に対Pit24・25があるほか、壁際の主柱穴の間を埋めるように壁柱穴17本(Pit10～23・26・27)が確認されている。主柱穴7本は大型で、その平均値は長軸1.13m・短軸0.85m・深さ0.84mを測る。柱痕については不明瞭だが、Pitの内側に柱材を立て、裏側に周礫があるものが多い。主柱穴間の距離はPit 1－2が約2.3m、Pit 2－3が約3m、Pit 3－4が約2.8m、Pit 4－5が約2.5m、Pit 5－6が約3m、Pit 6－7が約3mを測る。各主柱穴間には基本的に3本の壁柱穴があり、その平均的サイズは径30～40cmである。Pit 3－6間のPitは深さ67.2cmが平均値(最深82cm・最浅46cm)であり、その他のPit(平均40cm前後)に比べ深い。主柱穴間のPitは近接しており、上屋構造と関連するはずだが、その詳細については明らかではない。

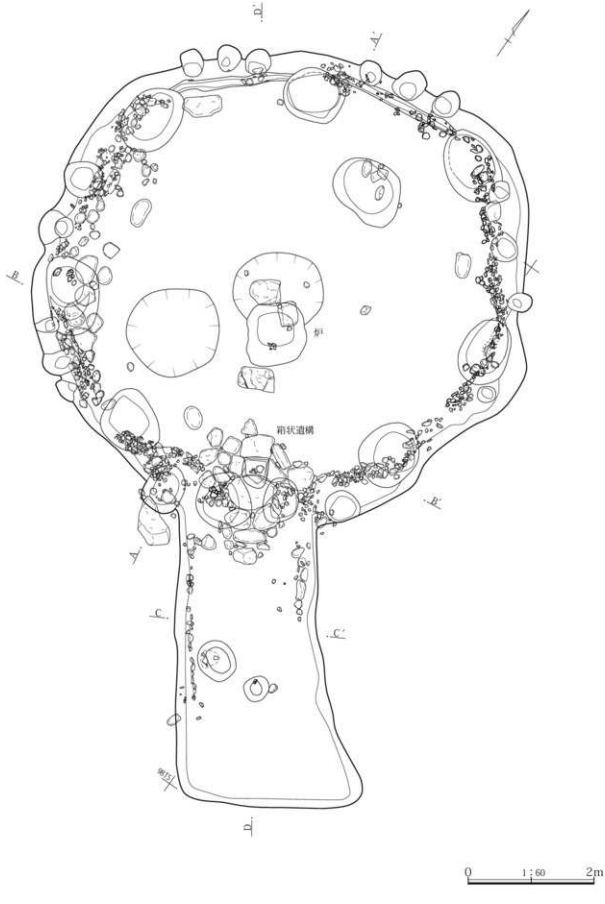
周　礫　柱穴間を周礫で繋ぐ基本構造は、1・2号住居と変わらないが、仔細に見ると、各柱穴間で周礫の在り方は異なる。周礫は崩れ落ちて乱れた状態にあり、旧状は止めていないが、Pit3－5の柱穴間には幅12～20cmを測る浅い周溝があり、Pit 5－Pit 7の柱穴間には仕切り石状に扁平礫が直線的に長軸を揃えて並ぶ。主柱穴の間には壁柱穴3本があり、これを基本構造としていることは明らかである。2号住居跡では住居外縁のプランと柱穴の位置に規則性が欠如していたため、住居の建て替え等の可能性も否定できないが、本住居の在り方を見る限り、極めて構造的に壁柱穴が機能したものと見られる。主柱穴、及び、壁柱穴と周礫は構造的に理解されるべきものであるが、周礫が崩れ落ちており、構造性が巧く図化されていないため、詳細は不明瞭だが、これについては別項にて検討することとして、ここでは周礫は構造性を有していたであろうことだけを指摘しておきたい。

連結部　箱状遺構(箱状石囲い施設)を含む連結部敷石、及び、対ピットがある。この対Pitの上面には小礫が多量に出土しているが、位置的に見て、連結部側壁の周礫が崩れたものと考えている。箱状遺構は住居長軸方向に大型の扁平礫を並べ、それより小型の礫で両側を塞いだもので、張出部側の大型扁平礫下には側壁として扁平礫が直立した状態で埋め込まれていた。規模は長軸0.35m・短軸0.25m・深さ0.24mほどで、下層に褐色土が、上層に炭化物を含む黒色土が堆積していた。本来的には蓋石で覆われるのであろうが、蓋石については確認されていない。近接して大型の石棒が敷石として利用されている。

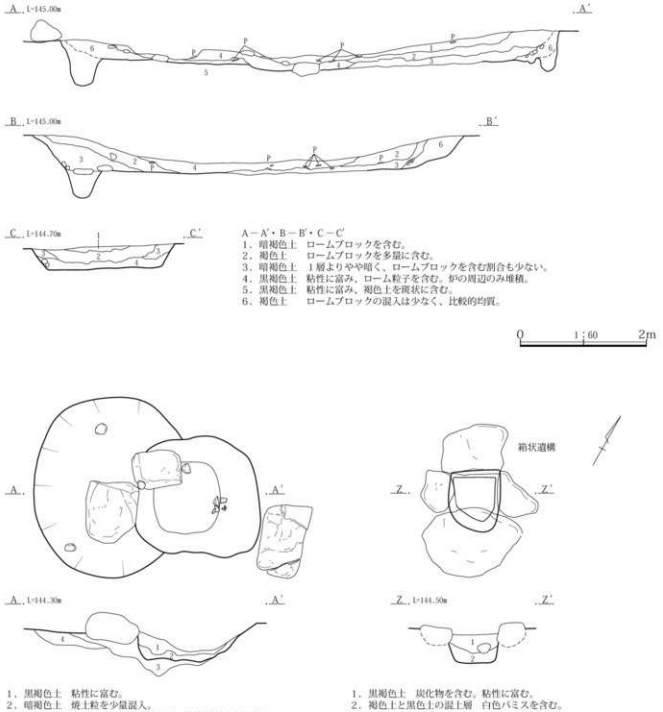
張出部　張出部敷石は大部分が抜き取られているが、両側に小礫が連続して並んでおり、本来的には張出部全面が敷石されていた可能性が高い。張出部中央には小Pitが並んでいるが、出入口部上屋を支えた柱穴になるのであろうが、対称性に欠け詳細は不明である。

埋没土　ロームブロックを含んだ褐色土が上層に堆積している。敷石が抜き取られていること、完形品に近い土器類55個体が出土していることから単なる自然埋没とは看做し難い。

遺物の出土状態　当初、本住居は土器廃棄地点として調査されたことでも分かるように、相当量の土器片類が出土している。その大部分が住居廃絶後の廃棄であり、住居に伴う土器類は周礫下部に差し込まれていた土器片類(第50図38)があるだけであり、第36～38図にあるように主体部・敷石上面レベルに出土した完形品に近い土器も張出部出土の土器片と接合関係が確認されており、これ



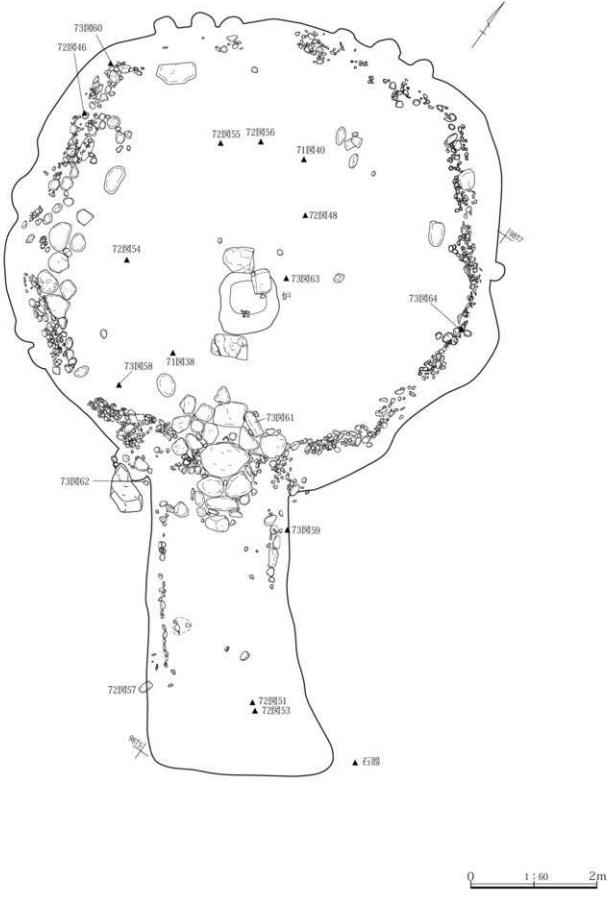
第30図　５号住居跡遺構図（１）



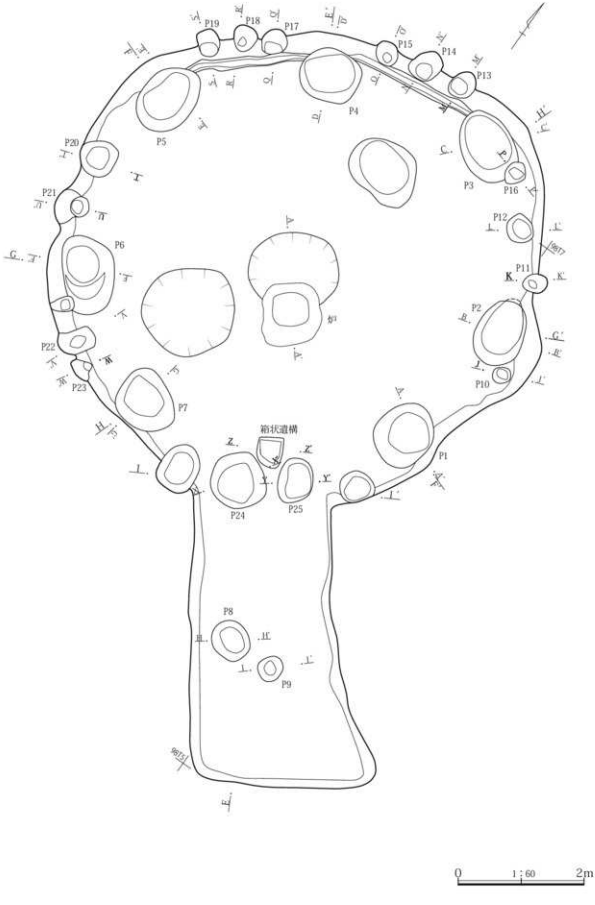
第31図　５号住居跡遺構図（２）

についても住居廃絶後に投げ込まれたものということになろう。石器類では後期石器類を網羅しているが、石棒のミニュチュアや軽石製の装身具類が周礫に混じり出土した。

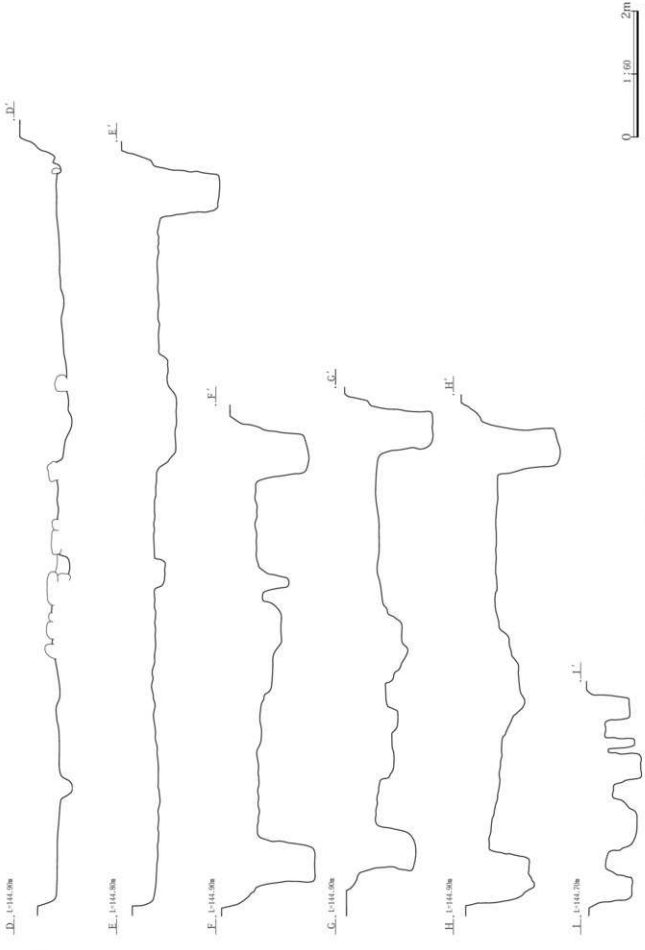
所　見　周礫に埋め込まれた土器は、後期初頭期のものであり、埋没土中から出土した廃棄土器の一群も同時期であり、形式学的な段階差はない。このことから、本住居の構築時期は、概ね後期初頭期（称名寺Ⅱ式期）ということになろう。



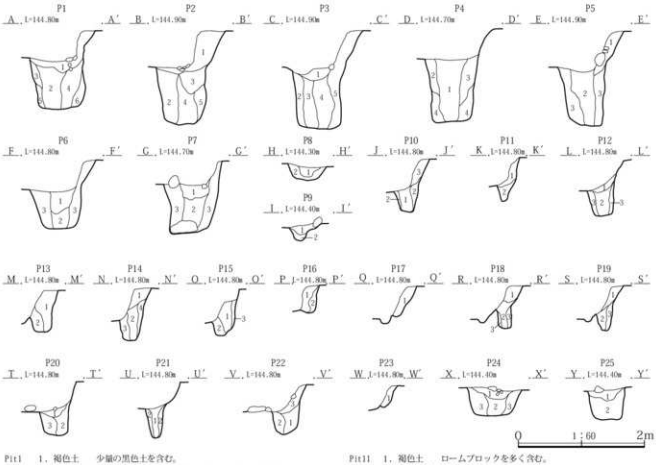
第32図　５号住居跡遺構図（３）



第33図　５号住居跡遺構図（４）

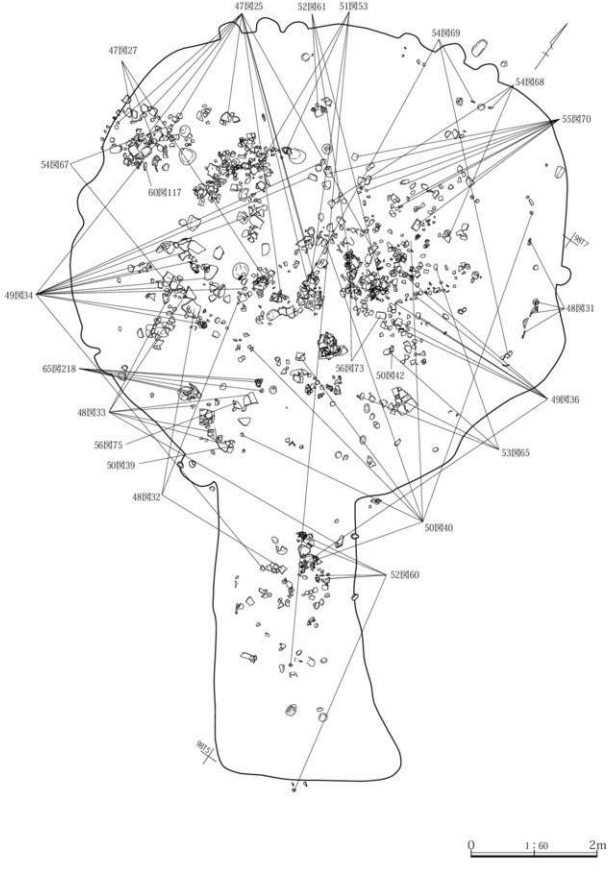


第34図　５号住居跡遺構図(５)

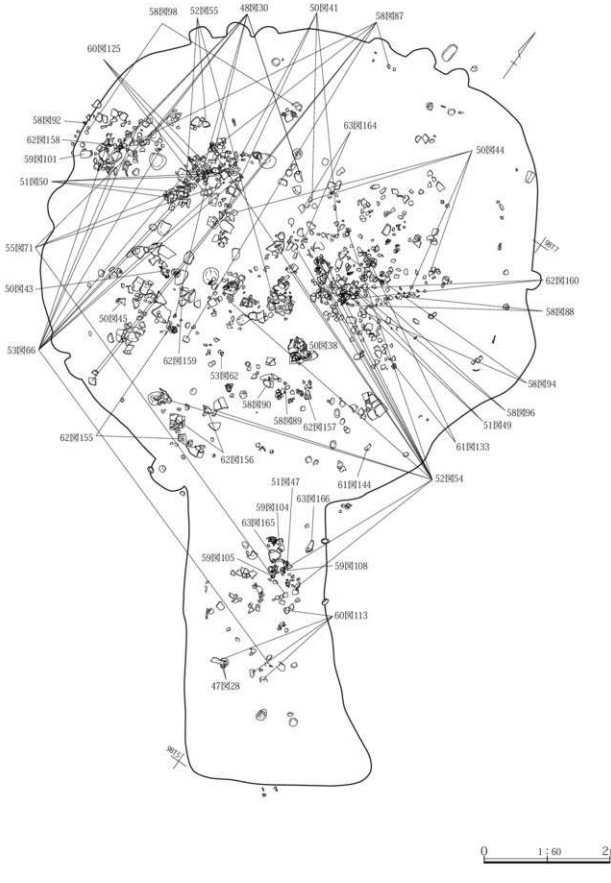


Pit1　1．褐色土　少量の黒色土を含む。
　　2．黒褐色土　炭化物を多く含む。下位ほどロームブロックが多い。
　　3．暗褐色土　ロームブロックを含む。
　　4．暗褐色土　ロームブロックを多量に含む他、少量の炭化物を含む。
　　5．灰褐色土　砂礫を含む。
　　6．暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。色調は4層より明るい。
Pit2　1．褐色土　ロームブロックを含む。
　　2．黒褐色土　炭化物を含む。
　　3．褐色土　１層と同質だが、ロームブロックの量が少ない。
　　4．黒褐色土　砂質で、ロームブロックを多く含む。
　　5．灰褐色土　砂礫を含む。
Pit3　1．暗褐色土　炭化物・ロームブロックを少量混入。
　　2．暗褐色土　大粒のロームブロックを含む。
　　3．黒褐色土　炭化物を多量に含む。
　　4．黒褐色土　３層と同質だがやや明るく、ロームブロックを多く含む。
　　5．褐色土　ロームブロックを多量に含む。
Pit4　1．黒褐色土　炭化物を含む。
　　2．黒褐色土　１層と同質だが、炭化物は含まない。
　　3．褐色土　ロームブロックを含む。
　　4．黒褐色土　ロームブロック・砂礫を含む。
Pit5　1．暗褐色土　還元気味の灰色を帯びたロームブロックを含む。
　　2．黒褐色土　炭化物・砂礫を含む。
　　3．褐色土　ロームブロックを含む。下層ほど砂礫が多い。
Pit6　1．暗褐色土　炭化物・少量のロームブロックを含む。
　　2．暗褐色土　１層と同質だが、小礫を含む。
　　3．褐色土　小礫を含む。
Pit7　1．褐色土　やや赤味を帯び、ロームブロックを含む。
　　2．黒褐色土　ロームブロックを含む。
　　3．褐色土　ロームブロックを多量に含む。
Pit8　1．暗褐色土　ロームブロックを含む。
　　2．褐色土　ロームブロックを含む。
Pit9　1．暗褐色土　ロームブロックを含む。
　　2．暗褐色土　１層と同質だが、やや色調は明るい。
Pit10　1．黒褐色土　ロームブロックを含む。
　　2．黒褐色土　ロームブロックを含む。１層よりやや明るい。
　　3．褐色土　ロームブロックを多く含む。
Pit11　1．褐色土　ロームブロックを多く含む。
　　2．黒褐色土　粘性に富む。
Pit12　1．暗褐色土　ローム粒子を多く含む。
　　2．黒褐色土　炭化物を少量混入。
　　3．黒褐色土　ロームブロックを含む。2層より明るい。
Pit13　1．黒褐色土　ロームブロックを含む。
　　2．褐色土　ロームブロックを多く含む。
Pit14　1．褐色土　ロームブロックを含む。
　　2．黒褐色土　ローム粒子を含む。
　　3．暗褐色土　ロームブロックを含む。
　　4．褐色土　ロームブロックを含む。
Pit15　1．黒褐色土　ロームブロックを含む。
　　2．黒褐色土　１層と同質だが、やや明るい。
　　3．褐色土　ロームブロックを多量に含む。
Pit16　1．黒褐色土　ローム粒子を含む。
　　2．黒褐色土　１層と同質だが、やや明るい。
Pit17　1．褐色土　ロームブロック主体で、黒色土が混じる。
Pit18　1．暗褐色土　ロームブロックを含む。
　　2．暗褐色土　１層と同質。ややロームブロックが多い。
　　3．暗褐色土　ロームブロックを多く含む。
Pit19　1．黒褐色土　ロームブロックを含む。
　　2．黒褐色土　ロームブロックを少量混入。1層より暗い。
　　3．褐色土　ロームブロックを多量に含む。
Pit20　1．暗褐色土　ロームブロックを含む。やや軟質。
　　2．黒褐色土　１層と同質。やや色調が暗い。
　　3．暗褐色土　ロームブロックを含む。
Pit21　1．暗褐色土　ロームブロックを少量混入。
　　2．暗褐色土　１層と同質。色調は暗い。
Pit22　1．黒褐色土　ロームブロックを含む。
　　2．黒褐色土　ロームブロックを少量混入。色調は暗い。
　　3．褐色土　ロームブロックを多量に含む。
Pit23　1．暗褐色土　ロームブロックを含む。
Pit24　1．黒褐色土　ロームブロックを含む。
　　2．黒褐色土　ロームブロックを多く含む。1層より若干明るい。
　　3．褐色土　やや軟質で、壁の検出は容易。
Pit25　1．暗褐色土　黒色土が混じる。
　　2．褐色土　ロームブロックを多量に含む。

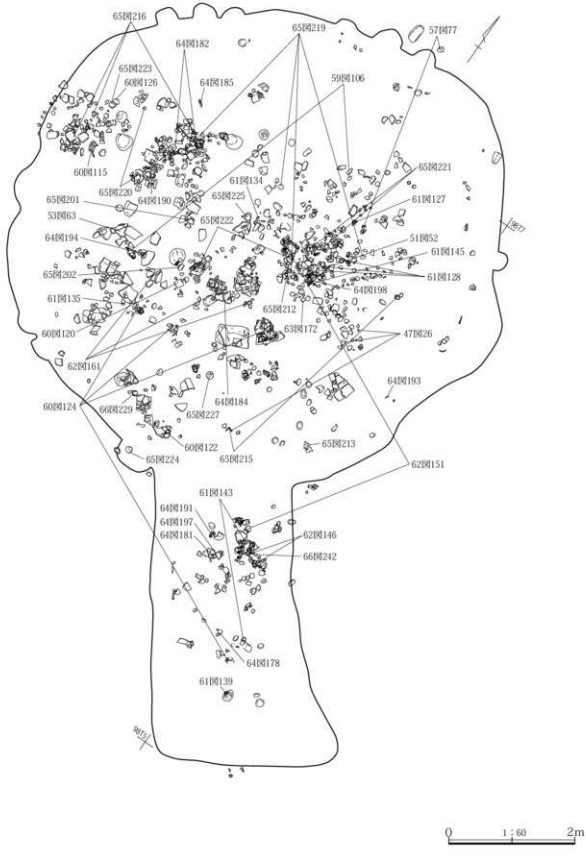
第35図　５号住居跡遺構図（６）



第36図　５号住居跡遺物の接合状態（１）



第37図　５号住居跡遺物の接合状態（２）



第38図　５号住居跡遺物の接合状態（３）

６号住居跡(第39～40図、PL.７)

位　置　98区Ｍ・Ｎ７

規　模　推定径約６ｍ

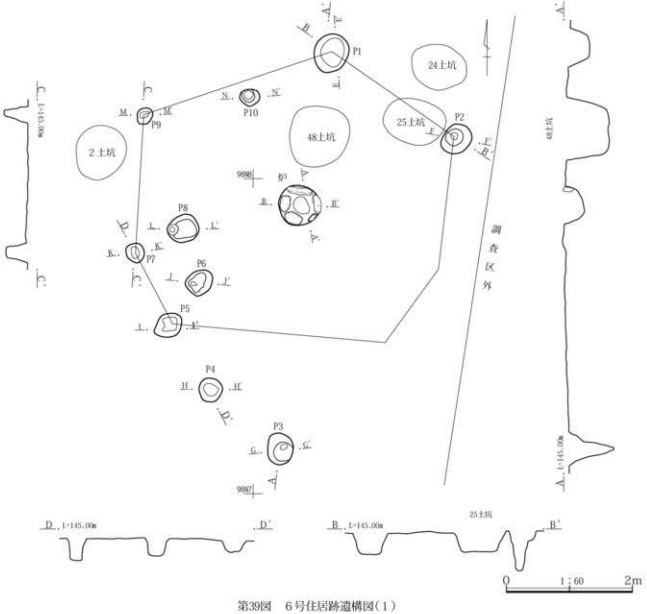
形　状　炉・Pitの配置状況から、住居形状は円形状を呈し、壁際に柱穴を配したものと見られる。

重　複　２・24・25・48土坑と重複する。住居と土坑の新旧関係については明らかでない。

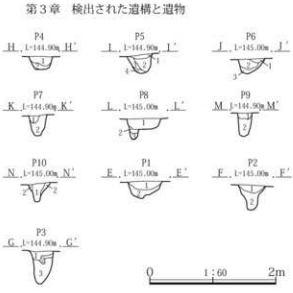
炉　石囲い炉。長軸69cm・短軸61cm・深さ31cmを測る楕円形状を呈する土坑の四隅に扁平礫の短軸方向を上にして、その隙間を埋めるよう小型礫が埋め込まれていたものと見られる。炉石は３点が残されていただけであるが、残る炉石２点の抜き取り痕が確認されており、炉石は５点からなることが判明した。炉石には、扁平礫が使われたようで、長さ40cmの大型礫を南北両辺に、これにやや小振りの礫を直交させるように置き、隙間が空いた南東隅に棒状礫を埋め込んだものと見られる。

柱　穴　炉の東側に柱穴が確認されないため、特に住居の柱穴は特定されていないが、炉を中心に柱穴があることから住居と認定されたようである。柱穴は径25～60cm程度で規格性に欠ける。位置関係から図上復元してみたが、炉が中央よりやや奥に位置することになり、確実性に乏しいかもしれない。

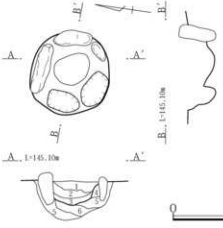
遺物の出土状態　明確に住居に伴う土器片は、確認されていない。石器類では住居炉跡から石鏃１(第73図65)、住居覆土から石鏃１・加工痕ある剥片１が出土したのみである。



第39図　６号住居跡遺構図(１)



Pit１　１．暗褐色土　ロームブロックを含む。
　　２．暗褐色土　１層と同質だが，若干色調は明るい。
Pit２　１．暗褐色土　黒色土が混じるほか、焼土粒を含む。
　　２．暗褐色土　ロームブロックを含む。
Pit３　１．暗褐色土　ロームブロックを含む。
　　２．暗褐色土　１層よりやや暗い、軟質で、しまりには乏しい。
　　３．暗褐色土　ローム・焼土粒を含む。色調は暗い。
Pit４　１．暗褐色土　ローム粒子を含む。
　　２．褐色土　ロームブロックを含む。
Pit５　１．暗褐色土　ローム粒子を含む。
　　２．暗褐色土　褐色土を斑状に含む。
　　３．暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。
　　４．灰褐色土　還元され灰色を帯びたロームブロックを含む。
Pit６　１．暗褐色土　ロームブロックを含む。
　　２．暗褐色土　１層と同質だが、やや明るい。
　　３．暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。
Pit７　１．暗褐色土　褐色土を斑状に含む。
　　２．暗褐色土　１層と同質だが、やや色調が明るい。
Pit８　１．暗褐色土　ローム粒子を含む。
　　２．暗褐色土　ローム粒子を多量に含む。
　　３．暗褐色土　ローム粒子を含む。色調は暗い。
Pit９　１．暗褐色土　ロームブロックを含む。
　　２．暗褐色土と黒色土の混土層
Pit10　１．暗褐色土　褐色土を斑状に含む。
　　２．暗褐色土　１層と同質だが、やや明るい色調を呈す。



１．褐色土　ロームブロックを多量に含む。
２．黒褐色土　ロームブロック・炭化物を多量に含む。
３．暗褐色土　炭化物・焼土粒を含む。
４．褐色土　ロームブロックを含む。
５．褐色土と黒色土の混土層
６．被熱赤化した褐色土

第40図　６号住居跡遺構図(２)

所　見　住居の帰属時期については伴出遺物が少なく不明だが、後期初頭期(称名寺式期)の土器片があり、概ね住居の構築時期を示していると考えている。

７号住居跡(第41図、PL.７)

位　置　99区Ａ12

方　位　Ｎ－88°－Ｗ

規　模　長軸5.15m・短軸4.40m・深さ0.24m

形　状　隅丸方形状を呈し、南北軸に住居の長軸はある。壁高は10～22cmで、北東側の壁高が低い。

重　複　確認されていない。

床　面　ほぼ平坦だが、明瞭な硬化面は確認されていない。

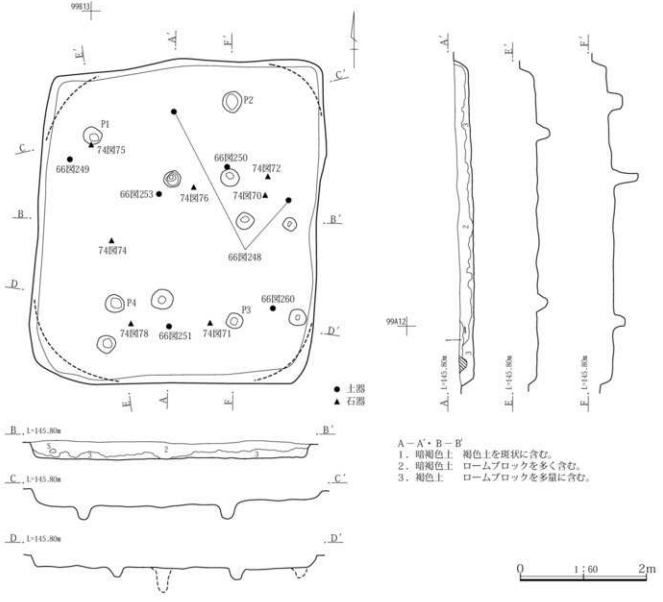
炉　確認されていない。当該期住居の炉は明瞭な焼土を形成することが稀で、焼土粒が散る程度であることが多く、見逃した可能性が高い。

柱　穴　柱穴11本を確認した。うち、Pit １～４が主柱穴として認定されているが、深さ20cm程度で、やや浅い。

埋没土　住居周辺部には地山のローム層に似た暗褐色土が堆積しており、住居プランの確認を難しくしていた。

遺物の出土状態　土器片類は覆土の上層から出土したようであるが、磨石等の石器類は下層に出土する傾向があり、また、平坦面を水平に出土している。礫石器類は床面よりやや浮いた状態で出土しているが、このレベルが本来の床面とすることができるかもしれない。

所　見　調査時の所見では黒浜式期の住居とされていたが、整理作業の結果、前期初頭の花積下層期式期の住居であることが判明した。この段階の住居は方形プランというより隅丸方形状であることが圧倒的であるため、推定プランを破線で示した(第41図)。当初、本遺跡では方形基調の住居とされていたが、黒浜式期の住居であるということが先行し、それが住居プランの認定にも影響したということだろう。



第41図　７号住居跡遺構図

８ａ・ｂ号住居跡(第42図、PL.７)

位　置　98区Ｒ・Ｓ－７・８

方　位　不明。

規　模　推定径５ｍ前後が想定可能。

形　状　炉、及び、周辺Pitの配置状況から住居形状は、円形状を呈するものと推定した。

重　複　焼土遺構２ヶ所があり、住居２棟(８ａ・８ｂ号住居)の重複と見た。

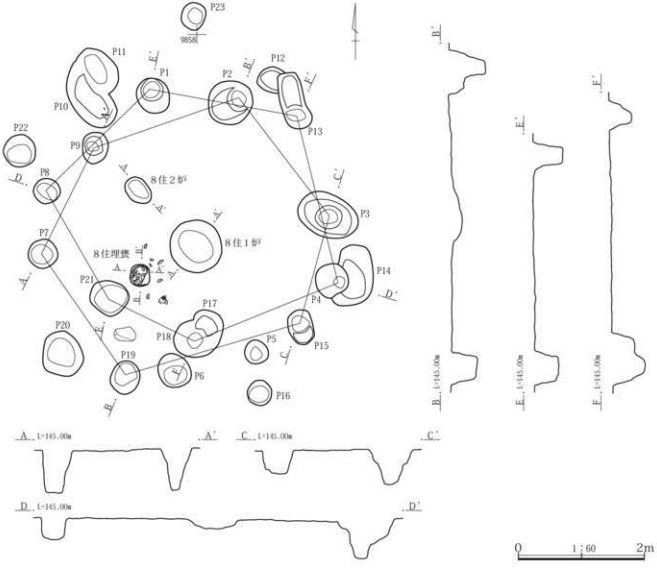
炉　想定住居内に、略円形状(８住１炉長軸88cm・短軸82cm)を呈する焼土の散布と、楕円形状(８住２炉長軸50cm・短軸32cm)を呈する焼土の散布があり、これを炉と認定した。炉の形態としては地床炉とされるものであるが、調査時においては焼土遺構(６・２号焼土遺構)として記録類が残されている。柱穴の配置状況、及び、焼土遺構の位置関係から焼土遺構を炉と呼び変えた。

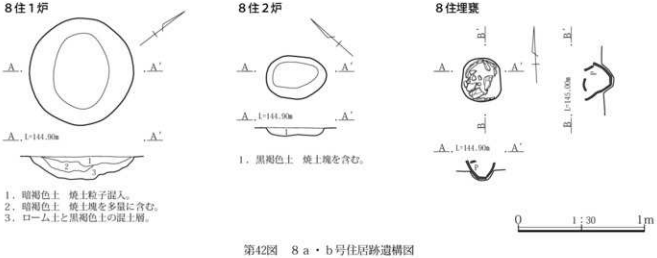
柱　穴　８ａ号住居柱穴として６本(Pit２・３・７・９・15・19)を、８ｂ号住居柱穴として６本(Pit１・４・８・13・17・21)を認定した。各柱穴間は1.8～2.9mと規格性に欠ける。

遺物の出土状態　Pit21・24より土器片２(第67図270・271)が、Pit５から加工痕ある剥片１が、炉・Pit22から石核１が出土した。

所　見　後期初頭期の住居の炉は、通常中央より入り口側に偏在することが知られ、また、敷石住居の入り口が

地形(等高線に直交)に規制されることが指摘されており、この要素を充たすことを期待して検討してみたが、いずれも８住２炉にはあてはまらないようで、果して炉と呼び代えていいものか疑問も残る。柱穴覆土より後期初頭期(称名寺式期)の土器片が出土しており、これにより住居の構築時期としておきたい。





第42図　８ａ・ｂ号住居跡遺構図

９号住居跡(第43図、PL．８)

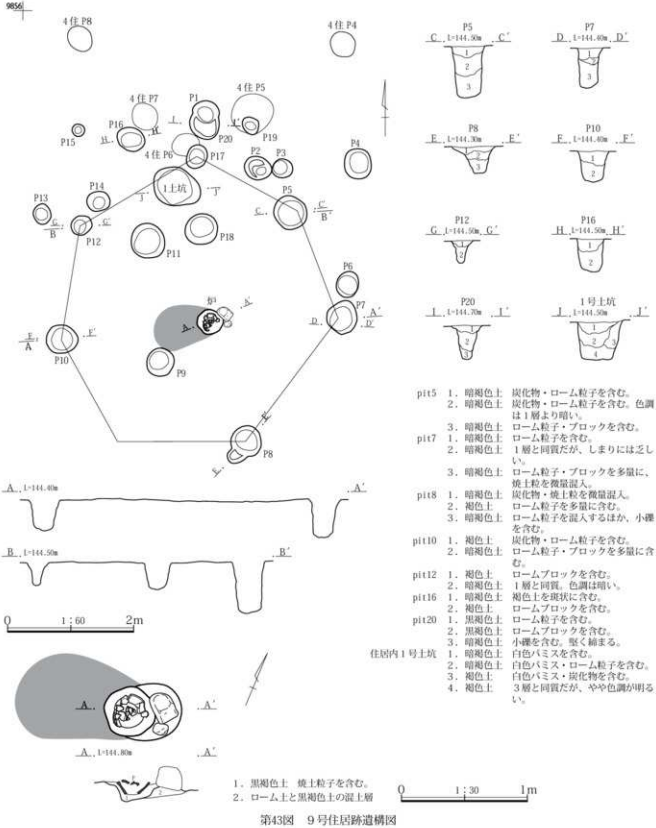
位　置　98区Ｒ４・５

方　位　柱穴だけから想定されたため、主軸方位については明確に判断できない。

規　模　推定径５ｍ前後の住居プランが想定可能。

形　状　炉、及び、周辺Pitの配置状況から、住居形状は円形状を呈するものと考えている。

重　複　４号住居と１号土坑と重複する。



pit5　1．暗褐色土　炭化物・ローム粒子を含む。
　　2．暗褐色土　炭化物・ローム粒子を含む。色調は１層より暗い。
　　3．暗褐色土　ローム粒子・ブロックを含む。
pit7　1．暗褐色土　ローム粒子を含む。
　　2．暗褐色土　１層と同質だが、しまりには乏しい。
　　3．暗褐色土　ローム粒子・ブロックを多量に、焼土粒を微量混入。
pit8　1．暗褐色土　炭化物・焼土粒を微量混入。
　　2．褐色土　ローム粒子を多量に含む。
　　3．暗褐色土　ローム粒子を混入するほか、小礫を含む。
pit10　1．褐色土　炭化物・ローム粒子を含む。
　　2．暗褐色土　ローム粒子・ブロックを多量に含む。
pit12　1．褐色土　ロームブロックを含む。
　　2．暗褐色土　１層と同質。色調は暗い。
pit16　1．暗褐色土　褐色土を斑状に含む。
　　2．褐色土　ロームブロックを含む。
pit20　1．黒褐色土　ローム粒子を含む。
　　2．黒褐色土　ロームブロックを含む。
　　3．暗褐色土　小礫を含む。堅く締まる。
住居内１号土坑　1．暗褐色土　白色パミスを含む。
　　2．暗褐色土　白色パミス・ローム粒子を含む。
　　3．褐色土　白色パミス・炭化物を含む。
　　4．褐色土　３層と同質だが、やや色調が明るい。

第43図　９号住居跡遺構図

炉　想定住居内に円形状を呈する埋甕炉がある。埋甕炉は径40cmほどで、これに接してその北東側に大型礫がある。この大型礫は炉石としてみると大き過ぎるようであるが、同サイズの礫が５号住居の炉石にもあり、石囲い埋甕炉になることも可能性として否定できないだろうと考えている。炉体土器(第67図274)は、深鉢の「括れ部」より上半部を埋め込んでおり、土器は部分的に被熱して還元状態にある。炉の西側には、これに接するように１m弱の赤化範囲が確認されている。

柱　穴　住居柱穴として、Pit５・７・８・10・12・17に未確認の１本を加えた７本を想定している。Pit７・８の柱穴間を除いて各柱穴間は1.9～2.1mと比較的バランスが取れている。柱穴は径30～50cm、深さ35～70cmを測り、北西側柱穴(径35cm)の径が、若干だが小さい傾向にある。

遺物の出土状態　本住居確認の際、相当量の土器類が出土しているはずであるが、最終的に本住居に伴う土器として認定することのできる土器は、炉体土器があるだけである。

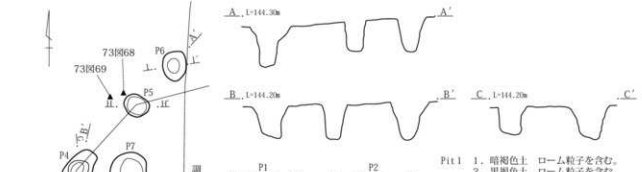
所　見　本住居の炉跡より北には複数の柱穴があり、それより南には柱穴が少ない。すでに述べたとおり、本住居北には４号住居が重複しており、これが柄鏡型敷石住居になる可能性のあることについてはすでに述べたとおりであるが、炉跡より北に柱穴が多く確認されていることからみて、４号住居跡に伴う柱穴が重複しているのは確実であり、本住居跡に伴う柱穴を誤認している可能性も否定できない。本住居は炉体土器よりみて、後期初頭期(称名寺Ⅱ式期)に帰属するものだが、「括れ部」より下半に接合した土器片は４・５号住居跡から出土している。通常、図示した状態では炉体土器とすることはなく、「括れ部」より下半を打ち欠いて、炉体土器としたものと想定されよう。

10号住居跡(第24図、PL.８)

位　置　99区Ｄ４・５

方　位　柱穴だけから想定されたため、主軸方位については明確に判断できない。

規　模　推定径６m前後の住居プランが想定可能。



第44図　10号住居跡遺構図

形　状　調査区(Ｃ区)の南東隅にある。Pit１～７まで Pit番号の付いた柱穴７本の他、小Pit２本がある。住居プランの詳細は調査区画に明示されていないが、調査時の所見としては、円形基調の住居プランが想定されたということだろう。

重　複　確認されていない。

柱　穴　柱穴７本が確認されている。柱穴の径は40～60cmと若干規格性に欠けているが、いずれも深さ50cm前後で安定している。Pit１～７には柱痕があるようであるが、写真で見る限り、それほど明確な痕跡は確認できない。

遺物の出土状態　本住居に伴出するのか不明だが、住居跡に重なり大型礫が出土しており、これに含まれるように磨石１・多孔石１が出土している。土器片類については出土していない。

所　見　壁際の土層断面図が残されているが、それによると、床面は軟質ローム層(Ⅶ層)の上面にあり、調査区コーナーから北側5.5m・同コーナーから西側2.4mの地点で住居が立ち上がるとされている。仮に、この観察が正しいとすれば、径10m弱の大型住居ということになり、中後期の住居としては大型住居の部類となる。常識的に見て、５m前後の住居プランを想定すべきであるが、仮に土層断面の観察のとおりであるならば、住居の重複を想定すべきかもしれない。本住居の帰属時期を示す土器片類は出土していないが、住居プランから見て、中・後期の住居ということになろう。

11号住居跡(第45図)

位　置　98区Ⅰ８

方　位　N－79°－E

規　模　推定径４m程の主体部に、２m前後の張出部が付く住居プランを想定することができる。

形　状　調査においては配石遺構と埋め甕として別々に記載されていたが、遺物の平面・垂直分布から「掘り込み」があることが判明、整理段階で主体部４m・張出部２m前後を測る柄鏡型の敷石住居と認定した。

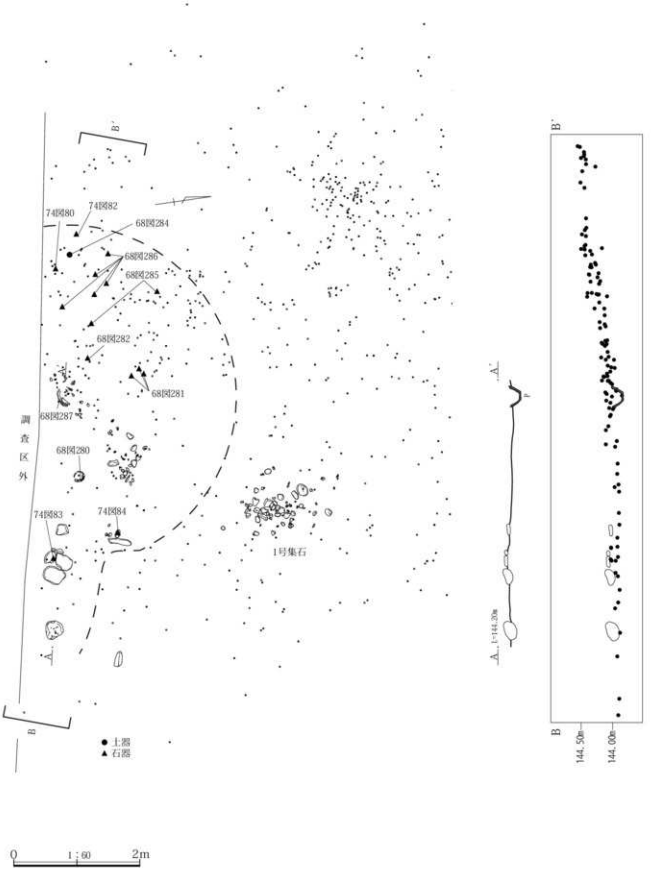
炉　位置的に見て、調査区の境に出土した胴部下半の深鉢(第68図290)が炉体土器ということになる。この炉体土器は被熱して表裏面とも剥落が激しい胴部下半の深鉢であり、炉体土器としての要素を備えている。黒色土中にあるためか、焼土や「掘り込み」の有無について調査所見の記載がなく、詳細は不明である。

柱　穴　確認されていない。

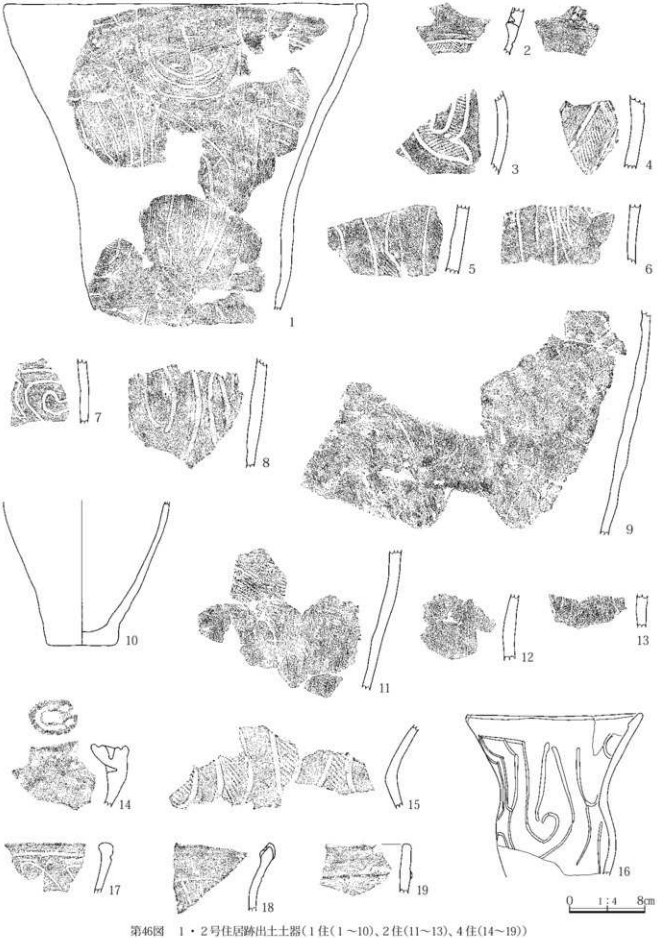
埋没土　当初、住居跡を想定して調査を進めたようで、遺物もａ－１号住居として取り上げられている。最終的には住居として認定できなかったようで、土層図等の記録は残されていない。

所　見　冒頭で述べたとおり、等高線に直交するよう作成した１m幅の垂直分布図(第45図)に示されたように、遺物が明らかに落ち込んでおり、概ね高低差を以て出土する遺物の最下層が床面の存在を想定させるように水平に出土していること、位置的に見て配石とされたものが敷石住居としての張出部に、埋甕とされたものが連結部の埋設土器に相当するものと考え、11号住居跡と認定した。仮に、これが敷石住居であるならば南側に張出部を持つ台地上の敷石住居とは異なり、東側に張出部を有することになるが、張出部が等高線に直交する在り方は共通している。住居の構築時期は埋設土器が沈線を横位に展開する弧状の文様を画き、「８」字状の貼付文を配することから、後期初頭期(称名寺Ⅱ式)に帰属するものといえよう。図示した遺物の垂直分布図を仔細に見ると、炉体土器より西側は想定床面より上位に遺物が出土しているが、それより東側では敷石より下位に遺物が出土したように見える。出土した土器片は同型式のものであり、これについてその理由は明らかではない。接合関係等は検討できていないが、遺物の取り上げ時に混乱があるかもしれない。

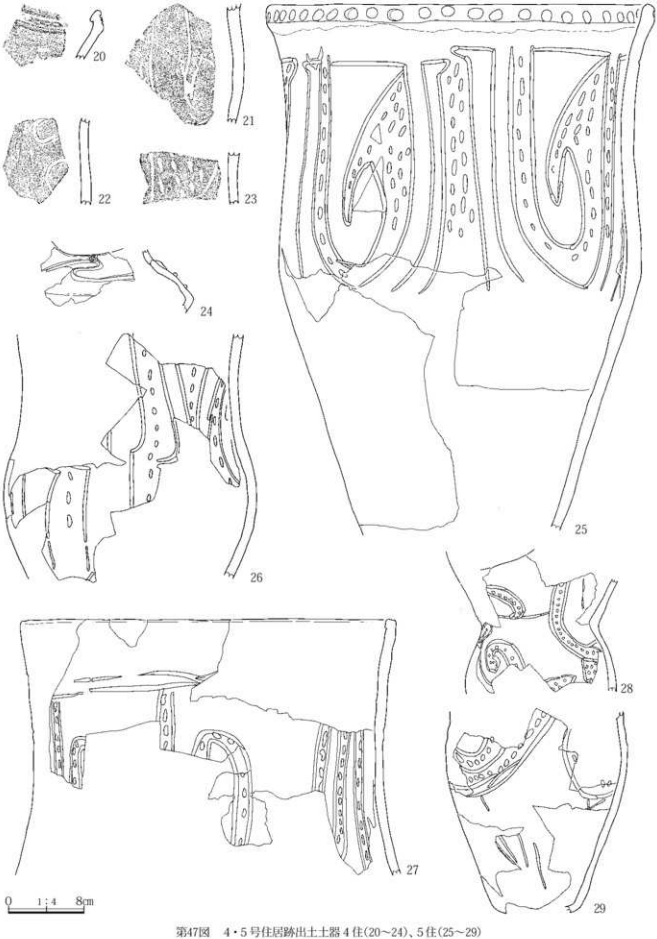
写真１　11号住居跡から逆位で出土した深鉢



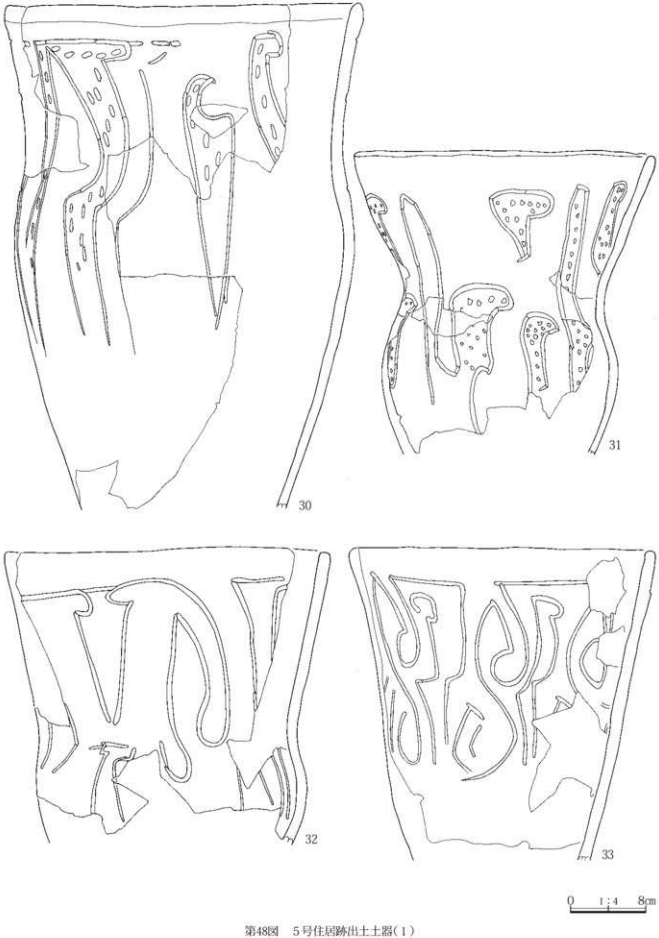
第45図　11号住居跡遺構図



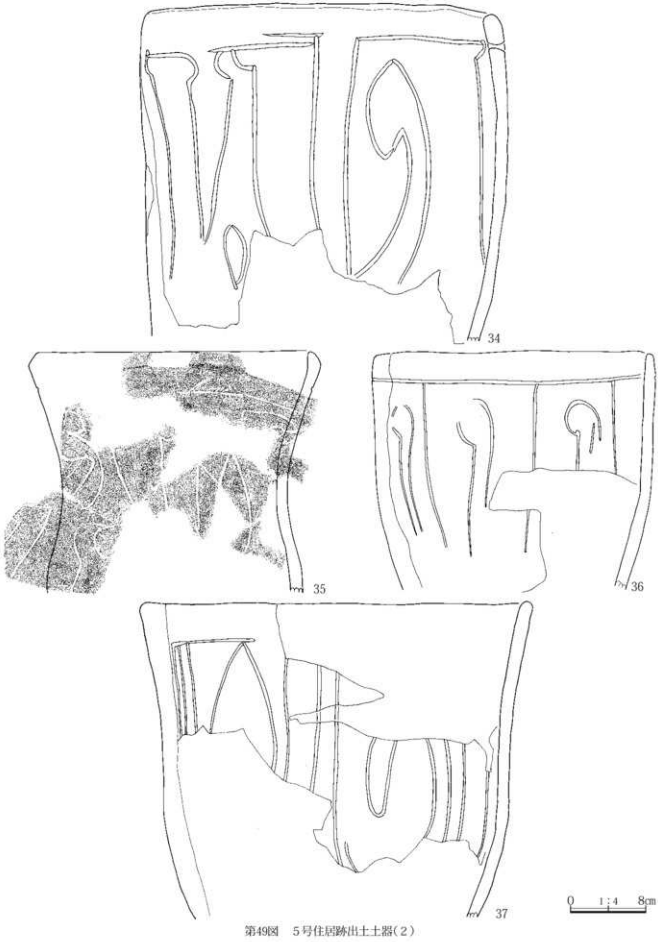
第46図　１・２号住居跡出土土器（１住（１～10）、２住(11～13)、４住(14～19)）



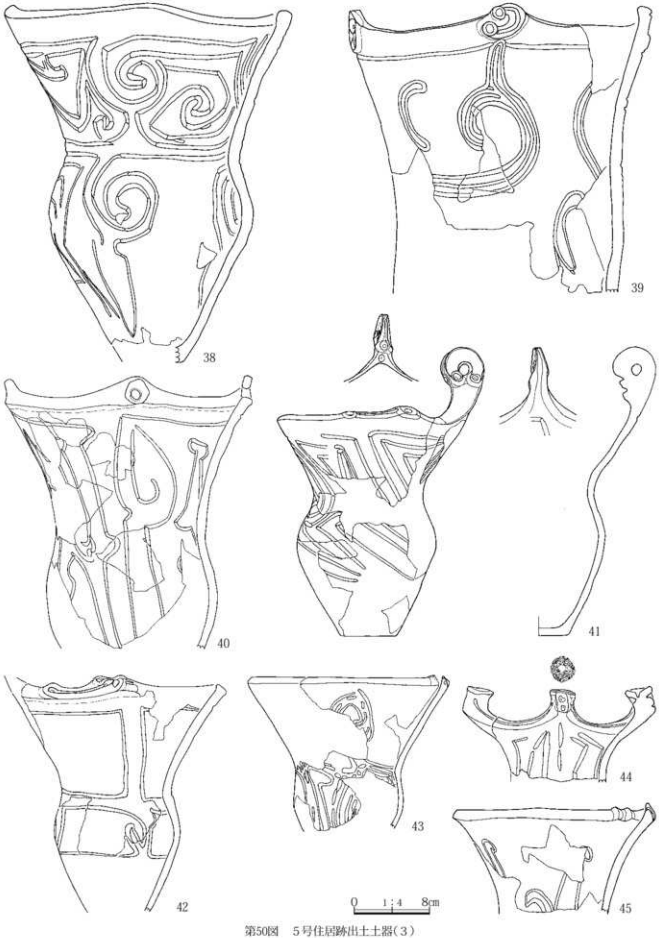
第47図　４・５号住居跡出土土器４住(20～24)、５住(25～29)



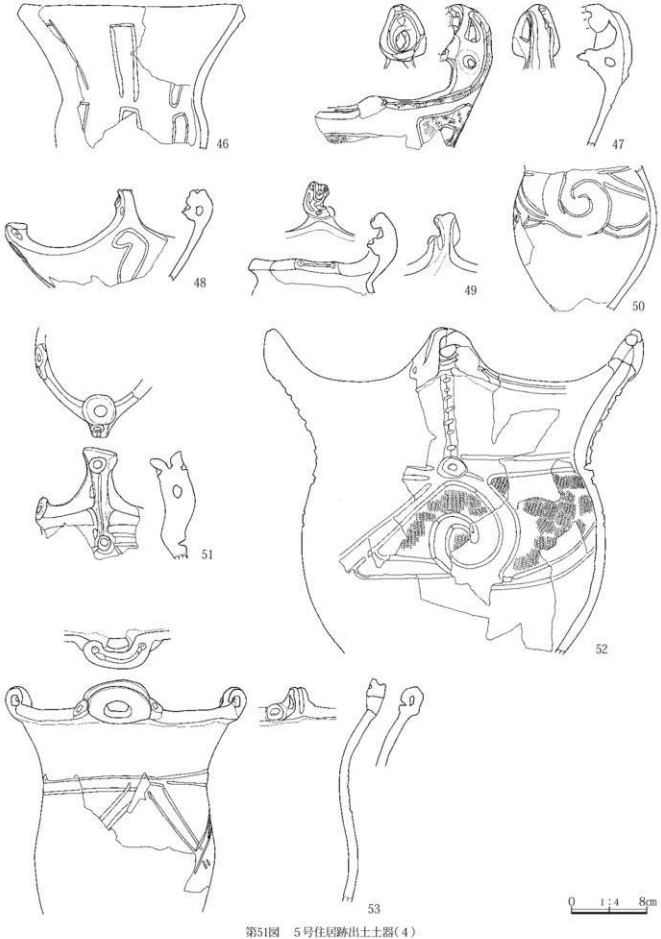
第48図　5号住居跡出土土器(1)



第49図　５号住居跡出土土器（２）

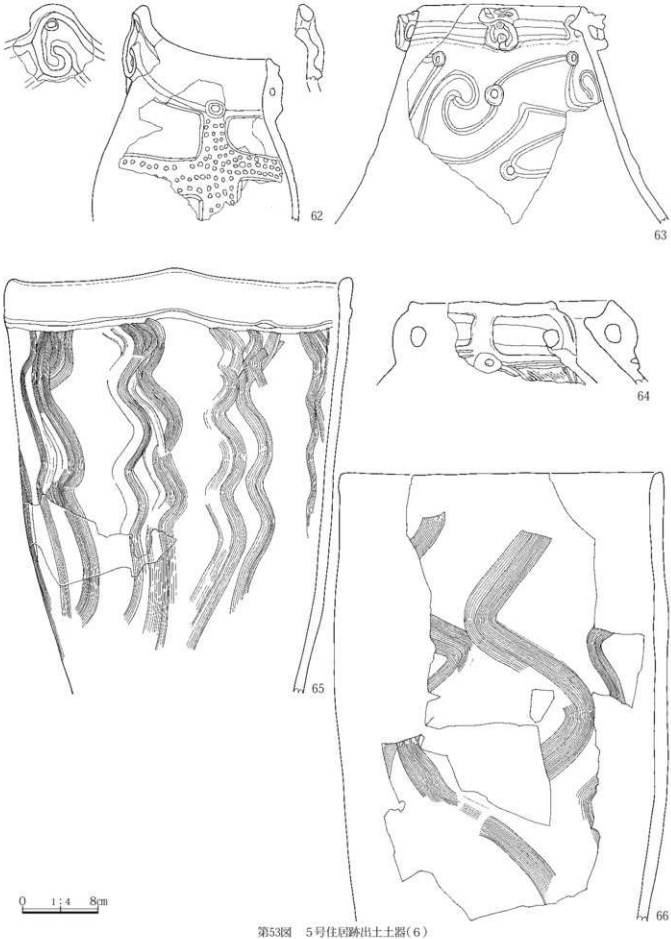


第50図　５号住居跡出土土器（３）

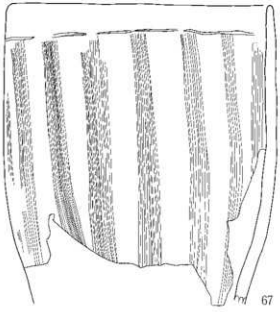


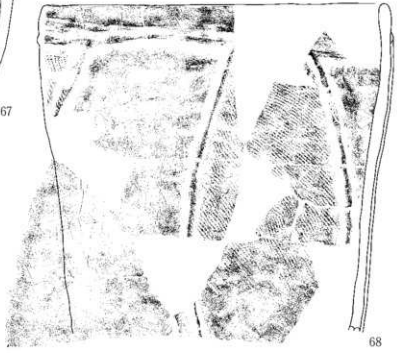
第51図　５号住居跡出土土器（４）

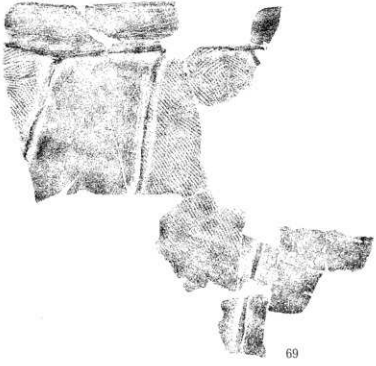
第52図　５号住居跡出土土器(５)



第53図　５号住居跡出土土器(６)

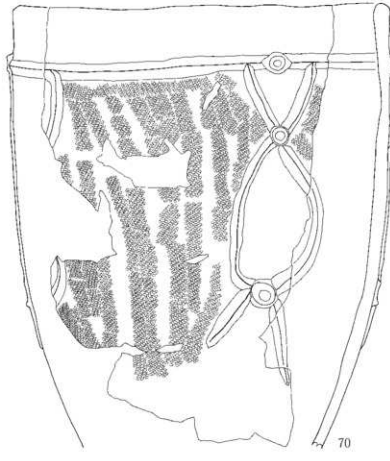


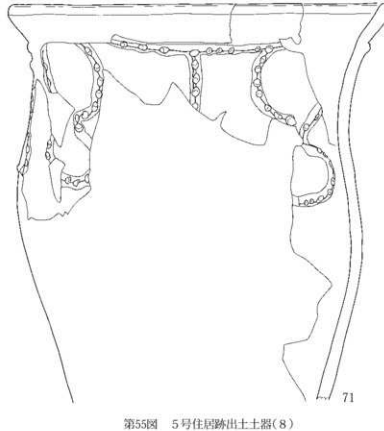




0　1:4　8cm

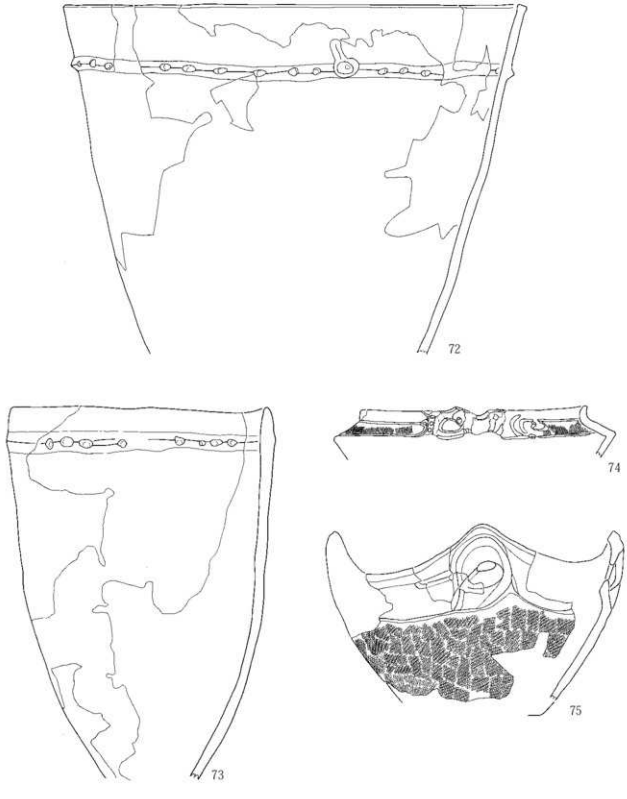
第54図　５号住居跡出土土器（７）



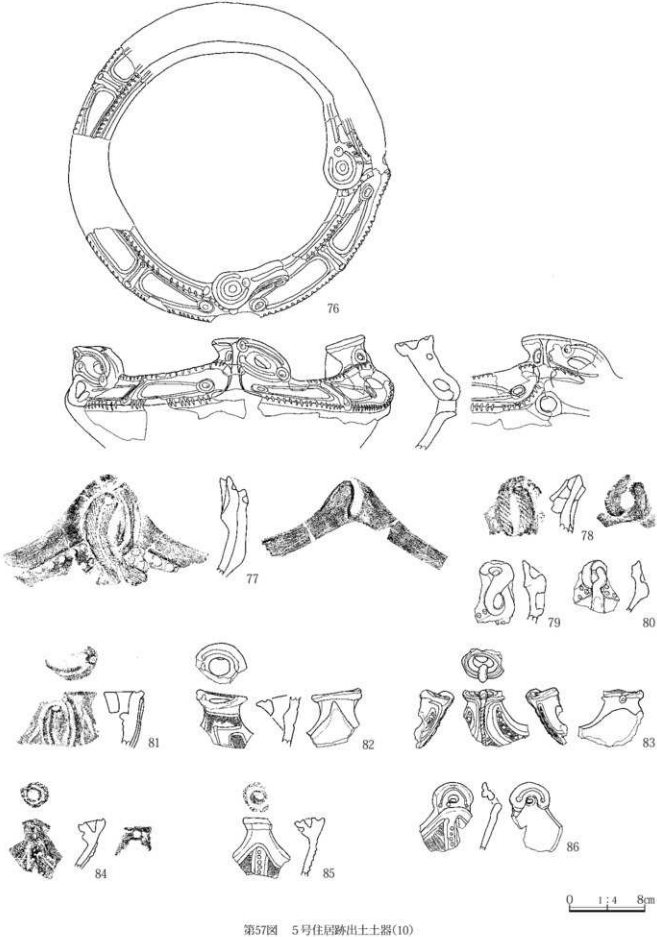


0　1:4　8cm

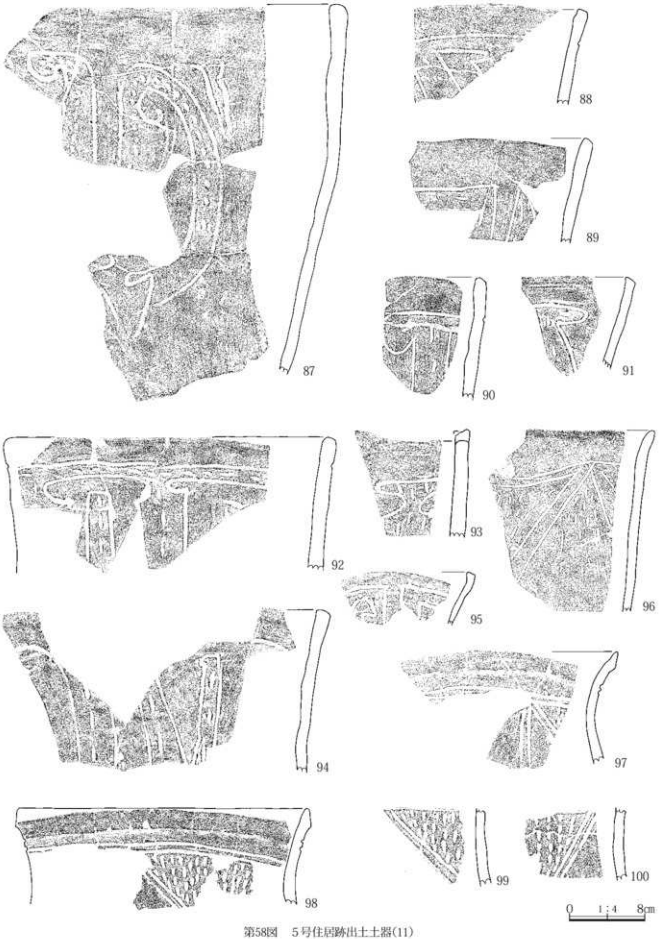
第55図　５号住居跡出土土器（８）



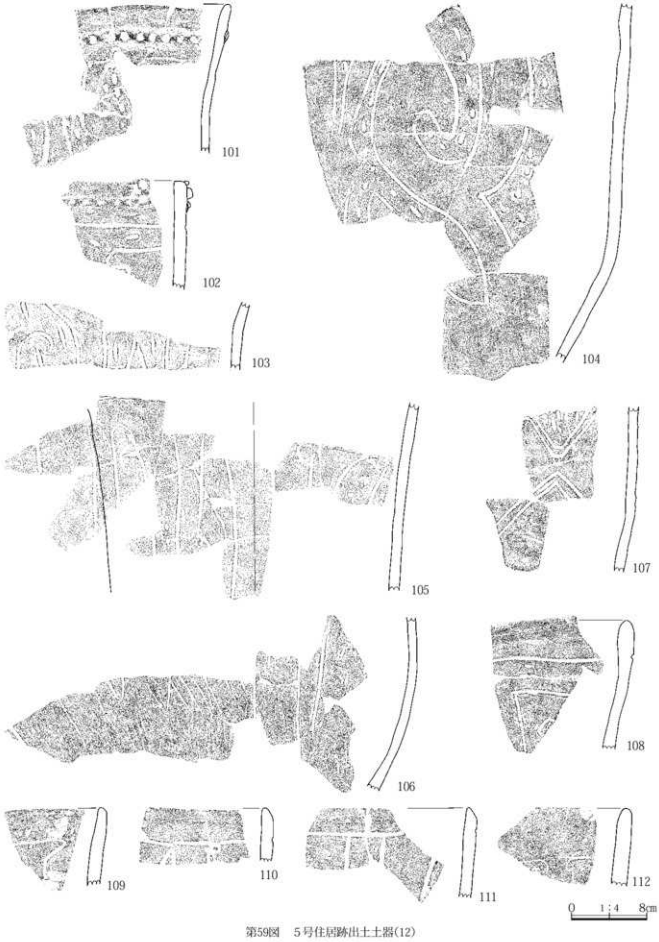
第56図　５号住居跡出土土器(９)



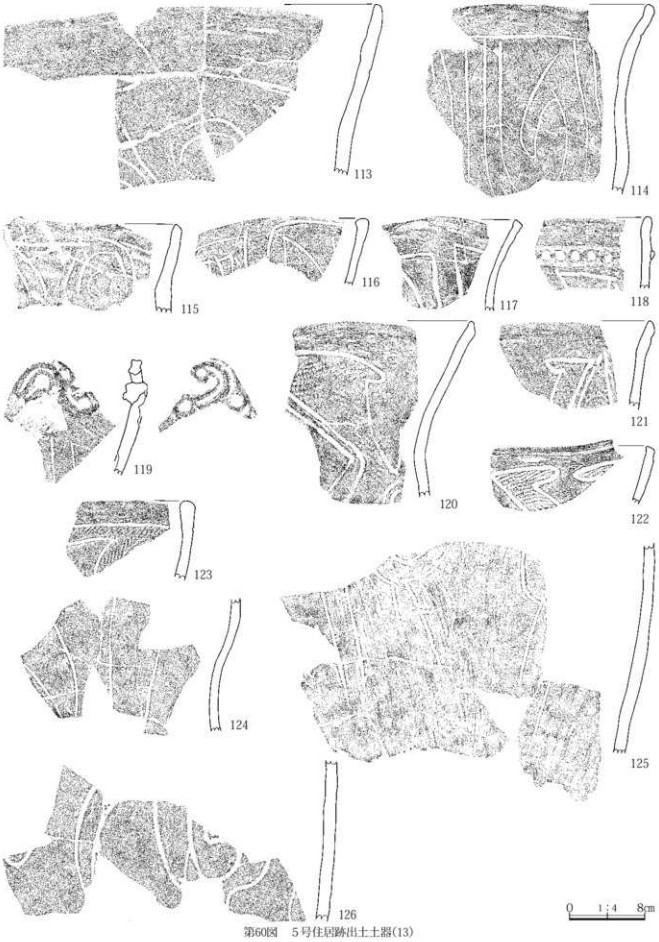
第57図　５号住居跡出土土器(10)



第58図　5号住居跡出土土器(11)



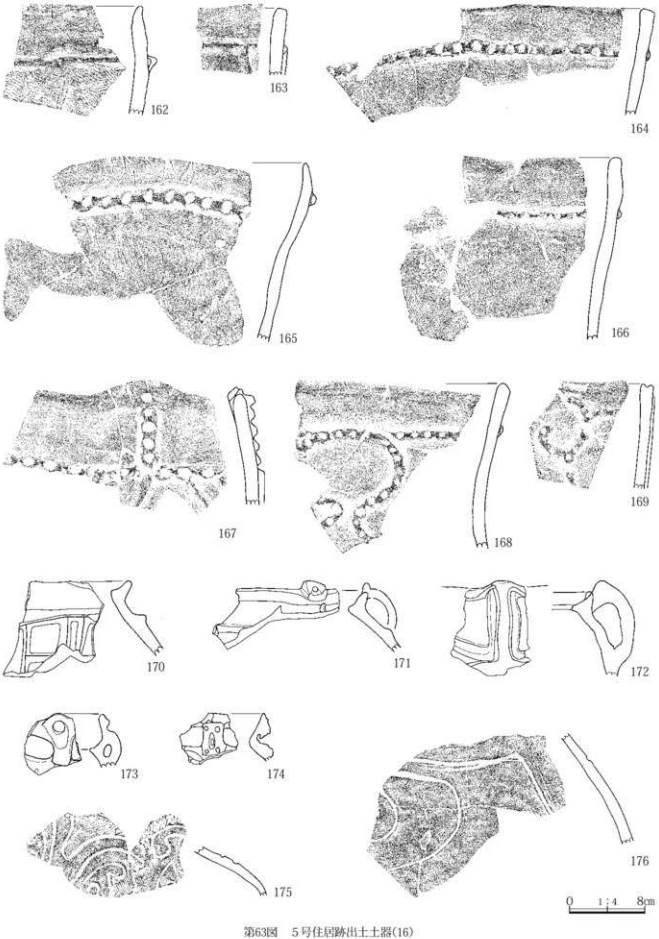
第59図　５号住居跡出土土器(12)



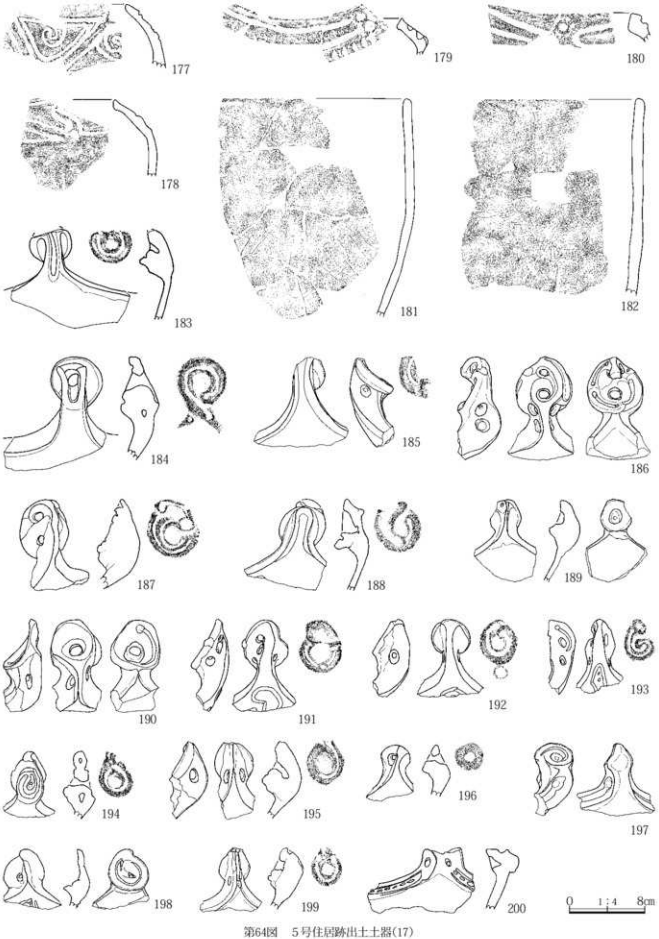
第60図　5号住居跡出土土器(13)

第61図　５号住居跡出土土器(14)

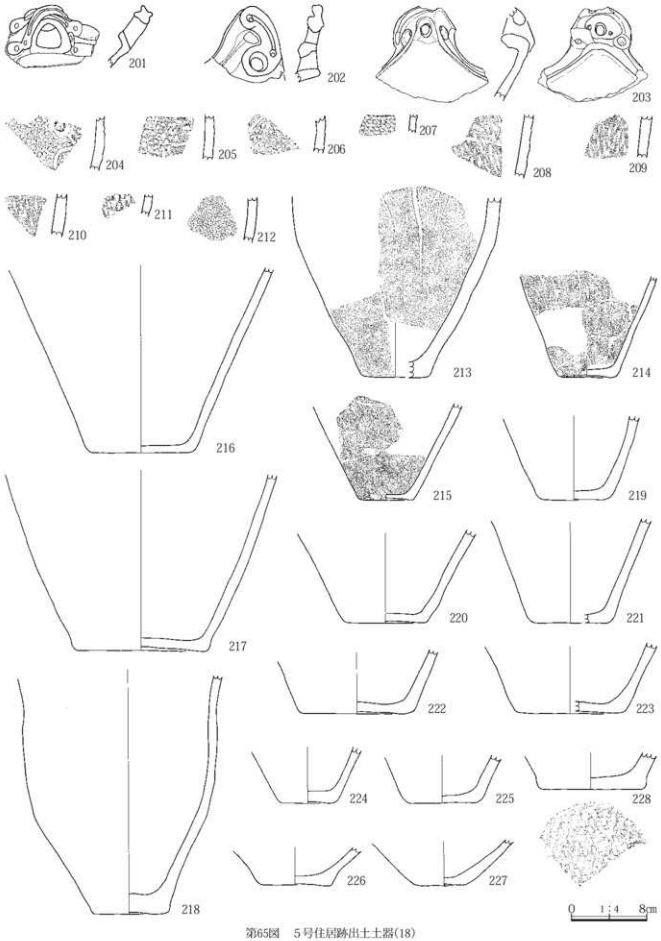
第62図　5号住居跡出土土器(15)



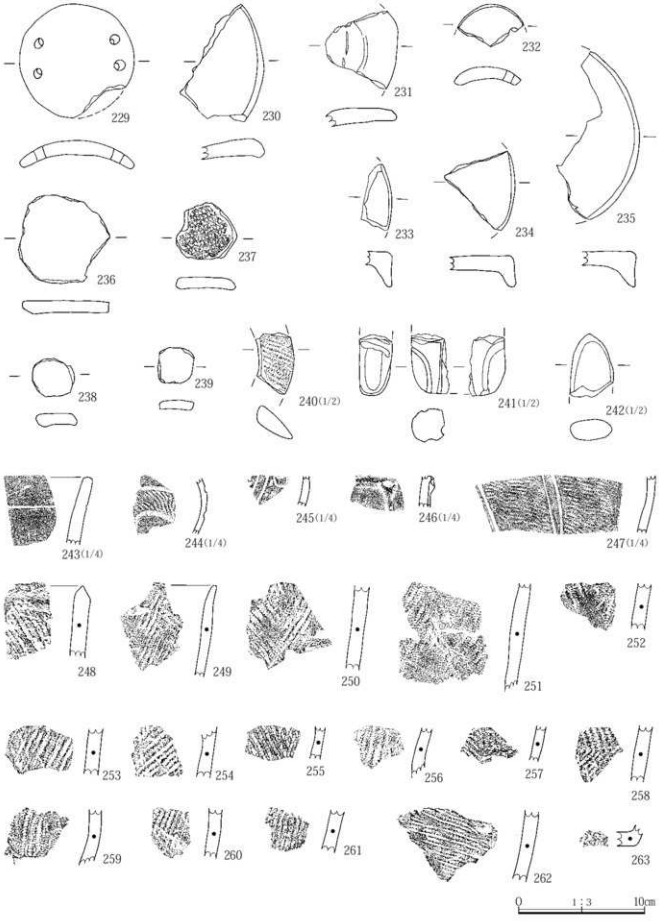
第63図　５号住居跡出土土器(16)



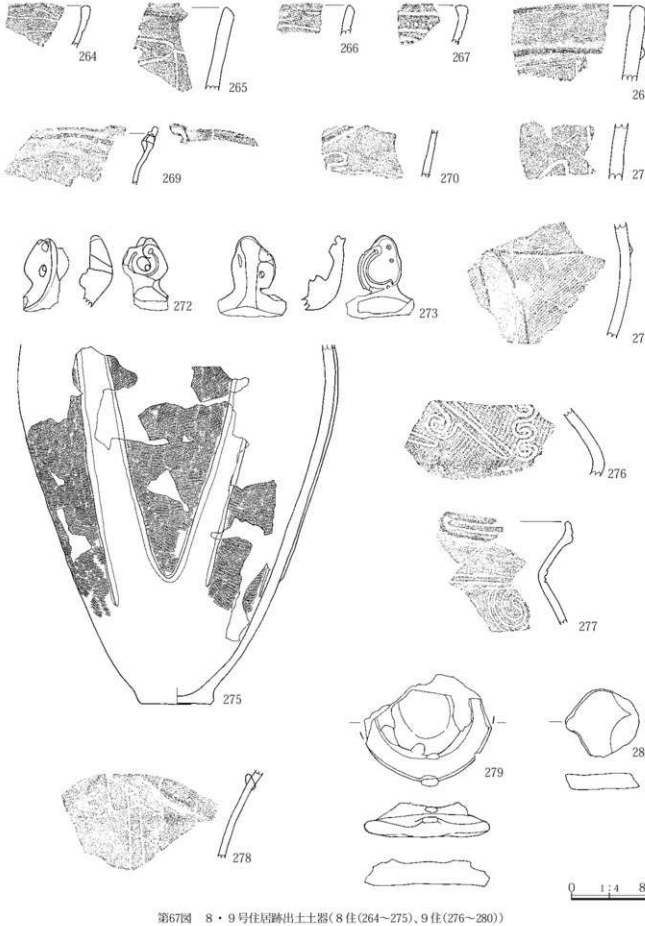
第64図　5号住居跡出土土器(17)



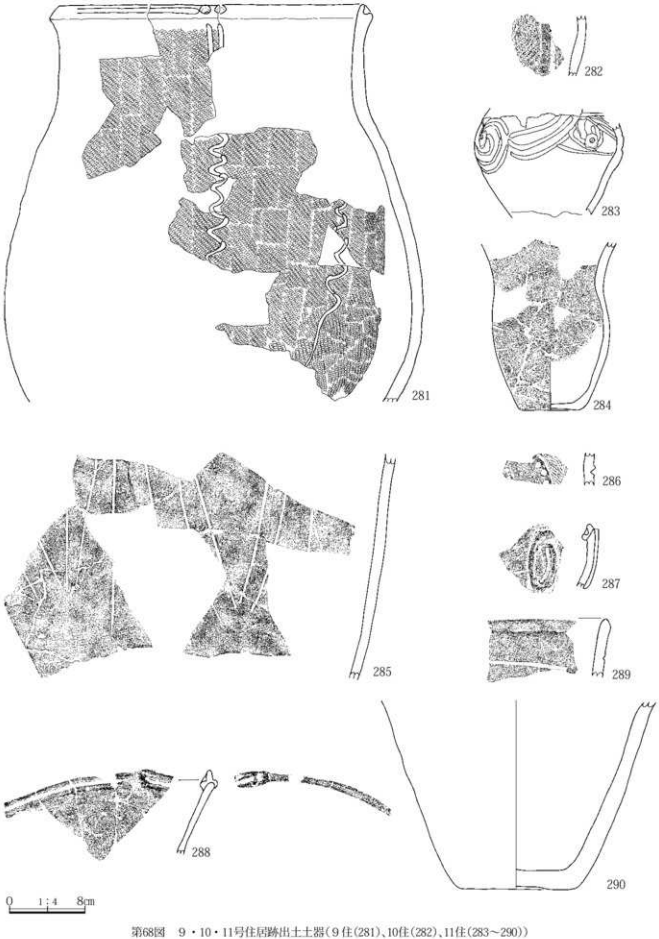
第65図　５号住居跡出土土器(18)



第66図　５号住居跡出土土器(19)、６・７号住居跡出土土器(５住(229～242)、６住(243～247)、７住(248～263))

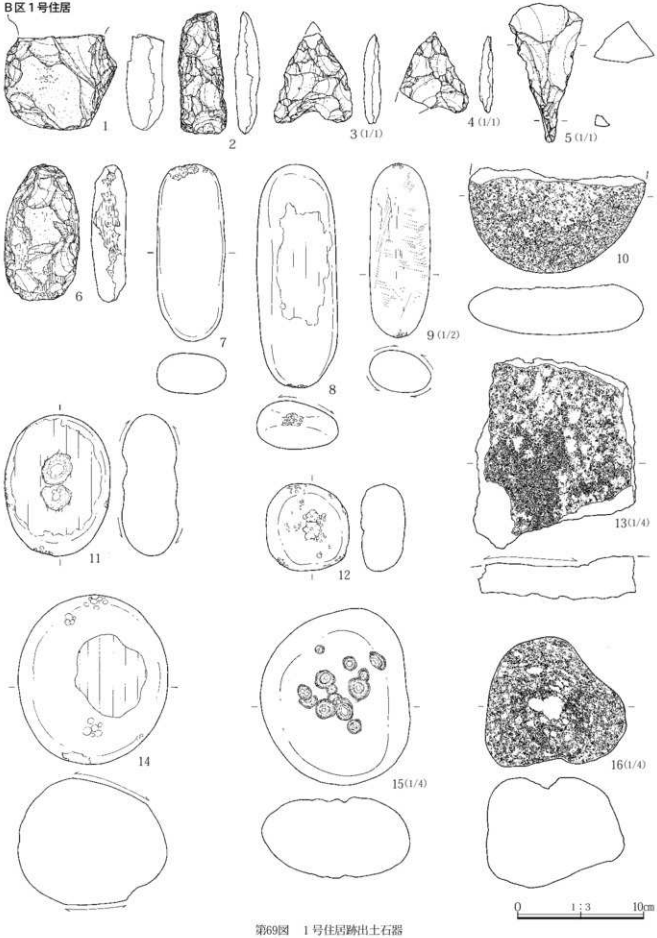


第67図　８・９号住居跡出土土器（８住(264～275)、９住(276～280)）



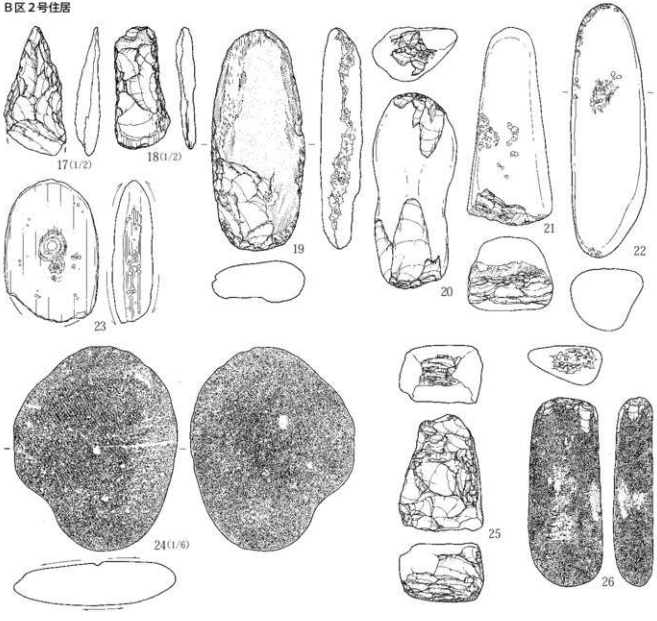
第68図　9・10・11号住居跡出土土器（9住(281)、10住(282)、11住(283～290)）

B区１号住居



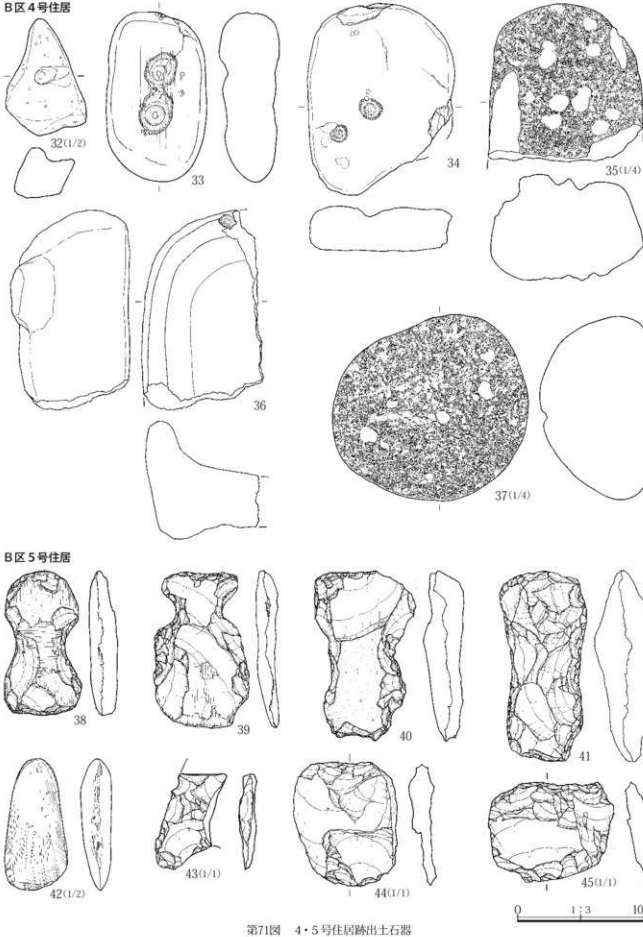
第69図　１号住居跡出土石器

B区2号住居



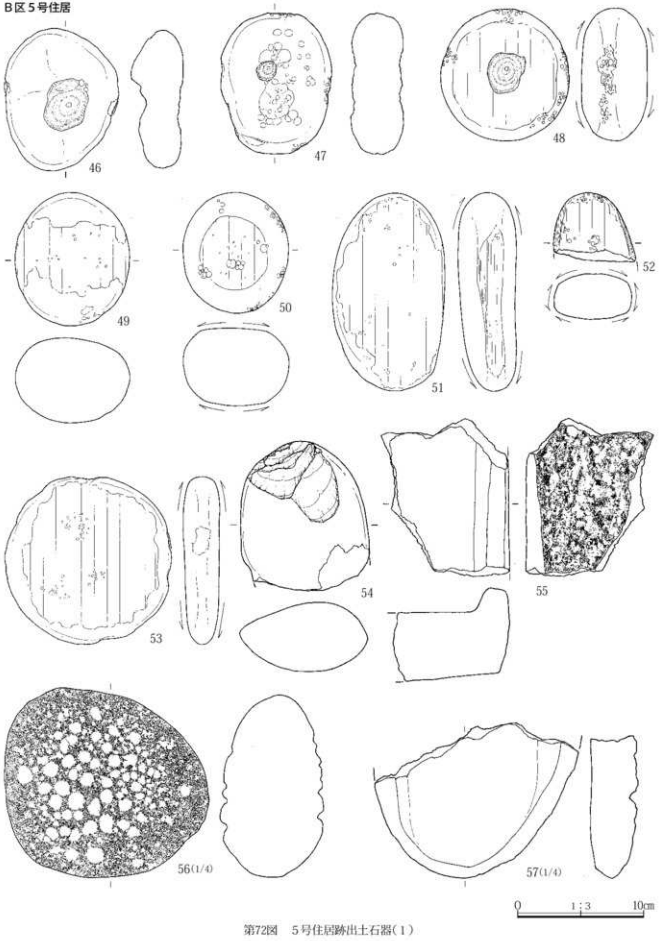
B区4号住居

第70図　2・4号住居跡出土石器

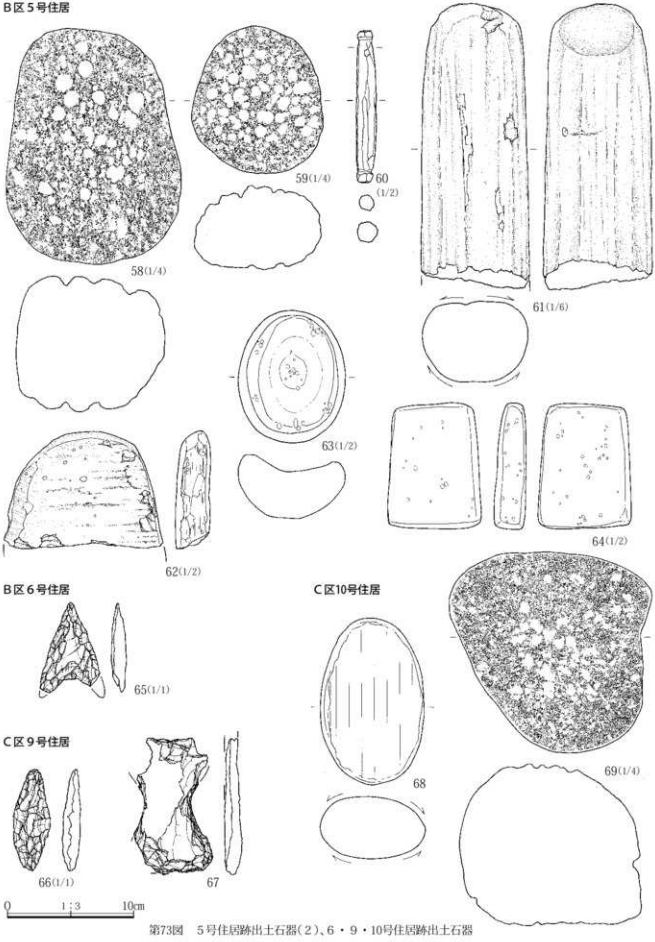


第71図　4・5号住居跡出土石器

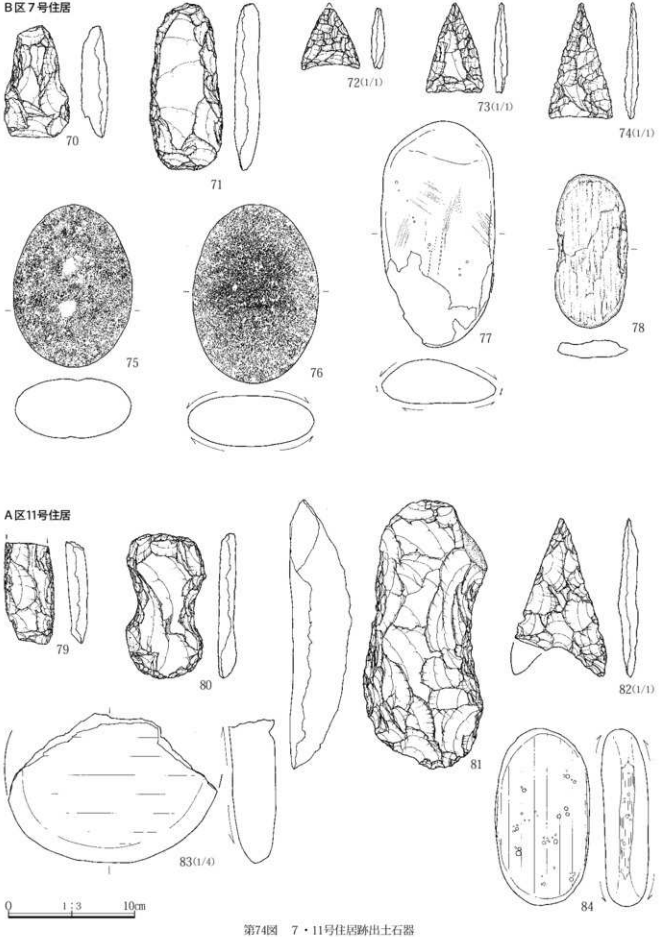
B区５号住居



第72図　５号住居跡出土石器(１)



第73図　５号住居跡出土石器（２）、６・９・10号住居跡出土石器



第74図　７・11号住居跡出土石器

３．土坑

土坑は、計81基（Ａ区３基・Ｂ区56基・Ｃ区22基）が確認されている。縄文期土坑は特に群在化するような傾向は見られないが、概ね縄文期住居の分布域に重なるよう分布した。

すでに概要の項で述べたとおり、土坑は円形を基調とするものが圧倒的に多い。結論から言えば、ほぼ同時期の土坑であり、土坑が機能的類似性を有するということだろうが、それでも土坑には形態的なバリエーションがあり、楕円形状を呈するものや不整形なものがある。土坑サイズでグラフ化したところその変化は漸移的であり、形態区分するほど有効ではないということも、上述した想定を裏付けているように思える。ここでは、以下の基準で土坑を分類、記述していきたい。

土坑サイズが漸移であるとはいえ、土坑に大小があるのも事実で、ここでは１ｍより小さいもの（Ａ類）と大きいもの（Ｂ類）、その他の不定形なもの（Ｃ類）に三分した。さらには、土坑が浅く壁が開き気味に立ち上がるもの（１類）と、その断面形状が箱状を呈するもの（２類）や、土坑開口幅より深い筒状を呈するもの（３類）があり、これを基準に分類した。結果、A-1類の土坑は別表のように18基（Ａ区1基、Ｂ区12基、Ｃ区５基）があり、A-2類は12基（Ｂ区８基、Ｃ区４基）、A-3類は６基（Ｂ区のみ分布）、同じくB-1類の土坑は４基（Ａ区１基、Ｂ区２基、Ｃ区1基）、B-2類は27基（Ｂ区22基、Ｃ区５基）、B-3類６基（Ｂ区１基、Ｃ区５基）、C類の土坑７基となり、浅い土坑は各区にあること、大型で深い土坑がＣ区に偏在する傾向が判明した。形態毎に見た分布傾向はB-2類の土坑が住居周辺に集中分布する傾向が強い。ところで、B-2類の土坑とA-2類の土坑は土坑サイズを除けば相似形の土坑というべきものであるが、両者とも住居周辺域にあるものの、A-2類の土坑は集中性に欠ける傾向が指摘することができる。Ｃ区においてはその南東隅に10号住

第10表　土坑計測値一覧表

土坑No	長軸	短軸	深さ	形態	時期	礫	備考
区C8	145	85	21	C(重複)	縄文時代		
区C9	72	65	16	A-1			
区C10	127	107	17	B-1			
BK１	77	74	26	A-1	加E	礫廃棄	多孔石１
BK２	87	78	15	A-1			
BK３	70	67	58	A-3	加E		
BK４	102	98	29	A-2	加E３・４		
BK５	112	108	29	B-1			
BK６	55	49	43	A-3			
BK８	123	116	45	B-2	縄文時代Ⅱ		
BK９	122	110	55	B-2	縄文時代	礫廃棄？	多孔石１
BK11	118	105	60	B-2			多孔石１
BK12	85	81	48	A-2			
BK13	160	147	66	B-2	縄文時代Ⅱ		
BK14	119	106	44	A-2		礫廃棄	
BK15	98	86	16	A-1			
BK16	93	86	67	B-2			
BK17	98	82	83	A-3			
BK20	250	190	93	C	縄文時代Ⅱ	礫廃棄？	多孔石２
BK22	126	115	40	B-2			
BK23	86	77	11	A-1			
BK24	95	73	50	A-2	縄文時代Ⅰ		
BK25	70	70	16	A-1			
BK28	133	90	30	C	縄文時代Ⅱ	礫廃棄？	多孔石２
BK29	100	80	28	A-1	縄文時代		
BK30	137	123	60	B-2	縄文時代	礫廃棄？	多孔石２
BK31	145	132	56	B-2			
BK32	140	127	65	B-2	縄文時代Ⅱ	礫廃棄	石皿２
BK33	155	138	61	B-2	縄文時代Ⅱ	礫廃棄	石皿１・多孔石１
BK35	150	140	83	B-2	縄文時代Ⅱ	礫廃棄	多孔石２
BK36	65	65	15	A-1		礫廃棄	多孔石１
BK37	120	105	78	B-2	縄文時代Ⅱ		
BK38	113	93	68	B-2		礫廃棄	多孔石１
BK39	136	120	57	B-2	縄文時代Ⅰ		
BK40	112	105	56	B-2	縄文時代Ⅱ		
BK41	88	84	32	A-1			
BK42	146	135	60	B-2	加E３	礫廃棄	石皿１
BK43	103	91	28	A-1			
BK44	78	75	52	A-3？	縄文時代Ⅱ		
BK45	63	60	28	A-1	縄文時代Ⅱ		
BK46	82	49	23	？			
BK48	105	96	68	B-2			
BK49	113	112	66	B-2	縄文時代Ⅱ	礫廃棄	
BK50	114	110	58	B-2	縄文時代Ⅱ		
BK51	100	92	42	A-2			
BK53	70	60	66	A-3			
BK54	90	78	38	A-2			
BK55	136	117	75	B-2	縄文時代Ⅱ		
BK56	73	68	68	A-3	縄文時代		
BK57	136	131	90	B-3	縄文時代Ⅱ	礫廃棄	石皿１・多孔石１
BK58	108	91	35	A-2		礫廃棄	多孔石１
BK59	97	95	45	A-2	縄文時代Ⅱ		
BK60	(150)	117	30	A-1	縄文時代Ⅱ		
BK61	115	105	78	B-2	縄文時代Ⅱ	礫廃棄？	多孔石１
BK62	165	150	20	C	縄文時代Ⅱ	礫廃棄？	石皿１
BK63	130	116	55	B-2	縄文時代Ⅱ		
BK64	94	89	55	A-1	縄文時代Ⅱ		
BK65	153	120	35	B-1			
BK66	(135)	88	18	C	縄文時代		
CK１	183	173	84	B-2	縄文時代Ⅱ	礫廃棄	石皿１・多孔石２
CK２	170	158	78	B-2？	縄文時代Ⅱ		
CK３	210	175	82	C	縄文時代Ⅱ		多孔石１
CK４	120	115	126	B-3	縄文時代Ⅱ		
CK５	147	118	28	B-1	縄文時代Ⅱ	礫廃棄	石皿１
CK６	125	117	183	B-3	縄文時代Ⅱ		
CK７	118	98	48	B-2	縄文時代		
CK８	105	86	52	A-2			
CK11	100	87	44	A-2			
CK12	87	76	28	A-1			
CK13	127	111	52	B-2			
CK14	110	103	20	A-1			
CK15	87	83	20	A-1			
CK16	152	95	37	C(重複)	縄文時代Ⅱ	礫廃棄？	
CK17	122	104	78	B-3			
CK18	142	123	68	B-2			
CK19	131	126	99	B-3			
CK20	131	121	104	B-3			
CK21	98	90	34	A-2			
CK22	85	70	33	A-2			
CK23	108	105	30	A-1			
CK25	78	58	18	A-1			

居があり、その周辺域には土坑が少なからずあるが、住居に近接していない地点にも土坑群がある。この地点の土坑は、どちらかと言えば大形のものが主体だが、小形のものもあり、基本的な土坑の在り方はＢ区土坑の在り方と変わらないというべきである。ただ、この地点には後述するように配石（Ｃ区１号配石、第93図）とされたものがあり、その関連性が問題となるかもしれない。土坑分布についてその概要を記してみたが、これ例外に本遺跡土坑の特徴を挙げるとするならば、どのような特徴が指摘できるだろうか。

まず、土坑は大半が人為的な埋め土であるという特徴がある。褐色土系の土で埋没しており、確認が容易ではないのは赤城山南麓の縄文期遺跡と変わらない現象で、このことが直接土坑の人為的埋没を示しているわけではないが、遺物類の出土状態を踏まえれば、その可能性は必然的に高まるだろう。すなわち、本遺跡土坑81基中20基以上に拳大～人頭大の大形礫が出土しており、何例か流れ込んだ状態のものもあるが、その大部分は意図的な廃棄というべき状態であるためである。

そして、その大型礫が住居周辺の大形土坑に多出することが特徴的である。具体的には、１号住居西側の11・33・35・36・42・49・55号土坑や、５号住居西側の28・31・32・62号土坑がそれで、個別出土状態については図示（第75～83図）したとおりであるが、大部分が大型土坑であることが注意されよう。廃棄礫についてはその属性を確認しているわけではないが、多孔石や石皿が多出している点が特徴的で、実用具とは看做し難い多孔石があることの意義が問われるべきだろう。

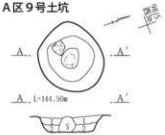
Ｃ類の土坑は楕円形状を呈するもの（Ａ区８・Ｂ区28・Ｃ区16号土坑）や、大型であるもの（Ｂ区20・62号土坑）などがあるが、楕円形状を呈するものについては土坑平面の形状が歪んでおり、小形土坑の重複も否定できないと考えている。また、後者の浅い大形土坑には、例えばＢ区20号土坑（第83図）のように、浅鉢型の注口土器が口縁部を下に伏せた状態で出土するなど、墓壙的なものもあり、注目しておきたい。Ｂ区62号土坑（第83図）も、同様に土坑の形状は歪んでいるが、両側に大型礫を配しており、大型礫には台石２・石皿１があり、墓壙としての可能性を検討してみたが、石鏃１・加工剥片１など生産具類や土器片類も多出しており、墓壙とするには問題が多い。

土坑の帰属時期については後期初頭（称名寺式）と見られ、住居と同時期に残されたものであろう。冒頭に述べたとおり、土坑は機能的類似性を有しているが、少量だが墓壙タイプのものもあることが判明した。

第11表　土坑出土遺物一覧表（石器）

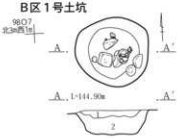
	打斧	石鏃	石匙	削器類	石核	敲石	磨石類	石皿	多孔石	台石	凹石	総計
Ａ区１号土坑									1			1
Ａ区２号土坑				1								1
Ａ区９号土坑		1							1			2
Ｂ区11号土坑									1			1
Ｂ区12号土坑			1									1
Ｂ区15号土坑					1							1
Ｂ区20号土坑									2			2
Ｂ区28号土坑									2			2
Ｂ区30号土坑				1	1				2			4
Ｂ区32号土坑				1				2				3
Ｂ区33号土坑					1		1	1	1			4
Ｂ区35号土坑				1					2			3
Ｂ区36号土坑									1			1
Ｂ区38号土坑									1			1
Ｂ区39号土坑		1										1
Ｂ区40号土坑	1											1
Ｂ区42号土坑				4				1				5
Ｂ区49号土坑	1			1	1							3
Ｂ区51号土坑	1											1
Ｂ区52号土坑				1								1
Ｂ区53号土坑	1											1
Ｂ区57号土坑								1	1			2
Ｂ区58号土坑						1	1		1			3
Ｂ区61号土坑									1			1
Ｂ区62号土坑		1		1			1	1		1	1	6
Ｃ区１号土坑								1	2			3
Ｃ区３号土坑							1		1			2
Ｃ区５号土坑								1				1
Ｃ区９号土坑							1					1
総　　計	4	3	1	11	4	1	5	8	20	1	1	59

A区９号土坑



1．暗褐色土　砂質で、ロームブロックを含む。
2．黒褐色土　ロームブロックを少量混入する。

B区１号土坑

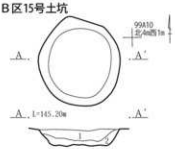


1．暗褐色土　ロームブロック混入。
2．暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。１層より明るい。

B区２号土坑

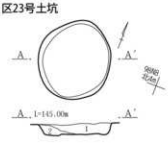
1．暗褐色土　ロームブロックを含む。

B区15号土坑



1．暗褐色土　ロームブロックを含む。
2．褐色土　ロームブロックを多量に含む。

B区23号土坑

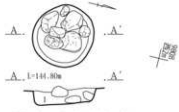


1．黒褐色土　ロームブロックを含み、堅く締まる。
2．褐色土　やや砂質で、ロームブロックを含む。

B区25号土坑

1．黒褐色土　やや明るい褐色土を斑状に含む。

B区36号土坑



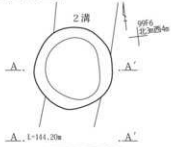
1．褐色土　黒色土を斑状に含む。

B区41号土坑

B区43号土坑

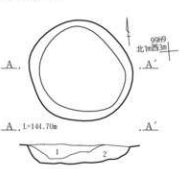
1．褐色土　ロームブロックを多く含む。

C区15号土坑



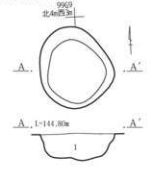
1．黒褐色土　褐色土を斑状に含む。

C区14号土坑



1．黒褐色土　ロームブロックを含む。
2．暗褐色土　黒色土を斑状に含む。

C区12号土坑



1．暗褐色土　ロームブロックを多く含む。

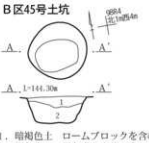
0　1:40　1m

第75図　土坑（１）

C区25号土坑

1．暗褐色土　ロームブロックを含む。

B区45号土坑



1．暗褐色土　ロームブロックを含む。
2．褐色土　黒色土を斑状に含む。

C区22号土坑

1．還元気味の灰褐色土を含む。

B区46号土坑

1．暗褐色土　ローム粒子を含む。
2．暗褐色土　ローム粒子を多量混入。色調は1層より明るい。

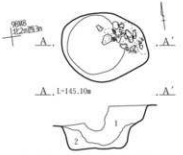
B区29号土坑

1．黒褐色土　ローム粒子を混入する。
2．褐色土　ロームブロックを多量に含む。
3．黒褐色土　1層と同質だがロームブロックの量は多い。
4．暗褐色土　ロームブロックを含む。

C区23号土坑

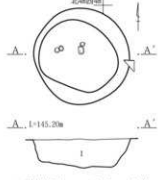
1．暗褐色土　ロームブロックを含む。

B区24号土坑



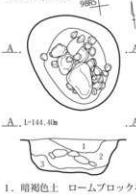
1．黒褐色土　ローム粒子・炭化粒を含む。
2．黒褐色土　ロームブロックを含む。

B区4号土坑



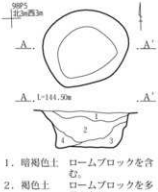
1．暗褐色土　ロームブロックを含む。

B区58号土坑



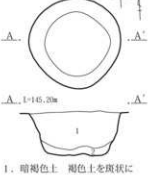
1．暗褐色土　ロームブロックを含む。
2．暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。
3．暗褐色土　ロームブロックを含む。粘性に富む。

B区54号土坑



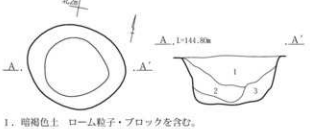
1．暗褐色土　ロームブロックを含む。
2．褐色土　ロームブロックを多量に含む。
3．暗褐色土　ローム粒子を含む。色調は暗い。
4．暗褐色土　ロームブロックを含む。堅く締まり、粘性に富む。

B区59号土坑



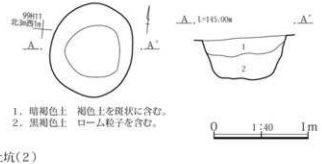
1．暗褐色土　褐色土を斑状に含む。
2．黒褐色土　ロームブロックを多量に含む。粘性に富む。

C区8号土坑



1．暗褐色土　ローム粒子・ブロックを含む。
2．黒褐色土　ローム粒子を含む。やや砂質。
3．暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。

C区11号土坑



1．暗褐色土　褐色土を斑状に含む。
2．黒褐色土　ローム粒子を含む。

第76図　土坑(2)

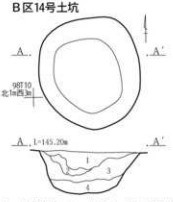
B区51号土坑

1．黒褐色土　褐色土を斑状に含む。
2．暗褐色土　ローム質だが、色調は暗い。

C区21号土坑

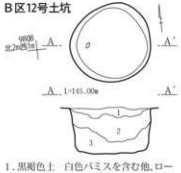
1．暗褐色土　ロームブロックを斑状に含む。

B区14号土坑



1．暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。
2．黒褐色土　ローム粒子を混入する。
3．暗褐色土　ロームブロックを含む。
4．黒褐色土　ローム粒子を少量混入。粘性に富む。

B区12号土坑

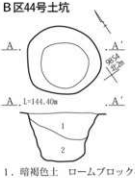


1．黒褐色土　白色パミスを含む他、ロームブロックを多量に含む。
2．黒褐色土　1層と同質だが、やや明るい。ロームブロックの含有量は少ない。
3．黒褐色土　1層と同質だが、ロームブロックの含有量が多い。

B区６号土坑

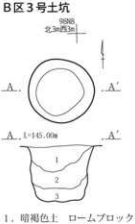
1．褐色土　均質で色調は明るく、ロームに似る。
2．暗褐色土　1層と同質だが、粘性に富む。
3．暗褐色土　ロームブロックを含む。粘性に富む。

B区44号土坑



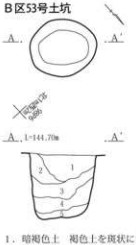
1．暗褐色土　ロームブロックを含む。
2．黒褐色土　上層ほどロームブロックを多量に含む。

B区３号土坑



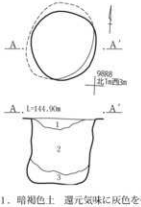
1．暗褐色土　ロームブロックを含む。
2．褐色土　ロームブロックを多量に含む。

B区53号土坑



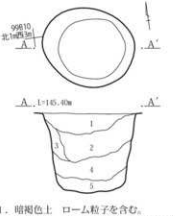
1．暗褐色土　褐色土を斑状に含む。
2．暗褐色土　1層と同質だが、やや明るい。
3．暗褐色土　ローム粒子を含む。色調は1・2層より暗い。
4．黒褐色土　ローム粒子等の混入は見られない。粘性に富む。
5．黒褐色土　4層と同質だが、やや明るい。

B区56号土坑



1．暗褐色土　還元気味に灰色を帯びたロームブロックを含む。
2．暗褐色土　ロームブロックを含む。1層より暗い。
3．暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。

B区17号土坑

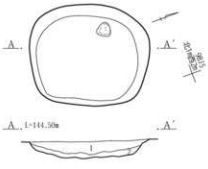


1．暗褐色土　ローム粒子を含む。
2．黒褐色土　ロームブロックを多く含む。
3．褐色土　ロームブロックを含む。
4．黒褐色土　やや砂質で、ロームブロックを含む。
5．黒褐色土　ロームブロックを含む。砂質。

0　1:40　1m

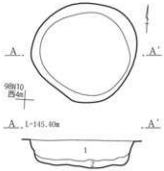
第77図　土坑(3)

A区10号土坑



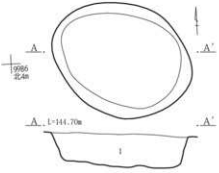
1．褐色土　砂質で、地山のローム層に似た理土。
2．褐色土　１層と同質だが、やや暗い。

B区５号土坑



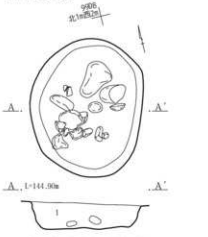
1．暗褐色土　褐色土を斑状に含む。
2．暗褐色土　ロームブロックを含む。

B区65号土坑



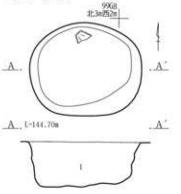
1．暗褐色土　還元気味のローム質土。

C区５号土坑



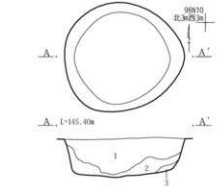
1．暗褐色土　褐色土を斑状に含む。

C区７号土坑



1．暗褐色土　灰色に還元したロームブロックを多量に含む。

B区22号土坑

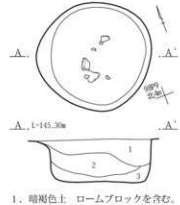


1．暗褐色土　黒色土を斑状に含む。硬く締まる。
2．黒褐色土　ロームブロックを含む。
3．褐色土　壁体崩落土。

B区９号土坑

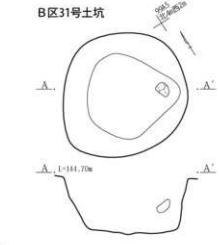
1．褐色土　均質で色調は明るく、ロームに似る。
2．黒褐色土　ロームブロックを含む。やや砂質で、粘性に乏しい。
3．暗褐色土　ロームブロックを多く含む。

B区８号土坑



1．暗褐色土　ロームブロックを含む。
2．黒褐色土　ロームブロックを含む。
3．暗褐色土　ロームブロックを多く含む。

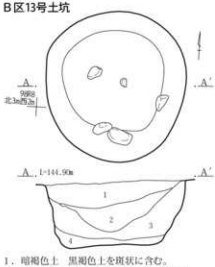
B区31号土坑



0　1:40　1m

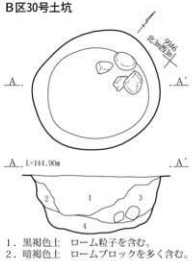
第78図　土坑（４）

B区13号土坑



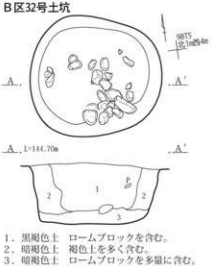
1．暗褐色土　黒褐色土を斑状に含む。
2．暗褐色土　１層と同質だが、やや暗い。
3．褐色土　壁体崩落土。
4．灰褐色土　砂質・軟質で、土坑底面を埋める。

B区30号土坑



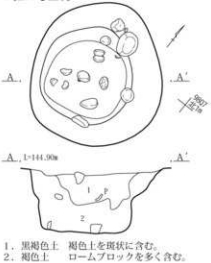
1．黒褐色土　ローム粒子を含む。
2．暗褐色土　ロームブロックを多く含む。
3．暗褐色土　比較的均質な土壌で、ローム粒ブロックの混入は少ない。
4．黒褐色土　ロームブロックを含む。

B区32号土坑



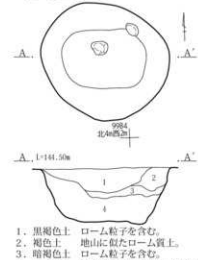
1．黒褐色土　ロームブロックを含む。
2．暗褐色土　褐色土を多く含む。
3．暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。

B区33号土坑



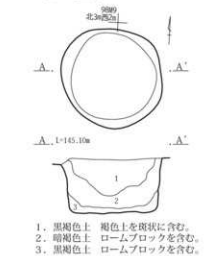
1．黒褐色土　褐色土を斑状に含む。
2．褐色土　ロームブロックを多く含む。

B区39号土坑



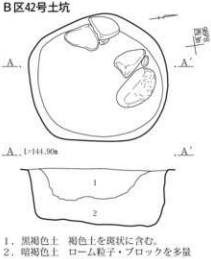
1．黒褐色土　ローム粒子を含む。
2．褐色土　地山に似たローム質土。
3．暗褐色土　ローム粒子を含む。
4．暗褐色土　２層と同質だが、色調は暗い。

B区40号土坑



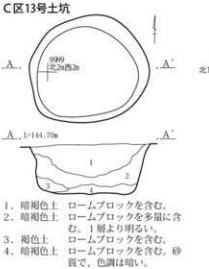
1．黒褐色土　褐色土を斑状に含む。
2．暗褐色土　ロームブロックを含む。
3．黒褐色土　ロームブロックを含む。

B区42号土坑



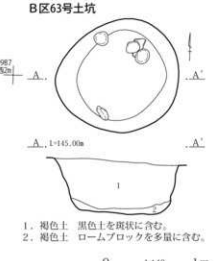
1．黒褐色土　褐色土を斑状に含む。
2．暗褐色土　ローム粒子・ブロックを多量に含む。

C区13号土坑



1．暗褐色土　ロームブロックを含む。
2．暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。１層より明るい。
3．褐色土　ロームブロックを含む。
4．暗褐色土　ロームブロックを含む。砂質で、色調は暗い。

B区63号土坑

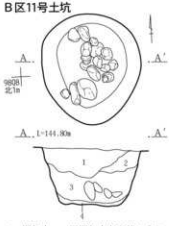


1．褐色土　黒色土を斑状に含む。
2．褐色土　ロームブロックを多量に含む。

0　1:40　1m

第79図　土坑（５）

B区11号土坑

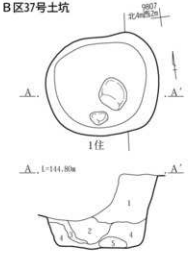


1．褐色土　黒褐色土を斑状に含む。
2．褐色土　１層と同質だが、やや明るい。
3．黒褐色土　ロームブロックを多量に含む。
4．黒褐色土　ロームブロックを含む。粘性に富む。

B区16号土坑

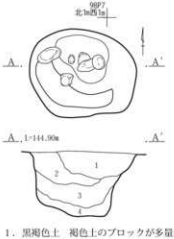
1．褐色土　ローム粒子を含む。
2．褐色土　ロームブロックを含む。１層よりやや明るい。
3．黒褐色土　砂質で、ロームブロックを含む。やや軟質。

B区37号土坑



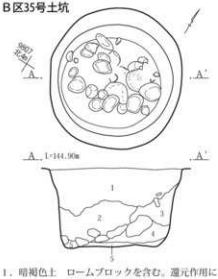
1．褐色土　軽してローム質だが、やや粗る。
2．黒褐色土　ローム粒子を含む。
3．暗褐色土　ロームブロックを含む。
4．褐色土　１層と同質だが、坑底に大型扁平礫が出上。

B区38号土坑



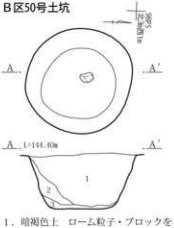
1．黒褐色土　褐色土のブロックが多量に混じる。
2．暗褐色土　均質で、部分的に還元され、灰色に脱色する。
3．暗褐色土　ロームブロックを含む。堅く締まる。
4．褐色土　ローム粒子を含む。砂質で、堅い。

B区35号土坑



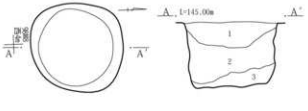
1．暗褐色土　ロームブロックを含む。還元作用により部分的に脱色している。
2．暗褐色土　ロームブロックを含む。１層より明るい。
3．黒褐色土　ロームブロックを少量混入。
4．黒褐色土　ロームブロックを含む。３層と同質。
5．黒褐色土　粘性に富み、ローム粒子等は含まれない。

B区50号土坑



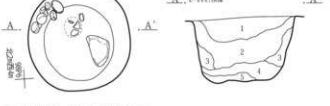
1．暗褐色土　ローム粒子・ブロックを含む。
2．暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。
3．暗褐色土　ロームブロックを含む。

B区48号土坑



1．暗褐色土　ローム質で、黒色土を斑状に含む。堅く締まる。
2．黒褐色土　褐色土を斑状に含む。
3．黒褐色土　ローム粒子を混入する。堅く締まる。

B区49号土坑

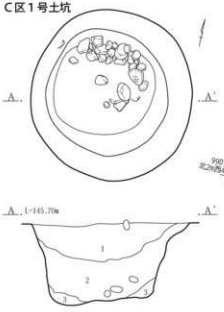


1．暗褐色土　褐色土を斑状に含む。
2．暗褐色土　１層と同質だが、やや暗い色調を呈する。
3．褐色土　ローム土をベースとする崩落土。
4．黒褐色土　ローム粒子を含む。
5．暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。

0　1:40　1m

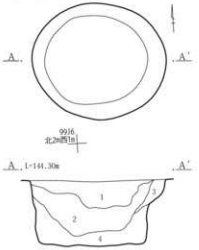
第80図　土坑(6)

C区１号土坑



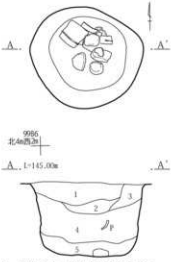
1．暗褐色土　ローム粒子を含む。
2．暗褐色土　褐色土を斑状に含む。堅く締まる。
3．黒褐色土　ロームブロックを含む。

C区18号土坑



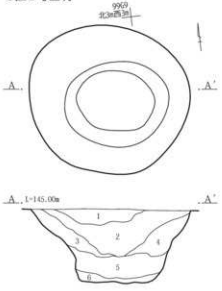
1．暗褐色土　還元され灰色を帯びた褐色土を斑状に含む。
2．黒褐色土　還元気味の灰褐色土が少なくなる。堅く締まる。
3．褐色土　ロームブロックを多量に含む。
4．暗褐色土　ロームブロックを含む。堅く締まる。

B区61号土坑



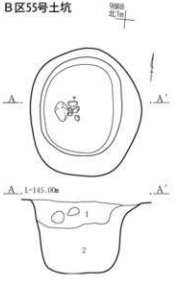
1．暗褐色土　褐色土を斑状に含む。
2．黒褐色土　褐色土を斑状に含む。
3．褐色土　ロームブロックを多量に含む。
4．褐色土　ロームブロックを含む。３層よりやや暗い。
5．暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。

C区２号土坑



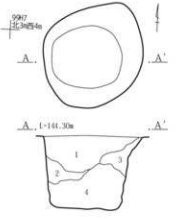
1．暗褐色土　ローム粒子を含む。堅く締まる。
2．暗褐色土　ロームブロックを含む。堅く締まる。
3．褐色土　ロームブロックを多量に含む。
4．暗褐色土　ロームブロックを含む。２層よりやや暗い。
5．黒褐色土　ロームブロックを含む。
6．暗褐色土　ロームブロックを含む。

B区55号土坑



1．暗褐色土　黒色土を斑状に含む。堅く締まる。
2．褐色土　ロームブロックを多量に含む。

C区17号土坑

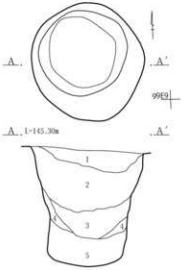


1．暗褐色土　ロームブロックを含む。
2．暗褐色土　１層と同質だが、やや明るい色調を呈する。
3．褐色土　ロームブロックを多量に含む。
4．黒褐色土　やや還元気味の褐色土を含む。粘性に富む。

0　1:40　1m

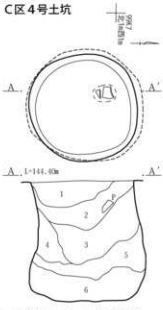
第81図　土坑（７）

C区６号土坑



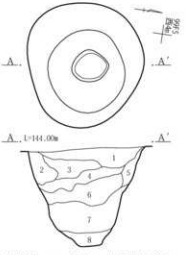
1．暗褐色土　褐色土を斑状に含む。
2．黒褐色土　褐色土を斑状に含む。
3．黒褐色土　２層と同質だが、褐色土を含む割合が２層より多い。
4．褐色土　壁体の崩落土。
5．黒褐色土　褐色土を斑状に含む。粘性に富む。坑底付近の埋土は出水して観察できていない。

C区４号土坑



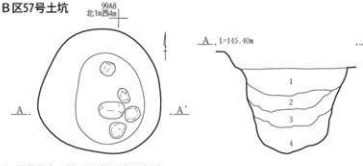
1．黒褐色土　ローム粒子を含む。
2．黒褐色土　ローム粒子・ブロックを含む。１層と同質だがやや明るい。
3．黒褐色土　ローム粒子等の含有が少なく、色調は暗い。
4．暗褐色土　ローム粒子を含む。
5．黒褐色土　ロームブロックを含む。色調は３層より暗い。
6．黒褐色土　ローム粒子等の混入刃見られない。粘性に富む。

C区20号土坑



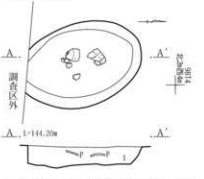
1．暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。
2．褐色土　ロームブロックを含む。
3．黒褐色土　褐色土を斑状に含む。
4．黒褐色土　上層に比べて褐色土を含む割合が少ない。
5．暗褐色土　ロームブロックを含む。
6．暗褐色土　２層と同質だが、やや明るい色調を呈する。
7．黒褐色土　ロームブロックを含む。
8．黒褐色土　ロームブロックを含む。

B区57号土坑



1．暗褐色土　ロームブロックを含む。
2．暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。
3．黒褐色土　やや砂質で、ローム粒子を含む。
4．暗褐色土　ロームブロックを含み、色調は明るい。

B区66号土坑



1．暗褐色土　ロームブロックを含む。砂質。

A区８号土坑

1．黒褐色土　As-Cを含む。
2．暗褐色土　ロームブロックを含む。

C区16号土坑

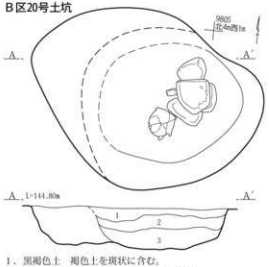
1．黒褐色土　ロームブロックを含む。
2．暗褐色土　ロームブロックを含む。

B区28号土坑

1．黒褐色土　褐色土を斑状に含む。
2．褐色土　ロームブロック主体の埋め土。

第82図　土坑（８）

B区20号土坑

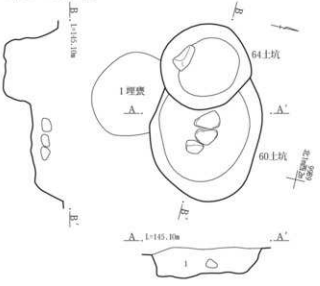


1．黒褐色土　褐色土を斑状に含む。
2．暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。
3．褐色土　ロームブロックを多量に含む。砂質で、やや軟質。

B区62号土坑

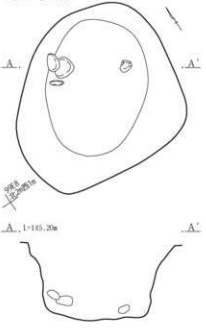
1．暗褐色土　褐色土を斑状に含む。

B区60・64号土坑

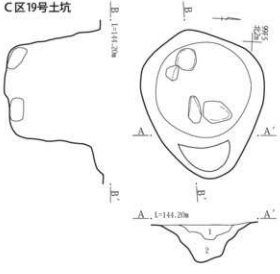


1．暗褐色土　褐色土を斑状に含む。

C区３号土坑

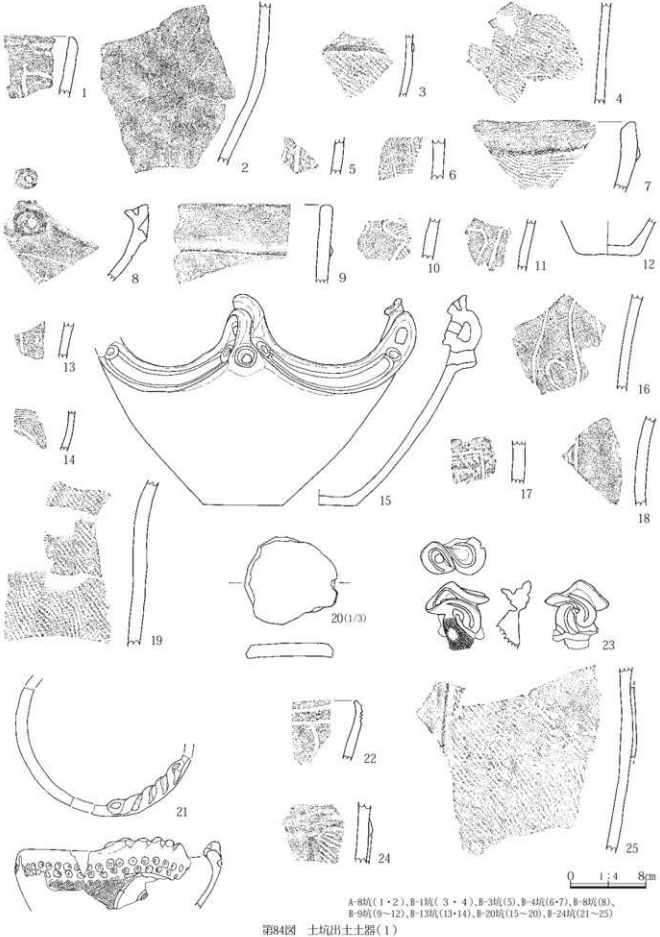


C区19号土坑



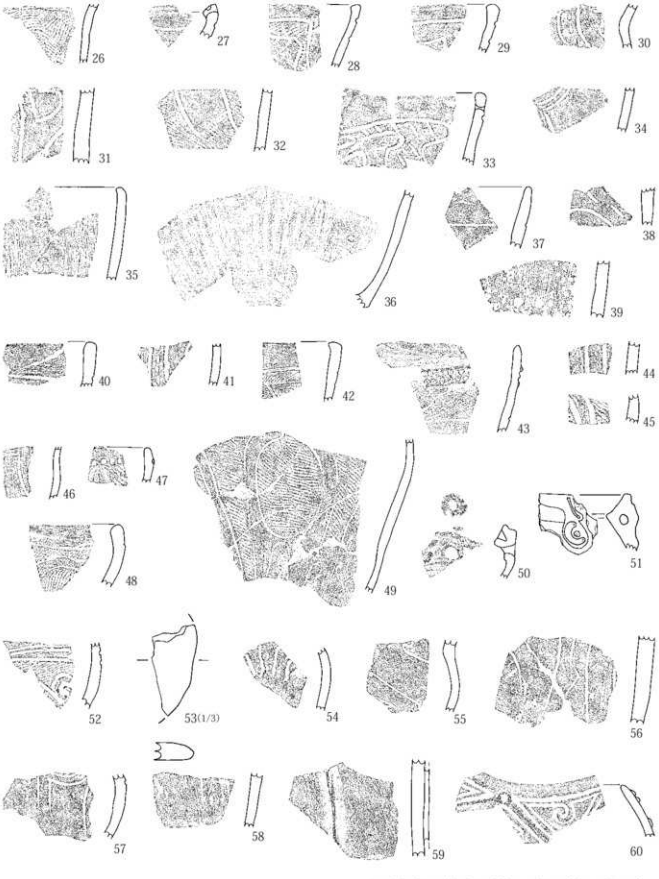
1．暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。
2．暗褐色土　ロームブロックを含む。

第83図　土坑（９）



A-8坑(１・２)、B-1坑(３・４)、B-3坑(5)、B-4坑(6･7)、B-8坑(8)、
B-9坑(9～12)、B-13坑(13･14)、B-20坑(15～20)、B-24坑(21～25)

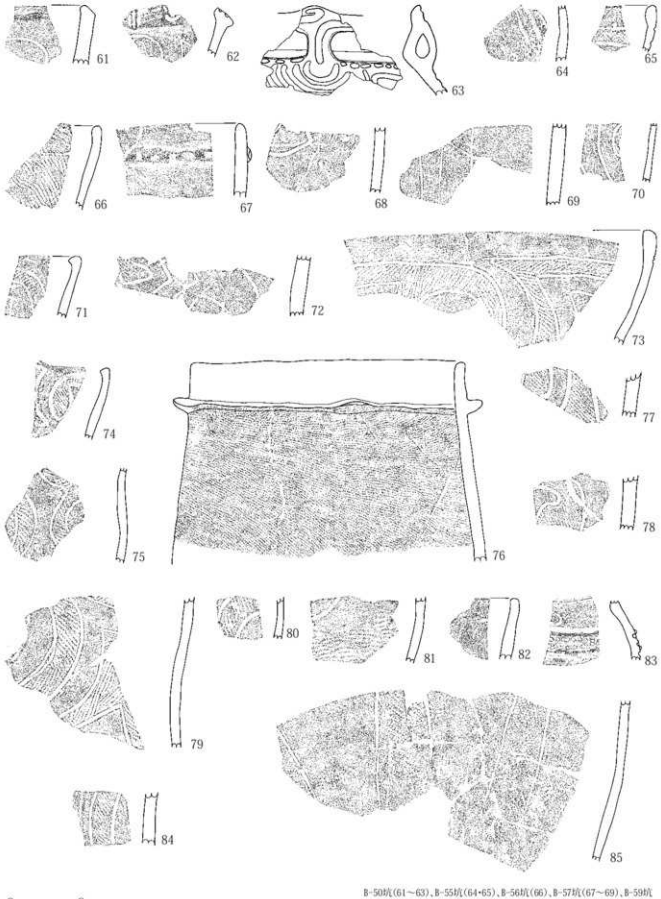
第84図　土坑出土土器(１)



0　1:4　8cm

B-28坑(26)、B-29坑(27)、B-30坑(28～32)、B-32坑(33～36)、B-33坑(37～39)、B-35坑(40･41)、B-37坑(42)、B-39坑(43)、B-40坑(44～46)、B-42坑(47～49)、B-44坑(50～53)、B-45坑(54)、B-49坑(55-60)

第85図　土坑出土土器(２)



0　1:4　8cm

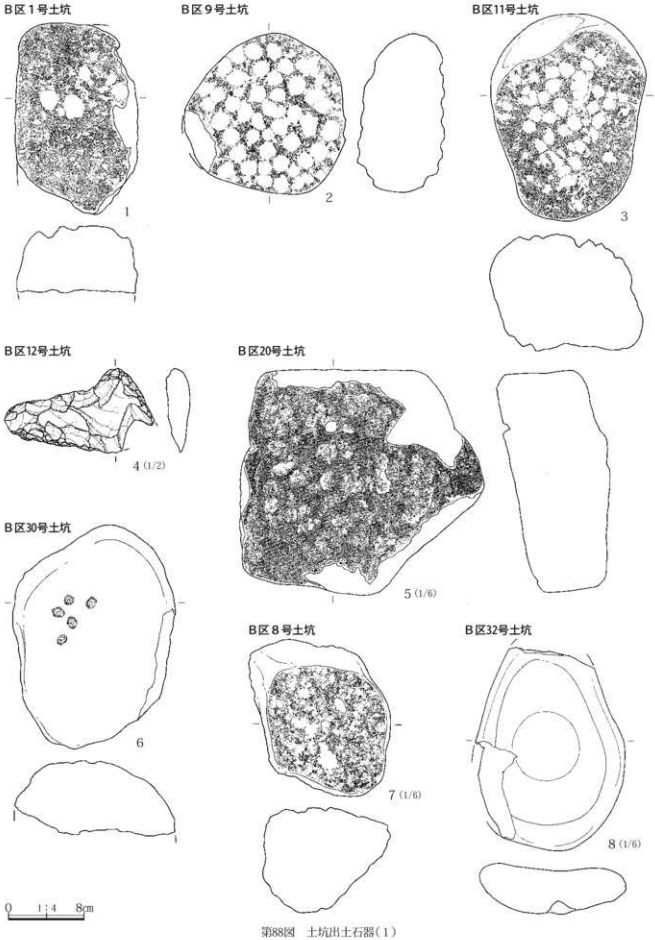
B-50坑(61～63)、B-55坑(64･65)、B-56坑(66)、B-57坑(67～69)、B-59坑(70)、B-60坑(71･72)、B-61坑(73～76)、62坑(77～81)、B-63坑(82･83)、B-64坑(84)、B-66坑(85)

第86図　土坑出土土器(3)

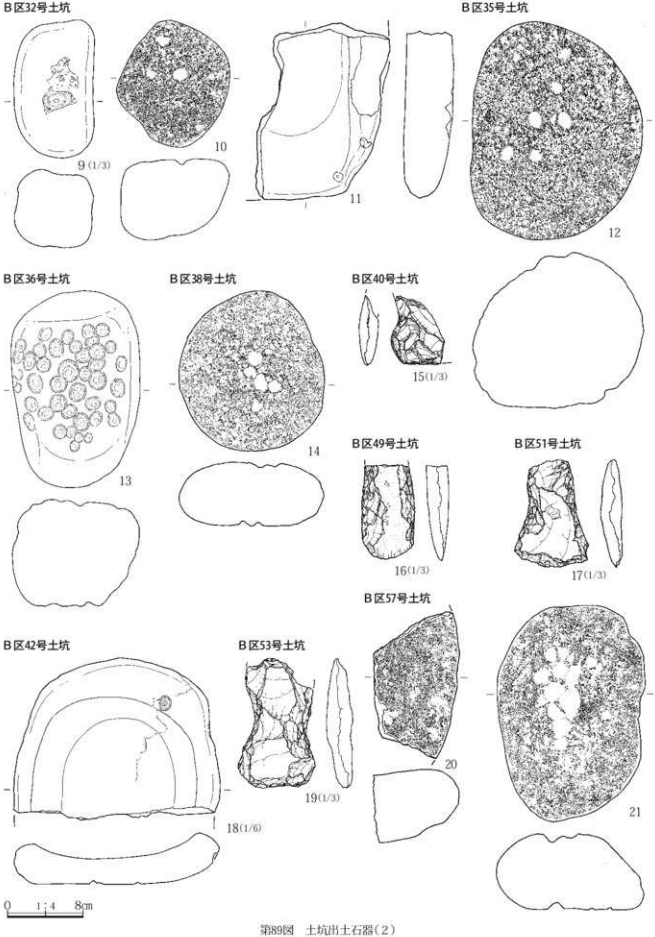
C-1坑(86)、C-2坑(87・88)、C-3坑(89～92)、C-4坑(93)、C-5坑(94)、
C-6坑(95・96)、C-7坑(97)、C-16坑(98～101)

0　1:4　8cm

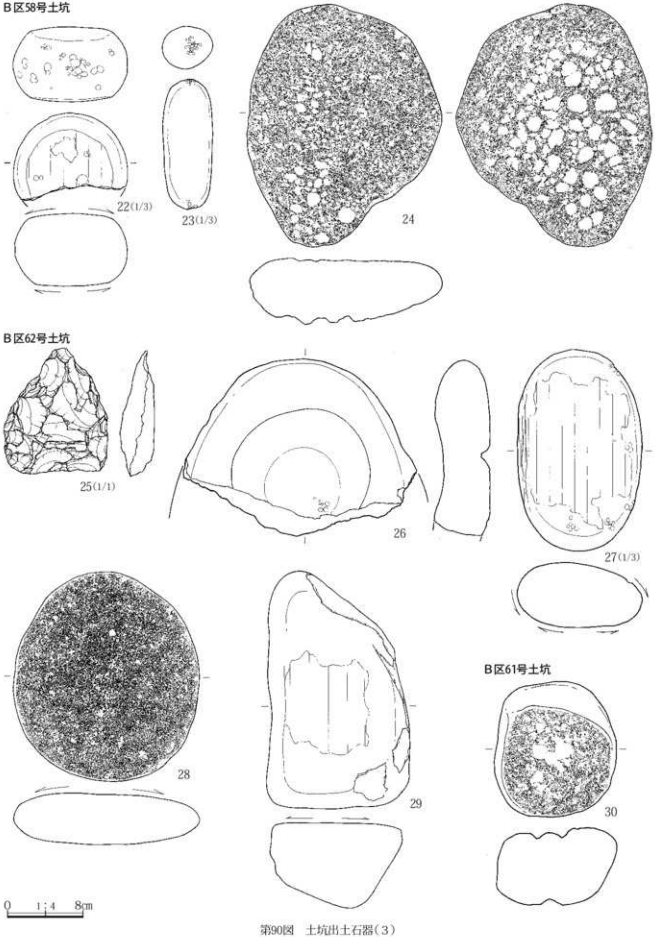
第87図　土坑出土土器（４）



第88図　土坑出土石器（１）

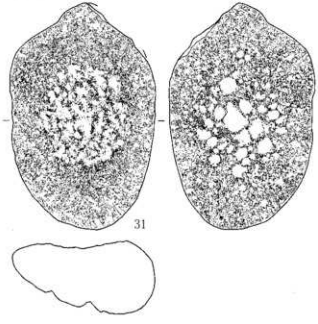


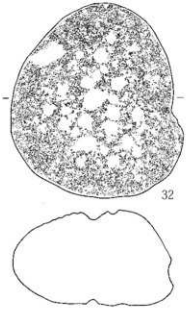
第89図　土坑出土石器（２）



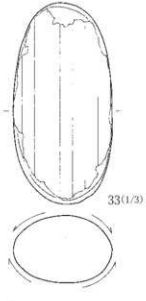
第90図　土坑出土石器(3)

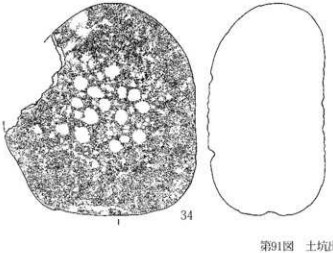
Ｃ区１号土坑





Ｃ区３号土坑





Ｃ区５号土坑

第91図　土坑出土石器（４）

４．その他の遺構

住居・土坑以外の遺構として、埋甕炉２・焼土遺構４・配石２・集石１が確認されている。

＜埋甕炉＞

埋甕炉は、Ｂ区西の99区Ｂ８グリッドとＢ区南西の98区Ｔ４グリッドの２ヶ所にあり、いずれも単独出土の状態で確認されている。調査において埋甕とされていたが、焼土を伴う埋甕の例は知られていないためここでは埋甕炉とすることにした。

１号埋甕炉(第92図、PL.８)　径１ｍ程の範囲に焼土があり、炉中央よりやや南に炉体土器が埋設されていた。炉体土器は胴部下半を欠き正位の状態で埋設され、その口縁部は土圧の影響で外側に崩れ落ちていた。炉体土器は崩れ落ちていた口縁以下が赤化しており、それより以下が黒斑気味の器壁になる。長軸1.09ｍ・短軸1.03ｍを測る略円形の「掘り込み」が炉体土器の掘り方として図示されているが、その掘り方に土器を埋設し、その隙間に褐色土を充填したというもので、その焼土化したものが８層ということになろう。本遺構は、60・64号土坑と重複関係にあり、その重複関係は図示されていないが、焼土の分布状況や本遺構の調査後に土坑を調査していることから、60・64号土坑が１号埋甕炉に先行するものと考えておきたい。

２号埋甕炉(第92図、PL.８)　径0.5ｍの「掘り込み」に炉体土器が埋設されていた、炉体土器は確認面が下がり、本来の状態で確認されたものではないが、胴部上半を欠き正位の状態で埋設されたものと考えている。炉体土器は長期に使用されたものと見られ、上半部が還元気味に変色・変質している。本遺構は５号住居の南東側に近接してあるが、周辺域に柱穴等は確認されていない。

＜焼土遺構＞

焼土遺構は、７基(Ｂ区６基・Ｃ区１基)が確認されている。Ｂ区の焼土遺構６基は１基(１号)のみやや離れているが、残る５基は住居が密集したＳライン付近に遍在する傾向があり、このうち３基(２・３・６号)については報告段階で住居炉跡として捉えるべきことが判明した。残る３基についてもその可能性が否定できないが、現状では周辺域に柱穴等がなく、判断は難しい。Ｃ区の焼土遺構は調査区南東隅で確認されている。これについても周辺域に柱穴等がなく、単独遺構と捉えている。

Ｂ区１号焼土遺構(第92図、PL.８)　98区Ｎ４グリッドにある。径70cm程の範囲に焼土が確認され、これを截ち割り調査した。確認面では焼土塊が、その下層に黒色土とローム土の混土層があるとされ、これより上位から掘り込んでいるのは確実である。周辺域に柱穴等がなく、焼土遺構が住居に伴う炉跡か明らかでないが、焼土遺構に近接して大型礫があり、このような在り方は他の焼土遺構にもあり、注意しておきたい。

Ｂ区４号焼土遺構(第92図、PL.８)　98区Ｒ５グリッドにある。中央付近を溝に切られ全貌は明らかでないが、溝の両側に焼土範囲が確認されたようである。ここでも大型礫が片側に配されており、１号焼土遺構に似た在り方を示している。単独遺構としておいたが、本遺構の周辺域には柱穴も多く、また、９号住居の炉跡(旧３号焼土遺構)も大型礫が片側にあることから(PL.８を参照)、住居炉跡としての可能性も否定できないだろう。

Ｂ区５号焼土遺構(第92図)　98区Ｓ５グリッドにある。新旧関係については不明だが、５号住居跡張出部に重複する。周辺部には礫が散在する。この礫が焼土遺構に伴う炉石として機能したものか、明らかでない。

Ｃ区１号焼土遺構(第92図)　99区Ｅ７グリッドにある。径１ｍ程の範囲に焼土が確認され、これを截ち割り調査した。確認面および土層の堆積状態はＢ区１号焼土遺構と同様で、周辺域に柱穴等がないのも良く似る。

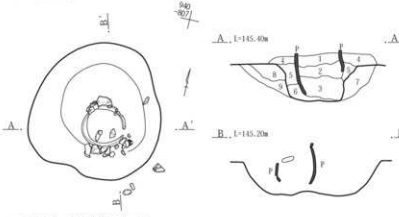
＜配石＞

配石は、Ｂ・Ｃ区に各１基がある。配石としてみた場合、礫分布は概して散漫であり、配石とするのが妥当か疑問だが、意図的に配置されたように見える箇所があるのも事実で、ここでは調査時の見解に従い、配石として報告しておく。

Ｂ区１号配石(第92図、PL.８)　98区Ｐ５の北側に大型礫が列状に分布するほか、それより南側に散漫な礫分布がある。その全域が１号配石とされているが、意図的な配置が看取されるのは北側の列状分布のみである。大型礫は平坦面を上に確認されているが、平坦間縁が傾いているものもあり、やや乱れた状態にある。構成礫は30点ほどで石材種や礫サイズは不明だが、石皿・多孔石・凹石が各３点、磨石２点が出土している。

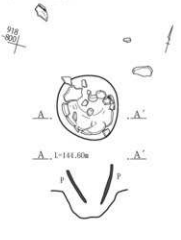
Ｃ区１号配石(第93図)　99区Ｆ５・６グリッドにある。

B区１号埋甕炉

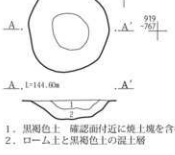


１．暗褐色土　褐色土を斑状に含む。
２．褐色土　炭化物を少量混入。
３．褐色土　砂質で、色調は2層より明るい。炭化物は見られない。
４．暗褐色土　若干の焼土とロームブロックを含む。
５．褐色土　砂質。焼土等は含まれない。
６．褐色土　5層と同質だが、色調は暗い。
７．暗褐色土　少量の焼土と炭化物を含む。
８．赤褐色土　被熱した褐色土が混拌して堆積する。
９．暗褐色土　ローム粒子を含む。

B区２号埋甕炉

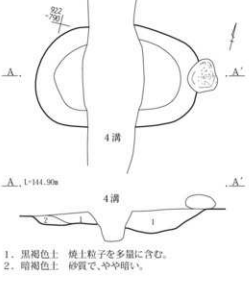


B区１号焼土遺構



１．黒褐色土　確認面付近に焼土塊を含む。
２．ローム土と黒褐色土の混土層

B区４号焼土遺構

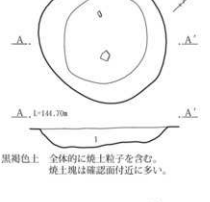


１．黒褐色土　焼土粒子を多量に含む。
２．暗褐色土　砂質で、やや暗い。

B区５号焼土遺構

１．黒褐色土　焼土粒子を多量に含む。
２．暗褐色土　焼土粒子を含む。

C区１号焼土遺構



１．黒褐色土　全体的に焼土粒子を含む。
焼土塊は確認面付近に多い。

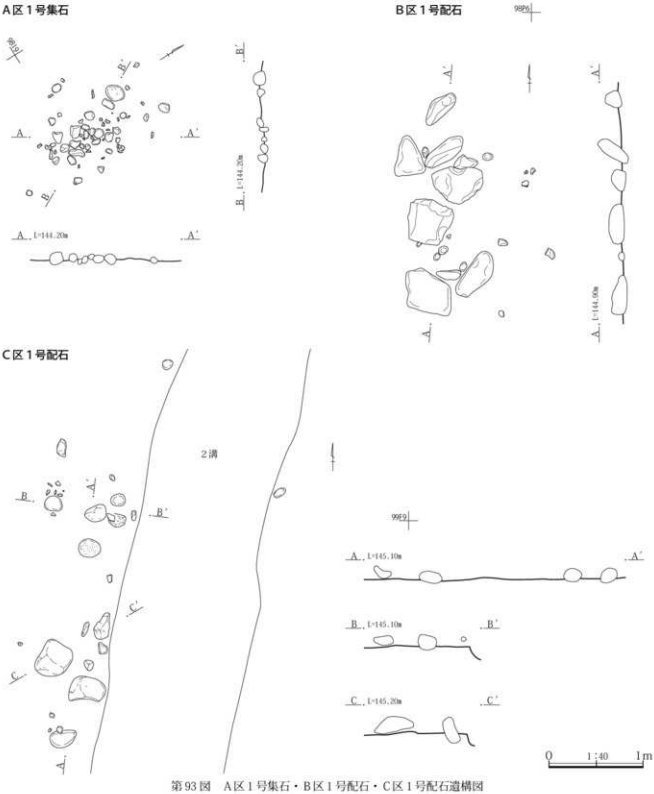
0　1:30　1m

第92図　B区１・２号埋甕炉、B区１・４・５号焼土遺構、C区１号焼土遺構遺構図

礫分布は散漫で、配石とするのは疑問が残る。多孔石３点が出土したほか、凹石１・打製石斧２・削器１が出土している。

＜集石＞（第93図、PL.８）

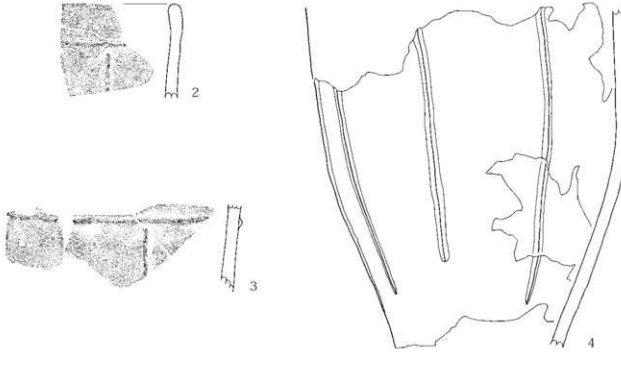
集石は、Ａ１区・台地斜面部で確認されている。これに近接して11号住居がある。集石の構成礫は50点弱が平面図に図化されているが、その石材構成については明らかではない。集石下土坑の有無については不明だが、エレベーション図が作成されており、礫はフラットに出土、掘り込んだ形跡は見られない。



第93図　Ａ区１号集石・Ｂ区１号配石・Ｃ区１号配石遺構図

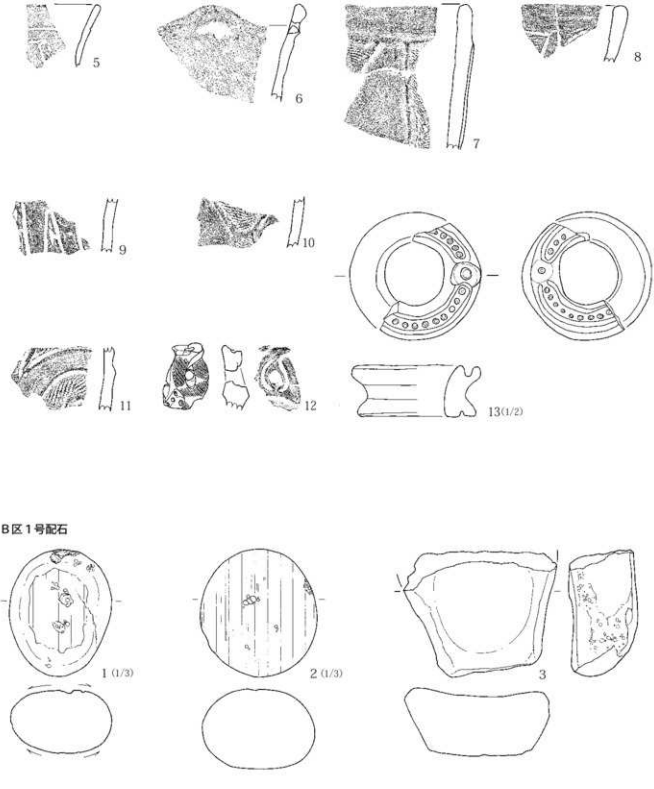
Ｂ区１号埋甕炉

Ｂ区２号埋甕炉



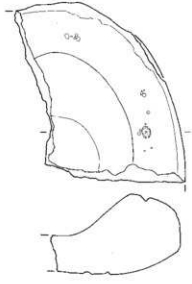
0　1:4　8cm

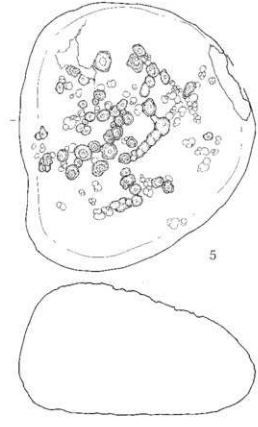
第94図　Ｂ区１・２号埋甕炉出土土器



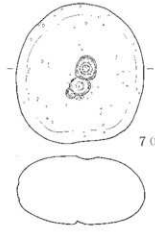
第95図　B区５号焼土遺構出土土器（５・６）、C区１号配石出土土器（７～13）、B区１号配石出土石器（１～３）

B区１号配石





C区１号配石



0　1:4　8cm

第96図　B・C区１号配石出土石器

５．旧河道跡の調査

Ｂ区・北東隅において、旧河道跡が確認されている。旧河道跡は縄文期遺構を確認するため徐々に掘り下げていく過程で確認されたものである。台地上の旧河道跡という表現は妥当性を欠いているかもしれないが、累々と河床礫が姿を見せるその様子は、旧河道と表現するのに相応しい様相を呈していた。後日、これについて専門家から泥流堆積により瞬時に堆積したものだろうという指摘を受けているが、これに似た現象として赤城山麓域においては山体崩壊に伴うローム層の再堆積や、河川氾濫に伴う扇状地形成があることが知られている。採集経済下にある縄文人が環境変化に順応して生きたことはいうまでもないことであるが、どの程度まで上述した山体崩壊や土砂の再堆積が影響したのか、そのことを明らかにする必要がある。被害の影響については、遺跡動向を踏まえ評価すべきであるが、まずその発生時期を明らかにしたうえで、その影響を評価すべきだろう。

第２章の基本土層や後述する第４章のテフラ分析（第４章）の記載事項と説明が重複してしまうが、ここでは以上を念頭に置き泥流堆積物の発生時期を明らかにすることを目標に、旧河道の形成過程について述べることにしよう。

＜旧河道跡の様相＞　旧河道跡は台地側の河床礫が盛り上がり、それより東側が浅く窪んでいた（PL.３）。河床礫は10～30cmを測る楕円礫が主体で、亜角礫は見た限り含まれない。河床礫は厚さ1.5m以上があり、その基底については確認できていないが、土層図には１ｍより下層は砂利が多く含まれ、上層は礫主体の堆積になるようであり、旧河道西端部では下層に小礫が、上層に大型礫が隙間なく堆積していることが図から読み取れる。河川性堆積物の特徴としてラミナ堆積や堆積物の再浸食などがあるが、ラミナ堆積した様子はなく、再浸食も見られないことから、土石流だろうとされた堆積物が瞬間的に堆積したことが分かる（第99図）。

Ｂ区において旧河道跡は北北西－南南東に確認され、町道下に潜り込んでいる。調査の先行したＡ区においては旧河道を念頭に置いて調査されておらず詳細については不明だが、Ａ区の全景写真（PL11－10）には礫が顔を出しているのが分かり、方向性から考えて、まず旧河道が下層に隠れていたのは確実である。また、これに続く南側の調査区には礫が確認されていないため、この付近で南東方向へ走行を変えている可能性が高い。

＜考古学的所見＞　旧河道の形成時期を絞り込む材料として旧河道西に分布した石槍を含む石器群と、旧河道上層から出土した撚糸文土器がある。前者にはやや出土層位（Ⅵ層に多出）のレベルが高い「北側分布域」と、これより出土層位（Ⅶ層）の低い石槍主体の「南側分布域」があり、北側分布域の石器群が旧河道西端部の下に潜り込んで出土した。後者の撚糸文土器は河床礫の上面から10cmほど浮いた状態で出土しており（土器１個体）、口辺部に縄文を施文、前半期撚糸文土器の特徴を備えている。

旧河道西側には縄文時代草創期の石槍の分布域があり、これが旧河道の下の潜り込んでいたことが明らかになり、さらには、旧河道跡においてその河床面より浮いた状態で撚糸文土器１個体が出土した。これにより、草創期石槍より古く、早期撚糸文土器より新しいという考古学的年代が確定した。加えて、Ａ区においてはその斜面部には縄文時代後期の土器・石器が多量に出土している。この地点には調査区南端に後期住居跡が確認されており、斜面部の土器類を見た目で斜面廃棄とするのは乱暴だが、旧河道跡形成後に台地が浸食されていることだけは確実である。

＜地質学的所見＞　上述した考古学的所見を踏まえてこれを裏付けるため、テフラ分析（第４章）を行い地質学的な検討を試みた。

先にも述べたとおり、旧河道跡の形成時期についてはその下限が縄文時代早期（撚糸文期）以前であることは確定していたが、その上限については不明であり、その形成時期を明らかにしようとして調査区・北に幅１ｍ弱のトレンチを設定した。人手で掘り下げたため、河床の基底は明らかにすることはできなかったが、旧河道構成礫は河床面から1.5m以上が堆積していることが明らかになり、旧河道跡の西側の立ち上がり付近で浅間系軽石が確認され、旧河道形成期に関する上限を押えることに成功した。以上は調査の経過とでもいうべきものであるが、このことを踏まえテフラ分析がおこなわれた。分析結果については第４章の火山灰分析に記載されているが、ここではその概要を述べておこう。まず、旧河道上限を知る上で重要な下層の２枚のテフラ（浅間系軽石）は上位の

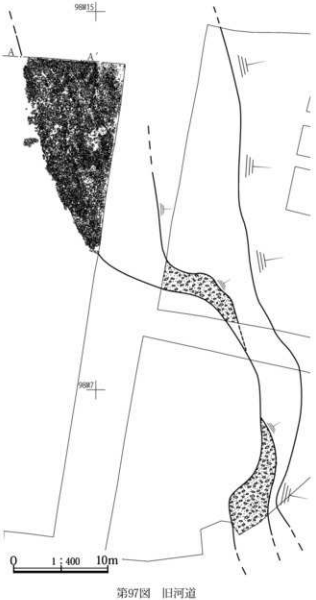
テフラが浅間白糸パミス(As-Sr)、下位のテフラが板鼻褐色軽石層(As-BP)であることが判明した。また、旧河道形成の下限については考古学的には撚糸文期以前であることが判明していたが、地質学的には旧河道跡の直上に堆積した黒褐色土中よりAs-Sj(浅間総社軽石)が確認され、旧河道形成期についてその大枠が確定した。

火山灰分析の項に示した第135図「Ｂ区埋没谷断面の土層柱状」は、調査区北壁で旧河道を截ち割り調査した狭いトレンチの短辺で、サンプリング当日、分析者が気付いたものである。それによると、最下層の粗粒火山灰の直上にAs-BPが、10cmほど間層を置いてAs-Srが堆積、その後に泥流堆積物が60cmほど堆積している。問題は泥流堆積物の上位に砂質の「灰褐色土」が同じく60cm程堆積している点である。この灰褐色土について分析者は漸移層(Ⅵ層)に相当するものであり、これを旧河道跡が浸食していると考えている。

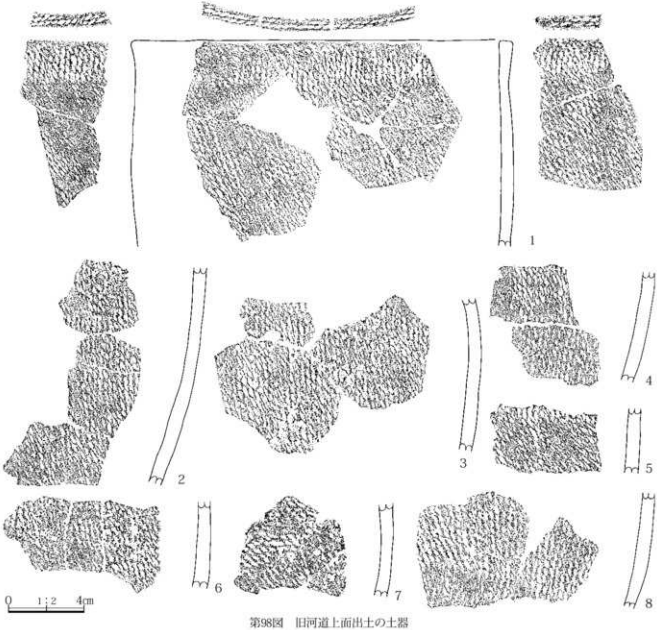
台地上ではⅥ層の下位にはⅦ層が堆積しており、埋没谷の断面で確認されたところの泥流堆積物と「灰褐色土」の間には明らかに不整合の関係があることになる。これについて分析者は、「縄文時代の早い頃、台地の浸食が進む時期がある」といい、「堤遺跡の漸移層も当該期の浸食谷に堆積した漸移層だろう」(早田氏私見)という。

<まとめ>　以上の考古学的所見と地質学的所見を総合してまとめとしよう。赤城白川扇状地の形成開始期は捉え切れていないため将来的課題とせざるを得ないが、本遺跡では少なくともAs-Sr降下後まもなくして扇状地堆積物に覆われたようである。その後しばらく安定期があり、草創期石槍(南側石器群)とチャート主体の石器群(北側石器群)が続いて残されたのであろう。この直後に台地が浸食、そして、ある程度まで谷が埋もれようとしたころ土石流が谷を埋めたということになる。土石流は現在の藤沢川のルートではなく、それより西の谷を流れていたと個人的には考えているが、いずれにしても土石流は谷を一挙に埋めたはずである。Ａ区においては土石流が部分的に残されているだけであることから、間隙を置かず土石流の浸食が開始され、その斜面部に中・後期遺物が廃棄されたということだろう。

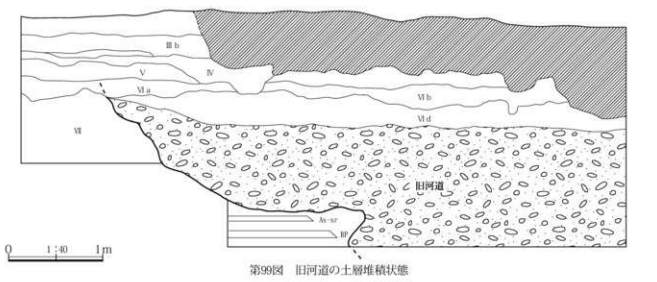
平成20年当時、上武道路関連の調査は複数遺跡が並行調査されており、各遺跡とも厚く泥流堆積物に覆われていた。同じ地形面にある遺跡で５m近い泥流堆積物に覆われていた例もあり、厚い泥流堆積層を抜いてその基層を確認することはできないだろうと考えていたが、予想に反して、本遺跡ではAs-BPが浅い位置に堆積していることが判明した。現場では地層が堅く、途中掘削を断念したというが、厚く堆積した河床礫を人手で掘り下げたという話を聞き驚いている。全体的に掘り下げ不足の感は否めず、台地の浸食状況や下層テフラの実態が不明であるのも事実である。しかしながら、本遺跡で確認することができた考古学的所見、及び、地質学的所見を総合することにより、赤城白川扇状地の形成後の地形発達が具体的に記述することが可能になり、これと遺跡動向を併せることで、実態に即した考古学的記述が可能になるはずである。



第97図　旧河道



第98図　旧河道上面出土の土器



第99図　旧河道の土層堆積状態

６．包含層出土の遺物

本遺跡では、包含層出土の遺物として相当量の土器や石器が出土している。具体的な数量把握はできていないため、果して包含層からどの程度の量の土器や石器が出土しているのか、その実数については明らかでないが、実績報告では遺構出土遺物と合せて遺物収納箱150箱に達したといい、包含層から出土した土器片には早期前半から後期前半まで、各種型式の土器片があることが判明した。型式別に見た内訳は、早期撚糸文土器、前期花積下層式期・関山式期・黒浜式期・諸磯ｃ式期、中期加曾利Ｅ３・４式期、後期称名寺Ⅰ・Ⅱ式期、堀之内Ⅰ式期である。数値データとして遺物の出土量は提示することはできないが、感覚的には集落が営まれた後期称名寺式期から堀之内式期の土器片類が圧倒的多数を占めることは明らかである。これに続いて中期加曾利Ｅ式期の土器片や前期初頭期の土器片が出土しているが、その出土量は後期土器片の量に比べるまでもない。残る撚糸文土器や前期関山式期・黒浜式期・諸磯式期の土器片は数点という出土量で、断片的な存在に止まる。

このような型式別に見た土器片の出土量は何を示しているのであろうか。遺跡全域が調査されていないこともあり断言できないのが現状だが、土器片の出土量と遺構量は確実に相関関係にあり、遺構に伴わず土器片のみ出土したものは周辺域に遺構があるだろうことが予想され、また、周辺域に住まいした縄文人が生活を維持するためその活動エリアとした痕跡と理解するのが妥当である。ここに型式別に見た土器片量を把握することの重要性があり、また、その意義が見出されねばならないと考えている。本遺跡の場合、包含層出土の土器片類は相当量に達しているが、柱穴のみから住居とされたものも多い。このように本来的に住居に還元されるべき土器片があるにもかかわらず、住居に還元することができないのが実態であり、数量把握が正確性に欠ける、あるいは、作業時間の割に成果が期待できないなど、遺物量の量的把握には消極的意見もある。数量的把握に対する懸念、懐疑的見方は当然あるだろうが、住居に伴う土器は意外に少なく、統計上の数字にはほとんど影響しないというのが実態であり、全体的傾向を評価するのに支障のないことは明らかである。上述したような土器の遺構還元問題を不確定要素として問題視するとなると、その後の議論は難しくなる。なぜなら、全点ドットで遺物を取り上げていない限り、包含層出土の遺物を住居に還元することはできないからである。縄文人の活動エリアを実体的に理解するためにも遺物の量的把握は必要であり、どのようにしてそれを評価するのかが今後の課題になるだろう。

石器についても、その量的把握の重要性は変わらないだろう。それは、石器は極めて機能的な存在であり、生業に直結、その地域の生産力を反映するものとして位置づけることができるためである。石器は土器に比べ時間軸の問題があり、それがために軽視されがちであるが、考え方・意義は変わらないはずである。このような視点

第12表　包含層出土石器の器種石材構成

	黒頁	頁岩	珪頁	砂岩	砂頁	黒安	黒曜石	チャ	ホルン	細安	粗安	変安	石閃	変玄武	緑片	軽石	流紋岩	総計
打斧	38		2	1		3			16	33			1					94
磨斧														1				1
石槍	1		1															2
石鏃	2		1			16	1	12										32
石匙						1		1										2
石錐	2					2		1										5
楔	2					5												7
削器	22		2	1		2			3	1								31
石核	32	2	1			12		15	2			1						65
加工痕	78	1	5	1		28		9	18	6		1						147
凹石											10							10
磨石											9							9
石皿											5							5
敲石	2				1				1	2	4	1	1					12
台石											1							1
多孔石											18							18
石製品																1		1
石棒											1				1			2
砥石			1														1	2
総計	179	3	13	3	1	69	1	38	40	42	48	3	2	1	1	1	1	446

に立ち、以下その概要を述べておこう。

＜土器＞

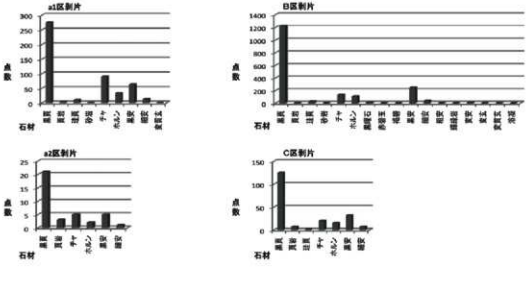
出土土器片類は膨大な量に達しているが、既に述べたように、土器片類については都合で出土量が把握できておらず数値データとしてその全体量を明らかにすることができないが、図の掲載方針として細別型式の全貌が分かるように、また、型式毎の文様のバリエーションが分かるように配慮したつもりである。資料提示に際して、写真のみを掲載ということも検討してみたが、情報量として適当ではないと判断、図として拓本のみを掲載することにした。断面等については深鉢胴部破片については省略、把手・土製円盤・土製品等に限り断面図を添えた。包含層出土の土器として、撚糸文土器２点・花積下層式土器39点・関山式土器10点・黒浜式土器29点・諸磯ｃ式土器３点・加曾利Ｅ３式土器28点・Ｅ４式土器38点・称名寺式土器252点・堀之内式土器２点の合計403点を図化した。

掲載土器片類を器種別に見ると、各区とも深鉢が圧倒的であることは変わらないが、Ａ区における器種構成が多様性に富み、壺形土器・鉢形土器・浅鉢型土器・注口土器・ミニチュア土器・蓋・土製円盤・土製腕輪・土製品が出土している。これに対して、Ｂ・Ｃ区の器種構成は貧弱であり、Ｂ区ではミニチュア土器・蓋・土製円盤・土製腕輪が、Ｃ区では土製円盤があるだけである。基本的にはＡ区包含層は斜面廃棄されたものと見られ、遺構出土の器種構成と大きく変わるものではない。結果的に、土器や石器は居住域から外れた斜面部にも住居にも廃棄されたということになるだろう。斜面廃棄は日常的に行われ、住居廃棄はイベントとして行われるということを考える必要もあるかもしれない。

＜石器＞

出土石器には総計447点の石器類があり、剥片類2549点(17751.1ｇ)がある。石器類の内訳は剥片系石器386点(29054.9ｇ)、礫石器60点(149491.7ｇ)で、圧倒的に剥片系石器が主体を占めた。これに対して、住居・土坑など遺構から出土した剥片系石器は176点(14748.2ｇ)、礫石器180点(468246.2ｇ)であり、その1.25倍程度が包含層から出土したということになる。遺構出土の剥片類は1215点(11133.9ｇ)で、包含層ではその2.09倍が出土したことになる。以上の数字は草創期石槍類を除いたものであるが、上述した出土の在り方が一般的であるのか、それとも個別遺跡の個性であるのか、判断が難しい。群馬県内の縄文時代前期遺跡では遺構出土量の10倍程度が包含層から出土することが知られているが(勝保沢中ノ山遺跡Ⅰ、第75集)、後期遺跡についてもそうした理解が可能か検証できていないことや、同時期の遺跡でも集落規模や継続性が異なり、適当な比較資料がないため、その評価は将来的課題としておこう。

器種レベルにおいては、剥片系石器10種・礫石器８種が確認されている(第12表)。このうち、剥片系石器は打製石斧の出土量94点(21.0％)が多く、狩猟具としての石鏃の出土量32点(7.2％)は少ない。加工痕ある剥片(147



第100図　包含層出土剥片類の石材別構成比

点、32.9％）や石核(65点、14.5％）の出土量が多く、集落内で石器を自前調達していたことが分かる。礫石器類では製粉具としての磨石類(20点、機能的に重複する要素が多く凹石も磨石類に含めた）も出土量は少ないように思える反面で、第二の道具としての多孔石の出土量が多量に出土している点が特徴的である。

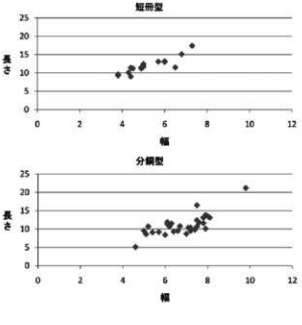
石材レベルにおいては黒色頁岩が圧倒的に多く、これに続いて黒色安山岩・チャート・ホルンフェルスが使用されており、各区とも似た傾向を示していた(第100図)。礫石器類については粗粒輝石安山岩の使用頻度が高く、石製品類には軽石が、石棒には緑色片岩が多用され、他遺跡を含め器種石材間に極めて強い対応関係を確認することができた。石材構成を考える際、遺跡地が旧利根川流路に近接していることが重視されるべきである。

本遺跡では早期から後期前半の土器が出土しているが、その大部分は後期初頭期のものとすることができ、このことを前提に記載を進めていきたい。

＜打製石斧＞　計94点が出土した。内訳は、短冊型40点・分銅型46点・撥型３点・不明５点である。短冊型が42.6％、分銅型が48.9％と拮抗しているが、住居出土の石斧に限れば、短冊型31.6％・分銅型57.9％と１：２程度になり、包含層には多時期の石斧が混在していることが分かる。38点中11点が未製品の類で、ある程度まで自前で石斧を調達しているかのようであるが、石材構成の観点から言えば、ホルンフェルスや細粒輝石安山岩製の石斧を遺跡内製作とするには剥片量(ホルンフェルス156点・細粒輝石安山岩57点）が少なく、従来通り遺跡内では石斧の部分的補修・補充程度の製作が想定されるべきものと考えている。

石斧サイズは短冊型としたものが長さ11.3㎝・幅4.9㎝・重さ154.9ｇ、分銅型としたものが長さ11.1㎝・幅6.9㎝・重さ171.6ｇを測る(第101図)。両タイプの石斧とも同サイズとすることができるが、短冊型に比べ分銅型としたものがやや幅広である。短冊型石斧は前期的な石斧とされており、前期中葉以降安定して組成するようになる。これに対して、分銅型石斧は中・後期に盛行するようになり、伐採具とされている。そうしたことを反映して重量感が増してくるが、糸巻状を呈した小形例もあり、機能的分化が予測され、実態の不明な点が多い。

適当な比較材料とはいえないだろうが、東毛地区の



第101図　包含層出土打製石斧の長幅比

太田市大道東遺跡(加曽利Ｅ３・Ｅ４式期～後期初頭期、称名寺Ⅰ式期)出土の分銅型の石斧も同サイズ(長さ10.7㎝・幅6.7㎝・重さ169.5ｇ）であり、短冊型の石斧も長さ10.7㎝・幅4.9㎝・重さ126.1ｇを測り、本遺跡出土の石斧類と似た傾向にある。前期遺跡の石斧は前橋市上泉新田塚遺跡(事業団、第522集)のデータが比較的充実しており、それによると、幅の狭い装着部に幅広の身が付く石鏃タイプの石斧(長さ11.6㎝・6.5㎝・150.7ｇ）や、両側縁が弱く直線的に開くタイプ(長さ12.5㎝幅5.3㎝・重さ137.8ｇ）があるほか、両側縁の並行する短冊型石斧の典型例(長さ10.4㎝・幅4.3㎝・重さ75.3ｇ）がある。新田塚遺跡の石斧は両側縁の並行するものが主体であり、48例中31点を占めた。新田塚例は前期石斧のバリエーションというべきものを示しているが、それがどのような変遷を辿り中・後期の石斧に連絡するのか、課題を残している。

＜石鏃＞　30点が出土している。その内訳は凹基無茎鏃20点・凸基無茎鏃２点・平基無茎鏃３点・不明５点である。石材としては黒色安山岩・チャートが多用されており、通常は多い黒色頁岩・黒曜石の使用量が極めて少ない。30点中19点を未製品が占め、特徴的である。石鏃は自前調達されるべきものであり、この意味で未製品が残されることに違和感はない。石鏃の製作は明らかに両極剥離と結びついているが、同剥離法は薄い素材獲得と石核の効

率的消費に利点があり、黒曜石を用いた小形石器の製作には必ず適用されている。石鏃に限れば、本遺跡における最大の特徴は、黒曜石製石鏃の量が少ないことと、黒色安山岩製の石鏃未製品が多出していることだろう。通常、これは黒曜石の供給事情を反映した際の適応形態－黒曜石に代わるものとして在地石材使用－として理解されているが、近年は鉱山遺跡としての黒曜石採掘遺跡が注目され、その供給ルートも集落間関係に影響されただろうことが指摘されている。これによれば、その評価は後期社会の安定性如何ということになるが、現状では個別遺跡の消費実態を積み上げていくべき段階にある。

黒色安山岩製の石鏃は未製品が多く、それが遺跡内で製作されたことが分かる。未製品としたものは完成品としたものより当然ひと回り大きい傾向にあるようであるが、加工状態は最終段階に近く、完成状態となるまでの間に多少小形になるだろうが、前期石鏃に比べて大きいように思う。これに似た現象が、伊勢崎市五目牛清水田遺跡のチャート製石鏃に看て取れる。同遺跡は前期初頭期(花積下層式期)の集落遺跡で、黒曜石製石鏃に比べチャート製石鏃(在地石材)の大型化が明らかであった。大型化の理由は異なるものの、時期を違えて似た現象が生じているということかもしれない。

＜削器＞　31点が出土した。黒色頁岩の22点を筆頭に珪質頁岩２・砂岩１・ホルンフェルス３・細粒輝石安山岩１が石材構成の内訳である。削器としたものは、基本的に石核や加工痕ある剥片と同じ石材構成を示しており、それぞれの製作構造は深く結び付いていることが明らかである。機能的な側面を重視して器種名称を付す場合、削器類には加工痕ある剥片を含めることが通例だが、本報告では刃部加工の連続性を重視して削器を限定的に捉え、これに外れるものを加工痕ある剥片と呼んだ。器種認定に際して、明確に器種認定されるもの以外を加工痕ある剥片としたために、石鏃様のもの、削器様のもの、石斧様のものがこれに含まれることになり、観察表には石器毎の製作意図を分かる範囲内で記載しておいた。削器としたものは特に定型化したものはないが、縦長剥片では両側縁が、幅広・横長剥片では剥片端部が機能部とされることが多く、このような傾向は縄文時代全般を通じ共通する。加工痕ある剥片としたものは機能的・形態的に多様だが、石器には定型石器とされるもの以外に、その場に限り使用するという「便宜的石器」と呼ばれるものがあるとされ、さらには器種転用(再利用)されるものがあるということも考えておかねばならない。厳密な意味で製作器種を特定することはできないが、加工痕ある剥片としたものの実態を理解するためにはその製作意図を明らかにする必要があり、そうすることでその実態が容易に理解できるというメリットがあるだろうと考えている。最終的にはその機能的解釈が問題となるものと見られ、現状では不確定要素とされるだろうが、ここでは敢えてそうした不確定要素を承知したうえで、その製作目的を観察表に示してみた。その結果、加工痕ある剥片には、削器を指向して製作されようとしたもの58点(39.5％)、同石鏃15点(10.2％)、同石斧20点(13.6％)、不明54点(36.7％)があることが判明した。

加工痕ある剥片とされるものは、従来ある定型石器の定義・概念規定に外れるものを総称するものとして採用されたという経緯がある。こうした学的経緯を踏まえれば、加工痕ある剥片と称されるものは形態的・機能的に多様であり、さまざまなものが含まれることになる。縄文期石器を機能的に説明する際、「削器類」の語は至極便利であるのは事実だが、加工痕ある剥片には削器に類したものも含まれているが、それだけではないことも明らかであろう。

＜その他の剥片系石器＞　このほか、剥片系石器として有茎尖頭器(第114図６)、有茎鏃(同図５)、石匙(同図７・８)、打製石斧(同図１～３)、磨製石斧(同図４)を図示した。1の有茎尖頭器はＡ－１区より出土したものである。草創期石器群がＢ区にあり、参考資料として図示しておく。打製石斧２点(１・２)は甲高で、刃部加工が縞状を呈するなど、形態的には古い要素が看て取れる。残る１点はＡ－1区に斜面廃棄されたものである。

石匙は出土例が少なく不明だが、前期的である。磨製石斧は定角式石斧の頭部破片であり、後期初頭期の帰属するものだろう。

＜磨石類＞　磨石20点は、いずれも粗粒輝石安山岩製を用いていた。サイズ的には長さ12.0㎝・幅8.3㎝・厚さ5.3㎝・重さ648.0ｇが平均値で、成人が手で握れる程度のサイズである(第102図)。礫形状は河床礫とされるもので、楕円礫が圧倒的に多い。そのほかには球形礫・扁平楕円礫・柱状礫があり、その採取地は藤沢川か、旧利

根川の河床ということになろう。磨石は石皿とセットになり使われたものであるが、機能的要素として粗粒・多孔質であることが必要で、機能面が再生され、再利用されることは極めて稀で、消耗した時点で廃棄、これに代わる河床礫を用意して磨石としたものと理解している。

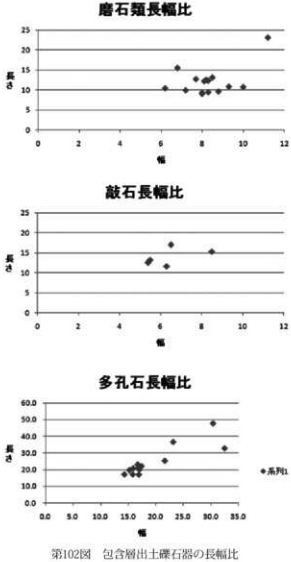
包含層出土の磨石は20点のみ出土しただけであり、居住期間を考えるなら少な過ぎるだろうが、遺構覆土の75点を含めることができれば、それ相応の比率を占めるということになろう。

<石皿>　石皿５点が包含層から出土した。破片資料が大部分で、形状の分かるものはほとんどない。５点中４点が有縁の石皿で、残り1点が無縁の石皿である。有縁の石皿には例外なく裏面側に孔が穿たれている。有縁の石皿４点には使用面・側縁が敲打されたままのもの１点(第114図18)がある。これについては未製品だろうとしたが、使用面の再生を意図した可能性もあるだろうと考えている。当該資料は裏面側に孔を穿ち、破損後被熱していることから縄文期石皿であることは明らかであるが、ここまで敲打されたものは稀で、石皿の使用面を再生するのに側面まで敲打する必要はないように思える。石皿が後世の井戸から出土したことも評価を難しくしている。

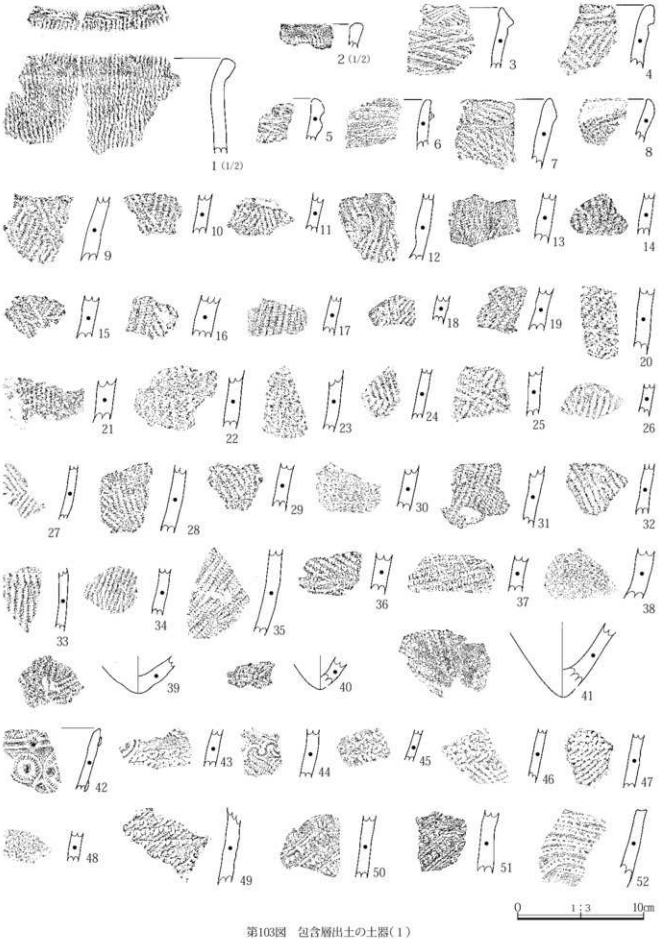
<敲石>　12点が出土している。棒状礫の小口部に打痕を有するものが圧倒的に多い。敲石の平均サイズは長さ13.9㎝・幅6.4㎝・厚さ3.9㎝・重さ458.5ｇであり、計測データからみると、礫を選択する際には、礫の「長さ」より「幅」や「厚さ」に規定されたことは明らかであり、掌で握れるサイズの棒状礫が選択されている(第102図)。このほかには、打製石斧様のエッジを敲打したもの(第114図11)があり、転用敲石とすることができる。この場合、剥離用ハンマーとするのは妥当性に欠けるため、広く敲打具として捉えるべきものと考えている。

<多孔石>　18点が出土している。平均的なサイズは長さ24.3㎝・幅19.3㎝・厚さ12.4㎝・重さ8.2kgを測る(第102図)。完形例に限れば、重さ５kg前後にピークがあり、10kgを超えるもの(最大35.9kg)も３例と多い。孔は漏斗状を呈するものが主体で、数個から「蜂の巣」状を呈するものまで多様だが、広い平坦面ほど孔を多く穿つ傾向があるように見える。第114図16に示した多孔石は背面側の中央付近が浅く窪んだその周辺に孔を穿つ例である。礫中央を意図的に窪めたものか微妙だが、多孔石としては特異な部類に入る。18例中４例に被熱破損が確認されている。

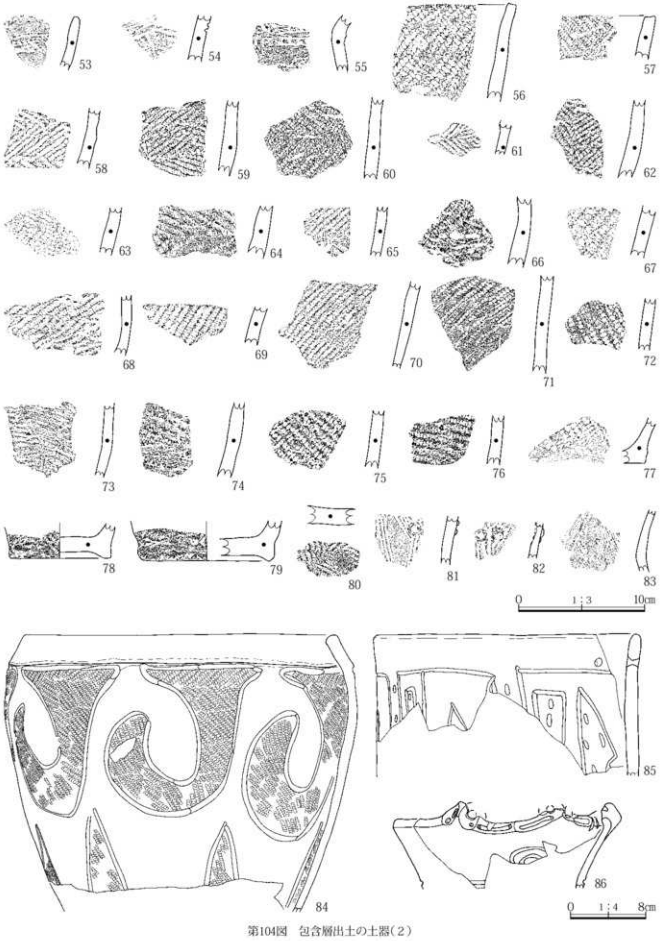
<その他の礫石器類>　このほか、砥石様のもの(第114図13・14)、石棒状のもの(同図15)がある。13は礫面に線条痕があり、14は研磨面が溝状に捩れており、砥石と認定した。２例とも縄文期砥石としてよくみる扁平な砂岩製砥石とは形態的に異なる。14はⅥ層から出土したとされるものであるが、形態的には古代以後散見されるようになる礫砥石に近い。15は角柱状を呈するもので、背面側・上端側と上面に浅い凹部がある。全面とも敲打整形されたのみであり、研磨痕は見られないが、角柱状に敲打整形されていることを重視して石棒と認定した。



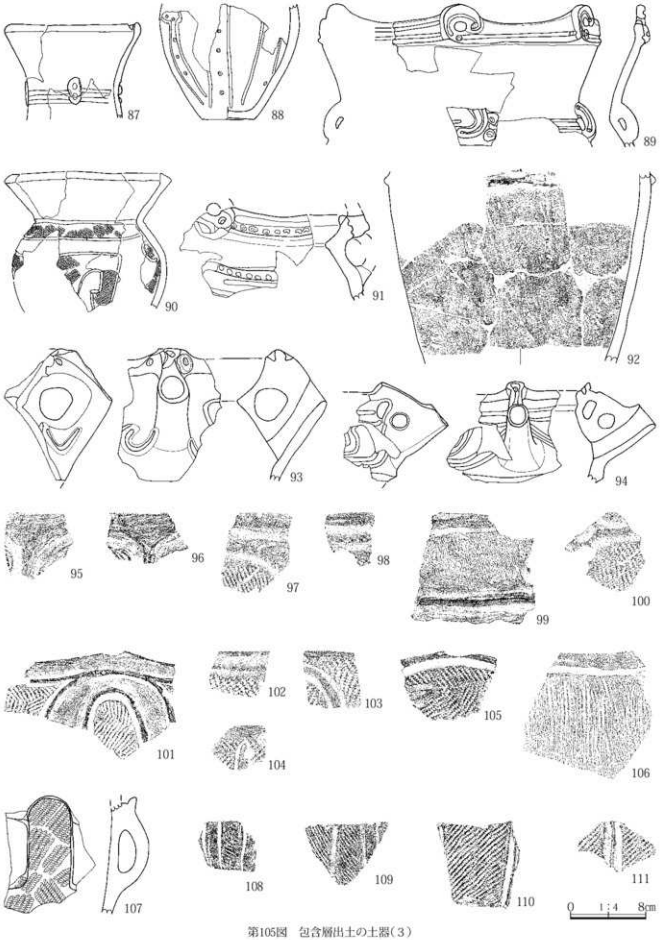
第102図　包含層出土礫石器の長幅比



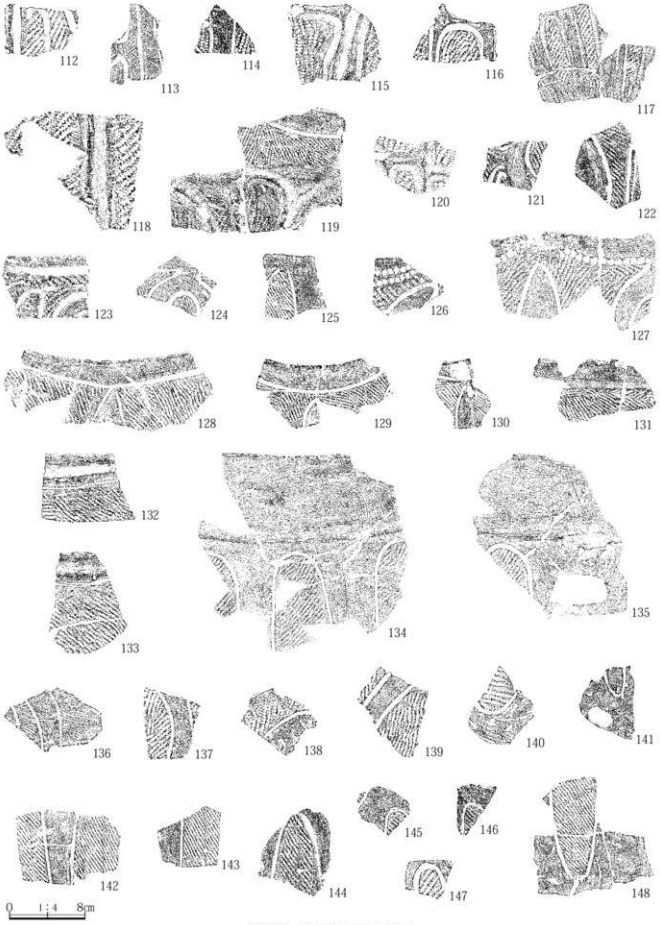
第103図　包含層出土の土器（１）



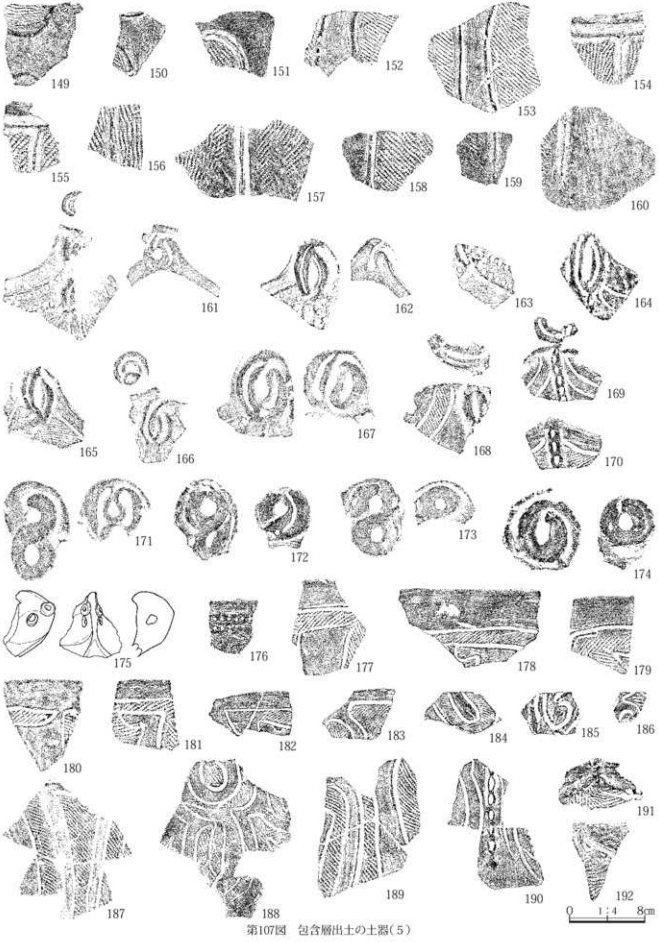
第104図　包含層出土の土器（２）



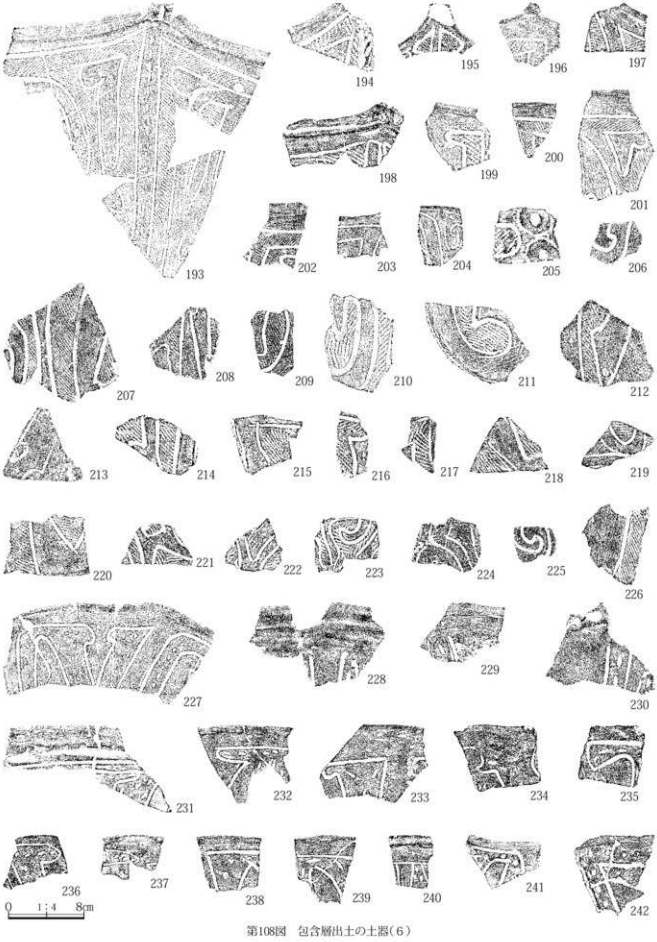
第105図　包含層出土の土器（３）



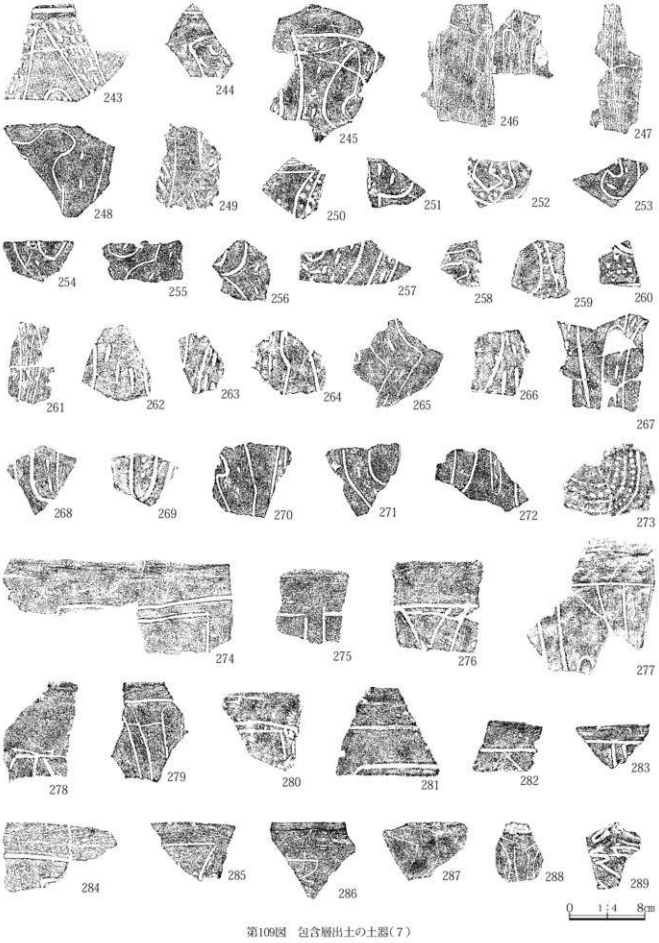
第106図　包含層出土の土器（４）



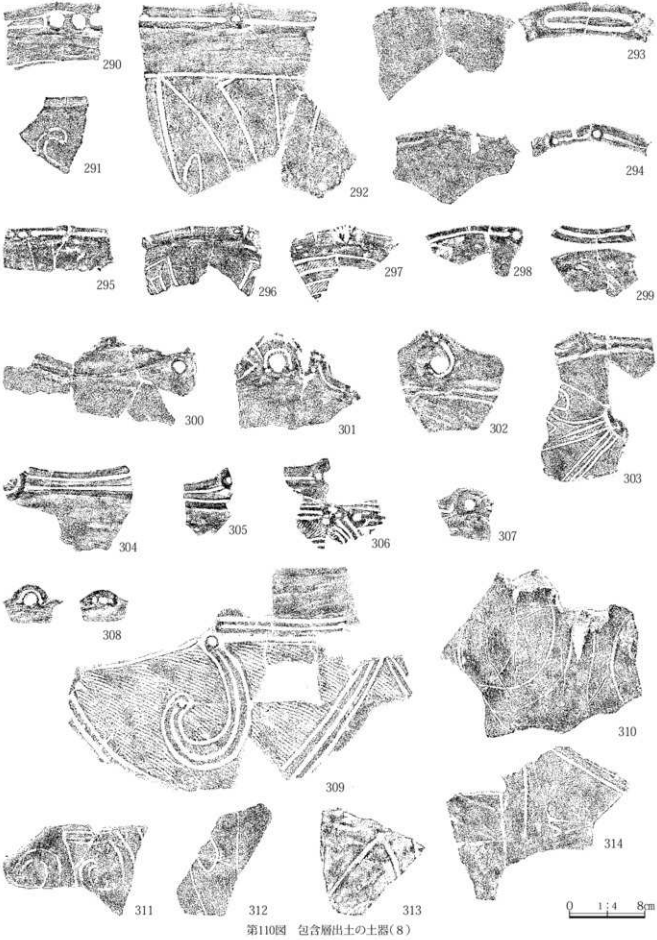
第107図　包含層出土の土器(5)



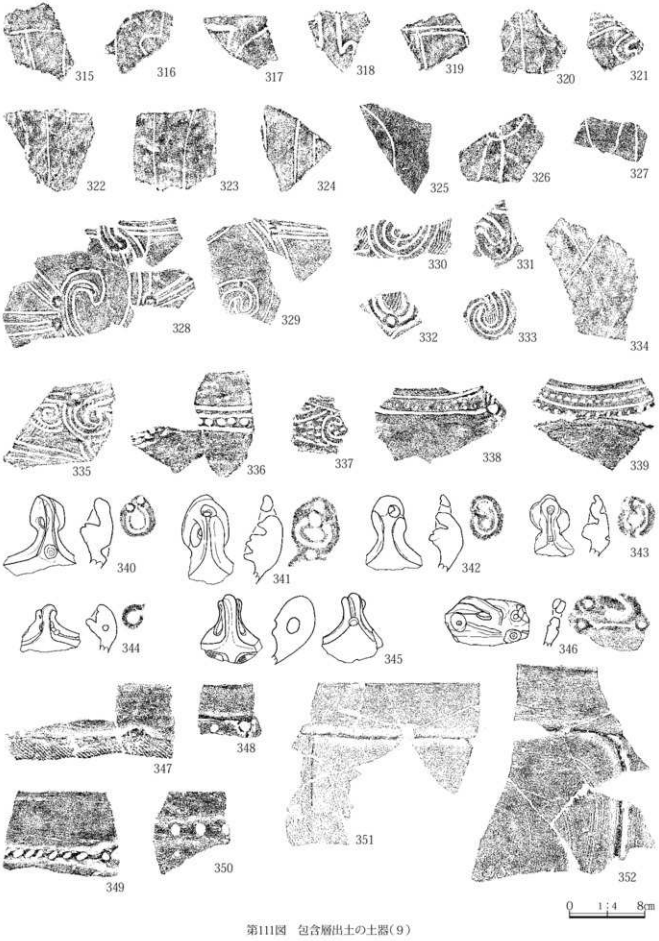
第108図　包含層出土の土器（６）



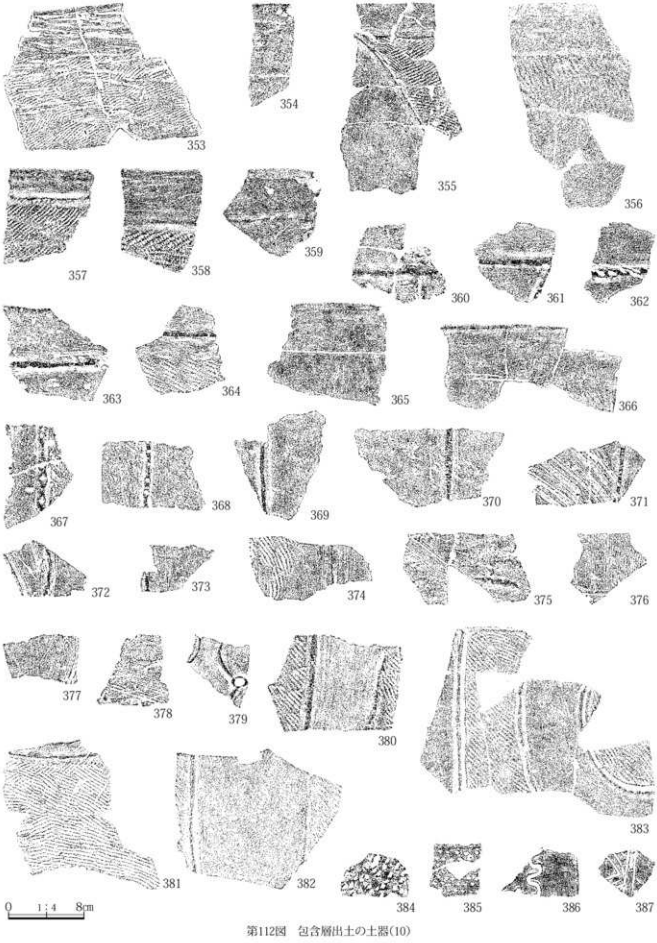
第109図　包含層出土の土器（７）



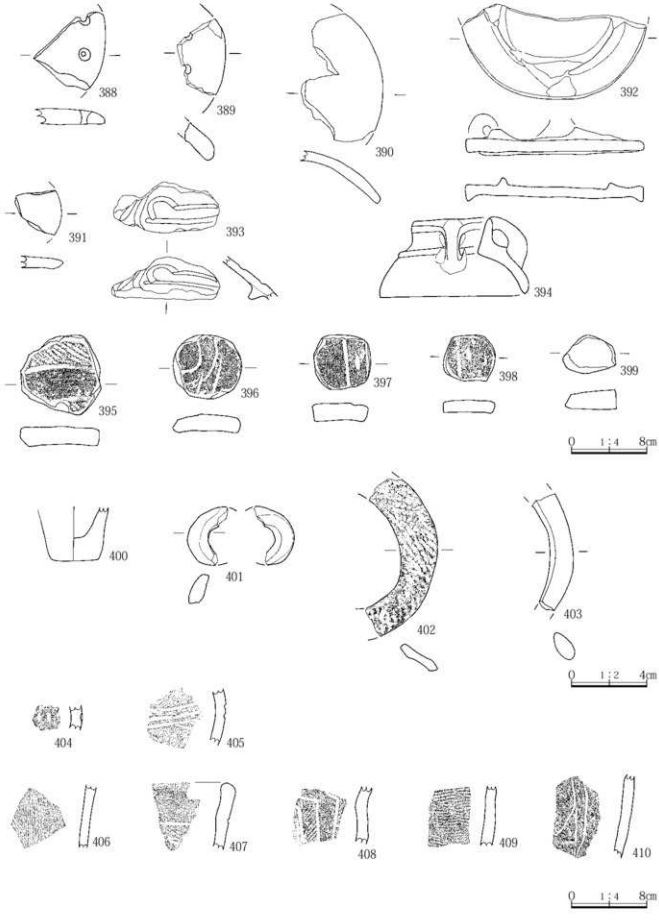
第110図　包含層出土の土器（８）



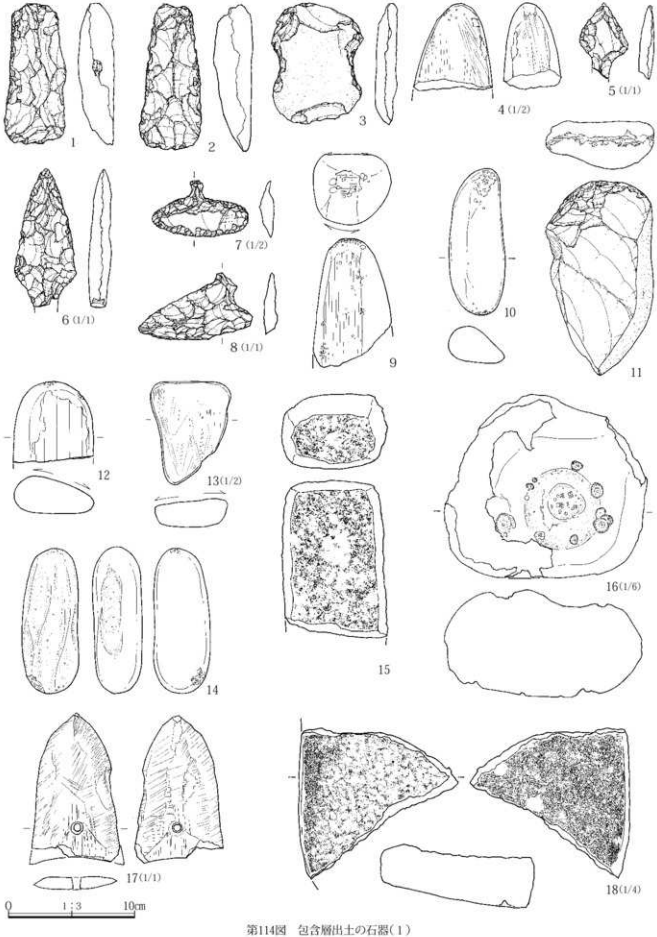
第111図　包含層出土の土器(9)



第112図　包含層出土の土器(10)



第113図　包含層出土の土器(11)



第114図　包含層出土の石器（１）

第２節　平安時代の遺構と遺物

１．概要

平安時代の遺構として、竪穴住居１軒・溝２状を確認した。住居の検出位置は東側台地縁辺から約50m内側の地点（Ｂ区）にあり、南壁際に数基の長方形土坑が重複していた。住居の帰属時期は概ね９世紀前半である。溝２条は台地中央付近にあり、このうち１条は等高線に直交していた。８世紀中葉から９世紀前半の坏・椀３点（第118図１～３）が３号溝から出土したこと、１・３号溝にはAs-Ｃ・Hr-FA起源の白色パミスを含んだ黒色土で埋没していることから、これについては概ね竪穴住居と同時期のものとすることができる。残る溝２条（２・４号溝）の帰属時期については、伴出遺物がなく明らかではないが、埋没土はAs-B起源の砂質土で、時期的には中・近世に下る可能性が高い。

２．竪穴住居

３号住居（第116図、PL.12）

位　置　98区、Ｓ８・９

形　状　略正方形を呈する。

重　複　南西側で長方形土坑と重複する。長方形土坑は図化されていないが、写真より判断した。

規　模　長軸4.00m・短軸3.70m

面　積　11.0㎡　　**主軸方位**　Ｎ－85°－Ｅ

埋没土　白色パミス（As-Ｃ・Hr-FA）を含む黒色土で埋没、東壁際には暗褐色土（ローム粒子を多量に含む）が三角堆積していた。住居自体が大きく削平されており、埋没土上層の堆積状況が不明だが、現状で見る限り、埋没が人為的であるということはなさそうである。

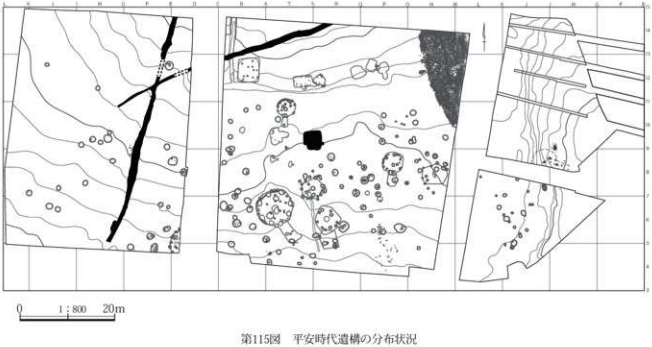
竈　東壁やや南に構築されていた。確認長90.0cm、燃焼部幅60.0cm（推定値）を測る。竈の袖は向って左側のみ残存したのみで、右袖は確認されていない。左袖は0.5mが図化されているが、９世紀代の竈としてこれを袖の残存長とするには長過ぎるかもしれない。

柱　穴　なし

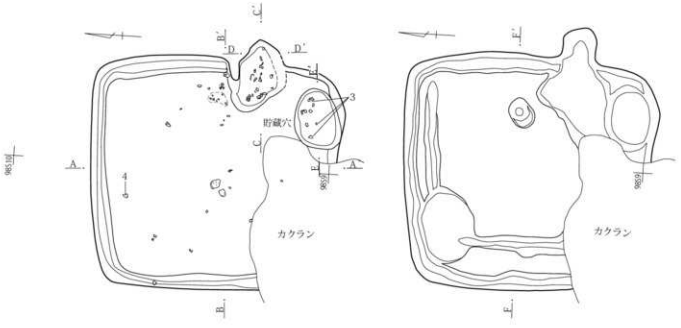
周　溝　長方形土坑と重複する南壁における周溝の有無については不明だが、竈右袖から南東側コーナー（貯蔵穴）付近を除き全周している。

貯蔵穴　住居南東隅にある。隅丸長方形状を呈し、長軸0.95m・短軸0.72m・深さ0.15mを測る。出土遺物は甕の上半部破片（第116図５）がある。

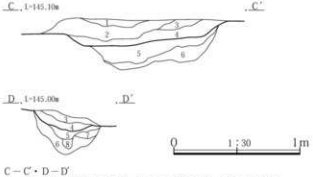
掘り方　住居北西コーナーが浅く土坑状に窪んでいるが、全体を粗く掘り窪めており、特に壁際を深く掘り下げる等の傾向は見られない。掘り方の調査時に北壁と西壁に並行する周溝が確認されており、住居を建て替えていることが判明した。



第115図　平安時代遺構の分布状況

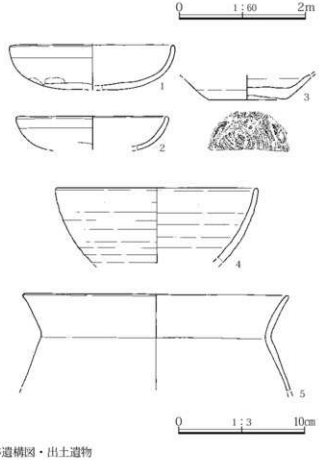


A－A'・B－B'
1．暗褐色土　ローム粒子・白色パミス(Hr-FA)起源を多く含む。
2．黒色土　ローム粒子を含む。
3．暗褐色土　ローム粒子を多量に含む。
4．黒色土　ロームブロックを多く含む。
5．黒色土　上層にロームブロック土体の貼り床がある。
6．黒色土と褐色土の混土層



C－C'・D－D'
1．暗褐色土　白色パミス(Hr-FA起源)を含む他、褐色土が斑状に混じる。
2．暗褐色土　白色粒子・ローム粒子を含む。
3．褐色土　焼土ブロックを含む。
4．黒色土　大粒の焼土を含む。下層に薄い灰層が堆積。
5．暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子を含む。
6．暗褐色土　ロームブロックを含む。

E－E'
1．暗褐色土　焼土粒子・炭化粒子を多量に含む。
2．黒色土と褐色土の混土層



第116図　３号住居跡遺構図・出土遺物

遺物の出土状況　竈の崩落土中から須恵器腕(第116図４)が、貯蔵穴の埋没土中から須恵器坏(同図３)が、住居埋没土中に甕(同図５)が出土した他、掘り方から坏(第116図１・２)が出土した。竈崩落土中の坏(同図３)は貯蔵穴の坏破片と接合関係にある。これと同様な接合関係が須恵器腕(同図４)にもあり、竈崩落土と住居床面より16cm浮いて出土した破片が接合している。住居埋没土中から出土した遺物の遺物量は少なく、礫類や甕の破片が少量出土したのみである。

所　見　掘り方から出土した坏類と、竈や貯蔵穴から出土した坏・腕類には時期差があり、住居の構築時期と建て替え時期を示唆している。

３．溝

１号溝(第117図、PL.117)

位　置　98区Ｒ～Ｔ12・13、99区Ａ～Ｇ－９～12

重　複　２・３号溝と重複関係にある。新旧関係については記録がなく不明だが、２号溝の砂質土は浅間Ｂ軽石に由来するものと見られ、浅間Ｃ軽石を含む黒色土で埋没している１号溝に後出する可能性が高い。

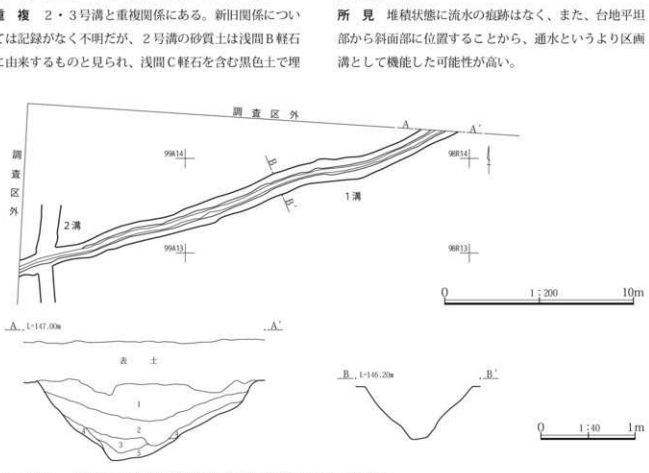
形　状　台地平坦部ではやや走行が乱れているが、走行は概ね直線的(Ｎ－71°－Ｅ)である。溝は台地西側斜面部で途切れているが、これが台地西側の低地まで延びるのか、折れ曲がるのか、判断できない。溝の断面形状は薬研状を呈し、上場が大きく開いている。溝の底面は、Ｂ区北とＢ区西では比高差７cm(勾配率0.37％)と平坦だが、Ｃ区東とＣ区西の溝末端では比高差30cm(勾配率1.67％)と傾斜が強まる。

規　模　調査長48.0m　　最大幅1.20m
　　最小幅0.70m　　深さ0.58m

埋没土　１・２層は褐色土と浅間Ｃ軽石を含む黒色土、溝底部は粘性を帯びた暗褐色土(３～５層)が堆積した。１・２層はⅣｂ層に由来する同質の堆積土であり、短期に埋め戻されたものだろう。

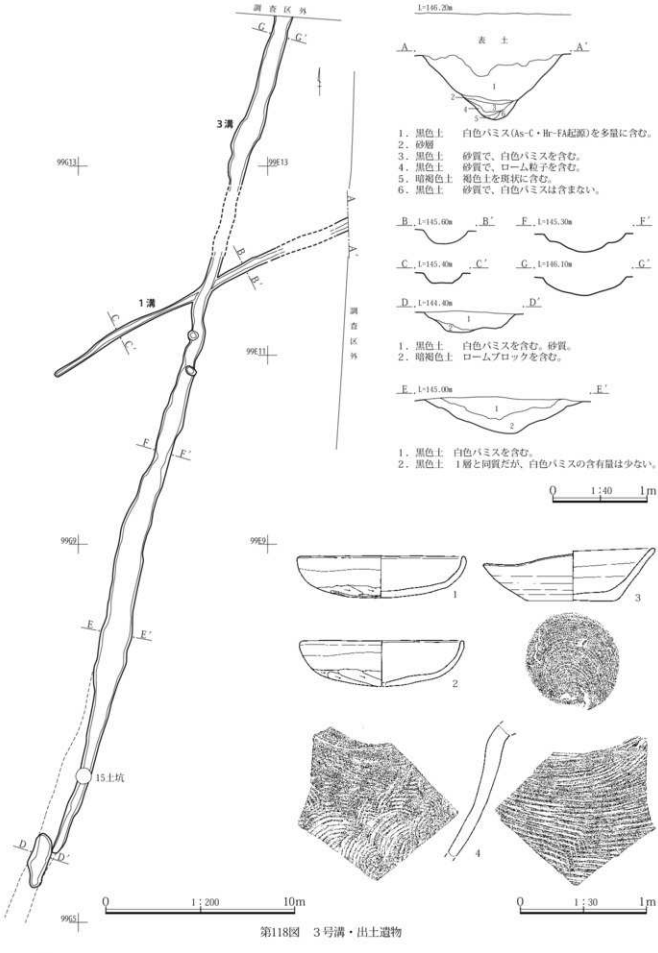
出土遺物　なし

所　見　堆積状態に流水の痕跡はなく、また、台地平坦部から斜面部に位置することから、通水というより区画溝として機能した可能性が高い。



1．黒色土　白色パミス(As-C・Hr-FA起源)・ロームブロックを多量に含む。人為的埋土。
2．暗褐色土　１層と同質だが、色調は暗い。
3．灰褐色土　ローム粒子を含む。粘性に富む。
4．暗褐色土　ロームブロックを含む。
5．暗褐色土　４層と同質だが、若干色調が明るい。

第117図　１号溝



第118図　３号溝・出土遺物

３号溝(第118図、PL.12)

位　置　99区Ｄ～Ｇ５～14

重　複　１号溝と重複関係にある。１・３号溝とも浅間Ｃ軽石起源の黒色土で埋没しているが、新旧関係については所見がなく明らかではない。

形　状　Ｃ区・東端にある。溝は概ね直線的であり、南南西(Ｎ－16°－Ｅ)を向く。溝幅は確認面で１ｍほどであるが、８ライン付近では1.5mほどやや溝幅が広がる。溝の断面形状は調査区北端では薬研状を呈していたが、13ラインより南では浅く、皿状を呈していた。溝の底面は北側と南端では1.5mの比高差を計測しているが、１号溝以北は比較的平坦(勾配率1.16%)だが、それより以南では勾配率3.67%と傾斜が強まる。６ライン以南については溝の痕跡がなくなるものと考えていたが、後日排土用通路とした６ライン以南を掘削したところ、３号溝と同じ浅間Ｃ軽石を含む黒色土が土坑状に落ち込んでいた。調査所見では溝が途切れたこともあり、これを９号土坑として調査したとあるが、同時に覆土の類似性や位置関係から３号溝の痕跡として捉えるべきことが指摘されている。確認面を下げ過ぎたということだろう。

規　模　調査長48.2m　　最大幅1.50m
　　最小幅0.60m　　深さ0.20m(確認面より)

埋没土　最上層は浅間Ｃ軽石を多量に含む黒色土が短期に自然堆積する。以下、砂質土と黒色土の薄層が互層堆積するように見える。２層は砂層と記されており、水が流れたことが示唆されているが、溝の底面は木の根の攪乱を除けば概ね平坦であり、常に通水したような状態は想定できない。

出土遺物　８世紀後半代の坏２点(第118図１・２)及び、須恵器甕破片(同図４)が埋没土中にあるほか、溝南端(９号土坑遺物として取り上げ)で５㎝浮いた状態で９世紀前半台の須恵器坏(同図３)が出土した。

所　見　埋没土に砂層があり、流水が関与したことは確実だが、溝は台地中央部に向いており、１号溝同様に区画溝として機能したものと考えておきたい。

第３節　中・近世の遺構と遺物

１．概要

中・近世の遺構として、竪穴状遺構６基・火葬跡４基・溝２条・井戸１基・土坑12基・ピット10基がある。遺構に伴う遺物は砥石１点(５号竪穴状遺構)と鉄斧１点(６号竪穴状遺構)があるのみであり、そのほか陶器類数点(第130図)が表土層から出土しただけである。

竪穴状遺構と火葬跡は群在化が明らかで、竪穴状遺構５基が12ライン付近に、火葬跡３基がＴライン付近に集中している。竪穴状遺構は出入口部の在り方に二種類があり、少なくとも竪穴状遺構の構築は二時期程度を想定したほうがよさそうだが、12ラインのものは南側に、Ｏラインのものは東側に出入口部を有している。これに連動するように、火葬跡も突出部を東側に向けたものが多

第119図　中・近世遺構の分布状況

く、伴出遺物こそなく時期不明とせざるを得ないが、配置状況からみて両者は関連したものとして捉えるべきものだろう。溝については、埋没土を検討した結果、南北に走る２条(２・４号溝)を中近世のものと捉えた。これに伴う遺物がなく帰属時期は不明だが、溝の底面や埋没土に水の流れた痕跡がなく、消極的だが溝は区画溝として機能したものと捉えた。このほか、中近世の遺構として土坑12基・ピット10基が確認されている。井戸は１基が確認されているが、確認面より1.2mと浅い。また、井戸特有の「アグリ」もなく、井戸とするのが妥当か不安を残しているが、途中平坦面に礫を積んでおり、これを重視して井戸と捉えた。土坑・ピットとも、半数以上がＡ区で確認されている。分布的特徴など特に指摘すべきことはなく、ピット数が少なく現状で掘立柱建物跡は復元できないが、竪穴状遺構等の配置状況からするなら、あることを前提に理解したほうがよさそうである。また、第１節で記したように(第10図を参照)、Ｂ区には長方形土坑多数が重複していたことが明らかである。このほかにも古代住居と長方形土坑の重複、火葬跡と土坑の重複があり、全域に長方形土坑・ピット・溝が分布していたのではないかという想定も否定できない状況にある。

なお、12ライン付近の削平の性格が問題になるだろうが、これについては調査前の土地区画に重なり、これが中世まで遡る区画か、現状で判断するだけの材料はない。

２．竪穴状遺構

＜１号竪穴状遺構＞(第120図、PL.13)

位　置　98区Ｐ12

主軸方位　Ｎ－67°－Ｗ

規　模　主体部(長軸2.50m・短軸1.70m)、出入口部(長軸0.80m・短軸0.95m)

形　状　主体部は長方形状を呈する。主体部の東壁中央に出入口部が付く。

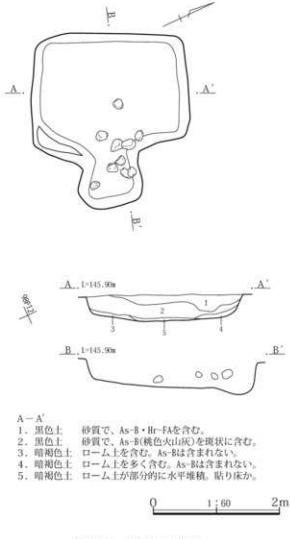
内部構造　床面は西壁側が高く、東壁側に向い徐々に傾斜して出入口部に続く。主体部・南東コーナーにテラス状の平坦面がある。主体部は確認面では東壁が食い違い歪んでいるが、床面では解消されている。

埋没土　白色パミスを含む砂質土で埋没する。１・２層とも同質で、比較的短期に埋没したものであろう。竪穴底面中央にはロームブロックを含む暗褐色土(５層)が薄く堆積しているが、浅く窪んだ中央部分を埋めた貼り床の一種と考えておきたい。

出土遺物　出入口部には人頭大程度の礫が流れ込んだ状態で出土した。

重　複　５号竪穴状遺構を切る。

所　見　埋没土は浅間Ｂ軽石起源の砂質土で、人為的に埋没していた。現場図面には出入口部が主体部本体の床面より低く掘り込まれたよう図化され、低い土屋の構造を考えるならば機能的であるというべきであるが、掘り窪んだ出入口底面の直上にはローム土と黒色土が互層堆積していること(PL.13)、重複する５号竪穴状遺構の床面とは50cmの高低差があることから、先のローム土と黒色土の互層は貼り床ということになり、使用過程で貼り床が沈んだものと理解しておきたい。



第120図　１号竪穴状遺構

＜２号竪穴状遺構＞（第121図、PL.13）

位　置　98区Ｐ・Ｑ12

主軸方位　Ｎ－65°－Ｅ

規　模　主体部(長軸2.70m・短軸2.48m)、出入口部(長軸0.65m・短軸1.15m)

形　状　主体部は方形状を呈し、やや歪んでいる。東壁・南東側コーナー付近に出入口部が付く。全体に形状が歪んでおり、主体部と出入口部の境界は不明瞭である。

内部構造　床面は、概ね平坦である。

埋没土　１～３層は浅間Ｂ軽石を含み、やや砂質である。調査所見では４層が浅間Ｂ軽石層とされている。床面に近い５・６層は粘性を帯びた暗褐色土で、６層は壁際に堆積した三角埋没土である。

出土遺物　なし。

重　複　なし

所　見　所見では４層が浅間Ｂ軽石とされているが、通常最上層にある桃色火山灰はブロック状に堆積するのみであり、堆積状態は全体的に乱れ、純層とされているが、二次堆積したものと理解しておきたい。本遺跡では竪穴状遺構に礫の多出傾向が指摘されるものの埋没土中に礫片が数点出土しただけである。本竪穴状遺構の南側に近接して人頭大の礫は集石されたように出土しており、用途については不明だが本竪穴状遺構に伴う礫としてその存在に注目しておきたい。

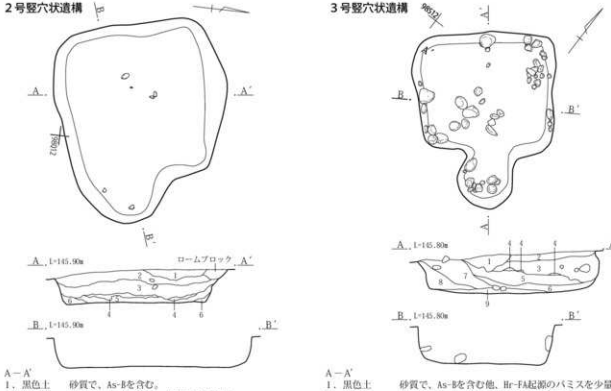
＜３号竪穴状遺構＞（第121図、PL.13）

位　置　98区Ｒ12・13

主軸方位　Ｎ－35°－Ｗ

規　模　主体部(長軸2.20m・短軸1.80m)、出入口部(長軸0.93m・短軸0.85m)

形　状　主体部は方形状を呈し、奥壁に近い両側の壁が弱く膨らんでいる。出入口部は南壁中央に付く。出入口部は東側が直線的だが、西側は弧状に膨らみ、歪んでいる。断面図に示されたように、奥壁はオーバーハングして立ち上がる。



第121図　２・３号竪穴状遺構

内部構造　出入口部と主体部の床面はフラットである。主体部中央から奥壁に向い、弱く傾斜する。

埋没土　埋没土中位に浅間Ｂ軽石の薄層がある。１～３層は浅間Ｂ軽石を含む砂質土であり、４層は浅間Ｂ軽石がブロック状に堆積したものである。５・７層も砂質土とされている。本竪穴状遺構は出入口部から土砂が流入したのち、主体部が短期に埋没したもので、堆積状態は人為的な埋没状態を示していた。

出土遺物　出入口部・東西の壁際に人頭大の礫が流れ込んで出土したほか、主体部中央付近では床面直上に礫が出土した。その他の遺物類の出土はない。

重　複　なし。

所　見　４号竪穴状遺構に近接する。直接の新旧関係は確認できないこと、主体部の形状の形式差があることから、両者の同時存在は否定的にならざるを得ないが、両者は避けて構築されているように見える。

＜４号竪穴状遺構＞（第122図、PL.13）

位　置　98区Ｓ12

主軸方位　Ｎ－10°－Ｗ

規　模　主体部（長軸・短軸）、南側出入口部（長軸0.70m・短　軸0.83m　）、南東側出入口部（長軸0.75m・短軸0.66m）

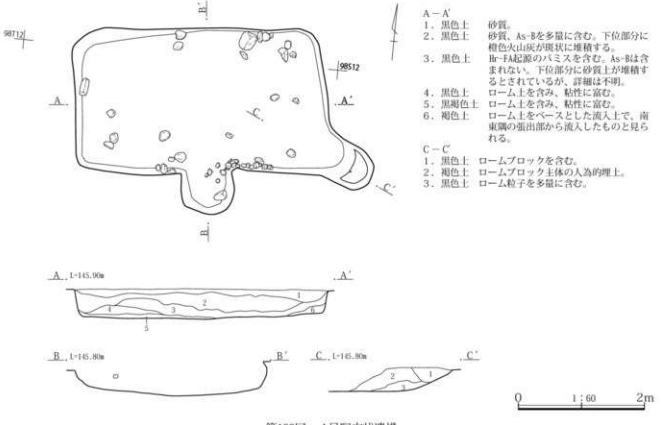
形　状　主体部は長方形状を呈する。主体部の南壁中央に出入口部が付く。

内部構造　南側出入口部は主体部の床面より浅く、弱く傾斜する。これに対して、南東側出入口部は主体部の床面と同レベルにあり、フラットである。南東側出入口部の端部は土坑状の遺構重複したことが断面図に示されている。

埋没土　１・２層とも浅間Ｂ軽石を含んだ砂質土で、２層下部に浅間Ｂ軽石が薄く堆積する。３層は白色パミスを含む黒色土で、その下面にあるとされた砂質土の由来については明らかにすることができない。６層は南東部コーナーの出入口部（Ｃ－Ｃ´）から続く人為的な埋め土であり、上面がフラットに整形されているようであるが、平坦面は部分的で、これが竪穴の付属施設とされるようなものになるか、現状では判断できない。

出土遺物　竪穴内部には河床礫多数が出入口部や壁際に出土しているが、床面から大きく浮いて廃棄状態で出土しただけである。

重　複　なし。



第122図　４号竪穴状遺構

所　見　３・４号竪穴状遺構が近接、それぞれが重複を避けるように構築されたように見える。本竪穴状遺構の南東コーナー出入口部を人為的に埋め戻し使用したとしても、上屋構造を考えた場合、両者は近接し過ぎており、同時性については想定し難い。

＜５号竪穴状遺構＞（第123図、PL.14）

位　置　98区Ｏ・Ｐ12

主軸方位　Ｎ－18°－Ｗ

規　模　主体部(長軸2.50m・短軸1.76m)、出入口部(長軸1.50m・短軸0.95m)

形　状　主体部は略方形状を呈する。主体部の南壁中央に長い出入口部が付く。

内部構造　床面が数枚ある。最終的な使用面として見た床面は、奥壁側に弱く傾斜している。主体部と出入口部の接合部付近が沈んでいるが、これは下層「掘り方」に影響されたものだろう。

埋没土　１～５層はロームブロックを多量に含む人為的な埋め土。６・７・９層の上下には、黒色土の薄層があり、複数の床面がある。

出土遺物　なし

重　複　１号竪穴状遺構と重複する。

所　見　出入口部は人為的に埋め戻されたのちに、掘り直され使用されたものと見られ、床面複数枚が確認されている。その間の時間的間断については不明だが、竪穴状遺構が繰り返し使用されたことは確実である。

＜６号竪穴状遺構＞（第124図、PL.14）

位　置　98区Ｔ９

主軸方位　Ｎ－85°－Ｅ

規　模　主体部(長軸3.62m・短軸1.80m)、出入口部(長軸1.70m・短軸1.20m)

形　状　主体部は概ね長方形状を呈しているが、出入口部側の南壁が食い違い変形している。この食い違い構造は図で見る限り床面でも解消されていないが、写真では明らかに解消されており、遺構間重複か、竪穴状遺構に伴うテラスということになる。これが切り合い関係にあるのか判断できない。

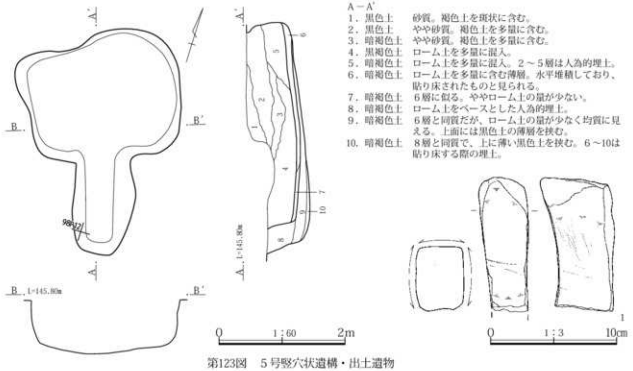
内部構造　床面は出入口部側が深く、奥壁に向い弱く傾斜している。床面は貼り床されているわけでなく、掘り窪めたローム層を均してそのまま床面としている。

埋没土　１～５層が浅間Ｂ軽石を含む砂質土、６層より下位がロームブロックを含んだ黒色土で、いずれも人為的な埋め土である。

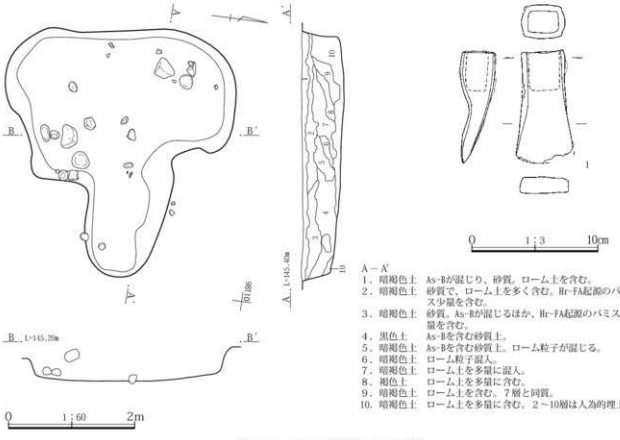
出土遺物　鉄斧(第124図)が１点のみ出土した。

重　複　なし。

所　見　出入口部・右のテラスには、撮影段階では礫が取り払われてないが、図には礫が図化されており、竪穴状遺構に伴うテラスとすることができるかもしれない。



第123図　５号竪穴状遺構・出土遺物



第124図　６号竪穴状遺構・出土遺物

３．火葬跡

＜１号火葬跡＞（第125図、PL.14）

位　置　98区Ｎ９

長軸方位　Ｎ－５°－Ｗ

規　模　主体部：長軸1.45m・短軸0.60m、突出部：長軸0.62m・短軸0.15m

形　状　主体部は長方形状を呈し、西壁中央に突出部が付く。東側の壁、西壁から突出部にかけての壁面が良く焼けている。

内部構造　主体部長軸に直交して、通風機能を高めたとされる浅い溝が取り付く。土坑底面はフラットである。

埋没土　３層に多量の炭化物が含まれ、突出部まで続く。所見では、骨片は２層・３層から出土したとされている。

出土遺物　なし。

重　複　長方形土坑が重複する。

所　見　図化されていないが、PL.14にあるように壁面の焼土が続いており、長方形土坑を切り本火葬跡が残されたものと見られる。掲載図は東壁中央より南に浅い土坑が重複しているように見えるが、東壁が崩落したか、長方形土坑の覆土を誤認して掘り進んだものか、いずれかであろう。

＜２号火葬跡＞（第125図、PL.15）

位　置　98区Ｓ・Ｔ８

長軸方位　Ｎ－10°－Ｅ

規　模　主体部：長軸1.25m・短軸0.55m、突出部：長軸0.78m・短軸0.12m

形　状　主体部は長方形状を呈し、東壁中央に突出部が付く。東壁から突出部にかけて壁面の赤化が著しい。西壁上端が浅く窪んでいるが、範囲が広く、崩落したとするのは難しい。

内部構造　主体部長軸に直交して、通風機能を高めたとされる浅い溝が取り付く。主体部両端に大型礫（長さ30cmほど）が配置されている。

埋没土　１～４層はロームブロックや焼土ブロックを含み、人為的な埋め土に見える。最下層の５層に炭化物が多く含まれていた。骨片の出土位置については所見に記載されていない。

出土遺物　なし。

重　複　なし。

所　見　大型礫は対に置かれ、焼成効果を高めたとされるが、火葬跡４基中１基のみに礫が置かれているだけで、特に焼成効果を裏付けるデータは得られていない。

＜３号火葬跡＞（第125図、PL.15）

位　置　98区Ｔ８

主軸方位　Ｎ－７°－Ｅ

規　模　主体部：長軸1.52m・短軸0.70m、突出部：長軸1.15m・短軸0.20m

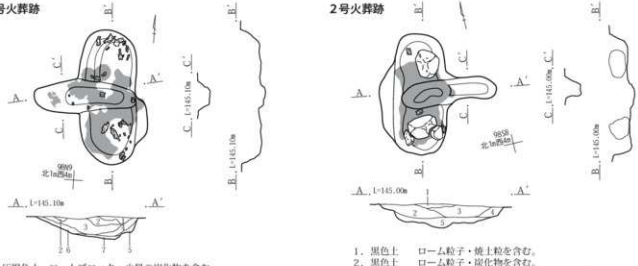
形　状　主体部は長方形状を呈し、東壁中央に突出部が付く。東壁から突出部にかけて、壁面が弱く赤化する。

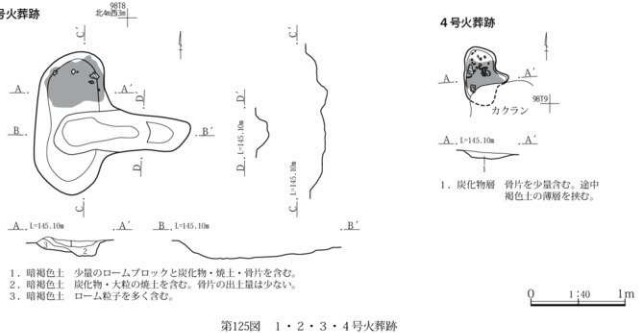
内部構造　主体部長軸に直交して、通風機能を高めたとされる浅い溝が取り付く。溝は奥壁に向け弱く傾斜する。

埋没土　１・２層は炭化物・焼土を含む暗褐色土である。骨片は１層から多く出土したとされ、３層は人為的な埋め土である。

出土遺物　なし。

重　複　なし。





1．暗褐色土　少量のロームブロックと炭化物・焼土・骨片を含む。
2．暗褐色土　炭化物・大粒の焼土を含む。骨片の出土量は少ない。
3．暗褐色土　ローム粒子を多く含む。

第125図　１・２・３・４号火葬跡

＜４号火葬跡＞（第125図、PL.15）

位　置　98区Ｔ９

主軸方位　Ｎ－２°－Ｅ

規　模　主体部：長軸(0.50m)・短軸0.30m、突出部：長軸－・短軸－

形　状　全貌は不明だが、長方形状を呈する主体部の東壁に突出部が取り付くタイプのものと見られる。

内部構造　他の火葬跡と同様、溝が取り付いていたはずだが、溝は確認されていない。

埋没土　上面に薄く褐色土が堆積、その下位に炭化物を含む黒色土が堆積した。

出土遺物　なし。

重　複　図化されていないが、写真で見る限り長方形土坑と重複しているように見える。

４．井戸

１号井戸（第126図、PL.15）

位　置　98区Ｑ５

規　模　長軸2.30m・短軸2.05m・深さ1.05m

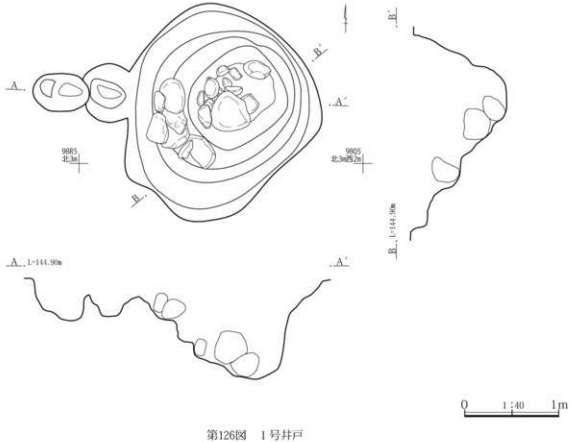
形　状　確認面の形状は略円形状を呈する。途中テラス状の平坦面を有し、大型礫を積み上げている。調査所見で井戸とされているが、井戸特有の「アグリ」はないようである。井戸底面は確認面より１mほどで、泥流堆積物を掘り込んでいる。

埋没土　ロームブロックを多量に含んだ黒色土で人為的に埋没していた。

出土遺物　なし。

重　複　なし。

所　見　井戸にはテラスがあり、大形礫が積まれていた。下層から出土した礫は、テラスから崩落したものとすることができる。果して遺構が井戸であるのか、礫を積み上げているとすれば、井戸以外適当な遺構はないだろう。中近世の遺構として報告してあるが、判然としないのが現状である。



第126図　１号井戸

５．溝

２号溝（第127図、PL.16）

位　置　99区Ｂ11～14

重　複　１号溝と重複する。新旧関係については不明だが本溝が浅間Ｂ軽石に由来する砂質土で埋没していることから、浅間Ｃ軽石を含む黒色土で埋没した１号溝より後出するものと考えた。

形　状　走行は概ね直線的で、南北方向を指しているが、１号溝付近で微妙に走行が変わり、それより北では５°東（Ｎ－５°－Ｅ）に、南では３°東（Ｎ－３°－Ｅ）に走行が振れる。溝の断面形状は浅く皿状を呈する。溝の底面は、溝北端と溝南端では比高差22cm（勾配率1.47％）を測る。溝の確認面における勾配率（2.94％）を考えると、溝の勾配は概ね平坦である。

規　模　調査長15.0m　最大幅0.55m

最小幅0.27m　深さ0.18～0.30m（確認面より）

埋没土　１・２層は砂質の灰褐色土が、溝底部は粘性を帯びた暗褐色土が堆積した。

出土遺物　なし

所　見　堆積状態に流水の痕跡はなく、また、台地平坦部に位置することから、通水というより区画溝として機能した可能性が高い。

４号溝（第127図、PL.16）

位　置　98区Ｒ・Ｓ４～６

重　複　縄文時代住居（９号）に重複する。

形　状　走行は概ね直線的で、Ｓ－６付近では南北方向を指しているが、北側は20°西（Ｎ－20°－Ｗ）に、南側は12°東（Ｎ－12°－Ｅ）に走行が振れる。溝の断面形状は浅く皿状を呈する。溝の底面は、溝北端と南端では比高差40cm（勾配率3.28％）を測る。

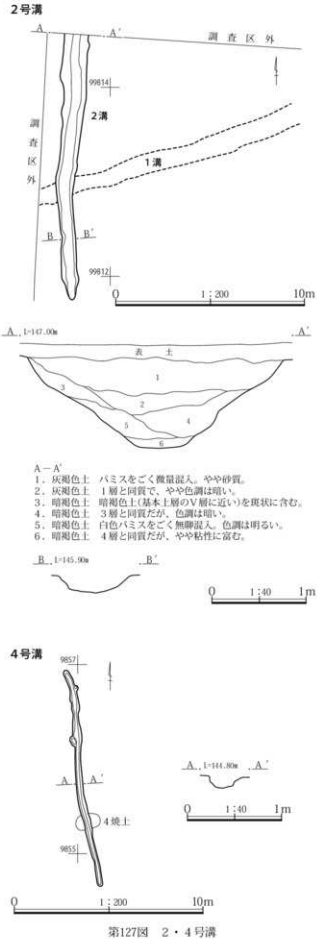
規　模　調査長12.1m　最大幅0.50m

最小幅0.25m　深さ0.08～0.20m（確認面より）

埋没土　ローム粒子を含む暗褐色土で埋まる。

出土遺物　なし

所　見　流水痕はないようであるが、溝の性格は明らかでない。



第127図　２・４号溝

６．土坑

当該期土坑は、計12基(Ａ２区６基、Ｂ区５基、Ｃ区１基)を数えた。土坑に伴う土器類がないため、厳密な意味で、土坑の帰属時期を特定することはできないが、調査時に区別されていた縄文期以外の土坑として、浅間Ｂ軽石を含む砂質土で埋没したものや、浅間火山や榛名火山起源の白色パミス(As-C・Hr-HA)を含んだ黒色土で埋没したものがある。土坑の構築が多時期に及んだことは明らかであるが、白色パミスを含む黒色土で埋もれた平安期の溝２条に平安期土器が出土しており、土坑構築時期の推定材料になるだろう。Ａ・Ｃ区の土坑については出土遺物がなく、その帰属時期の決定は難しいのが実態だが、ここではＢ区において示されていた調査時の所見(判断基準)に習い、縄文期以外の土坑を認定した。埋没土中に含まれているテフラから、平安期土坑と中・近世の土坑を区別することも可能だが、最終的には出土遺物から時期判定すべきであり、敢えて分別せず本項に纏めて記載した(第128・129図、PL.16)。まず、調査時に縄文期土坑を区分していたＢ区土坑から概要を記しておこう。

Ｂ区においては、土坑５基を当該期の土坑として認定した。Ｂ区土坑５基には、白色パミス(浅間・榛名火山起源のパミスが混在)を含む黒色土で埋没したもの(27・34号土坑)や、浅間Ｂ軽石が撹拌した砂質土で埋没していたもの(10・19・26号土坑)がある。土坑は円形を基調としており、深く掘り込んでいるもの(深さ0.75～0.90ｍ)が多い。埋没土中に大型礫を含んでいることや黒色土と褐色土が互層堆積することから、人為的埋土であることは明らかである。やや浅く掘り込んだ27号土坑は断面が椀状を呈しており、縄文期土坑と同型だが白色パミス混じりの黒色土で埋まり、縄文期土坑とは明らかに分別することができる。Ｂ区西端にある19号土坑を除く土坑４基が、Ｂ区中央より南東側に分布する。

Ａ区には土坑６基があり、やや東に台地が張り出した台地縁辺に分布した。土坑は浅く、その断面形状は盤状を呈するもの(２・４・６号土坑)や、これよりやや深い３号土坑、小形円形で深い１号土坑などがある。土坑は円形を基調としているが、５号土坑のみ小形で、楕円形状を呈していた。いずれも褐色土(ローム土)を斑状に含んだ黒褐色土で埋没しており、これと平安期遺構を埋める白色パミスの混じる黒色土や、中・近世土坑を埋める砂質黒色土とは明らかに異なるだろう、と理解している。１号土坑の土層註にある「砂質である」という表現も、写真を見る限り、浅間Ｂ軽石を撹拌した黒色土とは異なるようであり、遺物から帰属時期が決定されたわけではないので、土坑の帰属時期については確証はないというべきであろう。Ａ区土坑は台地頂部にあり、土坑の上半部が大きく削平されており、土坑の埋没状態を詳細に検討することはできないため、その帰属時期については時期不明とするのが妥当かもしれない。

Ｃ区においては、26号土坑１基を認定した。土坑はＣ区・南東隅にあり、明らかに基本土層Ⅳ層(白色パミス混じり)を掘り込んでいた。土坑最上層には浅間Ｂ軽石を含んだ黒色土が堆積しており、埋没土中に大型礫10点が廃棄されたように出土した。

７．ピット

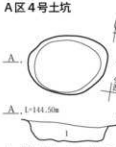
ピット類は、Ａ区で10本が確認されている。その分布は規則性に欠け、掘立建物跡を構成するようなピットの在り方は想定できない(第129図、PL.17参照)。ピットとされたものは長軸47.3cm・短軸38.6cm・深さ19.6cmが平均であり、柱穴とするにはやや浅いピットが多い。土層観察から、柱痕を示唆するものはピット８を除いてなく、また、土坑同様の砂質土壌で埋もれたピットは極めて少なく、その帰属時期は明確ではない。

第13表　中近世土坑・ピット計測値一覧表

	長 cm	短 cm	深さ cm
Ａ区１号土坑	63	52	57
Ａ区２号土坑	135	94	35
Ａ区３号土坑	120	105	63
Ａ区４号土坑	85	63	20
Ａ区５号土坑	60	37	23
Ａ区６号土坑	90	84	17
Ｂ区10号土坑	117	103	90
Ｂ区19号土坑	200	148	90
Ｂ区26号土坑	120	110	78
Ｂ区27号土坑	97	95	30
Ｂ区34号土坑	80	78	75
Ｃ区26号土坑	(230)	170	37

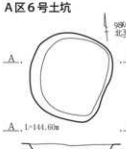
	長 cm	短 cm	深さ cm
Ａ区１号ピット	44	40	45
Ａ区２号ピット	57	53	18
Ａ区４号ピット	40	35	18
Ａ区５号ピット	35	28	22
Ａ区８号ピット	42	38	27
Ａ区９号ピット	43	38	10
Ａ区10号ピット	40	38	10
Ａ区11号ピット	62	57	16
Ａ区12号ピット	65	60	15
Ａ区13号ピット	45	37	15

A区４号土坑



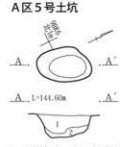
1．暗褐色土　ローム主体の褐色土を多量に含む。人為的埋土。

A区６号土坑



1．黒褐色土　ローム主体の褐色土を多量に含む。人為的埋土。

A区５号土坑

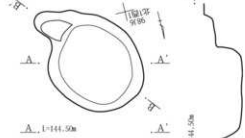


1．黒褐色土　ローム主体の褐色土を少量含む。壁際にローム主体の崩落土。
2．暗褐色土　ロームブロックを含む。

A区１号土坑

1．暗褐色土　砂質で、ロームブロックを含む。
2．黒褐色土　褐色土を斑状に含む。
3．黒褐色土　砂質で均質。ロームブロックの混入は少ない。

A区２号土坑

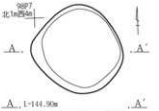


1．暗褐色土　ロームブロックを含む。
2．暗褐色土　１層と同質だが、ロームブロックを多く含む。
3．黒褐色土　ロームブロックを多く含む。粘性に富む。

A区３号土坑

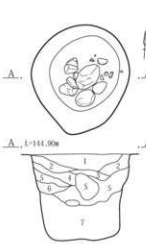
1．黒褐色土　ロームブロックを含む。
2．暗褐色土　ロームブロックを多量混入。
3．黒褐色土　ロームブロックを斑状に含む。
4．褐色土　砂質ローム主体の崩落土。

B区27号土坑



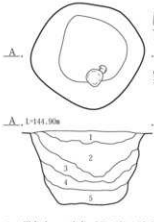
1．黒色土　白色パミスを含む。
2．褐色土　黒色土の薄層を挟み、縞状堆積する。人為的埋土。
3．黒色土　褐色土が薄い縞状に堆積する。
4．黒色土　ロームブロックを含む。

B区10号土坑



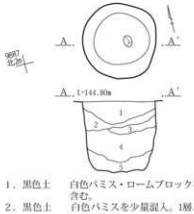
1．黒色土　砂質で、As-Bを含む。
2．黒色土　砂質で、ロームブロックを含む。１層より明るい。
3．黒色土　As-Bを多量に含む。
4．褐色土と黒色土の混土層
5．黒色土　ロームブロックを多量に含む。
6．黒色土　４層と同質だが、褐色土が縞状に堆積する。
7．黒色土　As-B主体の黒色砂質土で、ロームブロックを含む。

B区26号土坑



1．黒色土　白色パミス(As-CかFAに起源)を含む。
2．黒色土　砂質で軟質。パミス等の混入は見られない。
3．黒褐色土　ローム土が縞状に互層堆積している。
4．黒色土　砂質で、ロームブロックを多量に含む。３層と同質だが互層堆積は見られない。
5．黒色土　ロームブロックを含む。４層と同質。

B区34号土坑

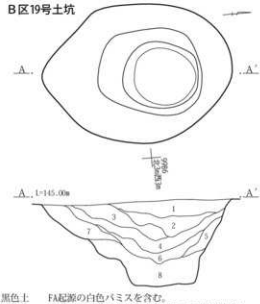


1．黒色土　白色パミス・ロームブロックを含む。
2．黒色土　白色パミスを少量混入。1層よりやや暗い。
3．黒色土　ロームブロックを多く含む。
4．黒色土　ロームブロックを含む。
5．暗褐色土　比較的均質で、粘性に富む。

0　1:40　1m

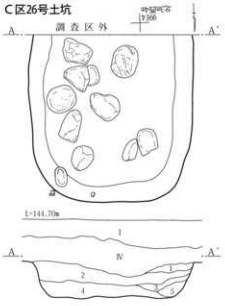
第128図　中近世の土坑（１）

B区19号土坑



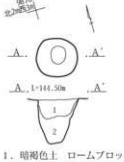
1．黒色土　FA起源の白色パミスを含む。
2．黒色土　由来不明の砂層が黒色土を挟んで互層堆積する。
3．黒色土　下位部分に褐色砂が厚く堆積する。
4．黒色土　砂質で、やや赤味を帯びる。途中、黒色土の薄層を挟む。
5．暗褐色土　ローム土を多量に含む。崩落したように見えているが、黒色土の薄層を挟む混入土だろう。
6．黒色土　ロームブロックを含む。
7．黒色土　白色パミス(FA起源)・ローム粒子を混入。
8．黒色土　ロームブロックを含む。しまりは弱い。

C区26号土坑



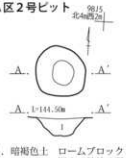
1．黒色土　白色パミス(As-Cか FA起源)を含む。
2．黒色土　砂質で軟質。パミス等の混入は見られない。
3．黒色土　ローム土が縞状に互層堆積している。
4．黒色土　砂質で、ロームブロックを多量に含む。3層と同質だが互層堆積は見られない。
5．黒色土　ロームブロックを含む。4層と同質。

A区１号ピット



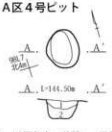
1．暗褐色土　ロームブロック混入。
2．暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。

A区２号ピット



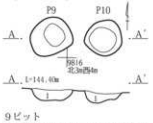
1．暗褐色土　ロームブロック混入。粘性は弱い。

A区４号ピット



1．暗褐色土　砂質で、黒色土が混じる。
2．褐色土　砂質で、粘性に乏しい。1層より明るい。

A区９・10号ピット



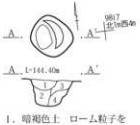
9ピット
1．暗褐色土　ロームブロックを含む。

10ピット
1．暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。

A区５号ピット

1．暗褐色土　ローム粒子を含む。
2．黒褐色土　ロームブロックを混入する。

A区８号ピット

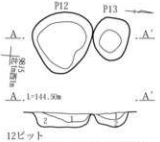


1．暗褐色土　ローム粒子を含む。
2．暗褐色土　ローム粒子を含む。1層よりやや暗い。
3．褐色土　ローム土による埋土。
4．暗褐色土　ロームブロックを含む粘質土。

A区11号ピット

1．暗褐色土　ローム粒子を含む。
2．暗褐色土　軟質の暗色土が主体で、黒色土が混じる。
3．褐色土　ロームブロックを含む。

A区12・13号ピット



12ピット
1．暗褐色土　ローム粒子・礫を含む。
2．褐色土　ロームブロックを多量に含む。

13ピット
1．暗褐色土　ローム粒子・礫を含む。
2．暗褐色土　ロームブロックを含む。1層よりやや明るい。

0　1:40　1m

第129図　中近世の土坑(２)、ピット

８．遺構外出土の遺物

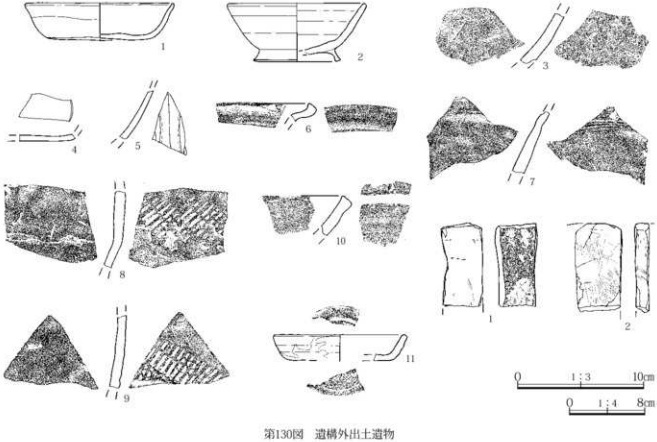
遺構外出土の遺物として、平安時代の須恵器１点(第130図１)、土師器１点(第130図２)、中世の陶磁器類(第130図３～10)、江戸時代の在地系土器(第130図11)、切り砥石２点(第130図１・２)を図示した。

平安時代の土器類は、いずれも８世紀後半から９世紀前半のものである。第130図１は縄文期住居の覆土から出土したものだが、２はＣ区から出土したもので、１棟のみ確認されている３号住居跡と同時期のものである。Ⅴ層から出土したとされているが、時期的にはⅤ層に落ち込んだⅣ層から出土した可能性が高い。Ｃ区には、同時期の遺構として３号溝がある。

中世関連では13～14世紀の中国製磁器２点(第130図４・７)があるほか、12～13世紀初期の美濃陶器が出土している。本遺跡の中世遺構には張出付の竪穴状遺構と火葬跡があり、その関連が注目されることになろう。

石器類として、切り砥石２点が出土した。２点ともＢ区で表土中から出土したものである。１は、側面に面取り整形痕を残している。２は、細粒・硬質の珪質頁岩製の仕上げ砥で、裏面側が節理面で剝れている。

本遺跡では、平安期から近現代の土器片類570点が出土している。遺構に伴う土器片類は少なく、大部分が遺構外出土の遺物として扱わざるを得ない状況にある。図示した以外には、平安期土師器404点(坏・腕類73点、甕類88点、不明243点)、須恵器98点(坏・腕類60点、甕類32点、不明６点)、近世遺物として35点(国産磁器11点、国産施釉陶器17点、国産焼締陶器４点・在地系焙烙・鍋3点)、近現代遺物として陶磁器類12点・土器類８点・瓦６点が出土している。これらについては小片であり、図化することができないため数量のみ報告することになるが、全体としてＢ区に多く、Ａ区・Ｃ区に少ないという状態は各時代を通じて変わらないようである。中世関連と捉えた竪穴状遺構や火葬跡があるＢ区には、中世遺物が集中するだろうことを期待してみたが、中世関連の遺物の出土量は８点中４点に止まる。むしろそれより近世遺物(36点中30点)が集中するようである。上記遺構の帰属時期についてはAs-B軽石の混じる黒色土で埋没してした点を重視して中世遺構としておいたが、その帰属時期を断定するのは難しいようである。



第130図　遺構外出土遺物

第４章　自然科学分析

本遺跡では、火山灰分析および火葬跡出土の人骨鑑定を実施した。

火山灰分析は、Ｂ区北東隅にある河道の形成時期、及び、同河道西に出土した石槍の年代的位置づけを明らかにすることを目的に分析を依頼した。旧河道の形成期については、旧河道上面から撚糸文土器が出土しており、それ以前に形成されたことは明らかであったが、それがどのようにして形成されたのかを提示することが遺跡を理解するうえで欠かせない、と考えた。すなわち、狩猟採集経済下にある旧石器・縄文期においては、人々を取り巻く環境なり、地域生産力が人口維持に大きく係わることが予想されており、環境要素としての地形発達を明らかにしたうえで遺跡を評価することが必要になるためである。火山灰分析を株式会社火山灰考古学研究所に依頼した理由は、こうした問題意識の基いており、その結果については第１節に掲載した。

人骨鑑定は、Ｂ区で確認した中世火葬跡４基から出土した人骨を対象としている。遺跡地周辺域は中世に至り再開発されたものと見られ、人骨鑑定から得られる性別・年齢等の形質的属性や、焼骨の残存状況から窺い知れる収骨法が明らかにされるころが期待され、分析を生物考古学研究所（楢崎修一郎氏）に依頼し、その結果については第２節に掲載した。

第１節　火山灰分析

Ⅰ．堤遺跡の土層とテフラ

１．はじめに

関東地方北西部に位置する前橋市とその周辺には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺に分布する火山のほか、中部地方や中国地方さらには九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフラ(火山砕屑物,いわゆる火山灰)が数多く降灰している。とくに後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的な特徴がテフラ・カタログなどに収録されており、遺跡などで調査分析を行いテフラを検出することで、地形や地層の形成年代さらには遺物や遺構の年代などに関する研究を実施できるようになっている。

堤遺跡の発掘調査区でも、層位や年代が不明なテフラや土層が認められたことから、地質調査を実施して土層やテフラの記載を行うとともに、採取した試料を対象にテフラ検出分析を行って、土層の層序や層位さらに年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、Ｂ区深掘地点(99B14杭脇)、B区調査区北壁西地点(98014杭脇)、Ｂ区調査区北壁中央地点、Ｂ区調査区北壁(北東隅より約1.5m西)、Ｂ区埋没谷断面の５地点である。

第131図　火山灰分析サンプル地点

２．土層の層序

（１）Ｂ区深掘地点(99B14杭脇)

Ｂ区深掘地点(99B14杭脇)では、下位より橙色の粗粒軽石を含むしまった黄色土(層厚15cm以上,軽石の最大径47mm)、亜円礫や黄色軽石を少し含む黄褐色土(層厚26cm,軽石の最大径８mm,礫の最大径16mm)、橙褐色細粒火山灰のブロックを含み黄色軽石に富む黄褐色土(層厚14cm,軽石の最大径７mm)、わずかに灰色がかった黄褐色土(層厚20cm)、若干色調が暗い灰色土(層厚11cm)が認められる(図132)。

これらのうち、最下位の土層に含まれる粗粒の軽石については、より上流域に堆積した赤城火山起源の大胡火砕流堆積物(新井,1962)などに二次的に由来する可能性が考えられる。また、下位より３層めの土層中にブロック状に含まれる橙褐色粗粒火山灰については、その層相から約1.3～1.4万年前＊1に浅間火山から噴出した浅間

板鼻黄色軽石(As-YP,新井,1962,町田・新井,1992など)の上部の成層した火山灰層の一部と考えられる。したがって、同層準にとくに多く含まれる黄色軽石についてもAs-YPに由来すると考えられる。また、その下位の土層中に含まれる黄色軽石については、層位や岩相などから浅間大窪沢第１軽石(As-Ok1,約1.7万年前＊1,中沢ほか,1984,早田,1996)および浅間大窪沢第２軽石(As-Ok2,約1.6万年前＊1,中沢ほか,1984,早田,1996)からなる大窪沢テフラ群(As-Ok Group)に由来すると思われる。

(２)Ｂ区査区北壁西地点(98014杭脇)

Ｂ区調査区北壁西地点(98014杭脇)では、下位より黄色細粒軽石混じり黄褐色土(層厚17cm,軽石の最大径３mm)、灰褐色土(層厚16cm)、暗灰褐色土(層厚14cm)、灰白色軽石に富む暗灰色土(層厚８cm,軽石の最大径５mm)、白色粗粒軽石混じりで灰白色軽石を多く含む黄灰色土(層厚４cm,軽石の最大径47mm)、火山砂や灰色軽石混じり灰色土(層厚７cm,軽石の最大径６mm)、灰色作土(層厚17cm)が認められる(図132)。

(３)Ｂ区調査区北壁中央地点

Ｂ区調査区北壁中央地点では、埋没谷を埋めた堆積物の最上部を構成する円礫層の上位に、下位より黄灰色粗粒火山灰混じり黒灰褐色土(層厚21cm)、灰褐色土(層厚25cm)、暗灰褐色土(層厚12cm)、灰色表土(層厚12cm以上)が認められる(図133)。これらのうち、黒灰褐色土からは発掘調査で撚糸文土器が検出されている。

(４)Ｂ区調査区北壁(北東隅より約1.5m西)

Ｂ区調査区北壁(北東隅より約1.5m西)では、下位より亜円礫混じり灰色砂層(層厚30cm以上,礫の最大径338mm)、黄色軽石や礫を少量含む固結した灰色砂質土(層厚40cm,軽石の最大径８mm,石質岩片の最大径８mm)、わずかに褐色がかって砂を多く含む固結した灰色土(層厚25cm)、鉄分を多く含む灰褐色土(層厚17cm)、わずかに褐色がかった灰色土(層厚17cm)、灰色土(層厚10cm)が認められる(図134)。これらのうち、鉄分を多く含む灰褐色土の基底部付近から撚糸文土器が検出されている。

(５)Ｂ区埋没谷断面

Ｂ区埋没谷断面では、下位より成層したテフラ層(層厚12cm以上)、黄灰色砂質土(層厚９cm)、黄色軽石層(層厚４cm,軽石の最大径６mm,石質岩片の最大径２mm)、褐色土(層厚５cm)、固結した灰色泥流堆積物(層厚62cm,礫の最大径88mm)、、砂混じり灰褐色土(層厚62cm)が認められる。本遺跡で検出された埋没谷は、これらの土層を切って形成されている。

これらのうち、成層したテフラ層は、下位より少なくとも黄灰色粗粒火山灰層(層厚６cm以上)と、とくに軽石に富む黄色軽石層(層厚６cm,軽石の最大径７mm,石質岩片の最大径２mm)からなる。このテフラ層は、層相から約1.9～2.4万年前＊1に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group,新井,1962,町田・新井,1992など)の一部と考えられる。また、その上位の軽石層については、層位や層相などから、浅間白糸軽石(As-Sr,約1.8～1.9万年前＊1,町田ほか,1984など)と思われる。

３．テフラ検出分析

(１)分析試料と分析方法

Ｂ区調査区北壁西地点(98014杭脇)、Ｂ区調査区北壁中央地点、Ｂ区調査区北壁(北東隅より約1.5m西)、の３地点いおいて採取されたテフラ試料のうち、７試料を対象にテフラ粒子の相対的な特徴を把握するテフラ検出分析を実施した。分析の手順は次の通りである。

１）試料５～７gを秤量。

２）超音波洗浄装置を用いながら、ていねいに泥分を除去。

３）80℃で恒温乾燥。

４）実体顕微鏡下で、テフラ粒子の量や色調などを観察。

(２)分析結果

テフラ検出分析の結果を表１に示す。Ｂ区調査区北壁西地点(98014杭脇)の試料３には、スポンジ状に良く発泡した灰白色軽石(最大径3.4mm)が少量、またその細粒物である灰白色軽石型ガラスが比較的多く含まれている。軽石の斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

Ｂ区調査区北壁中央地点およびＢ区調査区北壁(北東隅より約1.5m西)において、軽石やスコリアは検出されなかったものの、火山ガラスは少量ずつ認められた。火山ガラスは、灰色、白色、透明の軽石型や分厚い中間型

が多いが、Ｂ区調査区北壁中央地点の試料10や、Ｂ区調査区北壁(北東隅より約1.5m西)の試料６および試料２に灰白色の軽石型ガラスが含まれている。

５．考察

テフラ検出分析で検出されたテフラ粒子のうち、Ｂ区調査区北壁西地点(98014杭脇)の試料３に含まれる灰白色軽石やその細粒物である灰白色軽石型ガラスについては、その特徴から、３世紀後半に浅間火山から噴出したと推定されている浅間Ｃ軽石(As-C,荒牧,1968,新井,1979,坂口,2010)に由来すると考えられる。したがって、層相を合わせると、試料３付近にAs-Cの降灰層準があると思われる。また、そのすぐ上位に認められる粗粒の白色軽石については、層位や岩相などから、６世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA,新井,1979,坂口,1986,早田,1989,町田・新井,1992)あるいは６世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP,新井,1979,坂口,1986,早田,1989,町田・新井,1992)に由来すると考えられる。周辺での調査の結果からは前者の可能性がより高いように思われる。さらにその上位の土層中に多く含まれる砂については、層位などから、1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Ｂテフラ(As-B,荒牧,1968,新井,1979)に由来するのかも知れない。

また、Ｂ区調査区北壁中央地点の試料10や、Ｂ区調査区北壁(北東隅より約1.5m西)の試料６や試料２で、さほど量が多くないものの認められた灰白色の軽石型ガラスについては、岩相から約1.1万年前*1に浅間火山から噴出した浅間総社軽石(As-Sj,早田,1991,1996)に由来する可能性がある。そうすると、撚糸文土器包含層が最終的に形成されたのはAs-Sj降灰後の可能性が考えられる。ただし、今回行ったテフラ検出分析は高精度のテフラ同定のうちの初期段階の分析で同定精度はさほど高くないことから、今後火山ガラス比分析や火山ガラスの屈折率測定などを実施して、同定精度の向上が図られると良い。

６．まとめ

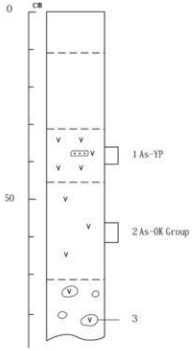
堤遺跡において、地質調査とテフラ検出分析を行った。その結果、下位より浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group,約1.9～2.4万年前＊１)、浅間白糸軽石(As-Sr,約1.8～1.9万年前＊１)、浅間大窪沢テフラ群(As-Ok Group,約1.6～1.7万年前＊1)、浅間板鼻黄色軽石(As-YP,約1.3～1.4万年前＊１)、浅間Ｃ軽石(As-C,３世紀後半)、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA,６世紀初頭)および榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP,６世紀中葉)、浅間Ｂテフラ(As-B,1108年)などの可能性が高いテフラ層やテフラ粒子を検出することができた。また、As-SrとAs-Ok Groupの間に泥流堆積物、As-Ok GroupとAs-Sjの間に埋没谷が存在する可能性が高いことも明らかになった。本遺跡で検出された撚糸文土器包含層の検出層位は、この埋没谷のすぐ上位にある。

*1　放射性炭素(14C)年代。As-YPの較正年代については,約1.5～1.65万年前と考えられている(町田・新井,2003).

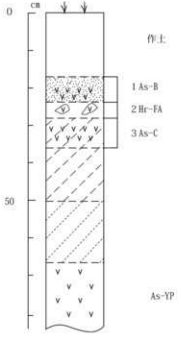
第14表　テフラ検出分析結果

地点名	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
Ｂ区調査区北壁西地点(98014杭脇)	3	*	灰白	3.4	**	pm	灰白
Ｂ区調査区北壁中央地点	2				*	pm,md	灰,白,透明
	6				*	pm	灰,白,透明
	10				*	pm	灰,白,透明,灰白
Ｂ区調査区北壁(北東隅より約1.5m西)	2				*	pm,md	灰白,灰
	6				*	pm,md	灰白,灰
	10				*	pm,md	白,灰

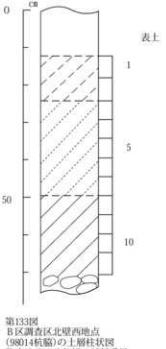
****：とくに多い，***：多い，**：中程度，*：少ない，(*)：とくに少ない．
最大径の単位は，mm．bw：バブル型，md：中間型，pm：軽石型．



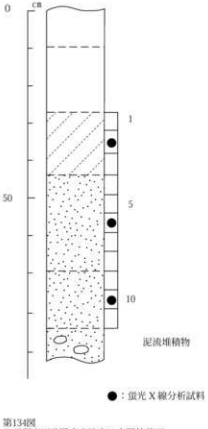
第132図
Ｂ区深掘り地点(99B14 杭脇)の上層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号



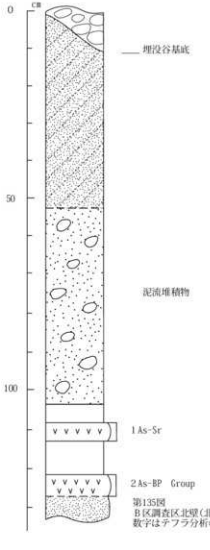
第132図
Ｂ区深掘り地点(99B14 杭脇)の上層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号



第133図
Ｂ区調査区北壁西地点
(98D14杭脇)の上層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号



第134図
Ｂ区調査区北壁中央地点の上層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号



第135図
Ｂ区調査区北壁(北東隅より1.5m西)の上層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

第136図
Ｂ区埋没谷の上層柱状図

Ⅱ．堤遺跡の蛍光X線分析

１．はじめに

縄文草創期の撚糸文土器における包含層の特徴を知るために、蛍光X線分析(エネルギー分散型蛍光X線)を用い、採取された土壌試料の化学組成を調べた。

２．分析試料

分析対象試料はＢ区調査区北壁(北東隅より約1.5m西)において基底部から撚糸文土器が検出された土層から採取された試料２と、比較のため同一地点の下位の土層から採取された試料６および試料10の３試料について加圧成型して分析試料とした。

３．分析方法

分析には、エネルギー分散型蛍光X線装置(EDXRF;Shimadzu EDX-800)を使用した。その測定条件は、X線管ターゲット:Rh,電圧電流値15kV-173-272μA(Na-Sc):50kV-23-27μA(Ti-U)、測定雰囲気:真空、照射径:10mm、測定時間:100s、"定性定量分析"で行った。定性定量分析は、定性分析によって検出された元素をトータル100%としてFP法(ファンダメンタル・パラメーター法;西埜,2005)で定量する半定量法(中村ほか,1999)である。なお、本分析による元素組成は酸化物として表示した。

４．結果および考察

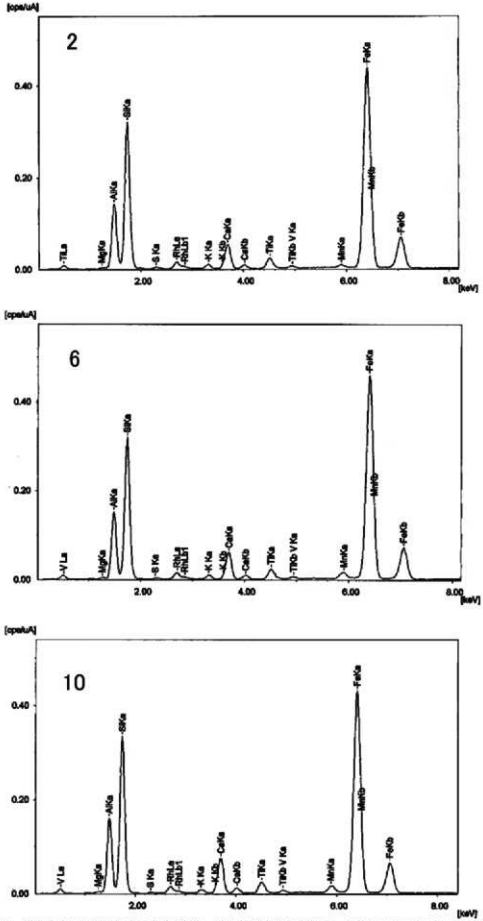
エネルギー分散型蛍光X線(EDXRF)による土壌の化学組成を表15および図137・138に示す。撚糸文土器を包含する土層から採取された試料２は、Si02>Al203>Fe203>CaO>Ti02>MgO>K20>S03>MnOを示した。一方、比較対照とした下部の土壌試料(試料６および試料10)は、ともにSi02>Al203>Fe203>CaO>MgO>Ti02>K20>MnOで(表15)、撚糸文土器包含層との違いはほとんどみられず、量比も誤差範囲で、EDXRFによる化学組成上の違いはほとんどないと考えられる。したがって、層相を考えると、おそらくこれらの試料の間には腐植含量や粒度組成などに違いがあるものと推定される。

文献
中村秀樹・金内孝宏・西埜　誠・桑原章二(1999)卓上型エネルギー分散型蛍光X線分析装置Asymo EDX-700/800　による分析．島津評論,56,181-189.
西埜　誠(2005)定量分析．中井　泉編「蛍光X線分析の実際」,朝倉書店,p.78-105.

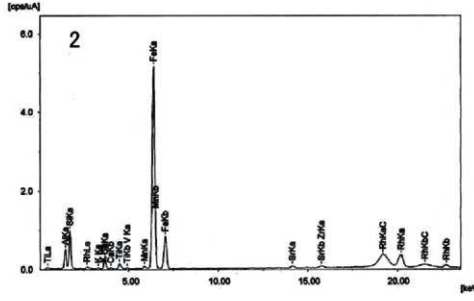
文献
新井房夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要自然科学編,10,p.1-79.
新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル,no.157,p.41-52.
荒牧重雄(1968)浅間火山の地質．地団研専報,no.45,65p.
町田　洋・新井房夫(1982)火山灰アトラス．東京大学出版会,276p.
町田　洋・新井房夫(2003)新編火山灰アトラス．東京大学出版会,336p.
町田　洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫(1984)テフラと日本考古学－考古学研究に関係する　テフラのカタログ．古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」,p.865-928.
中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦(1984)浅間火山,黒斑～前掛側のテフラ層序．日本第四紀学会講演要旨集,　no.14,p.69-70.
坂口　一(1986)榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器．群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井　神社古墳群・荒砥青柳遺跡」,p.103-119.
坂口　一(2010)高崎市・中居町一丁目遺跡周辺集落の動向－中居町一丁目遺跡82の水田耕作地と周辺集　落との関係－．群馬県埋蔵文化財調査事業団編「中居町一丁目遺跡３」,p.17-22.
早田　勉(1991)浅間火山の生い立ち．佐久考古通信,No.57,p.2-7.
早田　勉(1996)関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴－とくに御岳第１テフラより上位のテフラ　について－．名古屋大学加速器質量分析計業績報告書,7,p.256-267.

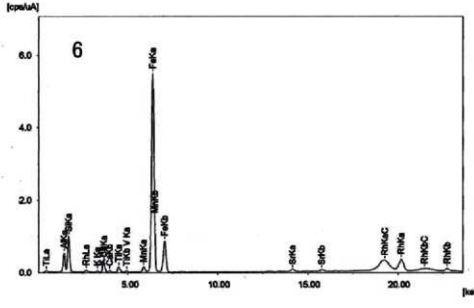
第15表　ＥＤＸＲＦ法(半定量)による撚糸文土器包含層相当の土壌資料（№２）と比較資料（№６,10）の化学組成

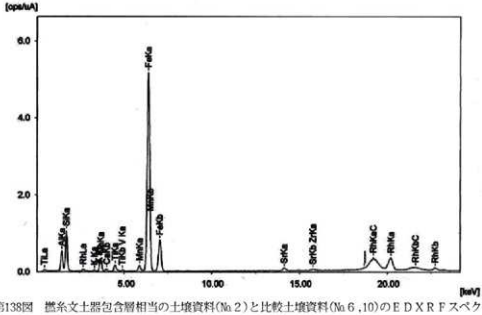
試料 No.	SiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	CaO	MgO	TiO_2	K_2O	MnO	SO_3	V_2O_5	SrO	ZrO_2
						%						
2	51.5	31.7	11.2	2.6	0.8	1.0	0.5	0.2	0.3	0.1	0.0	0.0
6	49.9	32.6	11.4	2.9	1.1	0.9	0.5	0.3	0.2	0.0	0.0	－
10	49.9	33.0	10.3	3.5	1.3	1.0	0.4	0.3	0.1	0.0	0.0	0.0



第137図　撚糸文土器包含層相当の土壌資料(№２)と比較土壌資料(№６，10)のＥＤＸＲＦスペクトル(Na～Sc)







第138図　撚糸文土器包含層相当の土壌資料(№２)と比較土壌資料(№６,10)のＥＤＸＲＦスペクトル(Ti ～U)

第２節　堤遺跡出土火葬人骨

はじめに

堤遺跡は、群馬県前橋市勝沢町に所在する。国道17号(上武道路)改築に伴い、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査が、平成20(2008)年4月～同年11月まで実施された。

本遺跡では、主に縄文時代住居・平安時代住居等が検出されている。本遺跡のB区の火葬跡4基から中世の火葬人骨が出土したので以下に報告する。しかしながら、火葬人骨の残存量は収骨(拾骨)により非常に少ない。

これら4基の火葬跡は、2号・3号・4号火葬跡は近接して検出されており墓域を形成しているが、1号火葬跡は比較的離れて検出されている。

群馬県出土中世火葬遺構48遺跡172基を分析した研究では、火葬跡は165基が認められている(楠崎　2007)。火葬跡は、土坑形態から5つのタイプに分類されており、本遺跡出土火葬跡4基は、すべてタイプⅡと呼ばれる主体部の長方形土坑の長辺に突出部があるものである。タイプⅡは、165基中55基(32.3%)に認められており、長軸方向は51基(92.7%)が南北である。また、主体部の規模は、長軸平均約119cm［75cm～205cm］・短軸平均68.1cm［20cm～195cm］・深さ平均25.8cmである。

１．１号火葬跡

(１)火葬人骨の出土状況

火葬人骨は、主体部(長軸約143cm・短軸約60cm・深さ約24cm)と突出部(長さ約45cm・幅約33cm)のタイプⅡ土坑から出土している。長軸方向は、ほぼ南北である。突出部は、西側に認められる。

写真２　堤遺跡Ｂ区１号火葬跡全景[南から撮影]

第139図　Ｂ区１号火葬跡平断面図[1/40]

(２)火葬人骨の出土部位

火葬人骨の残存量は非常に少なく、総重量44gである。出土部位は、少しずつ全身に及ぶが、頭蓋骨片は少なく四肢骨片が多い傾向がある。これは、丁寧に全部収骨した結果であると推定される。

(３)火葬方法

火葬人骨の色は白色を呈しているため、火葬の際の温度は約900℃以上であると推定される。また、火葬人骨には亀裂・捻れ・歪みが認められるため、白骨化したものを火葬にしたのではなく、死体をそのまま火葬にしたと推定される。

(４)被火葬者の頭位・焼成状態

被火葬者の頭位は不明である。群馬県出土中世火葬遺構で頭位が判明したものは、屈位で頭位を北にしたものが多いので本遺構も同じ可能性が高い。

(５)副葬品

副葬品は、検出されていない。

(６)被火葬者の個体数

火葬人骨の残存量が少ないため、被火葬者の個体数は不明であるが、恐らく1個体であると推定される。

(７)被火葬者の性別

火葬人骨の残存量が少ないが、四肢骨片は小さく華奢であるため、被火葬者の性別は女性であると推定される。

(８)被火葬者の死亡年齢

死亡年齢推定の指標となる部位が出土していないため、被火葬者の死亡年齢は不明である。恐らく、成人であると推定される。

(９)収骨(拾骨)方法

火葬人骨の残存量は少ないため、丁寧に全部収骨した東日本タイプの収骨方法であると推定される。

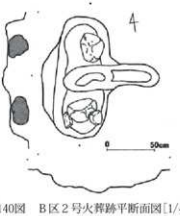
２．２号火葬跡

（１）火葬人骨の出土状況

火葬人骨は、主体部(長軸約128cm・短軸約55cm・深さ約20cm)と突出部(長さ約90cm・幅約33cm)のタイプⅡ土坑から出土している。長軸方向は、ほぼ南北である。突出部は、東側に認められる。

なお、本土坑主体部の北部に大礫1点が、同南部に大礫１点と小礫2点の合計4点が配置されている。これは、遺体を入れた棺の燃焼効率を高めるために配置したものと推定される。前出の火葬遺構の分析では、タイプⅡの55基中17基(30.9%)に礫が認められている(楠崎　2007)。

写真３　堤遺跡Ｂ区２号火葬跡全景[南から撮影]



第140図　Ｂ区２号火葬跡平断面図[1/40]

（２）火葬人骨の出土部位

火葬人骨の残存量は非常に少なく、総重量39gである。出土部位は、少しずつ全身に及ぶが、頭蓋骨片は少なく四肢骨片が多い傾向がある。これは、丁寧に全部収骨した結果であると推定される。

（３）火葬方法

火葬人骨の色は白色を呈しているため、火葬の際の温度は約900℃以上であると推定される。また、火葬人骨には亀裂・捻れ・歪みが認められるため、白骨化したものを火葬にしたのではなく、死体をそのまま火葬にしたと推定される。

（４）被火葬者の頭位・焼成状態

被火葬者の頭位は不明である。群馬県出土中世火葬遺構で頭位が判明したものは、屈位で頭位を北にしたものが多いので本遺構も同じである可能性が高い。

（５）副葬品

副葬品は、検出されていない。

（６）被火葬者の個体数

火葬人骨の残存量が少ないため、被火葬者の個体数は不明であるが、恐らく1個体であると推定される。

（７）被火葬者の性別

火葬人骨の残存量が少ないため、被火葬者の性別は不明である。しかしながら、四肢骨片は小さく華奢であるため、被火葬者の性別は女性であると推定される。

（８）被火葬者の死亡年齢

死亡年齢推定の指標の収骨方法となる部位が出土していないため、被火葬者の死亡年齢は不明である。恐らく、成人であると推定される。

（９）収骨(拾骨)方法

火葬人骨の残存量は少ないため、丁寧に全部収骨した東日本タイプであると推定される。

３．３号火葬跡

（１）火葬人骨の出土状況

火　葬人骨は、主体部(長軸約150cm・短軸約70cm・深さ約20cm)と突出部(長さ約90cm・幅約38cm)のタイプⅡ土坑から出土している。長軸方向は、ほぼ南北である。突出部は、東側に認められる。

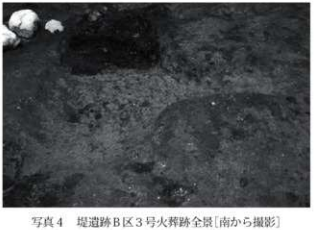
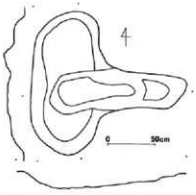


写真４　堤遺跡Ｂ区３号火葬跡全景[南から撮影]



第141図　Ｂ区３号火葬跡平断面図[1/40]

（２）火葬人骨の出土部位

火葬人骨の残存量は非常に少なく、総重量4gである。出土部位は、四肢骨片であり、頭蓋骨片は認められなかった。丁寧に全部収骨した結果であると推定される。

（３）火葬方法

火葬人骨の色は白色を呈しているため、火葬の際の温度は約900℃以上であると推定される。また、火葬人骨には亀裂・捻れ・歪みが認められるため、白骨化したものを火葬にしたのではなく、死体をそのまま火葬にしたと推定される。

（４）被火葬者の頭位・焼成状態

被火葬者の頭位は不明である。群馬県出土中世火葬遺構で頭位が判明したものは、屈位で頭位を北にしたものが多いので本遺構も同じである可能性が高い。

（５）副葬品

副葬品は、検出されていない。

（６）被火葬者の個体数

火葬人骨の残存量が少ないため、被火葬者の個体数は不明であるが、恐らく１個体であると推定される。

（７）被火葬者の性別

火葬人骨の残存量が少ないため、被火葬者の性別は不明である。しかしながら、四肢骨片は小さく華奢であるため、被火葬者の性別は女性であると推定される。

（８）被火葬者の死亡年齢

死亡年齢推定の指標の収骨方法となる部位が出土していないため、被火葬者の死亡年齢は不明である。恐らく、成人であると推定される。

（９）収骨（拾骨）方法

火葬人骨の残存量は少ないため、丁寧に全部収骨した東日本タイプであると推定される。

４．４号火葬跡

本土坑は、南部が攪乱を受けているため、全容は不明である。想定復元すると、火葬人骨は、主体部（長軸約60cm・短軸約33cm・深さ約8cm）と突出部（長さ約13cm・幅約10cm）のタイプⅡ土坑から出土している。長軸方向は、ほぼ南北である。突出部は、東側に認められる。なお、本土坑の規模は、前出の群馬県出土火葬跡タイプBの中で最小である。

写真５　堤遺跡Ｂ区４号火葬跡全景［南から撮影］

第142図　Ｂ区４号火葬跡平断面図[1/40]

火葬人骨の残存量は非常に少なく、総重量はわずかに1gである。出土部位は四肢骨片である。火葬人骨の色は白色を呈しているため、火葬の際の温度は約900℃以上であると推定される。残存量が少ないため、白骨化したものを火葬にしたか死体をそのまま火葬にしたかは不明である。また、頭位及び焼成状態も不明である。副葬品は検出されていない。残存量が少ないため、個体数・性別・死亡年齢も不明である。火葬人骨の残存量が少ない理由として、丁寧に全部収骨したためや攪乱を受けたためということが考えられる。

引用文献
橋崎修一郎 2007 群馬県出土中世火葬遺構.「(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要」, 25: 101-120

第５章　まとめ

第１節　草創期石器群について

１．石器群の同時性

草創期石器群として南北２群の分布域(Ｂ区)があり、石槍類を主体とする石器群と石鏃様石器を特徴的に含む石器群が出土した。前者は南側分布域、後者は北側分布域に主たる分布域がある。石槍を主体とする石器群は、縄文時代後期の住居跡や中世土坑群に切られ、その全貌については明らかにすることができないが、１号住居跡から出土した多量の剥片類には黒色頁岩製剥片類(307点、1193.6ｇ)や黒色安山岩製剥片類(71点、298.4ｇ)があり、さらには攪乱から出土した石槍類を加えたものがその全体像ということになろう。石鏃様石器を含む石器群は北側分布域１～３号ブロックと南側分布域１号ブロックにあり、チャートを用いた小形の石鏃様石器製作が特徴的で、これが指標的石器になるだろう。このほか、大形剥片素材の削器や、チャート製の加工痕ある剥片の出土量も多い。

南北両地点の石器群にはスタンプ形石器や石鏃、石斧類(PL.20)があり、Ⅵ層から出土したとされていたが、スタンプ形石器は撚糸文土器に伴う例が圧倒的で、石鏃や石斧についても形態的に混入遺物と見て、草創期石器群から除外した。剥片類についても混在したものがあるのは確実視していいが、これについては分離することができないため、台帳にカクランや表土層と記されたものを除外したのに止まる。石器組成を考える際の、不確定要素ということになる。

出土層位については、本文中で述べたとおり、石槍類がⅦ層、石鏃様石器がⅥ層を主体とすることは明らかである。これを素直に捉えるなら、両石器群には時間差があることになる。南北両地点間ともポイントフレイクがあり、この点で石器群の同時性について慎重であるべきであるが、ブロック単位では北群１～３号ブロックと南群４号ブロックは母岩レベルで共有個体があることや、Ⅵ層に出土量のピークがあり、これらについては石器群が同時存在した可能性が高い、と考えている。以上をまとめると、本遺跡出土の石器群は石槍類主体の石器群と石鏃様石器群の二群に大別することが可能であり、それぞれ時間差があるというのが妥当な解釈であろう。５号ブロック東の分布域ａは両者が接する地点であり、また、石槍類主体の５号ブロックにも石鏃様の石器が出土していることから、すくなからず両石器群は混在しているというべきである。南側分布域の５号ブロックが前者に、北側分布域の１～３号ブロック及び南側分布域４号ブロックが後者に対応するものとみていい。

２．石器組成

石槍類主体の石器群の組成は極めてシンプルで、ほぼその製作に特化した製作跡とすることができる。土坑が重複しているため残存状況は良好とはいえないが、５号ブロック西の分布域ｂには未製品類が出土している。明らかにその分布密度は薄く、石器製作空間に接した別の空間として性格づけられることになろう。石器群は黒色頁岩と黒色安山岩に強く結び付いているが、黒色頁岩製石鏃１点がある。これについては石槍類とは編年的に大きく隔たり、明らかな混入品である。

これに対して、石鏃様の石器群はチャートと深く関連していた。チャート製の石器には加工痕ある剥片としたものがあるだけで、これに黒色頁岩製の削器や黒色安山岩製の楔形石器が加わるという単純な器種組成を示していた。また、加工痕ある剥片には石鏃様石器に類するものがあり(第12図32)、剥片厚を減じるような両極剥離が特徴的で、石鏃・楔形石器・加工痕ある剥片などが連動して製作されていた。問題は、石鏃様石器に石槍や打製石斧が共存するかどうかであろう。それには黒色頁岩製の剥片類を評価することが必要となる。

本文中で述べたとおり、北側分布域には20ｇを超える大型剥片と、リップ状の打面を有するポイントフレイク様の剥片があり、その評価が問題となるのではないか、と考えている。常識的には、前者は通常の石核消費に基づく剥片生産と削器類製作が見込まれ、後者については大形であることを重視して石槍製作の初期剥片と考えるのが妥当で、体系の異なる石器製作が行われていたことになる。ポイントフレイク様の剥片が単なる調整剥片類

ということになれば、打製石斧等の存在も考える必要がある。このことについて、県内草創期石器群と比較検討することで、その可能性の程度が見えてこよう。

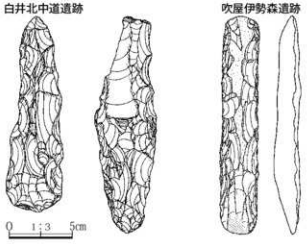
３．県内草創期石器群の様相

本遺跡から出土した石槍類は、前橋市北三木堂遺跡や渋川市房谷戸遺跡(第Ⅰ文化層)、石山遺跡(相沢1911)に類例がある。いずれもローム最上層に出土しており、As-YP降下後に帰属する石器群である。段階的には土器が伴出していい段階だが、北三木堂遺跡の無文土器を除けば、いずれも土器片類の伴出は報告されていない。萩谷(2008)は、県内草創期遺跡８遺跡を取り上げ、神子柴文化・隆起線文土器・爪形文土器・多縄文土器と続く各段階に組成した石器群を図示している。

これによると、神子柴文化と見た荒砥北三木堂遺跡の有茎尖頭器についてはその共伴性を不安視しているが、隆起線文土器段階以前の器種組成として、大型尖頭器類(以下、石槍類と呼ぶ)に打製石斧や掻器があるとした。隆起線文土器段階(白井北中道・徳丸仲田・小島田八日市遺跡)には石鏃が加わり、以後各段階の石器群は石斧・有茎尖頭器・石鏃が主たる狩猟具として組成するとしてその大枠を示した。土器編年を基軸に石器組成を見ると、隆起線文土器段階前半期に有茎尖頭器、後半期に石鏃が新規要素として加わるというのが基本的理解ということになる。

荒砥北三木堂遺跡の有茎尖頭器についてはブロック内に出土したものであるが、搬入石器であるがために接合資料や母岩レベルで、その共伴性を断言することはできないのが現状である。さらには、同時期の房谷戸遺跡や石山遺跡にも有茎尖頭器は確認されておらず、本遺跡においても有茎尖頭器は包含層の１点があるだけであり、少なくとも客体的な存在に止まる。以上を踏まえれば、その共伴性について再検討せざるを得ない状況にあるということだろうが、石槍と有茎尖頭器は形態的に類似性が高く、条件的にはいつ茎が付いてもいい状態はある。有茎尖頭器と無文土器の共伴性は同程度の確率であるというのが北三木堂の発掘成果ということだろう。

白井北中道遺跡の石斧(232集報告書の第130図183)は形状が粗く未製品気味だが細身であり、近接する吹屋伊勢森遺跡(事業団、第373集)のⅡ区包含層から出土した

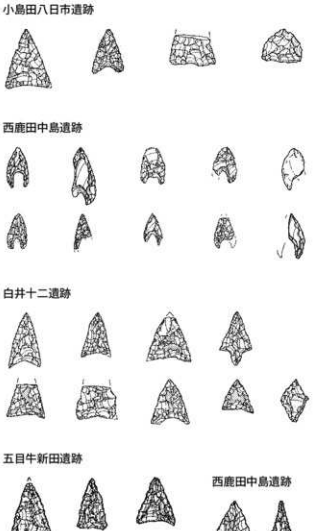


第143図　県内遺跡出土の草創期石斧

石斧が、そのモデルということになろう(第143図)。同遺跡で削器とされたものは細身で厚く、伊勢森遺跡の石斧を志向した未製品と捉えるべきである。逆に、184(232集掲載の番号、以下同様)は石斧とされているが、側縁加工が重視されており、剥片素材の削・掻器とすべきである。186も同様で、これに類したものになるかもしれない。白井北中道遺跡の石器群は西側段丘面から斜面部に流れ込んだことが確実で、他時期の石器が混じり込んでいる可能性が高い。石鏃には鍬形鏃と、浅く基部を抉る石鏃の２形態が図示されているが、形態の異なる両者が共伴する根拠は薄い。

小島田八日市遺跡の草創期石器群は、旧利根川左岸の完新世微高地の北側縁辺にある。石槍・有茎尖頭器・石鏃の３器種があるとされている。石鏃とされたものは７点あり、報告書には完成品２点・未製品５点が図示されている。草創期遺物が出土した地点には前・中期の土器片類も多く出土しており、分離が難しいだろうことを指摘しておきたい。

爪型文土器段階の下宿・西鹿田中島遺跡では石槍と石鏃があり、有茎尖頭器を欠いている。石鏃は、下宿が浅く基部を抉るタイプと基部の丸いタイプがあり、バリエーションがある。中島の石鏃は長脚鏃である。これに続く多縄文土器段階の神谷・五目牛新田・西鹿田中島遺跡では石槍が姿を消し、石鏃が優位を占めるようになる。中島の石鏃は最大幅が器体中央部にあり、有茎尖頭器を小形化したようで、形態的な親和性が強い。五目牛新田遺跡の石鏃は住居出土とされたものは大部分が未製品で、どのようなタイプの石鏃になるのか、その志向形



第144図　県内遺跡出土の草創期石鏃

態は明らかではない。包含層出土の有茎尖頭器は草創期段階のものであるが、石鏃にはやや浅く基部を抉り込んだものと深く抉り込んだものがあり、前期石鏃が混在している可能性が高い。上記３遺跡から出土した石鏃の志向形態は明らかでないが、同段階の白井十二遺跡では丈の短い三角鏃や丈の長い三角鏃が多量に出土した。同遺跡出土の石鏃は、表裏面に研磨痕が残る局部磨製石鏃であり、加工前に研磨されている。これまで、局部磨製石鏃は押型文土器に伴出するとされてきたが、これが多縄文系土器群の段階まで遡る事実が明らかにされた意義は大きい。このほか石鏃には、器体中央に最大幅を持つ有茎尖頭器が小形化したような西鹿田中島タイプと同形態の石鏃や、側縁をノッチ状に抉るタイプの石鏃がある。

石斧は神谷遺跡３例、五目牛新田遺跡２例がある。神谷の石斧は薄手で、刃部研磨が著しい。これに対して、五目牛新田の石斧は１例が薄手で、１例は厚く重量感がある。薄い石斧は再生品である可能性も否定できないが、小型で早期(撚糸文期)礫石斧につながるものかもしれない。厚く重量感のある石斧(報告書の第26図28)は上端側を刃部としてみると、刃部を縦位剥離する当該期石斧の特徴が見て取れる。

４．まとめ

本遺跡出土の草創期石器群は二群があり、下層石器群がAs-YPより上位のローム最上層に、上層石器群が漸移層中に出土した。下層石器群は荒砥北三木堂や房谷戸の上層石器群と同時期のもので、神子柴文化期に帰属する(萩谷2008)。一方、上層石器群は石鏃の未製品があるだけで、これに伴う土器類もなく、明確な時期判定は難しい。時期判定に際して、ただ一つ根拠になるのは上層石器群を含む石器包含層が土石流で壊され、その上層に撚糸文土器が出土していることだけである。本報告では石槍類に混じり石鏃様石器が出土、調査所見にはⅦ層とあり、慎重を期して便宜的に呼称した。最終的にはチャート製のものがⅥ層に多出しており、石鏃の未製品と結論、石槍類に伴いⅧ層から出土したとある黒色頁岩製のものは混入ということになろう。その最終的な形態が問題だが、草創期石鏃として安定的に存在する浅く基部を抉るタイプの石鏃が最終的な形態ということになるだろうが、未製品でもあり見通し程度に止めておきたい。草創期石鏃は遺跡単位では形態的に安定しているように見えるが、遺跡間で対応性に欠ける。他時期の石鏃の混入という問題も残る。この段階の石鏃は浅く基部を抉り込んだものを基調に推移したのであろうが、途中鍬形鏃が加わり、その変遷を考えるにはいま少し類例が増えるのを待つ必要がある。

第２節　柄鏡形敷石住居について
－周礫構造と住居の廃棄－

県内の柄鏡形敷石住居について、2000年の段階で133遺跡336例が確認されている（事業団、第260集）。集成以来12年が経過し、類例が増えているのは明らかであるが、時期別の分布状況や個別要素の傾向は当時と大きく変わらないようである。

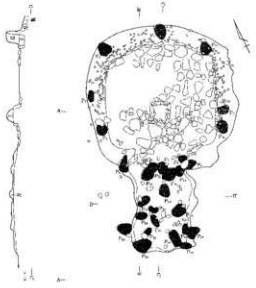
本遺跡では、縄文時代後期（称名寺Ⅱ式期）の柄鏡形敷石住居３棟が確認されているが、柱穴のみを確認しただけの住居もあり、その全貌を捉えることができたとは言い難い。ここでは、敷石住居の周礫検出状況など、本文中で詳述できていない点を補足説明して、まとめとしたい。

１．周礫について

本遺跡で確認した周礫を有する敷石住居は、2000年の段階で34例があるとされている。これを時期別に見ると、称名寺式期が20棟（58.8％）で、加曽利Ｅ４式期５棟・堀之内式期８棟を大きく引き離しており、称名寺式期に盛行したことが明らかである。周縁（周縁部還礫）の解釈には住居構造としてみる見解と、住居廃絶に係る祭祀的性格を読み取ろうとする見解があり、ここでは、整理作業を経て得た所見を述べ、上記見解について検討していきたい。

ａ．周礫を有する住居の基本形態

＜敷石のある住居＞　柄鏡形敷石住居には主体部全面に敷石を敷き詰める全面敷石と、炉の周辺部や張出部に限定して敷石する部分敷石とされるものがある。本遺跡の柄鏡形敷石住居がどちらになるか判断できないでいたが、本遺跡の東方約１㎞に位置する芳賀東部団地遺跡（前橋市教育委員会、1990）にＪ６号住居跡（第145図）類例があり、これを参考に考えてみたい。報文では主軸西側の敷石が抜き取られているとされ、構築当初はほぼ全面敷石されていたと想定されている（事業団、第260集）。構造上の特徴として①主体部中央付近に方形石囲炉を有すること、②壁柱穴は７～９本があること、③張出部に続く主体部南壁を除き周礫があること、④敷石と周礫の間に仕切り石状に礫を並べることなどがあり、このＪ６住居をモデルにして本遺跡の敷石住居を比較した結果、敷石の残存状況に差はあるもののおどろくほどよく類似していることが判明した。



第145図　周礫を有する全面敷石した住居
（周礫芳賀東部団地遺跡Ｊ６号住居跡）

芳賀東部Ｊ６号住居をモデルに、本遺跡の敷石住居を見ると、主体部に扁平礫を敷き、その外縁に仕切り石状に礫を並べ、その外側に周礫があるという構造的特徴が浮かび上がる。芳賀例と異なるのは壁柱穴の位置関係であり、本遺跡では扁平礫の短軸を上に向けて床に埋め込んだ仕切り石の変換点に壁柱穴が位置することである。このことを除けば、両遺跡の敷石構造は極めて類似していることが分かる。本遺跡と芳賀東部団地遺跡は地理的にも近く、また、上述した類似要素があることから、極めて近い関係で結び付いた集落と評価することができるだろう。

＜敷石のない住居＞　敷石されない住居の典型例には、荒砥二之堰遺跡がある（事業団、第36集）。後期称名寺式期の住居８棟があり、このうち４棟が床面密着タイプの周礫を、残る４棟が床面より浮いた周礫を有していた。床面密着型のものは周礫下部の床面を溝状に掘り込んでおり、周礫と浅い周溝が構造的であることが指摘されている（28・35号）。このほか、床面に密着した周礫が壁際まで続く住居（31号）がある。この住居の周礫は北壁側で仕切り石状に河床礫を並べ、裏側に小礫を充填する様子が図化されており（第36集、第106図）、本遺跡の周礫構造に近い。残る４棟の周礫は床面から15㎝ほど浮いている。周礫－周壁間に小礫がないということが最大の特徴になるだろう。

b．周礫構造

周礫について、それが住居構造に組み込まれていたとする根拠の一つとして、荒砥二之堰遺跡の報告では周礫上面から柱穴が確認されるものがあることや、柱穴付近の周礫が希薄になることを指摘した。同遺跡の周礫は小礫と土を混ぜ込んで各柱穴間を帯状に盛り上げたもので、その下部を周溝状に掘り込んでいるものもあり、「木柱間の構造物」が想定されるだろうことを述べている。

この種の調査では取り外していい礫か、外さずにそのまま残す礫か判断に苦しむことが多く、判断が難しい。本遺跡の柄鏡形敷石住居も、以下に述べるように相当量の敷石が抜き取られていると考えられ、また、周礫も崩れていることが明らかであることから、構築当初とは著しく変形しているとするのが妥当だろう。周礫を有する住居の遺構図は、往々にして雑然としているものが多い。これは、崩れた小礫を含め無差別に図化され、周礫構造が巧く図化できていないことに起因するためであり、本報告でも分かり易く資料化することができているか、心許ないものがある。ここではこうした不備を補う意味で、写真から作業段階毎の様子を復元してみた。これを参考資料として解説しておきたい。

写真６は、土層観察用のベルトが残り、調査初期の状態を示している。写真には周礫は東～北壁が見える。住居・外縁部の床面が見え、崩落・散在した周礫は取り除かれている。

写真７は、同じく北東壁の周礫を写している。中央の壁際にPit ３、左側にPit ４が確認されることになる。Pit ３の壁際の礫が残存するのに対して、Pit ４は壁際の礫がない。Pit ４の左側の周礫は残存していないが、これは調査で取り除かれたというより、崩れ落ちたものだろうと理解している。

写真８は、北から住居西側壁際の柱穴を写したものである。周礫の残存状態が比較的良好で、かなり上位まで盛り上げているのが分かる。

写真９・10は、Pit ２の調査前後の様子であり、正面に軽石製石製品が、周礫の下部に土器片が差し込まれたように出土した。これを半截した状態を写したのが写真９で、土器片３点がPit覆土から外面を住居内に向けた状態で出土した。この土器片は周礫下部の土器片と接合関係（第48図31）が確認されている。柱は石製品やPit中

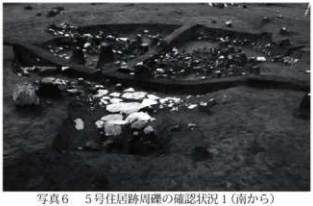


写真６　５号住居跡周礫の確認状況１（南から）

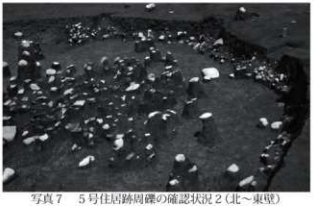


写真７　５号住居跡周礫の確認状況２（北～東壁）

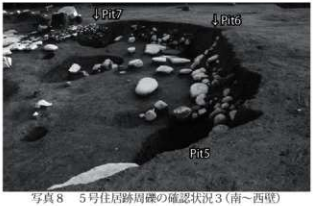


写真８　５号住居跡周礫の確認状況３（南～西壁）

写真９　Pit２周辺の周礫検出状況１

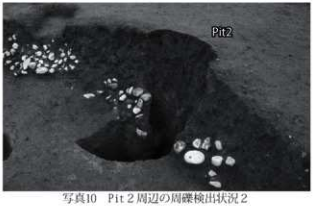


写真10　Pit２周辺の周礫検出状況２

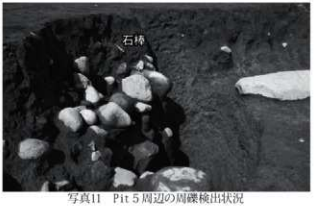


写真11　Pit５周辺の周礫検出状況

写真12　Pit６周辺の周礫検出状況

写真13　連結部西側周礫の検出状況（１）

写真14　連結部西側周礫の検出状況（２）

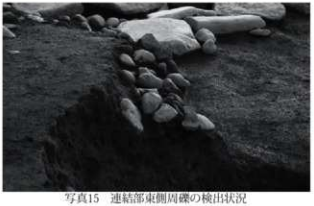


写真15　連結部東側周礫の検出状況

の土器片類の内側に埋設されたものと見られ、柱の裏側にも小礫が充填されたということになろう。

写真11は、Pit ５を南側から写したものである。Pit ２と同様に、裏側に周礫を充填した様子が良く分かる。周礫上部にミニュチュア製の石棒が出土した。

写真12・13は、Pit６の確認前後の状態を写したものである。写真12は正面から礫の出土状態を写したもので、大形の扁平礫が敷石として手前に、内側に拳大の河床礫が環状に並ぶ。柱と敷石の間を河床礫で埋めたことが分かる。写真13はPit６の完掘状態である。Pitの掘り方は敷石下部まで及び、柱を埋めてから敷石したことが理解されよう。

写真14は、連結部からみた周礫とPit ７の完掘状態である。ここでも柱穴裏の壁際に周礫が充填されることが明らかにされた。Pit ７とPit24の間にはPitがあり、周礫が確認面まで続いていた。まら、外縁には大形礫が出土しており、周礫が住居外に延びていたことを示唆している。

以上を総合判断するなら、まず住居構築に際して柱穴を掘り、柱を立て礫を貼り付けたあと、床に敷石するという順序で作業が進んだことになる。この想定が正しいなら、敷石住居の構築段階で周礫は付設されていたこと

になる。

＜周礫の性格＞　周礫について、荒砥二之堰遺跡では小礫を混ぜ込んだ状態と位置関係から、柱穴間の構築物が想定されるとされた。同遺跡の周礫は周壁から30～60cm内側を帯状に巡り、床面に密着したものと、15cmほど浮いたものがある。

現状では、荒砥二之堰遺跡で想定されたような構造物として、長野原一本松遺跡の炭化材が該当するかもしれない(事業団、第441集)。同遺跡５区60号住居跡の壁際の炭化材がそれで、報告者は壁際の木製施設、「壁際の土留め施設と壁棚状の施設を兼ね備えた」構造物を想定しているが、さらに住居外縁部に生活空間が広がることを示唆している。周礫に炭化材が伴う事例は、太田市東長岡戸井口遺跡55号住居にもある(事業団、第257集)。本遺跡５号住居の調査所見には炭化物について記されていないが、出土石器18点には被熱・破損したものや、煤けたものがあり、住居の廃棄後に「火入れ」されているのかもしれない。長野原一本松や東長岡戸井口遺跡の住居は炭化材があり、火災住居ということになろう。このような「火入れ」行為もあり、周礫の祭祀説が説かれるのであろうが、前述したような住居構築手順との関係を考慮すると周礫祭祀説を首肯することはできない。

二之堰遺跡では「径５cm前後の小礫と土とを混合して」と記されていたが、本遺跡５号住居の連結部両サイドにおいては主体部南壁に周礫が壁に張り付いた状態で出土した(写真14・15)。それは「小礫と土を混合」したというより、積み上げた礫の隙間を土で埋めたという状態に近く、周礫が崩れて初期状態を留めていないが、状況的には礫面が露出していた可能性さえあるのではないかと推察している。周礫の在り方は住居内においても場所毎に異なることも考えておきべきであるが、本住居の周礫の残存状態を見ると、壁際に密着した礫が多く、それが床面側に崩れ落ちたように見える。現状では主体部が全面敷石され、壁面に礫が露出するというのが５号住居の構造予測である。これに対して、同じ敷石住居でも１・２号住居では仕切り石状の礫は全周して配されたただろうが、周礫は仕切り石状の礫が住居壁から離れる場所に限り確認されている。位置的には１号住居が主軸左の北壁から西壁、２号住居が北壁側に周礫が遍在した。周礫は小礫を混ぜ込んだもので、こうした相違が何に起因するのか不明だが、可能性としては機能差という視点で検討することも必要になるだろう。

最後に、周礫裏側の小柱穴について触れておきたい。本遺跡の敷石住居には３棟ともこの小柱穴があり、主体部４m規模の敷石住居では奥壁から西壁に、同８m規模の敷石住居では入口部側を除いた壁に、壁柱穴より浅い小柱穴が確認されている。この小柱穴は広い所で90cm間隔だが、通常は50～60cm間隔程度で、３本が１セットになっている。小柱穴が周礫と関連することは明らかである。二之堰の記載に従えば、「柱が並び木柵状になる」という表現に近い。

２．住居の廃棄

本報告では、住居敷石の大部分が抜き取られたものと考えてみたが、住居周辺の土坑には多量の礫が廃棄状態で出土しており、周辺土坑に敷石を廃棄したということも想定された。しかし、土坑出土の廃棄礫には敷石に使用されているようなサイズの扁平礫は含まれておらず、抜去した敷石を周辺土坑に廃棄したと考えるのは困難である。従って、抜去された敷石は他の柄鏡形敷石住居に転用されたということになろう。

本遺跡の敷石住居３棟は、いずれも後期称名寺式期のものである。ほぼ同時期の住居ということになるが、１・２号住居が主体部４m、５号住居が同７m規模であり、また、遺物の出土量も住居サイズに比例するように、４mサイズの住居で少なく、逆に、住居規模の大きな５号住居では40個体以上の土器が出土しており、出土量の差が著しい。ここでは、５号住居を例に住居が廃棄されるまでを追い、その廃棄過程を解説していきたい。

＜住居廃棄以前＞　本住居の構築手順については、前項で指摘したとおりである。住居プランに従い全体を掘り下げるのが初期作業になるだろうが、それ以後の作業としては壁柱穴を掘る作業が最初で、続いて柱を立てるということになろう。これに引き続いて周礫が構築されることになるが、周礫は壁柱穴の裏側にもあることから、並行して作業が行われたというのが実態に近い。壁柱が立ち上がり、上屋の完成前後に敷石が施され、柱と敷石の隙間に礫を埋めたということになる(写真７)。

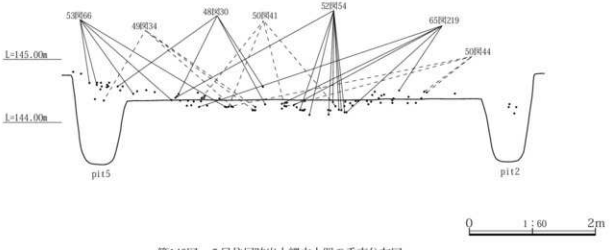
先にも述べたとおり、５号住居は他の同時期の住居に比べて大形住居の部類に入る。この住居が大形住居であ

ることとして、それが階層差を反映したものとするか、それとも機能差を反映したものとするか、住居の日常性を強調するか、呪術性を強調するか即断できない。ただし、多数の深鉢土器などの日常的器物の他に、東壁Pit２の裏側周礫には軽石製石製品２点(第73図63・64、残る１点は写真のみ掲載PL.43-103)が、西壁Pit５の裏側周礫にはミニチュア石棒(第73図60、PL.42)などの非日常器物があり、他の住居に比べて呪術的要素は強い。

＜住居廃棄以後＞　本住居は芳賀東部の住居構造と酷似しており、全面敷石されていたことは明らかである。本住居では連結部や外縁部の敷石を除いた大部分の敷石を抜き取り、その後に多量の土器を廃棄したというプロセスが辿れる。これを断面図に示してみたのが、第146図である。断面に印したドットは、東壁Pit ２と西壁Pit ５を結んだ幅２ｍの範囲に入る遺物の出土レベルであり、複数個体の接合関係が確認されている。敷石が抜去され、本来的な床面は残されていないが、外縁部に残された敷石のレベルを参考に床面を復元したもので、本文中の第36～38図に示されているように土器片類は炉の周辺や住居北西側、張出部に集中すること、主体部と張出部で接合するものが複数あるというのが図から読み取れる情報である。接合資料は集中性が極めて高く、多方向から廃棄されていることから、複数の人間が廃棄に介在したというのが実態になるだろうが、ここではその出土状態が問題になるものと考えている。接合資料の垂直分布は明らかに床面より上位の土器片と、下位の土器片が接合したことを示している。これにより、敷石の抜き取り後に土器廃棄が行われたとすることがいえる。

３．おわりに

本遺跡の柄鏡形敷石住居の観察から、周礫は住居廃絶後に付設されたものでなく、住居構築時に存在したことが確実視された。その具体的な機能・性格は不明だが、住居構築時の構造物ということならば、その上屋構造が問題になる。この種の指摘は以前からあり、現状より外側に住居構造が広がることが指摘されている(「敷石住居の謎に迫る」神奈川県立埋蔵文化財センター、1997)。本遺跡の柄鏡形敷石住居にもこうした住居構造が外側へ広がりそうな状況があり(写真14)、住居外に存在する礫類やPitに注意していく必要がある。一方、敷石されない二之堰遺跡の柱穴は周壁よりやや内側を廻り、周壁とは50cmほど空間がある。周礫は住居中心部側に崩れ、周壁側に崩れていないのが特徴であり、これについては有段構造が想定されることになるだろう。全面敷石した住居の周礫と部分敷石した住居の周礫や、敷石されない住居の周礫は同一次元で比べることができないというべきであり、地域差とも時間差ともいえない状況下では、少なくとも複数タイプが存在する周礫遺構を含む柄鏡形敷石住居の変遷を地域毎に明らかにする必要があるだろう。



第146図　５号住居跡出土縄文土器の垂直分布図

第３節　扇状地地形と遺跡分布

赤城白川扇状地の地形発達史について、その詳細は明らかではない。扇状地の形成時期は上部ロームの堆積期より以前とされているが(新井1971)、地点毎に堆積が異なり、その形成過程は複雑であることが予想されている。白川扇状地内には適当な露頭が少なく、その地形発達を詳述することを妨げているが、専門家の「扇状地は累積的に形成される」という言葉を手掛かりとして、以下に白川扇状地の地形について私見を述べてみよう。

具体的には、白川扇状地の地形発達を解説するのではなく、現状で見える地形的な特徴を理解することを優先させ、そのうえで遺跡の立地や分布を見ようというのがその考え方である。

１．扇状地の地形発達

扇状地内の堆積状態が地点毎に異なることについては、これまで指摘したとおりである。赤城白川は「天井川」として知られており、昭和23年のキャスリン台風の水害は地元在住の年配の方は忘れることができないという。赤城白川は典型的な「暴れ川」で、現流路周辺域には厚く氾濫堆積物が堆積しており、旧地形の理解を妨げている。県道渋川－大胡線を渋川方面に走り、大島居を超えた龍宮社付近に扇央部尾根があり、500mほど西を赤城白川が南流している。赤城白川の西側は扇状地西縁まで下り勾配となり、１kmほどで大川に、1.5kmほどで細ヶ沢川に架かる橋を通過する。大川より西の地形は平坦で、田島地区には暗色帯以上のローム層が堆積するという(白川遺跡1989)。赤城白川の両岸は新期氾濫堆積物で厚く覆われ、旧地形は不明である。

複雑な堆積状況を一つ一つ取り上げて説明することができないため、ここでは「扇状地は累積的に形成される」という専門家の見方に、扇状地地形も堆積するだけではなく、「浸食と再堆積を繰り返す」「現河道流路に扇状地地形を反映したものがある」という視点で、扇状地内の微地形を理解していこう。

ａ．扇状地内を流れる河川の流路

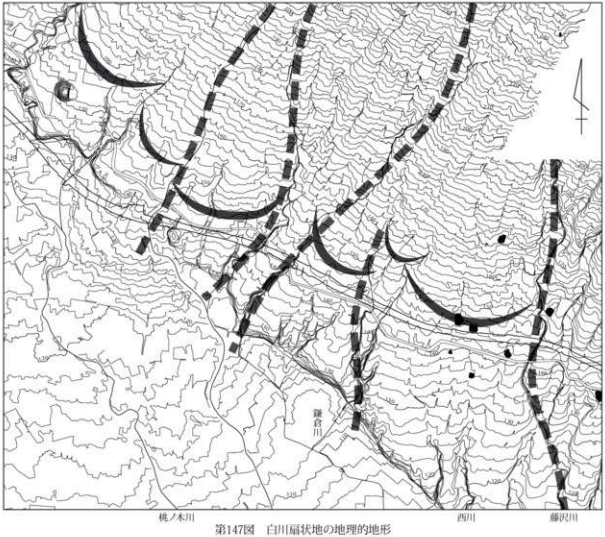
赤城山南東麓に広がる大間々扇状地は扇状地西縁を粕川が、東縁を無名河川が流れている。扇状地地形は河川が山麓から平野部に出た地形の変換点に形成され、土砂が扇状に堆積したもので、扇状地内には河川が網目状に流れた痕跡を残しているが、最終的には扇央部が高く両側が低い扇状地特有の地形に規定され、河川は扇状地の両縁を流れるようになる。

河川は地形に制約され流れるのが常であるが、赤城山南麓には不自然に流れる河川が知られている。神沢川や粕川がそれで、通常なら南流するはずの河川が南西に流れている。なぜ、そうした流路になるのか疑問を感じていたが、近年、同河川流域では縄文期の氾濫層が明らかになり、これが扇状地堆積したことが原因して河道が不自然に流れることが分かり、疑問が解消した。

この視点で、本遺跡を載せる白川扇状地内を流れる河川を見ると、赤城山南麓と同様に不自然に流れる河道があり、「ハ」字状に開いた扇状地地形があるとすることで、扇状地内を流れる河川の不自然な流路が説明できるだろうと考えている。具体的には藤沢川－龍ノ口川間の地形がそれに相当する。これと同様な河川に、赤城白川左岸を流れる観音川があり、途中南東方向に大きく流路を変えていることから、扇状地地形になる可能性があるのではないかと考えている。

白川扇状地は新旧二面からなり、南橋団地付近が新期扇状地に当たり(群馬県史1992)、縄文時代後期以後に形成された可能性が高い。本遺跡で確認した旧河道の土石流堆積物も扇状地内の地形発達に加えることができる。また、これとは別に完新世の河川氾濫が上細井中島遺跡や青柳引切塚遺跡などで確認されているが、地形を大きく変えるという状況にはなさそうであり、上述した扇状地内地形は更新世の出来事となる。

以上を踏まえるならば、赤城白川左岸は河川単位に三分して捉えることができるであろうことを第２章で述べた。第147図を見ると明らかであるが、河川単位で区画したそれぞれは「ハ」字の区画と、逆「ハ」字の区画からなることが分かる。広く山麓全域で見ると、新しい扇状地面(白川扇状地)は扇状に開いた地形を良く残しているのに対し、古い地形面(例えば大胡火砕流の堆積面)は本来の扇状地地形が失われ「◇」状を呈している。これが扇状地地形の新旧を示すメルクマールとなる可能性があり、これを白川扇状地の河川単位で見た地形に当て嵌めることができればその新旧が見通せることになる。そして、



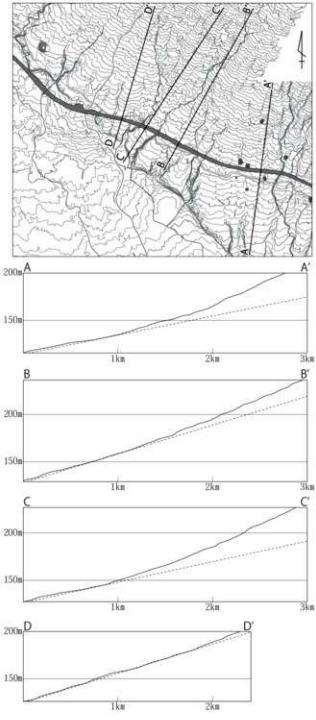
第147図　白川扇状地の地理的地形

その形成期が分れば、地形発達と気候の関係が鮮明に描けるようになり、また、これが旧石器遺跡の立地・分布と関係するだろうというのが現在の私見である。

b．地形的特徴

第147図に、等高線の開き具合を手掛かりとして地形変換点を印した(アミ点部)。概ね、変換点は上部道路の北側にあることが分かる。このことを確認するため、断面図を作製したのが第148図である。これによると、微妙だが標高160～180m付近に第一の地形変換点が、標高130～140m付近に第二の地形変換点があることが分かる。それぞれの断面図は地形区分を考慮してその作成位置を決めているが、B－B'は地形変換点(標高180m付近)より北が隣接区を跨いでおり、180m付近より北の傾斜は除外しなければならない。表16としてその勾配率を示しておいた。これによると、第一変換点より下は勾配率2.0～2.7%を、第二変換点より上では勾配率3.7～4.6%、第一・第二変換点の間は勾配率2.7～3.5%となり、標高が下がるほど傾斜角が弱まることが明らかである。等高線図からみた地形変換点と断面図で示した変換点は微妙に異なり整合的か気掛かりであるが、目安程度のデータにはなるだろう。

遺跡を選地する場合、狩猟社会なら動植物資源・飲料水が重要な環境資源であり、これが遺跡を選地する際の要素となる。農耕社会なら水田経営に適した場所・環境などが重要な遺跡選地要素となり、どちらも水が重要になる。調査現場において発掘は地質調査ではないという言葉を耳にすることがあるが、遺跡の立地する地域の地質学的な理解が重要であることは明らかであり、学問的に記載するにはその成果が欠かせない。例えば、古代粘土採掘坑を記載する際、それがどのようなもので、どのようにして粘土化したものか、地質学的成果を踏まえ明らかにする必要があるからである。しかしながら、古代



第148図　白川扇状地の地形断面

人が遺跡を選地する際の基準として、そうした知識は必要ではなく、経験的に好条件を求めて（最適適応）遺跡が選地されたはずである。そうした意味においては単に遺跡を地形的要素のみから判断するのも避けるべきであり、人々を取り巻く環境資源全般を念頭に遺跡の選地理由を考えることが重要になる。

白川扇状地内は基本的に欠水地帯であり、考古学的に見ると扇状地内の湧水有無や河道の移動等が問題になるはずで、これを踏まえる必要がある。

第16表　扇状地の地形変換点と勾配率

	第１地形変換点	中間	第２地形変換点
A－A'	138m以下:勾配率2.0%	138～162m:勾配率2.7%	162m以上:勾配率4.6%
B－B'	158m以下:勾配率2.3%	158～196m:勾配率3.5%	196m以上:勾配率4.2%
C－C'	148m以下:勾配率2.5%	148～184m:勾配率3.3%	184m以上:勾配率4.0%
D－D'	160m以下:勾配率2.7%	160～182m:勾配率3.1%	182m以上:勾配率3.7%

２．遺跡の分布

周辺遺跡の概要について、第２章に第２節「周辺遺跡」としてその概要を記した。時代毎の遺跡分布については第２節に譲り、ここでは扇状地地形を踏まえ遺跡の立地や分布を整理していきたい。

ａ．旧石器時代

旧石器遺跡の分布を理解するには、赤城白川扇状地の地形発達史的な理解が欠かせないことを指摘した。これは地質学者の「扇状地は累積的に形成される」という指摘を踏まえたものであるが、扇状地は堆積と浸食を繰り返し、いまも扇状地が形成過程にあるとして理解すべきであるからだ。まず、扇状地末端には蟬山や九十九山など10万年前の山体崩落期の独立丘陵「流山」があり、古い地形が扇状地の下に埋没している可能性がある。富士見支所付近を流れる大川の西、田島地区には暗色帯が堆積する地点がある（白川遺跡ほか1989）。一方、群馬県史には、前橋市南橋団地付近に新規扇状地があり、これが現白川上流域に延びるとされている。早田勉氏（前橋工科大学講師）の話を聞くと、白川扇状地北西部に暗色帯が堆積する地点があるということであり、暗色帯が確認されている白川遺跡が田島地区にあることを踏まえれば、赤城白川右岸側には古い扇状地面が残されている、ということも考えておくべきかもしれない。

白川以東の土層堆積は未整理遺跡も多く、不明な点が多い。本遺跡ではAs-BP以下の堆積状態については確認できていないため不明だが、As-SrとAs-YPの間に扇状地堆積物が確認されている。開通した上武道路を走ると、藤沢川－龍ノ口川間では東田之口遺跡付近が尾根状に高まり、両河川に向い傾斜、扇状地地形が形成されていることが分かる。地点毎に堆積状態が異なることはすでに触れたとおりであるが、上部道路より下位には鎌倉川が途中流路を大きく変える地点があり、藤沢川－龍ノ口川間の扇状地が形成されたあと、ごく短期間の中で小規模扇状地が形成された可能性がある。As-Sr降下直前には

陣場火砕流が発生、旧利根川が赤城山麓側に変流、山麓の浸食が進んだものと見られ、これが白川扇状地の浸食を促し、そして、谷を埋めるように小規模な扇状地地形が形成されたのであろう。

こうした地形発達は、どのように旧石器遺跡の立地や分布に影響したのであろうか。専ら移動生活する旧石器時代においては環境資源が重視され、なかでも動・植物資源が遺跡を選地する際の要素で、資源が豊富であればあるほど長期に滞在できただろう。居住期間の長短は、結果として遺跡の規模や遺物量に反映することになる。周辺遺跡の項で述べたとおり、扇状地内には尖頭器段階以後遺跡が残されるようになり、遺跡名を具体的に指摘した。この段階の遺跡は剥片数点が出土するだけの遺跡が多く、地域資源は豊富とはいえそうもないが、扇頂部に近い小暮東新山遺跡では石器ブロックを伴う文化層があり、本年度も扇状地端部に近い当事業団調査遺跡で石器ブロックを伴う旧石器遺跡が発見されており、現状は調査遺跡が少ないだけであり、実態は解明できていないということだろう。

b．縄文時代

第２節「周辺遺跡」において、扇状地内には縄文遺跡として73遺跡（包蔵地を含む）があることを指摘した。扇状地内の縄文遺跡を時期別にみると、草創期２遺跡・早期７遺跡・前期25遺跡・中期12遺跡・後期12遺跡・晩期０となる。このうち、住居跡が確認されている遺跡は前期12遺跡・中期３遺跡・後期４遺跡である。草創期遺跡は上百駄山遺跡で土器片１が確認されているだけであり、ほかには本遺跡の石器製作跡（有茎尖頭器が単独で出土した遺跡は草創期遺跡としては除外）があるだけである。また、早期遺跡では赤城白川の右岸で良好な遺跡が確認されている。標高200mより高い地域の調査例が少ないため断定することはできないが、観音川と龍ノ口川に挟まれた時沢以北の扇状地面にも縄文期の包蔵地が点在しており（第149図）、遺跡の実態把握が急務である。また、扇頂部に近い遺跡では縄文期「陥し穴」があり、猟場として機能したことが明らかである。

扇状地内の縄文遺跡の動向は上述したとおりであるが、前期遺跡が最も多く、次いで中後期の遺跡が残されているが、このような時期別遺跡の増減は、赤城山南麓の縄文期遺跡の在り方と変わらない。現状で、扇状地内の縄文期遺跡は扇状地西縁の細ヶ沢川流域と、東縁の藤沢川流域に集中しているよう見える。両河川ともに自然河川であることは明らかであるが、このほかの扇状地内を流れる河川も自然河川ということになれば、扇状地内の湧水を起源とする河川ということになる。大間々扇状地の遺跡分布を踏まえれば、湧水周辺域には縄文期の遺跡が分布することになるが、現在扇状地内を流れる河川は用水系に組み込まれ、これまで湧水点の有無は確認できていない。これについては発掘さえすれば確認することができるが、その機会に恵まれておらず、その実態は不明である。現状で扇状地内を流れる河川が自然河川であるかどうかを考えるには、観音川と龍ノ口川が最も近付いた位置にある新田上遺跡の発掘成果が重要となるのではないかと考えている。同遺跡の調査成果次第では、両河川が縄文期にさかのぼる自然河川ということが確定するかもしれない。扇状地内の河川は用水系に組み込まれ、現状で湧水起源の自然河川か判断できないでいたが、両河川が自然河川と確定されたならば、その上流域に縄文期遺跡の存在が期待されることになる。

第149図　縄文時代遺跡の分布

群馬県内の中期末から後期初頭の縄文期集落の動向については、それまでの伝統集落とは別に新天地を求めたという見解がある（石坂2002）。本遺跡を含む藤沢川流域

には縄文時代前期から後期の遺跡が集中、当該期集落の動向を考えるにはこれ以上ない条件を備えている。同河川流域の縄文期遺跡については、現在分析できていないため言及することはできないが、伝統集落が崩れた理由のひとつとして環境の悪化が想定されており、以下これについて検討しておきたい。

近年の縄文時代像は、考古学的には「階層化」がキーワードとなり語られることが多い。また一方では、氷床コアの分析から詳細な地球規模の気候変動が分かるようになり、より細かなオーダーで気候変動の様子が明らかにされている。こうした古気候の研究成果は考古学でも援用されることも多く、その解釈に大きく影響を与えている。縄文時代は採集経済下にあり、気候変動の影響は大というべきであるが、年代測定値が変わることも多く、それに振り回されないことが肝要である。

本遺跡でも草創期段階の土石流堆積物を確認しているが、このほかにも発掘調査で赤城山西麓の再堆積ローム（山体崩落、縄文前期以前）、粕川扇状地の形成（中期？以前）、神沢川流域・粕川流域の洪水堆積物（前期後半・中期中葉の二期）などが確認されている。こうしたイベントが考古学的に確認され、従前は気候変動に直結させていたが、神沢川流域では下層堆積物が前期諸磯ｂ式期の、上層氾濫層が中期阿玉台Ⅱ式期の洪水層と考古学的に判明した時点から（喜多町遺跡、事業団第519集）、山麓域で起こるこうした現象は瞬間的であり、すくなくとも気候変動に直結させなくてもいいだろうと現在は考えている。常識的には気候変動は広く影響を与え、まず植物に影響が出て、食物連鎖により動物相に影響、徐々に気温が上下するより、極端であればあるほど影響は大きいということだろう。こうした気候の在り方と集落の動向がどのように連動するのかが問われているが、これについては今後の課題として指摘するのに止めておきたい。

当該地域に縄文期遺跡は相当数があるものの、その全貌が明らかにされている遺跡は極めて少ないのが実態であり、こうした中で人口動態を理解するには型式別に見た土器片類の量的把握が当該地域の生産力（＝人口支持力）を示す指標になるのではないかと考えている。この想定が妥当であるということになれば、報告の済んだ遺跡などではこれに代わるものが検討されねばならない。

ｃ．弥生時代以降

時代別の遺跡分布については第２節「周辺遺跡」の項に記載したので、ここでは白川扇状地が欠水地帯であり、どのようにそれを克服、そして、生産域を確保しようとしたのか、について述べていきたい。

採集経済下ではあるものをそのままの状態で利用、大

弥生・古墳時代

奈良・平安時代

第150図　弥生～平安時代遺跡の分布

きく改変しないことが原則である。初期農耕社会も段階的にはこれに近く、条件の良い場所に水田が作られ、水田に近接して集落が作られる。原則論だが、これを否定する意見はないのではないか。これを踏まえたうえで、扇状地内の集落分布を見ると、弥生時代の３遺跡と古墳時代前期（４世紀代）の集落は扇状地末端にあり、耕作地としては最適の条件を備えていたとすることができる。５・６世紀代の集落も同様な立地傾向を示しているが、６世紀集落が拡大傾向にあるものの、立地は５世紀集落と変わらず古墳群も上細井地区（上細井稲荷山古墳、５世紀）や小神明地区、芳賀地区、青柳地区に群集墳が形成されている。これに対して奈良・平安期の集落は前代から継続する集落14遺跡、新期集落13遺跡があり、生産域拡大を背景とした遺跡分布は明らかである。古墳時代以後の集落分布は上流域の調査例が少なく判然としないが、龍ノ口川左岸には広面遺跡（第６図38）から寺間遺跡（37）、孫田遺跡（35）、上百駄山遺跡（33）に続く遺跡があり、上流域遺跡の在り方を示唆しているように思える。すなわち、上記６遺跡は1/25000の地形図には表われてこないが、両側に浅い谷が入り込んだ位置にあり、また、上百駄山遺跡は西側低地の谷頭にあり、その谷頭は梅雨時には湧水するという。このことから、遺跡分布の薄い時沢以北の上流域でも条件の良い地点を選び水田化するような集落が点在するのかもしれない。

３．利水状況

旧富士見村が、欠水地帯にあることは明らかである。現在、扇状地内の農耕地には赤城大沼用水を水田耕作用として、大正・群馬用水を畠作用として取水している。大沼用水は昭和32年、大正用水は昭和22年、群馬用水は昭和47年の完成である。大沼用水開削の歴史は古く、幕末の名主船津傳次平（農学者）に遡る。傳次平の志は木村興作、樺沢政吉、須田惇一と受け継がれ、84年の歳月を経て赤城大沼用水として結実した。現在、赤城大沼用水は旧富士見村大河原付近の分水槽２ヶ所で細ヶ沢川、龍ノ口川、藤沢川の３河川に分水されている。富士見村誌には、梅雨時に降水量が少なく田植ができず蕎麦・粟を撒いたという記載や、毎年が水不足となるという記載があるほどで、扇状地が欠水地帯であることを如実に示している。扇状地内の遺跡分布を考えるには、どのようにして上述したような水不足を解消してきたのか、このことを明らかにする必要がある。

まず、農耕集落の初期段階からみていこう。当初、水田は条件の良い場所が選ばれたはずである。扇状地末端の地域に当該期の遺跡がある。現在、扇状地内の河川は浸食が進んでおり、末端部の水田に導水するには相当に上流域から引き込む必要があり、湧水起源の浅い低地が最適立地環境ということになる。これが第一段階である。

第二段階としては、溜井灌漑である。東田之口遺跡で古代の溜井が、小神明遺跡群や広面遺跡でも時期不明とされているが報告されている。広面遺跡を除いて、いずれも地形変換点より低い標高140m以下にあり、これと湧水ポイントが連動している可能性がある。

第３段階としては、溜池灌漑がある。本遺跡周辺には東堤沼・中堤沼・西堤沼が群在しており、その重要性が窺える。本遺跡から１㎞北の上堤沼と呼ばれる溜池は見上げるような高台にある。おそらく藤沢川から導水したものだろうが、築堤に執念さえ感じる。通常溜池は近世に築かれたとされるが、周辺域には中世遺跡が点在しており、その築堤が中世に溯る可能性も考えておきたい。従来の知見に従えば、溜井灌漑は古代、溜池灌漑は中・近世に導入されたものということになるが、具体的に発掘で確認されていない。

このほか、扇状地内には旧富士見村小暮と時沢付近に分水施設があり、現在下流域の農業用水として利用されている。分水時期については不明だが、小暮付近の分水は地形的に見て比較的容易で、いつでも分水できる条件下にある。また、時沢付近では河川浸食が進み若干難易度は上がるだろうが、それほど大きな労働力の投下を考えずにすみそうである。さらには、富士見村誌には「皆沢の江戸窪を水源とする藤沢川は各堰によって小暮、時沢の東部を潤している」と記されており、藤沢川も堰を設け利水されていたことが分かる。分水場所は確認できていないが、受地付近か大峯神社付近が有力視される。

以上、赤城白川扇状地地形を地形的に読み解き、これに遺跡分布を重ね、その動向を考えてみた。旧石器遺跡や縄文期遺跡の動向については定式化できていないが、弥生期以後の農耕集落の動向については大間々扇状地や、これに続く粕川・新里村の分布調査で示された農耕

発達史的な理解の有効性が再確認されるであろう。赤域白川扇状地内の遺跡の実態は、必ずしも上流域のそれが明確ではないが、敢えてそのことについて見通してみた。このことが今後に活かされるならば、望外の喜びである。分析の不足している点も多々あるだろうが、これについては稿を改め論じるつもりである。

第４節　中世遺構について

本文中にあるように、堤遺跡Ｂ区で調査された中世の竪穴遺構は 12・13 ライン付近にあり、火葬土坑はＴ・Ａライン付近にあった。しかし、このほかにも近世の所産として調査に含まれなかった遺構である長方形あるいは短冊形の土坑が航空写真で確認される。こうした長方形の土坑は中世の屋敷遺構に一般的に見られることから、ここでは敢えて中世の遺構としてこれらを含めて検討してみたいと思う。

竪穴遺構と長方形土坑は、南北方向のＭ～Ｐライン、Ｒ～Ｔライン、東西方向の 11 ～ 12 ライン、そして、その分布がはっきりしないものの、凡そ４～７ライン付近に集中して分布しているが、その分布域は真北に対して反時計回りに８°傾いたライン上に幅 10m 程の幅で分布している。そしてその内側には円形土坑や一部長方形土坑が掘削されている。一方、円形土坑はＴラインの西側にも 12 ライン付近を北限として分布している。このような長方形のものを中心とした土坑は外周の区画に集中して掘削され、その内側に掘立柱建物群の遺存が見られることが、中世屋敷遺構では往々にして見られる現象である。

調査された中世遺構のうち、竪穴遺構は地下式坑と称される遺構の一種である。地下式坑は底面に降りるための階段を伴った入り口部と箱状に掘削された本体がある。地下式坑には大小があり、本遺跡のものは小型のものに含まれる。また地下式坑は土壙墓であるという見解もあるが、実際のところ人骨の出土例は少なく、中世土坑墓に出土する人骨の出土状況に鑑みれば土壙墓である可能性は低いと言わざるを得ず、寧ろ室（むろ）としての使用例に照らせば倉庫機能を持つものと判断されるものである。なお、竪穴遺構は以下に於いては地下式坑と称することとする。

一方、火葬土坑には西日本型と東日本型の拾骨方法があり（楠崎 2007）、楠崎修一郎氏の鑑定所見が示すように本遺跡のものは東日本型の収骨方法が該当する。西日本型に骨の遺存が多いこともあって、火葬土坑は墓として分類されることもあるが、火葬土坑は荼毘所の跡であって墓そのものではない。こうした火葬土坑が設置される場所に規則性は認められないが、藤岡市白石大御堂遺跡の中世寺院址例が示すように、外周の区画に直線的に配列する例もあり、本遺跡においても区域内の外周部が選地された可能性が考えられる。また、長方形土坑類の掘削意図は確定していないが、後世の所謂芋穴としての使用に鑑みれば、やはり貯蔵穴としての用途が指摘できる。

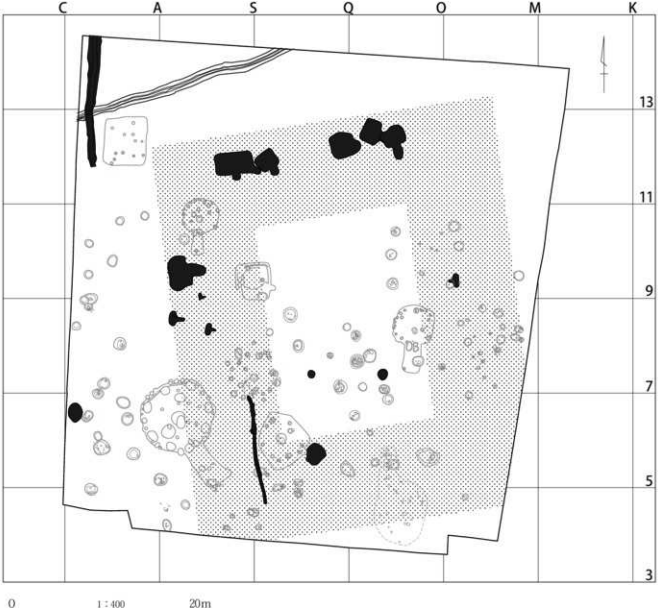
さて、本遺跡において倉庫あるいは貯蔵穴と想定される地下式坑や長方形土坑の分布状況は、第 151 図に示したように長方形区画の中にあるが、その範囲は東西 20 間(約36m)、南北24間(約43m)程と想定され、特に幅10m（５間半）程の範囲に集中する傾向が窺われた。このようなロ字状に貯蔵遺構の集中する分布状況は、方形の区域に対する認識があったことが示すものであり、溝や堀で囲繞された状態にはないものの、貯蔵施設が外区側に集中的に分布する屋敷遺構同様の土地の使われ方が行われた可能性が考慮されるのである。こうした土地の使われ方を前提に立てば、１号竪穴遺構と５号竪穴遺構の入り口方向の違いは時期差と捉えることができるが、本来は遺構の薄い内区側に面するべきものであったと認識される。また、６号竪穴遺構の入り口と２・４号火葬土坑の突出部の方向は共通しているが、前者は内区に面して開けられたと考えられるものであり、後者は煙突様の用途を持つものであり、竪穴住居の竈の設置位置に多い東側に向いているのは風向きによることと関連していると判断されるものである。

ところで本遺跡の 50m 程南に位置する小神明遺跡群（前橋市教育委員会 1987)Ｃ・Ｄ区（以下「小神明遺跡」とする）では、一辺 40m 程の方形の環濠遺構と地下式坑遺構群の分布が見られる。このうち環濠遺構は本遺跡で想定した方形区画の真南に位置するものであるが、その軸方向は北に対して 15°程時計回りに傾いていて、本遺跡で想定した方形区画とは異なっている。一方、地下式坑群は東西に列をなし、6m 程西側が南に下がる喰い

違いを伴うライン上に並び、井戸がその分布域の内側や延長線上に掘削されている。これらの地下式坑は東西で掘削されるライン上の喰い違いの部分を境にして西側のものが北に対して３°、東側のものが８°反時計回りに傾いていており、東西に分けることができる。これらの地下式坑の入り口は南向きのものが多いが、西側の土坑群のうち最東のものは開口部が東に面しており、これらと東の土坑群は共通する空間に面していると判断される。従って、西側の最も東にある地下式坑と東側の地下式坑を東群とし、それ以外の西側に分布する地下式坑を西群とすると、東群と西群の地下式坑および同区域内にある井戸は別の区画にあると判断される。地下式坑と井戸の分布域は東群が東西32ｍ、西群が東西22m以上を測る。特に東群は屋敷遺構と同様に内区を囲むものと認識されるが、その内区に相当される区域にピットが分布していることから、そこには居住区があったことが想定される。

さて、小神明遺跡の遺構群のうち環濠遺構は異なった軸方向を取るため時期が異なると認識されるが、堤遺跡と小神明遺跡の地下式坑群は近似した軸方向を取るため近似した時期の所産と認識される。またその規模も近似し、内区を囲む外区に貯蔵施設が掘削されるという共通点もあるため、同じ規制の基に付近一帯の区画利用がなされていた可能性が想定されるのである。

また、小神明遺跡の地下式坑群東群のように、居住区



第151図　B区・中世方形区画想定図

を内区として貯蔵施設や井戸が設けられるのは、県内で確認される屋敷遺構など中世の屋敷遺構に頻繁に見られる土地の使用法であり、堤遺跡や小神明遺跡の中世遺構群の構造もそれに準拠したものと思慮される。また、両遺跡の方形区画はともに環濠を伴なっていないが、中世においては前橋市中内村前遺跡３区の屋敷遺構のように、堀や溝で四囲を囲繞せずに一部に溝が掘削されないものもある。この堀あるいは溝で囲繞されない箇所は生垣を設置していたと想定しているが、生垣であっても枝に鎧の械糸が絡まって防御機能を持つことから、堀の代わりに生垣を設置したと想定したものである。こうした生垣の設置によって堤遺跡の口字状配置の遺構群も屋敷に準拠した機能を持つものと思慮されるのである。

引用文献

＜第１節＞
相沢忠洋・関矢晃(1988)
「石山遺跡」『赤城山麓の旧石器』講談社
萩谷千明(2008)
「関東地方北西部に認められる厚手の爪形文土器(下宿式土器)とその位置づけについて」『縄文草創期セミナー後半の諸様相』第21回　縄文セミナー
荒砥北三木堂遺跡Ⅱ(1992)
　群馬県埋蔵文化財調査事業団第136集
小島田八日市遺跡(1994)
　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第279集
白井北中道遺跡(1998)
　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第232集
徳丸仲田遺跡(2001)
　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第279集
西鹿田中島遺跡発掘調査報告書(1)（2003）
　笠懸町埋蔵文化財発掘調査報告書13集
五目牛新田遺跡(2005)
　伊勢崎市文化財報告書第57集
吹屋伊勢森遺跡(2006)
　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第373集
白井十二遺跡(2008)
　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第427集
＜第２節＞
荒砥二之堰遺跡(1985)
　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第36集
仁田・暮井遺跡(1990)
　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第109集
三ツ子沢中遺跡(2000)
　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第260集
長野原一本松遺跡4(2008)
　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第441集
小神明遺跡群(1982)
　前橋市教育委員会
芳賀東部団地遺跡Ⅲ(1990)
　前橋市教育委員会
溝呂木大御堂遺跡(2003)
　赤城村埋蔵文化財発掘調査報告書第21集
見立八幡遺跡(2008)
　渋川市教育委員会
山本暉久(2002)
「敷石住居址の研究」六一書房
神奈川県立埋蔵文化財センター(1997)
「敷石住居の謎に迫る記録集」
＜第３節＞
新井房夫(1971)
「第二節、各地域の地質」『前橋市史第１巻』
早田勉(1992)
「赤城山山麓の地形発達史」『群馬県史』
富士見村誌(1978)
　富士見村誌編纂委員会
富士見村誌続編(1979)
　富士見村誌編纂委員会
『新里村の遺跡』(1984)
　新里村教育委員会
『粕川村の遺跡－遺跡詳細分布調査報告書－』(1985)
　粕川村教育委員会
藤巻幸男・小島敦子(1989)
「湧水池に歴史あり」『よみがえる中世』
喜多町遺跡(2011)
　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第519集
白川遺跡(1989)
　群馬県勢多郡富士見村教育委員会
広面遺跡(1992)
　群馬県勢多郡富士見村教育委員会
上百駄山遺跡・寺間遺跡・孫田遺跡(1995)
　群馬県勢多郡富士見村教育委員会
＜第４節＞
白石大御堂遺跡(1991)
　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第122集
中内村前遺跡(2002)
　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第298集
櫛崎修一郎(2007)
「群馬県出土中世火葬遺構」『群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要25、101-120

第17表　草創期石器計測一覧表

神明原遺跡図版番号	遺物番号	器種	石材	母岩	ブロック	層位	接合	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)
第11図PL.18	1	石槍	黒真		7	Ⅶ		(9.4)	2.3	25.07
第11図PL.18	2	石槍	黒真			表土		(8.5)	3.4	39.96
第11図PL.18	3	石槍	黒真			表土		(5.2)	2.1	7.85
第11図PL.18	4	石槍	黒安			撹乱		(4.5)	(2.5)	10.05
第11図PL.18	5	石槍	黒真		7	Ⅶ		(7.0)	(2.8)	25.51
第11図PL.18	6	石槍	黒真			表土		(6.5)	(3.9)	28.22
第11図PL.18	7	石槍	黒真		5	Ⅶ		(4.5)	(3.1)	20.50
第11図PL.18	8	石槍	黒真			撹乱		(6.7)	(3.9)	31.96
第11図PL.18	9	石槍	黒安			表土		(6.1)	3.6	20.73
第11図PL.18	10a	石槍	黒真			撹乱	接2	(7.8)	4.4	62.81
第11図PL.18	10b	石槍	黒真			表土	接2	(5.9)	3.7	30.31
第11図PL.18	11	石槍	黒真			表土		(10.7)	(4.3)	90.65
第11図PL.18	12	石槍	黒真	黒真1		撹乱	接1	(9.9)	4.9	94.31
第11図PL.18	13	石槍	黒真			表土		(9.4)	4.2	52.40
第11図PL.18	14	石槍	黒真			表土		(10.0)	(6.9)	145.46
第11図PL.18	15	石槍	黒安			表土	接8	(6.7)	5.1	65.98
第12図PL.18	16	石鏃	黒真		5	Ⅶ		4.4	2.7	6.70
第12図PL.18	17	石鏃	チャ		6	Ⅵ		(2.0)	1.6	1.26
第12図PL.18	18	石鏃	チャ		1	Ⅵ		(2.0)	2.1	1.74
第12図PL.18	19	楔形石器	黒安		6	Ⅵ		2.9	3.1	7.03
第12図PL.18	20	削器	黒真			撹乱		5.1	5.6	43.77
第12図PL.18	21	削器	黒真		2	Ⅵ		3.3	5.1	22.51
第12図PL.18	22	削器	ホルン		2	Ⅵ		8.0	5.9	50.64
第12図PL.18	23	削器	黒真		4	Ⅵ		6.5	5.6	71.39
第12図PL.18	24	削器	黒真		1	Ⅴ		10.1	8.6	275.29
第12図PL.18	25	削器	黒真		2	Ⅵ		11.4	9.0	398.22
第12図PL.18	26	加工痕	チャ	1a	1	Ⅴ		2.9	2.3	7.76
第12図PL.18	27	加工痕	チャ		7	Ⅶ		2.9	3.8	8.51
第12図PL.18	28	加工痕	チャ	1a	1	Ⅵ		2.4	4.0	10.35
第12図PL.18	29	加工痕	チャ	1b	5	Ⅶ		3.1	3.5	7.64
第12図PL.18	30	加工痕	チャ	1a	1	Ⅵ		2.2	2.9	5.37
第12図PL.18	31	加工痕	チャ	1a	6	Ⅵ		2.6	3.2	8.15
第12図PL.18	32	加工痕	チャ	1a	2	Ⅵ		1.2	1.7	1.13
第12図PL.18	33	加工痕	黒真		2	Ⅴ	接3	7.7	5.1	87.62
第12図PL.18	34	加工痕	黒真			Ⅵ		4.2	6.6	63.12
第12図PL.18	35	加工痕	黒真			撹乱		4.0	6.0	17.51
第12図PL.18	36	使用痕	黒真		2	Ⅵ		7.5	7.4	109.05
第12図PL.19	37	使用痕	黒真		外	Ⅴ		5.7	5.8	61.01
第12図PL.19	38	礫長剥片	黒真			撹乱		8.2	2.0	10.41
第13図PL.19	39	石核	黒真		2	Ⅴ		5.7	9.8	185.78
第13図PL.19	40	石核	黒真		6	Ⅵ		8.3	7.3	175.68
第13図PL.19	41	石核	チャ			撹乱		3.8	5.2	45.06
第13図PL.19	42	石核	黒真		3	Ⅴ		6.3	7.0	101.68
第13図PL.19	43	石核	チャ	1a	1	Ⅴ		1.8	2.5	11.04
第13図PL.19	44	敲石	粗安		3	Ⅵ		11.0	6.3	471.63
第13図PL.19	45	敲石	粗安			撹乱		(7.3)	(5.6)	251.24
第13図PL.19	46	敲石	黒真			撹乱		(5.6)	(4.2)	82.91
PL.19	47	石槍	黒真			表土		(7.6)	3.0	34.68
PL.19	48	石槍	黒真			表土		(5.4)	(3.2)	25.32
PL.19	49	石槍	黒真			表土		(7.2)	3.6	38.97
PL.19	50	石槍	黒真			表土		(4.8)	(2.7)	10.67
PL.19	51	石槍	黒真			表土		(4.6)	2.6	12.90
PL.19	52	石槍	黒真			撹乱		(5.0)	4.3	43.54
PL.19	53	石槍	黒真			表土		(9.4)	4.0	61.82
PL.19	54	石槍	黒真			表土		(7.3)	4.4	62.95
PL.19	55	石槍	黒真			表土		(7.0)	(4.5)	65.68
PL.19	56	石槍	黒真			表土		(6.2)	(5.2)	45.79
PL.19	57	石槍	黒真			表土		(10.4)	(5.6)	127.56
PL.19	58	削器	黒真			撹乱		5.2	8.8	58.69
PL.19	59	加工痕	黒真			撹乱		5.4	3.4	24.82
PL.19	60	加工痕	黒真			撹乱		6.9	2.4	16.01
PL.19	61	加工痕	珪質		6	Ⅴ		3.7	1.9	5.46
PL.19	62	加工痕	チャ	1a	2	Ⅵ		3.0	2.7	10.61
PL.19	63	加工痕	黒真	黒真1		撹乱		2.6	3.5	5.86
PL.19	64	加工痕	黒安			撹乱		1.6	3.8	5.66
PL.19	65	加工痕	チャ		4	Ⅵ		1.3	2.0	1.60
PL.19	66	加工痕	黒真			撹乱		2.3	3.8	6.11
PL.19	67	加工痕	ホルン		3	Ⅵ		1.8	2.9	3.12
PL.19	68	使用痕	黒真		2	Ⅴ		5.1	5.9	25.60
PL.19	69	石核	黒真		3	Ⅴ		7.3	14.4	284.05
PL.19	70	石核	チャ	1a	1	Ⅵ		2.5	2.4	2.90
PL.19	71	石核	黒真			撹乱		4.0	4.1	30.93
PL.19	72	石核	黒安			撹乱		3.4	5.0	79.51
PL.19	73	石核	砂岩			撹乱		6.6	4.8	139.03
PL.20	74	石核	黒真		7	Ⅶ		4.7	4.8	53.99
PL.20	75	石核	黒安			撹乱		7.3	8.9	278.23
PL.20	76	石核	黒真			撹乱		10.3	7.0	206.73
PL.20	77	礫長剥片	黒真		3	Ⅵ		11.2	4.0	44.45
PL.20	78	剥片	黒真	黒真1	3	Ⅵ		7.6	6.9	70.69
PL.20	79	剥片	黒真	黒真1	3	Ⅴ		5.0	5.8	22.80
PL.20	80	剥片	細安		4	Ⅵ		1.9	4.8	8.20
PL.20	81	敲石	粗安		3	Ⅴ		13.3	11.7	2425.00
PL.20	82	石鏃	チャ		3	Ⅵ		2.6	1.6	1.36
PL.20	83	石鏃	チャ		3	Ⅵ		(2.7)	1.7	1.15
PL.20	84	打製石斧	細安		5	Ⅵ		(7.1)	(5.2)	44.67
PL.20	85	打製石斧	黒真		外	Ⅵ		(4.8)	(4.3)	39.19
PL.20	86	スタンプ	細安		3	Ⅵ		11.3	4.4	444.18
第14図PL.20	1	剥片	黒真	黒真1		撹乱	接1	2.4	2.4	1.60
第14図PL.20	2	砕片	黒真	黒真1	5	Ⅶ	接1	2.3	1.5	0.81
第14図PL.20	3	剥片	黒真		2	Ⅵ	接3	4.2	3.1	12.89
第14図PL.20	4	剥片	黒安				接8	2.1	2.9	0.60
PL.20		砕片	チャ	1a	2	Ⅵ	接10	1.9	1.2	0.37
PL.20		砕片	チャ	1a	1	Ⅵ	接10	1.9	2.0	1.47
PL.20		礫長剥片	黒真	黒真1	3	Ⅵ	接4	7.0	2.7	10.92
PL.20		礫長剥片	黒真	黒真1	3	Ⅵ	接4	7.9	3.2	16.07
PL.20		砕片	黒真		3	Ⅵ	接5	1.7	1.4	0.51
PL.20		剥片	黒真		3	Ⅵ	接5	2.2	2.5	2.16
PL.20		剥片	黒真		3	Ⅵ	接6	4.2	6.4	25.67
PL.20		剥片	黒真		3	Ⅵ	接6	6.2	4.2	14.51
PL.20		剥片	黒真			撹乱	接7	3.3	2.5	5.33
PL.20		剥片	黒真	黒真1		撹乱	接7	4.7	7.2	37.04
PL.20		砕片	チャ	1b	1	Ⅵ	接9	1.4	1.2	0.57
PL.20		剥片	チャ	1b	1	Ⅵ	接9	1.8	2.2	1.23

第18表　住居出土縄文土器観察表

図版番号 図版番号	遺物 番号	出土遺構	出土位置	器形	部位	胎土	文様の特徴等	摘要
第46図 PL.21	1	1号住居	埋没土	深鉢	LI縁～胴部	粗砂、細礫	平LI縁のLI縁下に沈線でＪ字状等の曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第46図 PL.21	2	1号住居	埋没土	深鉢	LI縁部片	細砂、細礫	平LI縁のLI縁部に環状の突起を有し、LI縁以下の胴部に沈線で文様を描き、文様内にＬＲの縄文を施す。	称名寺Ⅱ式
第46図 PL.21	3	1号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線でＪ字文等の曲線的な文様を描き、文様内にＬＲの縄文を施す。	称名寺Ⅱ式
第46図 PL.21	4	1号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で文様を描き、文様内にＬＲの縄文を施す。	称名寺Ⅱ式
第46図 PL.21	5	1号住居	周溝	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線でＪ字文等の曲線的な文様を描き、文様内にＬの縄文を施す。	称名寺Ⅱ式
第46図 PL.21	6	1号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線でＪ字文等の曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第46図 PL.21	7	1号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線でＪ字文等の曲線的な文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第46図 PL.21	8	1号住居	埋没土	深鉢	胴部片	細砂、細礫	胴部に沈線でＪ字文等の曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第46図 PL.21	9	1号住居	埋没土	深鉢	胴部片	細砂、細礫	胴部に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第46図 PL.21	10	1号住居	埋没土	深鉢	胴部～底部	粗砂	胴部下半が無文となる。	称名寺Ⅱ式
第46図 PL.21	11	2号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂	胴部下半にＬＲの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ４式
第46図 PL.21	12	2号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線でＪ字状等の曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第46図 PL.21	13	2号住居	埋没土	深鉢	胴部片	細砂、細礫	胴部に沈線で曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第46図 PL.21	14	4号住居	床直	深鉢	LI縁部片	粗砂	平LI縁のLI縁に突起をもち、突起部上面の中央に孔とその周囲に両端に刺突をもつ沈線を有する。裏面の突起下には刺突をもち、表面の突起下の肉幅に刺突をもつ。	称名寺Ⅰ式
第46図 PL.21	15	4号住居	床直	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅰ式 加曽利Ｅ式系
第46図 PL.21	16	4号住居	炉体土器	深鉢	LI縁～胴部	粗砂	LI縁部裏面に段をもつ平LI縁で、LI縁下の胴部に沈線でＪ字状やＶ字状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第46図 PL.21	17	4号住居	埋没土	深鉢	LI縁部片	粗砂	平LI縁のLI押が肥厚し、LI縁下に沈線でＪ字状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第46図 PL.21	18	4号住居	床直	深鉢	LI縁部片	粗砂	平LI縁のLI縁部裏面が有段となり、表面のLI縁以下に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第46図 PL.21	19	4号住居	pit	深鉢	LI縁部片	粗砂	直立する平LI縁のLI縁下に隆帯を巡らせてLI縁部無文帯を区画する。	称名寺Ⅱ式
第47図 PL.21	20	4号住居	埋没土	深鉢	LI縁部片	粗砂	幅狭に屈曲する波状LI縁のLI縁部裏面が有段となり、表面のLI縁部に沈線を巡らせて区画し、区画内に刺突列を施す。	称名寺Ⅱ式
第47図 PL.21	21	4号住居	pit	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第47図 PL.21	22	4号住居	床直	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第47図 PL.21	23	4号住居	床直	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第47図 PL.21	24	4号住居	床直	壺？	LI縁～胴部	細砂	波状LI縁で、胴部が大きく屈曲する。LI縁下に沈線を巡わせた隆線で2字状の曲線的な文様を横位に描き、波底部からの８字状貼付文が連結する。注口土器の可能性あり。	称名寺Ⅱ式
第47図 PL.22	25	5号住居	埋没土	深鉢	LI縁～胴部	粗砂	平LI縁のLI縁部が有段となり、LI縁部に円形刺突を巡らせる。以下の胴部に沈線でＪ字状等の文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第47図 PL.22	26	5号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線でＪ字状等の曲線的な文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第47図 PL.22	27	5号住居	埋没土	深鉢	LI縁～胴上半 1/2	粗砂	平LI縁のLI縁下に２条の沈線を巡らせてLI縁部無文帯を区画し、以下の胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第47図 PL.22	28	5号住居	埋没土	深鉢	胴部	粗砂、細礫	胴部の括れ部に沈線を巡らせて文様帯区画し、胴部下半に沈線で渦巻き状の文様を３単位に描き、その間を斜位・弧状の沈線で連結させる。	称名寺Ⅱ式
第47図 PL.22	29	5号住居	埋没土	深鉢	胴部～底部	粗砂	55と同一個体。胴部に沈線で渦巻き状等の曲線的な文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第48図 PL.23	30	5号住居	埋没土	深鉢	LI縁～胴部 1/3	粗砂	平LI縁のLI縁部がやや有段状となり、LI縁下に沈線を巡らせてLI縁部無文帯を区画する。以下の胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第48図 PL.23	31	5号住居	埋没土＋Pit 2・12	深鉢	LI縁～胴部 1/2	粗砂	平LI縁のLI縁以下の胴部に沈線で崩れた曲線的な文様を描き、文様内に刺突を充填する。	称名寺Ⅱ式
第48図 PL.23	32	5号住居	埋没土＋３号 土坑	深鉢	LI縁～胴部 1/3	粗砂	平LI縁のLI縁下に沈線で胴部に沈線でＶ字状ないし刺先文等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第48図 PL.23	33	5号住居	埋没土	深鉢	LI縁～胴部 3/4	粗砂	平LI縁のLI縁以下の胴部に沈線でＪ字状等の曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第49図 PL.24	34	5号住居	埋没土	深鉢	LI縁～胴部 1/2	粗砂	内反ぎみの平LI縁で、LI縁以下の胴部に沈線でＪ字状や刺先状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第49図 PL.24	35	5号住居	埋没土	深鉢	LI縁～胴部 1/2	粗砂	平LI縁のLI縁部が屈曲し、LI縁下に沈線を巡らせてLI縁部無文帯を区画する。以下の胴部に沈線で曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第49図 PL.24	36	5号住居	埋没土	深鉢	LI縁～胴部 1/2	粗砂、細礫	平LI縁のLI縁下に沈線を巡らせてLI縁部無文帯を区画し、以下の胴部に沈線で垂下した区画内に曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第49図 PL.24	37	5号住居	埋没土＋４号 住居？	深鉢	LI縁～胴部	粗砂、細礫	平LI縁のLI縁以下の胴部に沈線でＪ字状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式

図版番号 図版番号	遺物番号	出土遺構	出土位置	器形	部位	胎土	文様の特徴等	摘要
第50図 PL.25	38	5号住居	埋没土	深鉢	口縁～底部	粗砂、細礫	4単位の小波状口縁で、胴部の括れ部で文様帯を分帯し、胴部上半に沈線で渦巻き状ないし入り組み状および逆三角形状の文様を描き、下半に渦巻き状の文様を描く。	称名寺B式
第50図 PL.25	39	5号住居	埋没土	深鉢	口縁～胴部 1/2	粗砂、細礫	4単位の波状口縁の波頂部に、端部に円形刺突をもつ円形の貼付文と沈線をもつ弧状の隆帯を貼付する。口縁下には沈線を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部に3条ないし2条の沈線で波頂下から垂れ下がる渦巻き状の文様を横位に展開させ、文様間に弧状の文様を配する。	称名寺B式
第50図 PL.25	40	5号住居	埋没土	深鉢	口縁～胴部 1/2	粗砂	4単位の波状口縁で口縁部が屈曲する。波頂下に沈線で円形の孔を有し、胴部に沈線で J 字状等の曲線的な文様を描く。	称名寺B式
第50図 PL.25	41	5号住居	周溝構造(床面・Pit2に埋めふむ)	深鉢	口縁～胴部 2/3	粗砂	片波状口縁となる波頂部の先端側面が環状となる突起をもち、突起裏面に円形刺突を配し、頂部は沈線状となる。環状となる両側面には円形刺突をもつ円形状の貼付が2個づつ付く。屈曲する口縁部には一部が小波状となり、その部分に円形刺突をもつ円形状の貼付と沈線が配される。胴部には沈線で逆三角形や J 字状等の文様を描き、下半では文様が弱めに流れる。	称名寺B式
第50図 PL.25	42	5号住居	埋没土	深鉢	口縁～胴部	粗砂、細礫	片波状口縁となる波頂部を欠損し、屈曲する口縁部の一部が小波状となり、その部分に円形刺突をもつ円形状の貼付と沈線が配される。胴部上半には沈線で方形の文様を描き、下半には小さく J 字状の文様が描かれる。	称名寺B式
第50図 PL.25	43	5号住居	埋没土	深鉢	口縁～胴部	細砂	口縁部が屈曲する平口縁で、口縁部に隆帯の貼付をもつ。以下の胴部には沈線で文様が描かれる。	称名寺B式
第50図 PL.25	44	5号住居	埋没土	深鉢	口縁～胴部	粗砂、細礫	4単位の波状口縁で、波頂部上面が中央に刺突をもって凹石円形となる。口縁部は屈曲して段状となり、波頂下に円形刺突を縦位に2個もち、波頂部間に沈線を施す。胴部には波頂下に1条の沈線を垂下させて文様を分帯し、沈線で文様を描く。	称名寺B式
第50図 PL.25	45	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	細砂	口縁部が屈曲する平口縁で、口縁部に隆帯の貼付をもつ。以下の胴部には沈線で文様が描かれる。	称名寺B式
第51図 PL.26	46	5号住居	埋没土	深鉢	口縁～頸部 1/4	粗砂	口縁部が屈曲する平口縁で、口縁以下の胴部に沈線で縦長な方形状の文様を胴部上半と下半に分帯して描く。	称名寺B式
第51図 PL.26	47	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	細砂	波状となる口縁の波頂部に突起をもち、裏面側に刺突と弧状の沈線を有する環状突起となる。波頂部側面に2段に孔をもち、波頂部側面から屈曲する口縁部に沈線と L R の縄文を施す。以下の胴部には沈線で曲線的な文様が描かれ、文様内に L R の縄文を充填する。	称名寺B式
第51図 PL.26	48	5号住居	周溝構造？	深鉢	口縁部片	粗砂	4単位の波状口縁であるが、1カ所が大きい波状となる。この波頂部上面から裏面にかけて S 字状の貼付文が付き、波頂部側面に孔を有する。別の波頂部上面は中央に刺突をもつ小さな円形で、側面に孔を有する。口縁部は屈曲し、以下の胴部に沈線で曲線的な文様を描く。	称名寺B式
第51図 PL.26	49	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	片波状口縁となる波頂部に突起をもち、裏面側に刺突と弧状の沈線を有する環状突起となる。屈曲する口縁部には一部が小波状となり、その部分に円形刺突をつつ円形状の貼付と沈線が配される。	称名寺B式
第51図 PL.26	50	5号住居	埋没土	深鉢	胴部	粗砂、細礫	胴部の括れ部に沈線を巡らせて文様帯区画し、胴部下半に沈線で渦巻き状の文様を3単位に描き、その間を斜位・弧状の沈線で連結させる。	称名寺B式
第51図 PL.26	51	5号住居	埋没土	壺	口縁部	細砂	4単位の波状口縁であるが、1カ所が大きい波状となる。この波頂部上面は中央に刺突をもって凹石円形で、裏面に刺突をもち、表面の波頂下に横状把手を有する。横状把手はさらに頸部下にまで延び、円形刺突をもつ円形の貼付文と沈線をもつ。他の波頂部には刺突をもった円形の隆帯が貼付される。口縁部は有段となり、頸部の括れ部に沈線が巡る。	称名寺B式
第51図 PL.26	52	5号住居	埋没土	深鉢	口縁～胴部	粗砂	波状口縁の波頂部が円環状となり、波頂部上部が粘土紐を捻った X 字状で、その両脇に孔をもつ。口縁部は屈曲して有段となり、先端に円形刺突をもつ沈線が巡る。波頂下には縦みをもつ隆帯が垂下し、下端に円形刺突をもつ円形の貼付文を有する。頸部下に1条の沈線を巡らせて頸部無文帯を区画し、以下の胴部には沈線で渦巻き状の文様を描き、斜位等の沈線で横位に連結する。	称名寺B式
第51図 PL.26	53	5号住居	埋没土	深鉢	口縁～胴部	粗砂	2対の突起を有する平口縁で、1対は大型の環状となる上部に沈線と両脇に円形刺突をもつ円形の貼付文を配し、裏面に両端に刺突をもつ孤状の沈線を施す。別な1対は小型で側面に孔をもち、裏面から表面側へ沈線を施し、脇に円形刺突をもつ円形の貼付文を配する。口縁部は有段となり、頸部の括れ部に沈線を巡らせて口頸部無文帯を区画する。以下の胴部には縦で逆三角形や斜格子状の文様を描く。	称名寺B式
第52図 PL.26	54	5号住居	埋没土＋4号竪土	深鉢	口縁～胴部	粗砂	4単位の波状口縁で、円環状となる波頂部の内、1カ所は上部が粘土紐を捻ったもので、その両脇に円形刺突を配し、下端に孤状の沈線をもつ。他の3カ所は10周りに刺突をもつ沈線を有する。口縁部は有段となり、沈線が巡る。頸部下に2条の沈線を巡らせて頸部無文帯を区画し、8字状の貼付文を5単位に配する。胴部には沈線で渦巻き状の文様を横位に展開させ、さらに斜位等の沈線で連結する。	称名寺B式
第52図 PL.26	55	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部	粗砂	2ヶ所一個体。4単位2対の小波状口縁で、波頂部の1対は上部が粘土紐を捻ったもので、その両脇に円形刺突を配する。別の1対は粘土紐を縦位に捻ったもの。口縁部は屈曲して有段となり、沈線が巡る。頸部下に間に刺突列をもつ2条の沈線を巡らせて頸部無文帯を区画し、以下の胴部には沈線で文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺B式
第52図 PL.27	56	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部	粗砂	4単位の波状口縁で、波頂部に孔をもち、孔の上部に円形刺突をもつ円形の貼付文を両端に配した孤状の沈線を有する。口縁部は有段となり、波頂間に円形刺突をもつ円形の貼付文を配して分割し、稍円文や横位の沈線を施す。頸部は無文で、頸部下に沈線が巡る。	称名寺B式
第52図 PL.27	57	5号住居	埋没土	深鉢	口縁～胴部	粗砂	平口縁の頸部括れ部に沈線を巡らせて口頸部無文帯を区画し、以下の胴部に沈線文様を描く。	称名寺B式
第52図 PL.27	58	5号住居	埋没土	小型壺？	口縁～頸部	粗砂	片波状口縁の小型坪で、口縁部が屈曲し、波頂および波頂脇に隆帯で結縄状の貼付をもち、その下に縦位の沈線と刺突をもつ横状把手を有する。横状把手は対面側にも付く。頸部の括れ部に沈線を巡らせて文様帯区画し、以下の胴部文様は4単位で、上半に曲線的な文様を描き、下半に J 字状や渦巻き状の文様を描く。文様内には L R の縄文を充填する。	称名寺B式

図版番号 図版番号	遺物番号	出土遺構	出土位置	器形	部位	胎土	文様の特徴等	摘要
第52図 PL.27	59	5号住居	埋没土	壺？	口縁～胴部	細砂	4単位の小波状口縁で口縁部が有段となり、頸部裏面が屈曲する受け口状となる。波頂部の表裏面には円形刺突をもつ円形小貼付文を配し、表面の波頂下胴部に縦位の隆帯をもち、その下端に両端に刺突をもつ弧状の沈線を施す。頸部下に沈線を巡わせた隆帯を巡らせて口縁部から頸部の無文帯を区画し、以下の胴部にかさな波状をもつ逆三角形小渦巻き状の曲線的な文様を描く。文様内には LR の縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第52図 PL.27	60	5号住居	埋没土	壺	口縁～胴部	粗砂、細礫	4単位の小波状口縁で口縁部が有段となり、口縁部裏面に突出する受け口状が巡る。波頂部から頸部下に橋状肥手が付き、肥手には円形刺突をもつ円形小貼付文を配し弧状の沈線が巡る。結れる頸部下には隆帯が巡り、1.頸部無文帯を区画する。以下の胴部に沈線で渦巻き状の曲線的な文様を描き、文様内には LR の縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第52図 PL.27	61	5号住居	埋没土	壺	口縁～胴部 1/2	粗砂、細礫	短く優力に外反する小波状口縁の頸部裏面に屈曲する受け口が巡る。頸部下に隆帯を巡らせて口縁部から頸部の無文帯を区画し、波頂部からの橋状肥手が5単位に配される。胴部は無文。	称名寺Ⅱ式
第53図 PL.27	62	5号住居	埋没土	壺	口縁～胴部	粗砂、細礫	片波状口縁で口縁部が有段となる。波頂部には孔を有し、渦巻き状の曲線的な隆帯が垂れ下がり、裏面も孔の周囲が隆帯状となる。この垂れ下がった隆帯から頸部の括れ部に隆帯を巡らせて頸部無文帯を区画し、波頂部に帯する胴部には口縁部からの橋状肥手が付き、波頂部と橋状肥手の間に円形刺突をもつ円形小貼付文を配する。胴部文様には波頂下と円形貼付文をおよび橋状肥手を区画帯とし、沈線で方形の無文部を区画し、さらに胴部下半にも同様に描く。この方形区画によって十字状の区画が創出され、その区画内に刺突を充填する。	称名寺Ⅱ式
第53図 PL.27	63	5号住居	埋没土+32号土坑	壺	口縁部片	細砂	胴部上半から口縁にかけて直線的に内径する平口縁の壺で、裏面口縁下に突出した受け口が巡る。口縁部は有段となる無文で、その下に隆帯が巡り文様帯を区画する。また、口縁部からこの隆帯へは刺突と弧状の沈線を配した環状となる橋状肥手が付き、別に円形刺突をもつ円形小貼付文が配される。内部する胴部上半には隆帯で渦巻き状となる曲線的な文様が横位に描かれ、円形刺突をもつ円形小貼付文が配される。	称名寺Ⅱ式
第53図 PL.27	64	5号住居	埋没土	壺	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁部が有段となり、裏面口縁下に突出した受け口が巡る。口縁部に橋状肥手が付き、円形刺突をもつ円形小貼付文を配する。頸部括れ下には隆帯を沈線が巡り、1.1・頸部無文帯を区画する。以下の胴部に沈線で文様を描き、文様内に LR の縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第53図 PL.28	65	5号住居	埋没土＋4号住＋3号竪土	深鉢	口縁～胴部 1/2	粗砂、細礫	4単位の小波状口縁の口縁下に沈線を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部に縦位の波状に条線で描く。	称名寺Ⅱ式
第53図 PL.28	66	5号住居	埋没土	深鉢	口縁～胴部 1/4	粗砂	平口縁の口縁下の胴部に縦位の波状に条線で描く。	称名寺Ⅱ式
第54図 PL.28	67	5号住居	埋没土＋9号土坑	深鉢	口縁～胴部 1/2	粗砂、細礫	直立する平口縁の口縁下に沈線を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部に条線を縦位に垂下させる。	称名寺Ⅱ式 加曽利E式系
第54図 PL.28	68	5号住居	埋没土＋P1t3	深鉢	口縁～胴部	粗砂	0と同一個体。直立する平口縁の口縁下に隆帯を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下に対向する弧状の隆帯を垂下させ、区画内には LR の縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式 加曽利E式系
第54図 PL.29	69	5号住居	埋没土＋P1t4	深鉢	口縁～胴部	粗砂	68と同一個体。直立する平口縁の口縁下に隆帯を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下に対向する弧状の隆帯を垂下させるが、文様が崩れ、区画内には LR の縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式 加曽利E式系
第55図 PL.29	70	5号住居	埋没土	深鉢	口縁～胴部	粗砂	直立する平口縁の口縁下に隆帯を巡らせて口縁部無文帯を区画し、円形刺突をもつ円形小貼付文を配する。以下の胴部には円形貼付文下に左右に対向する弧状の隆帯を連続的に垂下させ、その交点に円形刺突をもつ円形小貼付文を配する。	称名寺Ⅱ式 加曽利E式系
第55図 PL.30	71	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部	粗砂	2と同一個体。4単位2対の小波状口縁で、波頂部の1対は粘土紐を横位に捻ったもので、その両端に円形刺突を配する。別の1対は粘土紐を縦位に捻ったもの。口縁部は屈曲して有段となり、沈線が巡る。頸部下に隆帯を巡らせて頸部無文帯を区画し、以下の胴部には沈線で文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第56図 PL.30	72	5号住居	埋没土	深鉢	口縁～胴部	粗砂、細礫	平口縁の口縁下に刺突圧痕をもつ隆帯巡らせて口縁部無文帯を区画し、一部に円形刺突を配して同様の隆帯を張出にもつ。以下の胴部は無文。	称名寺Ⅱ式 加曽利E式系
第56図 PL.30	73	5号住居	埋没土	深鉢	口縁～胴部	粗砂	直立する平口縁の口縁下に刺突圧痕をもつ隆帯巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部は無文。	称名寺Ⅱ式 加曽利E式系
第56図 PL.31	74	5号住居	埋没土	注口土器	口縁部	粗砂	大きく屈曲して内反し、口縁が僅かに直立する浅鉢で、注口部は欠してないが注口土器と思われる。平口縁で突起を有するが、突起は注口部の上部に1カ所か、帯する器の2カ所の可能性もある。突起のほとんどを欠するが、76に近い突起と考えられる。突起下には橋状肥手も付くようである。直立する口縁部は無文で、肩部に沈線で曲線的な文様を数単位描き、その間を楕円状に沈線で描き、文様内に LR の縄文を充填する。屈曲部には刺突が巡り文様帯を区画する。	称名寺Ⅱ式
第56図 PL.31	75	5号住居	埋没土	浅鉢	口縁～胴部	粗砂、細礫	4単位の波状口縁で、口縁部裏面が有段となる。波頂下には円形の孔とその周囲を取り巻く隆帯が左側へ流れるようにあり、隆帯の先は口縁下を巡る隆帯として口縁部無文帯を区画する。さらに、波頂下左脇の口縁部無文帯には三角状の孔を有する。胴部には LR の縄文を施す。	称名寺Ⅱ式
第57図 PL.31	76	5号住居	埋没土	注口土器	口縁部	粗砂	大きく屈曲して内反する浅鉢の注口土器で、4単位の波状口縁となる波頂部に同様の突起が付く。突起は右側に孔をもった横長で、上面の中央が大きく凹み、その周りを先端に刺突をもった沈線が巡る。また、突起の横長部分から1対所に沈線をもつ。突起下には大小2段に橋状肥手をもち、口縁下と屈曲部に梨状を巡らせて口縁部文様帯を区画する。口縁部文様には両端に刺突をもつ沈線を有する縦位の隆帯を配して分割し、橋状肥手と縦位隆帯の間に一方に円形刺突をもつ円形貼付文を配した楕円状を沈線で描く。突起下の橋状肥手下に先端の短い注口部をもつ。	称名寺Ⅱ式
第57図 PL.31	77	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	細砂、細礫	波状口縁の波頂下に刺突と沈線をもつ弧状の隆帯を結節状に段違いに貼付し、隆帯上に LR の縄文を充填する。口縁下に沈線で長楕円状に巡らせ、以下に沈線で文様を描き、文様内に LR の縄文を充填する。	称名寺Ⅰ式
第57図 PL.31	78	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫	波状口縁の波頂部に裏面から表面にかけて8字状となる逆れた隆帯を貼付し、表面には LR の縄文を充填する。口縁下には隆線が巡り、口縁部無文帯を区画する。	称名寺Ⅰ式
第57図 PL.31	79	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	波状口縁の波頂部に8字状の隆帯が貼付され、口縁下に隆帯を巡らせて刺突帯を区画する。	称名寺Ⅰ式

図版番号 図版番号	遺物番号	出土遺構	出土位置	器形	部位	胎土	文様の特徴等	摘要
第57図 PL.31	80	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	波状口縁の波頂部上面が袋状の環状となり、先端に刺突をもつ弧状の沈線をもち、波頂下を含めた口縁下には沈線で文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅰ式
第57図 PL.31	81	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	波状口縁の波頂部が袋状となり、上面に刺突をもつ弧状の沈線が巡り、裏面の両脇に刺突を有する。表面の波頂下に刺突と沈線をもつ弧状の隆帯が胴部状に貼付し、口縁下に沈線が巡る。	称名寺Ⅰ式
第57図 PL.31	82	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	波状口縁の波頂部上面が袋状の環状となり、先端に刺突をもつ弧状の沈線をもつ。波頂下を含めた口縁下には沈線で文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅰ式
第57図 PL.31	83	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	波状口縁の波頂部上面が袋状の環状となり、沈線が巡る。波頂部から側内をも隆帯が垂下し、文様を分帯する。口縁下には無文帯と刺突列帯を隆線で区画し、以下に沈線で文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅰ式
第57図 PL.31	84	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	細砂	85と同一個体。波状口縁の波頂部正面が円形となり、中央に線形刺突とその周囲を沈線が巡る。表面の波頂下には刺突をもつ隆帯が垂下して文様を分帯し、口縁下に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅰ式
第57図 PL.31	85	5号住居	pit	深鉢	口縁部片	細砂	84と同一個体。波状口縁の波頂部上面が円形となり、中央に刺突と周囲に沈線が巡る。波頂下から刺突をもつ隆帯が垂下し、文様を分帯する。口縁下には沈線が巡り、その下に沈線で文様を描き、文様内に縄文を充填する。	称名寺Ⅰ式
第57図 PL.31	86	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	細砂	波状口縁の波頂下に孔をもち、裏面側がやや袋状となる。裏面に両端に刺突をもつ弧状の沈線を有する。波頂部の孔の周りに外つと弧状の沈線をもち、波頂下の胴部には刺突列が縦位に垂下し文様を分帯する。文様は沈線で描かれ、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅰ式
第58図 PL.31	87	5号住居	埋没土+62号土坑	深鉢	口縁～胴部	粗砂	直立する平口縁の口縁以下に沈線で丁字状の文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第58図 PL.31	88	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部に沈線でＶ字状等の文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第58図 PL.31	89	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁以下の胴部に沈線で文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第58図 PL.31	90	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部に沈線で文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第58図 PL.31	91	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫	平口縁の口縁下に沈線でＶ字状等の文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第58図 PL.31	92	5号住居	埋没土＋４号住居	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部に沈線で丁字状の文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第58図 PL.31	93	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫	波状口縁の口縁下に沈線で曲線的な文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第58図 PL.32	94	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁以下の胴部に沈線で文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第58図 PL.32	95	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線で丁字状等の文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第58図 PL.32	96	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部に沈線で三角状の文様を描き、文様内に刺突を充填する。	称名寺Ⅱ式
第58図 PL.32	97	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	97～100は同一個体。平口縁の口縁部が有段となり、頸部の括れ部に２条の沈線を巡らせて口・頸部の無文帯を区画し、以下の胴部に２条の沈線で逆三角形状の文様を描き、文様内に刺突を充填する。	称名寺Ⅱ式
第58図 PL.32	98	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	97～100は同一個体。平口縁の口縁部が有段となり、頸部の括れ部に２条の沈線を巡らせて口・頸部の無文帯を区画し、以下の胴部に２条の沈線で逆三角形状の文様を描き、文様内に刺突を充填する。	称名寺Ⅱ式
第58図 PL.32	99	5号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂	97～100は同一個体。胴部に２条の沈線で逆三角形状の文様を描き、文様内に刺突を充填する。	称名寺Ⅱ式
第58図 PL.32	100	5号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂	97～100は同一個体。胴部に２条の沈線で逆三角形状の文様を描き、文様内に刺突を充填する。	称名寺Ⅱ式
第58図 PL.32	101	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫	平口縁の口縁下に刺突圧痕をもつ隆帯を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部に沈線で丁字状の文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式 加曽利Ｅ式系
第58図 PL.32	102	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	直立する平口縁の口縁下に刺突圧痕をもつ隆帯巡らせて口縁部無文帯を区画し、「８」字状の渦付文を配する。以下の胴部には沈線で丁字状等の文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第58図 PL.32	103	5号住居	埋没土+52号土坑	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で丁字状等の曲線的な文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第58図 PL.32	104	5号住居	埋没土	深鉢	胴部	粗砂	胴部に沈線で丁字状の文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第58図 PL.32	105	5号住居	埋没土＋４号住＋20号土	深鉢	胴部片	粗砂	口縁下に沈線を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部に沈線で文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第58図 PL.32	106	5号住居	埋没土＋42号土坑	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部に沈線で縦位および曲線的な文様を描き、文様間に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第58図 PL.32	107	5号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で鋸歯状ないし三角状の文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第59図 PL.33	108	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部に沈線で丁字状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第59図 PL.33	109	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁以下の胴部に沈線で文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第59図 PL.33	110	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁以下の胴部に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第59図 PL.33	111	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第59図 PL.33	112	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁以下の胴部に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第60図 PL.33	113	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部に沈線で曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第60図 PL.33	114	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部に沈線で丁字状の文様を描く。	称名寺Ⅱ式

図版番号 図版番号	遺物番号	出土遺構	出土位置	器形	部位	胎土	文様の特徴等	摘要
第60図 PL.33	115	5号住居	埋没土	深鉢	Ll縄部片	粗砂、細礫	突起をもつ平LR縄のLl縄下に沈線で曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第60図 PL.33	116	5号住居	Pit 3	深鉢	LR縄部片	粗砂	平LR縄のLl縄下に沈線でJ字状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第60図 PL.33	117	5号住居	埋没土	深鉢	LR縄部片	粗砂	平LR縄のLl縄下に沈線でJ字状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第60図 PL.33	118	5号住居	埋没土	深鉢	LR縄部片	粗砂、細礫	平LR縄のLl縄下に刺突圧痕をもつ隆帯巡らせてLl縄部無文帯を区画し、以下の胴部に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式 加曽利E式系
第60図 PL.33	119	5号住居	埋没土	深鉢	LR縄部片	粗砂	波状Ll縄の波頂部が突起状となり、突起は中央と両脇に孔を有し、表裏面に刺突と弧状の沈線をもつ。Ll縄下にはLR縄でJ字状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第60図 PL.33	120	5号住居	埋没土	深鉢	LR縄部片	粗砂	平LR縄のLl縄下に沈線で刺先文等の文様を描き、文様内にLR縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第60図 PL.33	121	5号住居	埋没土	深鉢	LR縄部片	粗砂	平LR縄のLl縄部が有段状となり、以下の胴部に沈線でV字状やJ字状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第60図 PL.33	122	5号住居	埋没土	深鉢	LR縄部片	細砂	平LR縄のLl縄下に沈線でV字状の文様を描き、文様内にLR縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第60図 PL.33	123	5号住居	埋没土	深鉢	LR縄部片	粗砂	平LR縄のLl縄下に沈線を巡らせてLl縄部無文帯を区画し、以下の胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様内にLR縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第60図 PL.33	124	5号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部に沈線でJ字状等の曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第60図 PL.33	125	5号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部に沈線でJ字状等の曲線的な文様を描き、その下端を下に開放する。	称名寺Ⅱ式
第60図 PL.33	126	5号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部に沈線でJ字状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第61図 PL.33	127	5号住居	埋没土	深鉢	胴部片	細砂	胴部に沈線で曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第61図 PL.33	128	5号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線でV字状やJ字状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第61図 PL.33	129	5号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂	胴部下半に沈線でJ字状等の曲線的な文様を描き、文様間にLR縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第61図 PL.34	130	5号住居	埋没土	深鉢	LR縄部片	粗砂、細礫	平LR縄のLl縄下に沈線で曲線的な文様を描き、地文にLR縄文を施す。	称名寺Ⅱ式
第61図 PL.34	131	5号住居	埋没土	深鉢	LR縄部片	細砂	平LR縄のLl縄に大きな突起をもち、突起の中央には三角状の孔を有し、頂部に弧状の沈線をもつ隆帯を巡れた環状に貼付する。突起頂面には両端に刺突をもつ横位V字状の沈線を施す。Ll縄以下には沈線でJ字状等の文様を描き、文様内にLR縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第61図 PL.34	132	5号住居	埋没土	深鉢	LR縄部片	粗砂	波状Ll縄の波頂部側縁に沈線で区画してLR縄文を充填する。Ll縄下には波頂下に1条の沈線を垂下させて文様を分帯し、沈線で文様を描き、文様内にLR縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第61図 PL.34	133	5号住居	埋没土	深鉢	LR縄部片	粗砂	平LR縄のLl縄に環状の突起をもち、突起の上端に刺突をもつ沈線、裏面に刺突と弧状の沈線を有する。Ll縄部裏面は有段となり、刺突をもつ円形の貼付文を配し、その間を沈線が巡る。Ll縄下には沈線を巡らせてLl縄部無文帯を区画し、刺突をもつ円形の貼付文を配する。以下の胴部には沈線で曲線的な文様を描き、文様内にLR縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第61図 PL.34	134	5号住居	埋没土	深鉢	LR縄部片	細砂	平LR縄のLl縄部が有段となり、括れた頭部下に3条の沈線を巡らせて頭部無文帯を区画し、縦位沈線をもつ貼付文を配する。以下の胴部に3条の沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第61図 PL.34	135	5号住居	埋没土	深鉢	LR縄部片	粗砂	平LR縄の抽出するLl縄部に孔をもつ2個の突起を有し、以下の胴部に沈線でV字状やJ字状の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第61図 PL.34	136	5号住居	埋没土	深鉢	LR縄部片	粗砂	平LR縄のLl縄部が抽出し、Ll縄下に沈線でJ字状等の文様を描き、文様内にLR縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第61図 PL.34	137	5号住居	埋没土	深鉢	LR縄部片	粗砂、細礫	平LR縄の表裏面のLl縄部が有段となり、裏裏面面のLl縄部に円形刺突をもつ円形の貼付文を2個配し、裏面では1条、表面では2条の沈線がその間を巡る。Ll縄以下の胴部には沈線でJ字状の曲線的な文様が描かれる。	称名寺Ⅱ式
第61図 PL.34	138	5号住居	埋没土	深鉢	LR縄部片	粗砂	平LR縄のLl縄に突起をもち、表裏Ll縄部が有段となる。突起裏面に円形刺突をもち、Ll縄裏面に沈線を施す。突起の表面には隆帯に刺突をもつ横位5字状の沈線を施し、その両脇に円形刺突をもつ円形の貼付文を配する。頭部以下には沈線で曲線的な文様を描き、文様内にLR縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第61図 PL.34	139	5号住居	埋没土	深鉢	LR縄部片	細砂	平LR縄の稲状なLl縄部が抽出し、Ll縄部に円形刺突をもつ円形の貼付文を4単位配し、その間に沈線を巡らせる。頭部下に沈線を巡らせて頭部無文帯を区画する。	称名寺Ⅱ式
第61図 PL.34	140	5号住居	埋没土	深鉢	LR縄部片	粗砂	平LR縄のLl縄部が有段となり、Ll縄部に2個の円形刺突を配し、その間を沈線が巡る。Ll縄以下の胴部には沈線でJ字状が描かれる。	称名寺Ⅱ式
第61図 PL.34	141	5号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	頭部下の括れ部に沈線を2条巡らせ、胴部下半に沈線でJ字状等の曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第61図 PL.34	142	5号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線でJ字状等の曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第61図 PL.34	143	5号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂	胴部下半に沈線でJ字状等の曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第61図 PL.34	144	5号住居	周溝構造？	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部下半に沈線でJ字状等の曲線的な文様を描き、文様間に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第61図 PL.34	145	5号住居	埋没土	深鉢	LR縄部片	粗砂	胴部下半に沈線で小さなJ字文をもつ曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第62図 PL.34	146	5号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂	胴部下半に沈線でJ字状等の曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第62図 PL.34	147	5号住居	埋没土	深鉢	LR縄部片	粗砂	頭部に縦位の単沈線を横位に充填し、頭部下の括れ部に沈線を巡らせて文様帯を区画する。	称名寺Ⅱ式
第62図 PL.34	148	5号住居	埋没土	深鉢	LR縄部片	粗砂	平LR縄のLl縄部が有段となり、Ll縄部に縦位の貼付文を配し、その間を2条の沈線が巡る。頭部は無文帯となるが、補修孔をもつ。	称名寺Ⅱ式

図版番号 図版番号	遺物番号	出土遺構	出土位置	器形	部位	胎土	文様の特徴等	摘要
第62図 PL.34	149	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁部が肉役となり、口縁部に２条の沈線で区画し、区画内に刺突列をもつ。頸部は無文帯。	称名寺Ⅱ式
第62図 PL.34	150	5号住居	埋没土+Pit 8	深鉢	口縁部片	粗砂	欠損するが、突起をもつ平口縁の口縁部が肉役となり、頸部は無文。頸部下に沈線を沿わせた隆帯を巡らせて文様帯区画し、突起下に弧状の沈線をもつ大きな円形の貼付文を配する。胴部には沈線で文様を描くが、その交点に円形刺突をもつ円形の貼付文を配する。	称名寺Ⅱ式
第62図 PL.34	151	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	128と同一個体。頸部は無文帯で、頸部下に低い隆帯を巡らせて文様帯を区画する。隆帯には中央に孔と周囲に弧状の沈線をもつ突起を有する。隆帯下には３条の沈線が巡り、突起下に半円状の文様を描く。また、胴部には３条の沈線で曲線的な文様を描き、ＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第62図 PL.34	152	5号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂	頸部下の括れ部に沈線を３条巡らせ、円形刺突をもつ円形の貼付文を配する。胴部下半に沈線で小さな J 字状の文様をもつ曲線的な文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第62図 PL.34	153	5号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂	胴部下半に沈線で入り組み状等の曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第62図 PL.34	154	5号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線を３条巡らせ、その下に沈線で曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第62図 PL.34	155	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫	直立する平口縁の口縁下に刺突圧痕をもつ隆帯を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部に条線を縦位に施す。	称名寺Ⅱ式 加曽利Ｅ式系
第62図 PL.34	156	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫	直立する平口縁の口縁下に沈線を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部に条線を縦位に施す。	称名寺Ⅱ式 加曽利Ｅ式系
第62図 PL.35	157	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫	平口縁の口縁下に刺突圧痕をもつ隆帯を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部に条線で縦位に波状の文様を描く。	称名寺Ⅱ式 加曽利Ｅ式系
第62図 PL.35	158	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部に沈線で斜格子状の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第62図 PL.35	159	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部に沈線で斜格子状の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第62図 PL.35	160	5号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂	口縁下に沈線を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部に沈線で斜格子状の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第62図 PL.35	161	5号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で斜位に文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第63図 PL.35	162	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫	平口縁の口縁下に突出部を配した隆線を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部にＲＬの縄文を施す。	称名寺Ⅱ式
第63図 PL.35	163	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に隆線を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部に隆線を弧状に縦位に垂下させる。	称名寺Ⅱ式
第63図 PL.35	164	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫	平口縁の口縁下に刺突圧痕をもつ隆帯を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部に条線を施す。	称名寺Ⅱ式 加曽利Ｅ式系
第63図 PL.35	165	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫	内反ぎみの平口縁の口縁下に刺突圧痕をもつ隆帯巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部は無文。	称名寺Ⅱ式 加曽利Ｅ式系
第63図 PL.35	166	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	やや内傾ぎみの平口縁の口縁下に刺突圧痕をもつ隆帯巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部は無文。	称名寺Ⅱ式 加曽利Ｅ式系
第63図 PL.35	167	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	直線的に内反する波状口縁の波頂部に円形刺突をもち、その下に刺突圧痕をもつ隆帯を垂下させる。口縁下には同様の刺突圧痕隆帯を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部に隆帯で文様を描く。	称名寺Ⅱ式 加曽利Ｅ式系
第63図 PL.35	168	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫	平口縁の口縁下に刺突圧痕をもつ隆帯を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部に同様の隆帯で対向する悪弧状の曲線的な文様を縦位に施す。	称名寺Ⅱ式 加曽利Ｅ式系
第63図 PL.35	169	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	直立する平口縁の口縁の一部に隆部に刺突をもつ沈線を有し、口縁下に刺突圧痕をもつ隆帯を巡らせて口縁部無文帯を区画する。また、口縁の沈線下には同様の隆帯で C 字状の文様を描き、その下部から同様の隆帯を垂下させる。なお、隆帯の交点には円形刺突をもつ円形の貼付文が配される。	称名寺Ⅱ式 加曽利Ｅ式系
第63図 PL.35	170	5号住居	埋没土	壺	口縁部片	細砂	短く僅かに外反する平口縁の口縁部裏面に突出する受け口が巡る。頸部下に隆帯を巡らせて口縁部から頸部の無文帯を区画し、以下に隆帯で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第63図 PL.35	171	5号住居	埋没土	壺	口縁部片	粗砂	短く外反する平口縁で、裏面の口縁下には受け口状の段が突出して巡る。口縁部には突起状となる橋状把手が付き、頸部括れ下に隆帯が巡り、口・頸部間無文帯を区画する。以下の胴部に隆帯で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第63図 PL.35	172	5号住居	埋没土	壺	口縁部片	粗砂、細礫	短く外反する波状口縁で、裏面の口縁下には受け口状の段が突出して巡る。口縁部には波頂部から沈線をもつ橋状把手が付き、内径する頸部下に隆帯が巡り、口・頸部無文帯を区画する。	称名寺Ⅱ式
第63図 PL.35	173	5号住居	埋没土	壺	口縁部片	細砂	口縁部が屈曲する平口縁に突起をもち、括れる頸部裏面に突出する受け口が巡る。突起は中央に円形刺突をもち、円形の貼付による。突起下に橋状把手をもち、頸部下に隆帯が巡る。	称名寺Ⅱ式
第63図 PL.35	174	5号住居	埋没土	壺	口縁部片	細砂	口縁部が屈曲する平口縁で、括れる頸部裏面が受け口状となる。口縁部下に刺突と孔を有した橋状把手をもち、頸部下に隆帯が巡る。	称名寺Ⅱ式
第63図 PL.35	175	5号住居	埋没土	壺	肩部片	粗砂	頸部下に沈線が巡り、肩部以下に沈線で J 字状の曲線的な文様を描き、文様の先端に円形の貼付文をもつ。また、文様内にＬＲの縄文を充填し、部分的に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第63図 PL.35	176	5号住居	埋没土	壺	胴部片	細砂	胴部上半に沈線で方形区画し、区画内に曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第64図 PL.35	177	5号住居	埋没土	鉢	口縁部片	粗砂	妨C母土坑6と同一個体。大きく内反する平口縁の口縁下に隆帯を縦面状に巡らせ、隆帯の頂部に刺突をもつ、縦面状の隆帯の内側には沈線で三角状に区画し、小さな J 字文を描く。	称名寺Ⅱ式
第64図 PL.35	178	5号住居	埋没土	鉢	口縁部片	粗砂、細礫	内反する平口縁の口縁下に沈線を沿わせた隆帯を巡らせて口縁部文様帯を区画し、同様の隆帯で縦面状や曲線的な文様を描き、その交点に円形刺突を加える。	称名寺Ⅱ式
第64図 PL.36	179	5号住居	埋没土	浅鉢	口縁部片	粗砂	屈曲して内反する波状口縁の波頂下付近に円形刺突をもち、口縁下に２条の沈線で区画し、区画内に縦位の刻み を施す。屈曲部には刺突を巡らせ、以下の胴部は無文。	称名寺Ⅱ式
第64図 PL.36	180	5号住居	埋没土	鉢	口縁部片	粗砂	内反する平口縁の口縁下に円形刺突をもつ円形の貼付文を配した、沈線で横長な楕円状の文様を描く。	称名寺Ⅱ式

図版番号 図版番号	遺物番号	出土遺構	出土位置	器形	部位	胎土	文様の特徴等	摘要
第64図 PL.36	181	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂、雲母	直立する平口縁で、同部がやや膨れる無文。	称名寺Ⅱ式
第64図 PL.36	182	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂、雲母	直立する平口縁で、同部がやや膨れる無文。	称名寺Ⅱ式
第64図 PL.36	183	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	雲母	波状となる口縁の波頂部に突起をもち、裏面側に刺突と弧状の沈線を有する環状突起となる。	称名寺Ⅱ式
第64図 PL.36	184	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	波状となる口縁の波頂部に突起をもち、裏面側に刺突と弧状の沈線を有する環状突起となる。波頂部側面にも孔をもつ。	称名寺Ⅱ式
第64図 PL.36	185	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	雲母	波状となる口縁の波頂部に突起をもち、裏面側に円形刺突をもつ円形の貼付文と弧状の沈線を有する環状突起となる。波頂部側面には刺突をもつ。	称名寺Ⅱ式
第64図 PL.36	186	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂、雲母	波状となる口縁の波頂部に突起をもち、裏面側に両端に刺突をもつ弧状の沈線を有する環状突起となり、孔をあくもつ。波頂部側面には円形の刺突と孔をもつ。	称名寺Ⅱ式
第64図 PL.36	187	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	雲母	波状となる口縁の波頂部に突起をもち、裏面側に両端に刺突をもつ円形の貼付文と弧状の沈線を有する環状突起となる。波頂部上端にも孔をもつ。	称名寺Ⅱ式
第64図 PL.36	188	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	波状となる口縁の波頂部に突起をもち、裏面側に両端に刺突をもつ弧状の沈線を有する環状突起となる。	称名寺Ⅱ式
第64図 PL.36	189	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	波状となる口縁の波頂部裏面側に環状突起をもつ。	称名寺Ⅱ式
第64図 PL.36	190	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	雲母、粗砂	波状となる口縁の波頂部に突起をもち、裏面側に先端に刺突をもつ弧状の沈線を有する環状突起となる。波頂部側面には孔をもつ。	称名寺Ⅱ式
第64図 PL.36	191	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	波状となる口縁の波頂部に突起をもち、裏面側に刺突と弧状の沈線を有する環状突起となり、孔をあくもつ。波頂下には沈線で曲線的な文様が描かれる。	称名寺Ⅱ式
第64図 PL.36	192	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	波状となる口縁の波頂部に突起をもち、裏面側に刺突と弧状の沈線を有する環状突起となる。裏面突起下に刺突、波頂部側面に孔をもつ。	称名寺Ⅱ式
第64図 PL.36	193	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	雲母、粗砂	波状となる口縁の波頂部裏面に両端に刺突をもつ弧状の沈線を有する。波頂部側面に2段に孔をもち、先端に刺突をもつ弧状の沈線をもつ。波頂下には沈線で曲線的な文様が描かれ、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第64図 PL.36	194	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	波状となる口縁の波頂部に突起をもち、裏面側に弧状の沈線を有する環状突起となる。波頂部側面には上端と下端に孔をもち、波頂部表面に溝状の沈線を有する。	称名寺Ⅱ式
第64図 PL.36	195	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	波状となる口縁の波頂部に突起をもち、裏面側に刺突をもつ弧状の沈線を有する環状突起となる。波頂部側面に孔をもつ。	称名寺Ⅱ式
第64図 PL.36	196	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	雲母、粗砂	波状となる口縁の波頂部裏面側に環状突起をもつ。	称名寺Ⅱ式
第64図 PL.36	197	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	雲母、粗砂	波状となる口縁の波頂部が裏面を向く厚面状となり、目は両側面に大きな円形刺突とそれを取り巻く沈線、口は沈線で倒み状に表現する。裏面の頂面下には円形刺突をもつ。口縁部には波頂部側面の円形刺突を先端とする沈線が巡る。	称名寺Ⅱ式
第64図 PL.36	198	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	雲母、粗砂、雲母	波状となる口縁の波頂部に突起をもち、裏面側に弧状の沈線を有する環状突起となる。波頂下には沈線で文様が描かれる。	称名寺Ⅱ式
第64図 PL.36	199	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	雲母、粗砂、雲母	波状となる口縁の波頂部に突起をもち、裏面側に両端に刺突をもつ弧状の沈線を有する環状突起となる。波頂部側面には刺突をもち、波頂部表面に両端に刺突をもつ沈線を縦位に施す。	称名寺Ⅱ式
第64図 PL.36	200	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	波状口縁の波頂部が突起状となり、突起は帯を巻くように上面が円形となる。突起の裏面に円形刺突をもち、表面の両側面に孔を有する。口縁部は有段となり、2条の沈線とその間に刺突列が巡る。頸部は無文。	称名寺Ⅱ式
第65図 PL.36	201	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の表裏口縁部が有段となり、環状突起が付く。突起は帯状が付くX字状で、沈線をもち、両端に円形刺突をもつ円形の貼付文を配する。口縁部には沈線が巡る。	称名寺Ⅱ式
第65図 PL.36	202	5号住居	埋没土	注口土器	口縁部片	粗砂	波状口縁の波頂部が環状の突起状となり、突起には両端に刺突をもつ円形貼付文を配した弧状の沈線を有する。突起下に先端の短い注口部をもつ。	称名寺Ⅱ式
第65図 PL.36	203	5号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂、雲母	波状口縁の波頂下に孔をもち、裏面側が平円状となり、その両側に刺突をもつ。波頂部の表面には円形刺突をもつ弧状の沈線を有し、口縁部には波頂部側面の孔を先端とする沈線が巡る。	称名寺Ⅱ式
第65図 PL.36	204	5号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂、雲母	204～206は同一個体。胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様の先端に円形刺突をもつ円形貼付文をもち、文様以外の部分に刺突を施す。	三十稲場式
第65図 PL.36	205	5号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂、雲母	204～206は同一個体。胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様以外の部分に刺突を施す。	三十稲場式
第65図 PL.36	206	5号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂、雲母	204～206は同一個体。胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様以外の部分に刺突を施す。	三十稲場式
第65図 PL.36	207	5号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に細かな刺突を施す。	三十稲場式
第65図 PL.36	208	5号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂	208～210は同一個体。胴部に刺突を施す。	三十稲場式
第65図 PL.36	209	5号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂	208～210は同一個体。胴部に刺突を施す。	三十稲場式
第65図 PL.36	210	5号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂	208～210は同一個体。胴部に刺突を施す。	三十稲場式
第65図 PL.36	211	5号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に刺突を施す。	三十稲場式
第65図 PL.36	212	5号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に細かな刺突を施す。	三十稲場式
第65図 PL.36	213	5号住居	埋没土	深鉢	胴～底部	粗砂	胴部下半に沈線が垂下する底部。	称名寺式
第65図 PL.36	214	5号住居	埋没土	深鉢	胴～底部	粗砂、雲母	胴部下半に沈線が垂下する底部。	称名寺式
第65図 PL.36	215	5号住居	箱状遺構	深鉢	胴～底部	雲母、粗砂	胴部に沈線で曲線的な文様が描かれる。	称名寺式

図版番号 図版番号	遺物番号	出土遺構	出土位置	器形	部位	胎土	文様の特徴等	摘要
第65図 PL.36	216	5号住居	埋没土	深鉢	胴～底部	粗砂、細礫	胴部下半が無文の底部。	称名寺式
第65図 PL.37	217	5号住居	埋没土	深鉢	胴～底部	粗砂、細礫	胴部下半が無文の底部。	称名寺式
第65図 PL.37	218	5号住居	埋没土	深鉢	胴～底部	粗砂	胴部下半は無文であるが、部分的にわずかに縦位の条線が残る。	称名寺Ⅱ式
第65図 PL.37	219	5号住居	埋没土	深鉢	胴～底部	粗砂、細礫	胴部下半が無文の底部。	称名寺式
第65図 PL.37	220	5号住居	埋没土	深鉢	胴～底部	粗砂、細礫	胴部下半が無文の底部。	称名寺式
第65図 PL.37	221	5号住居	埋没土	深鉢	胴～底部	粗砂、細礫	胴部下半に沈線が垂下する底部。	称名寺式
第65図 PL.37	222	5号住居	埋没土	深鉢	胴～底部	粗砂	胴部下半が無文の底部。	称名寺式
第65図 PL.37	223	5号住居	埋没土	深鉢	胴～底部	粗砂	胴部下半が無文の底部。	称名寺式
第65図 PL.37	224	5号住居	埋没土	深鉢	底部	粗砂	胴部下半が無文の底部。	称名寺式
第65図 PL.37	225	5号住居	埋没土	深鉢	底部	粗砂	胴部下半が無文の底部。	称名寺式
第65図 PL.37	226	5号住居	埋没土	深鉢	底部	粗砂、細礫	胴部下半が無文の底部。	称名寺式
第65図 PL.37	227	5号住居	埋没土	浅鉢	底部	粗砂	胴部が無文となる浅鉢の底部。	称名寺式
第65図 PL.37	228	5号住居	埋没土	深鉢	底部	粗砂、細礫	胴部下半が無文の底部。	称名寺式
第66図 PL.37	229	5号住居	埋没土	蓋	一部欠損	粗砂	円形の浅い皿状で、両側に２孔ずつの計４孔を有する。表面の中央には横位に浅い沈線がある。径：8.8cm	称名寺式期
第66図 PL.37	230	5号住居	Pit 6	蓋	破片	粗砂	円形の浅い皿状。表面は無文。推定径：17.0cm	称名寺式期
第66図 PL.37	231	5号住居	埋没土	蓋	破片	粗砂	円形の深い皿状。表面に沈線で曲線的な文様が描かれる。推定径：14.0cm	称名寺式期
第66図 PL.37	232	5号住居	埋没土	蓋	1/4	粗砂	小型で円形の浅い皿状。孔を有する。表面は無文。推定径：6.5cm	称名寺式期
第66図 PL.37	233	5号住居	埋没土	蓋	破片	細砂、細礫	円形で側縁が直立し、上面は平坦。表面は無文。推定径：14.0cm　高さ：2.8cm	称名寺式期
第66図 PL.37	234	5号住居	埋没土	蓋	破片	細砂	円形で側縁が直立し、上面は平坦。表面は無文。推定径：15.0cm　高さ：2.3cm	称名寺式期
第66図 PL.37	235	5号住居	埋没土	蓋	1/4	粗砂	円形で側縁が直立し、上面は平坦。表面は無文。推定径：16.0cm　高さ：2.9cm	称名寺式期
第66図 PL.37	236	5号住居	埋没土	土製円盤		粗砂	土器片利用のやや不整形な土製円盤。側縁を研磨。表面は無文。径：7.0cm	称名寺式期
第66図 PL.37	237	5号住居	埋没土	土製円盤		粗砂	土器片利用の土製円盤。側縁を僅かに研磨。表面に刺突をもつ三十稲葉式土器。径：4.8cm	称名寺式期
第66図 PL.37	238	5号住居	埋没土	土製円盤		粗砂	土器片利用の小型の土製円盤。側縁を研磨。径：3.3cm	称名寺式期
第66図 PL.37	239	5号住居	埋没土	土製円盤		粗砂	土器片利用の小型の土製円盤。側縁を研磨。表面は無文。径：3.1cm	称名寺式期
第66図 PL.37	240	5号住居	埋没土	土製品	貝輪形腕飾り	粗砂	表面に縄文を施す。	称名寺式期
第66図 PL.37	241	5号住居	埋没土	土製品	1/4	細砂	楕円形の土製品で、側縁に面取りが施され、表裏面に十字の沈線と、弧状の沈線をもつ。長軸中央には孔が貫通する。長さ：(3.0) cm　幅：(1.7) cm　厚さ：1.7cm	称名寺式期
第66図 PL.37	242	5号住居	埋没土	土製品		細砂	先端が窄まる。長さ：(3.0) cm　幅：1.3cm　厚さ：1.1cm	称名寺式期
第66図 PL.38	243	6号住居	フク土	深鉢	胴部片	細砂	僅かに間く平口縁の口縁下に沈線で「字状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第66図 PL.38	244	6号住居	フク土	深鉢	胴部片	細砂	胴部上半に沈線で渦巻き状の曲線的な文様を描き、文様内に０段多条のＲＬの縄文を施す。	加曽利Ｅ４式
第66図 PL.38	245	6号住居	フク土	深鉢	胴部片	細砂	胴部に沈線で斜位および円形の文様を描き、刺突を加える。	称名寺Ⅱ式
第66図 PL.38	246	6号住居	フク土	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	口縁下に隆線を巡らせ、胴部に隆線を垂下させる。口縁部の横位隆線と胴部の垂下隆線の交差部に刺突圧痕をもつ。	称名寺Ⅱ式 加曽利Ｅ式系
第66図 PL.38	247	6号住居	フク土	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、懸垂文間にＬＲの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ３式
第66図 PL.38	248	7号住居	埋没土	深鉢	胴部片	繊維	平口縁の口縁部を僅かに肥厚させ、口縁部に沈線で複合鋸歯状の文様を巡らせる。以下の胴部には０段多条のＲＬの縄文を縦長な菱状を構成するように施す。	花積下層Ⅰ式
第66図 PL.38	249	7号住居	埋没土	深鉢	胴部片	繊維	平口縁の口縁以下に０段多条のＲＬと０段多条のＬＲの縄文を縦長な菱状に施す。	花積下層Ⅰ式
第66図 PL.38	250	7号住居	埋没土	深鉢	胴部片	繊維	胴部に０段多条のＲＬと０段多条のＬＲの縄文を縦長な菱状に施す。	花積下層Ⅰ式
第66図 PL.38	251	7号住居	埋没土	深鉢	胴部片	繊維	胴部に０段多条のＲＬと０段多条のＬＲの縄文を縦長な菱状に施す。	花積下層Ⅰ式
第66図 PL.38	252	7号住居	埋没土	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＲＬとＬＲの縄文を縦長な菱状に施す。	花積下層Ⅰ式
第66図 PL.38	253	7号住居	埋没土	深鉢	胴部片	繊維	胴部に０段多条のＲＬと０段多条のＬＲの縄文を縦長な菱状に施す。	花積下層Ⅰ式
第66図 PL.38	254	7号住居	埋没土	深鉢	胴部片	繊維	胴部に０段多条のＲＬと０段多条のＬＲの縄文を縦長な菱状に施す。	花積下層Ⅰ式

図版番号 図版番号	遺物番号	出土遺構	出土位置	器形	部位	胎土	文様の特徴等	摘要
第66図 PL.38	255	7号住居	埋没土	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＲＬとＬＲの縄文を縦長な菱状に施す。	花積下層Ⅰ式
第66図 PL.38	256	7号住居	埋没土	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＯ段多条のＲＬとＯ段多条のＬＲの縄文を縦長な菱状に施す。	花積下層Ⅰ式
第66図 PL.38	257	7号住居	埋没土	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＯ段多条のＲＬとＯ段多条のＬＲの縄文を縦長な菱状に施す。	花積下層Ⅰ式
第66図 PL.38	258	7号住居	埋没土	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＲＬとＬＲの縄文を縦長な菱状に施す。	花積下層Ⅰ式
第66図 PL.38	259	7号住居	埋没土	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＯ段多条のＲＬとＯ段多条のＬＲの縄文を縦長な菱状に施す。	花積下層Ⅰ式
第66図 PL.38	260	7号住居	埋没土	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＯ段多条のＬＲの縄文を縦長な菱状を構成するように施す。	花積下層Ⅰ式
第66図 PL.38	261	7号住居	埋没土	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＯ段多条のＲＬの縄文を縦長な菱状を構成するように施す。	花積下層Ⅰ式
第66図 PL.38	262	7号住居	pit	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＲＬの縄文を横位に施す。	花積下層Ⅰ式
第66図 PL.38	263	7号住居	埋没土	深鉢	底部片	繊維	胴部下端に縄文を施す平底の底部片。	花積下層Ⅰ式
第67図 PL.38	264	8号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	細砂	平口縁の口縁下に沈線でＶ字状等の文様を描き、文様内にＬの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第67図 PL.38	265	8号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線でＪ字状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第67図 PL.38	266	8号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線で文様を描く。	称名寺式
第67図 PL.38	267	8号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫	平口縁の口縁下に沈線で文様を描き、文様内に円形刺突を充填する。	称名寺Ⅱ式
第67図 PL.38	268	8号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫	直立する平口縁の口縁下に隆線を巡らせて口縁部無文帯を区画し、胴部に隆線を垂下させる。垂下する隆線間には条線が横位・縦位に施される。	称名寺式 加曽利Ｅ式系
第67図 PL.38	269	8号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	朝顔状に開く平口縁の口例に中央に孔をもつ突起を有し、口縁下の頸部に条線で鋸歯状のも屈を描く。	称名寺Ⅱ式
第67図 PL.38	270	8号住居	pit	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	頸部に沈線を沿わせた隆帯を斜位に、沈線で曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第67図 PL.38	271	8号住居	pit	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線を垂下させ、曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第67図 PL.38	272	8号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	細砂	波状となる口縁の波頂部に突起をもち、裏面側に刺突と弧状の沈線を有する環状突起となる。波頂部の側面に孔をもつ。	称名寺Ⅱ式
第67図 PL.38	273	8号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	波状となる口縁の波頂部に突起をもち、裏面側に刺突と弧状の沈線を有する環状突起となる。	称名寺Ⅱ式
第67図 PL.38	274	8号住居	埋没土	深鉢	胴部片	細砂	６と同一個体。内反ぎみの平口縁の口縁下に隆線を巡らせて口縁部無文帯を区画し、胴部に隆線で渦由する懸垂文およびＶ字状の文様を描き、文様内にＲＬの縄文を縦位に施す。	称名寺式 加曽利Ｅ式系
第67図 PL.38	275	8号住居	埋戻	深鉢	胴～底部	細砂	５と同一個体。胴部に隆線で渦由する懸垂文およびＶ字状の文様を描き、文様内にＲＬの縄文を縦位に施す。	称名寺式 加曽利Ｅ式系
第67図 PL.38	276	9号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂	同面に沈線で小さなＪ字状の文様をもつ斜位の文様と入り組み状の縦位に連続する文様を描き、地文にＬＲの縄文を施し、文様内を磨消する。胴部屈曲下は無文。	堀之内１式
第67図 PL.38	277	9号住居	埋没土	深鉢	口縁～胴部	細砂	口縁部が有段となる小波状口縁で、小波頂下の刺突を先端とする沈線を横位に２条施し、頸部が無文帯となる。括れる頸部下には３条の沈線が横位に巡り、胴部に小さなＪ字状の文様を３条の沈線で描く。	称名寺Ⅱ式
第67図 PL.38	278	9号住居	炉内	深鉢	口縁部片	細砂	波状口縁の波頂部を欠き、波頂下に沈線を垂下させる。	称名寺Ⅱ式
第67図 PL.38	279	9号住居	pit	蓋		粗砂、細礫	平坦な円形で、表面に隆帯が円形に巡り、隆帯から縁への橋状肥手が４方向に付く。推定径：11.0cm	称名寺式期
第67図 PL.38	280	9号住居	埋没土	土製円盤		粗砂	土器片利用の土製円盤。側縁を僅かに研磨。表面は無文。径：5.4cm	称名寺式期
第68図 PL.39	281	9号住居	炉体土器	深鉢	口縁～胴部	粗砂	平口縁の口縁部が有段となり、口縁部に２ないし３連の円形刺突と沈線を巡らせる。以下の胴部に蛇行する沈線を垂下させ、地文にＬＲの縄文を縦位に施す。	堀之内１式
第68図 PL.38	282	10号住居	pit	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、懸垂文間に縦長な楕円状の文様を描く。文様内にＲＬの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ３式
第68図 PL.38	283	11号住居	床直	深鉢	胴下半	細砂	胴部下半に３条の沈線で横位に展開する渦巻き状の文様を描き、その先端等に刺突をもつ円形の貼付文を配する。	称名寺Ⅱ式
第68図 PL.38	284	11号住居	埋没土	深鉢	胴下半	粗砂	胴部に沈線で曲線的な文様を描き、下端は無文。	称名寺Ⅱ式
第68図 PL.38	285	11号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂	胴部下半に沈線で曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第68図 PL.38	286	11号住居	埋没土	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に隆帯と沈線で文様を描き、隆帯脇に円形刺突を沿わせ、隆帯による文様内を無文とする。また、ＬＲの縄文を施す。	称名寺Ⅱ式
第68図 PL.39	287	11号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	波状口縁の波頂部裏面に円形刺突をもつ円形の貼付文を有し、表面に弧状の沈線をもつ縦長な楕円状の隆帯を貼付する。口縁下には沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第68図 PL.39	288	11号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の表裏面の口縁部が有段となり、口縁部裏面に円形刺突をもつ円形の貼付文を配し、横位の沈線を巡り、裏面では１条の沈線が巡る。口縁下の頸部は無文。	称名寺Ⅱ式
第68図 PL.39	289	11号住居	埋没土	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁部が有段となり、口縁下に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第68図 PL.39	290	11号住居	炉体土器	深鉢	胴下半	粗砂	胴部下半は無文。	称名寺Ⅱ式

第19表　住居出土石器観察表

図版番号 図版番号	遺物番号	出土遺構	器種	形態・素材	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	使用状況・製作状況	石材
第66図 PL.39	1	1号住居	打製石斧	分銅型	周溝	(7.6)	(8.8)	2.9	248.4	未製品。大きくリダクションされ目印は留めていないが、右辺側に側縁の「抉り込み」が残る。上半部欠損。	細粒輝石安山岩
第66図 PL.39	2	1号住居	打製石斧	短冊型	床直	9.6	3.8	2.0	80.7	完成状態？左辺側エッジのみ潰れる。剥離面はシャープで、最終段階で破損した可能性も否定できない。	黒色頁岩
第66図 PL.39	3	1号住居	石鏃	凹基無茎鏃	埋没土	2.4	2.1	0.5	2.1	未製品。加工が粗く、概形作出段階で製作を放棄。	黒色安山岩
第66図 PL.39	4	1号住居	石鏃	凹基無茎鏃	埋没土	2.1	(1.8)	0.4	1.0	未製品。加工が粗く、概形作出段階で「返し部」を欠損。	黒色安山岩
第66図 PL.39	5	1号住居	石錐？	小形剥片	埋没土	3.7	2.0	1.1	4.7	背面側先端を厚く、裏面側を薄く加工する。加工位置から先端を意識していることは確実だが、定型的でない。	黒色頁岩
第66図 PL.39	6	1号住居	敲石	扁平礫	周溝	10.8	6.0	2.8	276.7	粗く周辺加工して楕円形状に器体を整えている。剥離後、両側縁は敲打され、エッジは丸味を帯びる。磨製石斧の未製品の可能性も否定できないが、敲打具として捉えた。	変質安山岩
第66図 PL.39	7	1号住居	敲石	棒偏平状礫	周溝	14.0	5.3	3.1	419.6	小口部上端に敲打痕。背面側に多方向の線条痕がある。	細粒輝石安山岩
第66図 PL.39	8	1号住居	敲石	扁平棒状礫	周溝	17.7	6.3	3.9	641.9	小口部上端に敲打痕がある。背面側の礫面に強い線条痕がある。磨石種に使われたものか。	輝緑岩
第66図 PL.39	9	1号住居	石製研磨具？	棒状礫	床上14	9.3	3.2	2.7	117.6	背面側に線条痕を伴う摩耗面が広がるほか、右側縁が研磨され、ごく弱い稜が形成されている。小口部に打痕。	デイサイト
第66図 PL.39	10	1号住居	石皿？	扁平楕円礫	周溝	(8.2)	(14.0)	(3.9)	532.6	背面側が広く敲打され、ごく浅く窪む。実用具としての石皿としてはやさく、石皿のミニチュアとするべきか。	粗粒輝石安山岩
第66図 PL.39	11	1号住居	凹石	扁平楕円礫	周溝	11.2	8.9	4.5	555.4	表裏面とも摩耗するほか、漏斗状の孔2を穿つ。	粗粒輝石安山岩
第66図 PL.39	12	1号住居	凹石	扁平円礫	床上18	7.1	6.6	3.7	209.9	背面側中央付近に集合打痕があるほか、左側縁に打痕。	粗粒輝石安山岩
第66図 PL.39	13	1号住居	石皿	無縁	床上5	(20.4)	(4.5)	(17.3)	1,692.7	大型の板状破片を用い、背面側に顕著な摩耗面が形成されている。	粗粒輝石安山岩
第69図 PL.39	14	1号住居	磨石	球形礫	周溝	13.5	11.6	9.7	2,314.8	表裏面とも礫の中央付近が著しく摩耗して、平坦面が形成されている。礫周辺部に敲打痕がある。	石英閃緑岩
第69図 PL.39	15	1号住居	多孔石	楕円礫	埋没土	18.8	14.8	8.8	3,182.5	表裏面とも漏斗状の孔を穿つ。	粗粒輝石安山岩
第69図 PL.39	16	1号住居	石錘？	楕円礫？	床上5	12.6	15.8	11.5	2,466.5	背面側に孔3を穿つ。	粗粒輝石安山岩
PL.40	85	1号住居	石鏃	不明	埋没土	2.6	1.8	0.7	2.7	未製品。加工が粗く、製作初期段階で製作を放棄。	黒色安山岩
PL.40	86	1号住居	磨石	楕円礫	埋没土	10.6	7.6	5.2	964.8	表裏面とも弱く摩耗する。裏面側に被熱剥落痕。	粗粒輝石安山岩
PL.40	87	1号住居	磨石	楕円礫	床上10	20.3	7.7	5.3	639.7	表裏面とも集合打痕・摩耗痕があるほか、小口部両端・側縁に敲打痕がある。	粗粒輝石安山岩
PL.40	88	1号住居	多孔石	大型楕円礫	床直	29.7	22.7	14.5	10,840.0	表裏面とも漏斗状の孔多数を穿つ。	粗粒輝石安山岩
PL.40	89	1号住居	石棒？	棒状礫	石囲い炉	(19.2)	7.0	7.6	1,380.6	炉石として使われていたもので、器体は被熱して剥落が激しく、石棒としての属性は観察できない。	緑色片岩
第70図 PL.40	17	2号住居	石錐	柳葉形状	床直	(8.5)	(3.1)	(1.8)	20.5	右辺側剥離面が摩耗するのに対して、左辺側剥離面はシャープで、剥離の時間差があり、石錐を再加工している可能性が高い。	黒色頁岩
第70図 PL.40	18	2号住居	打製石斧	短冊型	床直	(9.1)	4.1	1.4	47.8	完成状態。激しく使い込まれ、刃部摩耗が著しい。	黒色頁岩
第70図 PL.40	19	2号住居	磨製石斧	短冊型？	埋没土	17.4	7.3	3.3	670.2	磨製石斧の再生品。背面側に大きく研磨面が残り、裏面側研磨面は頭部付近にあるのみである。背面側刃部には剥離後の敲打痕があり、両側縁には敲打痕が残る。裏面側は平坦で、周辺加工した後、敲打・研磨痕がある。	変玄武岩
第70図 PL.40	20	2号住居	敲石	棒状礫	敷石	15.4	6.6	4.3	565.0	上下両端の小口部で激しく敲打、器体長軸方向の剥離が生じている。	黒色頁岩
第70図 PL.40	21	2号住居	敲石	柱状礫	敷石	15.6	6.6	5.8	794.5	加端部エッジに線条痕を伴う摩耗面があるほか、背面左辺側の礫縁部に敲打痕が集中する。石核転用した敲打具。	黒色頁岩
第70図 PL.40	22	2号住居	敲石	棒状礫	敷石	20.1	6.0	5.4	1,004.3	背面側中央よりやや上端側に偏り集合打痕があるほか、側縁・小口部に打痕。	細粒輝石安山岩
第70図 PL.40	23	2号住居	凹石	扁平楕円礫	敷石	(11.3)	7.5	3.8	352.3	表裏面とも著しく摩耗、背面側に漏斗状の孔1・裏面側に孔3がある。両側縁も著しく敲打され、平坦面が形成されている。被熱して傷ける。	粗粒輝石安山岩
第70図 PL.40	24	2号住居	石皿	無縁	敷石	32.4	25.8	7.1	8,450.0	背面側平坦面に摩耗面が広がる。表裏面とも漏斗状の小孔1を穿つ。	粗粒輝石安山岩
第70図 PL.40	25	2号住居	敲石	石核	埋没土	9.1	6.6	4.6	428.2	背面側剥離面・裏面側のエッジが著しく摩耗する。石核を転用し、敲打具としたものか。	黒色頁岩
第70図 PL.40	26	2号住居	敲石	棒状礫	埋没土	14.9	5.8	3.1	430.2	表裏面・右側面・小口部上端に敲打痕。小口部は敲打痕を覆う摩耗がある。	ホルンフェルス
第70図 PL.40	27	4号住居	打製石斧	分銅型	床直	11.8	7.6	2.1	232.1	完成状態。両側縁・上下両端の刃部が著しく摩耗する。	細粒輝石安山岩

図版番号 図版番号	遺物番号	出土遺構	器種	形態・素材	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	使用状況・製作状況	石材
第70図PL.40	28	4号住居	楔形石器	幅広剥片	埋没土	2.2	2.3	0.8	4.3	加工意図：石敷？	黒色安山岩
第70図PL.40	29	4号住居	敲石	楕円礫	床直	6.9	5.3	3.1	210.9	小口部角端が敲打・摩耗する。下端側は摩耗して磨り減り、平坦面が形成されている。	変玄武岩
第70図PL.40	30	4号住居	磨石	楕円礫	石囲い炉1	9.2	7.7	4.4	444.2	表裏面とも集合打痕があり摩耗するほか、両側縁に打痕がある。背面側の摩耗が顕著。	粗粒輝石安山岩
第70図PL.40	31	4号住居	磨石	楕円礫	埋没土	11.0	9.1	6.1	915.0	表裏面とも摩耗する。小口部に被熱剥落痕、ひび割れ。	細粒輝石安山岩
第71図PL.40	32	4号住居	石製品	不明	埋没土	6.2	4.3	2.7	21.3	背面側に径1cm弱の孔を穿つ。政権面も不明瞭で、形状に意図的要素を感じることはできない。	軽石
第71図PL.40	33	4号住居	凹石	扁平棒状礫	床直	13.5	8.0	4.6	690.8	表裏面とも漏斗状の孔2がある。被熱してひび割れる。	粗粒輝石安山岩
第71図PL.40	34	4号住居	凹石	板状扁平礫	石囲い炉1	(15.2)	(11.7)	3.4	697.0	背面側中央付近に径1.5cmの孔1を穿つ。	粗粒輝石安山岩
第71図PL.41	35	4号住居	多孔石	柱状礫	床直	16.3	16.4	12.5	4,286.0	表裏面とも漏斗状の孔多数を穿つ。背面側の孔は裏面側に比べやすく、孔径は2cm前後。被熱破損。	粗粒輝石安山岩
第71図PL.41	36	4号住居	石皿	定型	石囲い炉1	(15.6)	(9.5)	9.0	1,033.7	左辺側・上端破片。裏面側に柱状の脚が付く。	粗粒輝石安山岩
第71図PL.41	37	4号住居	多孔石	楕円礫	床直	20.6	19.6	13.0	6,200.0	背面側稜上に敲打痕・漏斗状の孔4がある。	粗粒輝石安山岩
第71図PL.41	38	5号住居	打製石斧	分銅型	床上15	11.4	6.1	2.2	179.2	完成状態。刃部摩耗・潰蝕痕が著しい。下端刃部はリダクションされ、直刃様を呈する。	黒色頁岩
第71図PL.41	39	5号住居	打製石斧	分銅型？	pit埋没土	12.4	7.5	1.7	170.3	完成状態。上端側の両側縁を大きくノッチ状に挟り込む。刃部摩耗が著しく、石斧様に使用されたのは確実だが、類例は乏しい。	黒色頁岩
第71図PL.41	40	5号住居	打製石斧	分銅型	埋没土	13.5	8.0	2.9	345.5	未製品。両側縁をノッチ状に挟り込んでいる。加工は粗く概形を作出する段階で、製作を放棄している。	黒色頁岩
第71図PL.41	41	5号住居	打製石斧	短冊型	埋没土	15.1	6.8	4.6	482.7	大形で、中高、風化して摩耗痕等は不明瞭だが、形態的には完成状態にある。	黒色頁岩
第71図PL.41	42	5号住居	磨製石斧	乳房状	埋没土	6.9	3.3	1.6	49.4	全面を丁寧に研磨して石斧を仕上げる。裏面側頭部に研磨後の敲打痕がある。	黒色頁岩
第71図PL.41	43	5号住居	石敷？	凹基無茎鏃	埋没土	(2.6)	(1.8)	0.4	1.7	未製品。左辺側「返し部」の敲打、加工は粗く、初期段階で製作を放棄したもの。	黒色安山岩
第71図PL.41	44	5号住居	楔形石器	小形剥片	埋没土	3.3	2.8	0.7	7.2	表裏面とも対向する剥離面が特徴的である。両極剥離して剥片の厚味を減じたもの。	黒色安山岩
第71図PL.41	45	5号住居	楔形石器	小形剥片	埋没土	2.7	3.3	0.6	7.4	表裏面とも対向する剥離面が特徴的である。左辺側に礫面を残す。	黒色安山岩
第72図PL.41	46	5号住居	凹石	楕円礫	周溝	11.3	9	4.6	486.0	背面側に大きな漏斗状の孔を穿つ。側縁は敲打され、これに伴い破損が生じている。	粗粒輝石安山岩
第72図PL.41	47	5号住居	凹石	扁平楕円礫	pit埋没土	11.2	8.7	4.2	473.0	表裏面とも浅い漏斗状の孔を有する。石材が粗く、側縁の敲打痕が目立つ。	粗粒輝石安山岩
第72図PL.41	48	5号住居	凹石	扁平円礫	床直	10.4	10.1	5.2	670.0	表裏面とも摩耗するほか、礫中央に漏斗状の孔を穿つ。	粗粒輝石安山岩
第72図PL.41	49	5号住居	磨石	楕円礫	pit埋没土	10.5	9.0	6.7	899.1	表裏面とも著しく摩耗する。	粗粒輝石安山岩
第72図PL.41	50	5号住居	磨石	楕円礫	周溝	9.6	8.3	6.1	684.2	表裏面とも摩耗して平坦面が形成されている。礫周辺部に敲打痕がある。	粗粒輝石安山岩
第72図PL.41	51	5号住居	磨石	扁平礫	床上18	15.6	8.8	4.6	1,016.0	表裏面とも摩耗する。両側縁の摩耗も著しく平坦面が形成されている。	粗粒輝石安山岩
第72図PL.41	52	5号住居	磨石	扁平礫	埋没土	5.5	6.5	3.6	140.3	表裏面の他、両側面が著しく摩耗、明瞭な稜を形成する。	粗粒輝石安山岩
第72図PL.41	53	5号住居	磨石	扁平円礫	床上25	13.2	13.1	2.9	834.1	表裏面とも摩耗する。被熱して脆ける。	粗粒輝石安山岩
第72図PL.41	54	5号住居	敲石	楕円礫	床上31	11.8	10.3	5.7	976.1	小口部上端が敲打され、大きく破損。裏面側礫面に敲打痕がある。	変質安山岩
第72図PL.41	55	5号住居	石皿	定型	床上26	(12.4)	(9.9)	7.4	843.7	体部側縁破片。裏面側を敲打し平坦面を作出する。縁は逆行形状に整形され、横出工に向い弱く外側に開く。	粗粒輝石安山岩
第72図PL.41	56	5号住居	多孔石	大形楕円礫	床直	21.6	19.8	12.0	5,691.1	表裏面とも蜂の巣状に孔を穿つ。	粗粒輝石安山岩
第72図PL.42	57	5号住居	石皿	有縁	埋没土	(16.2)	(21.4)	5.1	1,998.5	下半部破片で、横出工が弱る。裏面側には小孔多数を穿つ。裏面側は被熱して脆ける。	粗粒輝石安山岩
第73図PL.42	58	5号住居	多孔石	大形楕円礫	床直	24.8	18.4	14.2	8,100.0	表裏面に漏斗状の孔多数を穿つ。	粗粒輝石安山岩
第73図PL.42	59	5号住居	多孔石	楕円礫	周溝	15.6	13.8	9.2	2,039.9	背面側に蜂の巣状に孔を穿つ。裏面側の孔は数ヶ所。	粗粒輝石安山岩
第73図PL.42	60	5号住居	石棒	ミニチュア	周溝	8.0	1.1	1.0	16.3	上下両端に溝を切り両頭タイプの石棒を作出する。体部は面取り整形され、多角形状を呈する。	雲母石英片岩
第73図PL.42	61	5号住居	石棒	棒状礫	敷石	(45.3)	(17.4)	(13.7)	20,000.9	裏面側に径1cmの孔を穿つ。表裏面とも光沢が強く、研磨されているのは確実だが、両側縁は光沢が乏しい。	雲母石英片岩
第73図PL.42	62	5号住居	石製品	扁平礫	埋没土	(6.2)	(8.3)	(1.9)	145.7	両側縁に面取り様の平坦面が形成され、これに敲打痕が伴う。属性的には磨石的だが、詳細は不明。	雲母石英片岩
第73図PL.42	63	5号住居	石製品	楕円礫	床直	7.0	5.7	高さ3.3	143.1	背面側が窪形され、浅く窪む。	粗粒輝石安山岩

図版番号 図版番号	遺物番号	出土遺構	器種	形態・素材	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	使用状況・製作状況	石材
第73図 PL.42	64	5号住居	石製品	不明	周溝	6.6	5.0	1.7	36.7	各面とも研磨整形され、弱い線条痕が残る。	軽石
PL.42	90	5号住居	打製石斧	分銅型	埋没土	10.4	7.1	1.5	116.6	完成状態？形態的には安定、刃部も変形しているが、刃部摩耗等は明確ではない。	細粒輝石安山岩
PL.42	91	5号住居	打製石斧	短冊型?	埋没土	(6.1)	(6.9)	(1.5)	71.6	完成状態？刃部が弱く摩耗する。幅広で、器体は薄い。	黒色頁岩
PL.42	92	5号住居	打製石斧	短冊型?	埋没土	(7.1)	3.6	1.7	63.4	完成状態？両側縁が弱く摩耗する。下端側を大きく欠損。	変質安山岩
PL.42	93	5号住居	打製石斧	分銅型?	埋没土	(7.0)	(5.3)	(2.1)	85.0	未製品？剥離面は新鮮で、シャープ。上端部エッジが敲打され潰れている。未製品を再利用したものか。	黒色頁岩
PL.42	94	5号住居	凹石	球形礫?	床直	(6.6)	(7.3)	(5.1)	231.9	背面側に浅い凹部がある。石材が粗く、摩耗は不明瞭。	粗粒輝石安山岩
PL.42	95	5号住居	凹石	楕円礫	床上19	(10.4)	(6.7)	4.2	407.6	表裏面とも摩耗するほか、敲打痕がある。敲打痕は縁の中心部から離れて小1個に偏る。製粉臼としての磨石類とは異なり、敲打具として機能したものだろう。	粗粒輝石安山岩
PL.42	96	5号住居	凹石	扁平楕円礫	周溝	10.4	7.6	3.9	500.9	表裏面とも集合打痕を伴う著しい摩耗面がある。両側縁は敲打され、平坦面が形成されている。被熱して脆ける。	粗粒輝石安山岩
PL.42	97	5号住居	凹石	楕円礫	埋没土	13.8	9.6	5.9	1,226.3	表裏面とも摩耗するほか、背面側に漏斗状の小孔1・集合打痕がある。側縁の敲打が激しい。	かこう岩
PL.42	98	5号住居	凹石	楕円礫	埋没土	13.7	7.5	6.0	720.0	表裏面とも漏斗状の孔2を穿つ。石材感が粗く、敲打痕が目立つ。礫形状は棒状に近い。	粗粒輝石安山岩
PL.42	99	5号住居	敲石?	球形礫	埋没土	14.0	12.8	11.5	2,438.4	全体に摩耗しており、これが入為的か不明。形態的には「丸石」とされるものであろう。	粗粒輝石安山岩
PL.42	100	5号住居	石皿	有縁	床直	(7.5)	(13.2)	6.5	673.2	体部側縁破片。裏面側に径1cm弱の小孔1を穿つ。	粗粒輝石安山岩
PL.42	101	5号住居	多孔石	大形円礫	床上26	20.4	18.4	16.6	7,004.0	背面側頂部に漏斗状の孔穿つ他、表面側に小孔2を穿つ。被熱して赤化、ひび割れている。	粗粒輝石安山岩
PL.42	102	5号住居	多孔石	柱状礫	床上29	8.6	8.8	10.4	4,678.9	背面側に孔を穿つ。漏斗状の明確なものは孔1のみで、他は前潜程度が残る。	粗粒輝石安山岩
PL.42	103	5号住居	石製品	扁平礫	周溝	7.0	5.3	2.0	33.5	風化して面整形の詳細は不明だが、左側面が面取り様に整形され、棒が形成されている。	軽石
第73図 PL.43	65	6号住居	石鏃	凹基無茎鏃	炉埋没土	(2.1)	(1.6)	0.4	1.1	完成状態。表裏面とも素材剥離面を大きく残す。調査時に右辺側「返し部」を欠損する。	黒色安山岩
第74図 PL.43	70	7号住居	打製石斧	短冊型	床上13	8.8	5.1	2.1	93.4	未製品。剥離面は新鮮で、下端側より大きく破損する。	細粒輝石安山岩
第74図 PL.43	71	7号住居	打製石斧	短冊型	床上9	13.1	5.7	2.0	178.9	未製品。背面側を粗く加工する。裏面加工は着柄部付近に行われ、限定的である。	黒色頁岩
第74図 PL.43	72	7号住居	石鏃	凹基無茎鏃	床上12	(1.6)	1.6	0.4	0.7	完成状態。ごく浅く基部を抉り込んでいる。平基に近く、正三角形状を呈する。	チャート
第74図 PL.43	73	7号住居	石鏃	平基無茎鏃	埋没土	2.4	1.5	0.7	1.1	完成状態。加工は丁寧だが、背面側に礫面を残す。	黒色頁岩
第74図 PL.43	74	7号住居	石鏃	平基無茎鏃	床上27	3.1	1.7	0.7	1.2	完成状態。押圧剥離が器体全面を覆う。長身で二等辺三角形状を呈する。	チャート
第74図 PL.43	75	7号住居	凹石	扁平楕円礫	床上8	12.7	9.3	4.8	648.6	表裏面とも摩耗、集合打痕2ヶ所がある。被熱。	粗粒輝石安山岩
第74図 PL.43	76	7号住居	磨石	扁平楕円礫	床上9	14.1	9.8	4.1	898.7	表裏面とも摩耗するほか、小1部に打痕がある。	粗粒輝石安山岩
第74図 PL.43	77	7号住居	磨石	扁平楕円礫	床上19	17.8	8.9	3.8	850.8	表裏面とも摩耗する。背面側摩耗面には線条痕を伴う。被熱して先端部礫面が剥落する。	変質安山岩
第74図 PL.43	78	7号住居	敲石	扁平礫	床上11	12.1	5.5	1.7	162.1	側縁を敲打。これに伴う剥離痕が右側縁に生じている。	雲母石英片岩
PL.43	104	7号住居	凹石?	楕円礫	床上10	16.7	8.9	5.2	958.3	表裏面・小1部両端に敲打痕がある。	粗粒輝石安山岩
PL.43	105	7号住居	磨石	扁平棒状礫	床上10	11.7	5.5	2.9	313.6	表裏面とも弱く摩耗、背面側には器軸に並行する線条痕がある。小1部両端に敲打・摩耗痕あり。	粗粒輝石安山岩
第73図 PL.43	66	9号住居	石鏃	尖基鏃	埋没土	2.7	1.0	1.0	1.3	完成状態。器体中央に最大幅を有し、基部側を弱く絞り込む。先端部を欠損する。	黒色安山岩
第73図 PL.43	67	9号住居	打製石斧	分銅型	床直	10.7	6.2	1.4	72.0	完成状態？表裏面とも被熱して大きく剥落。刃部摩耗等の痕跡については不明。	黒色頁岩
第73図 PL.43	68	10号住居	磨石	楕円礫	床上15	13.2	8.2	5.0	825.4	表裏面とも摩耗するほか、小1部下端に打痕がある。	石英閃緑岩
第73図 PL.43	69	10号住居	多孔石	大型楕円礫	床上11	21.2	21.4	16.7	9,380.0	表裏面とも漏斗状の孔多数を穿つ。孔径1cm前後と小型。	粗粒輝石安山岩
第74図 PL.43	79	11号住居	打製石斧	短冊型	埋没土	(8.0)	3.9	1.7	65.0	未製品。剥離面は新鮮で、シャープ。上端側を欠損。	細粒輝石安山岩
第74図 PL.43	80	11号住居	打製石斧	分銅型	埋没土	11.5	6.3	1.5	134.1	完成状態。刃部エッジ・側縁に製作時の打撃痕が顕著に残り、未使用の状態にあることが分かる。	ホルンフェルス
第74図 PL.43	81	11号住居	打製石斧	分銅型?	埋没土	21.2	9.8	4.8	1,149.70	未製品。大型で粗く加工する。側縁等のエッジはシャープであり、摩耗痕等は見られない。	石英閃緑岩
第74図 PL.43	82	11号住居	石鏃	凹基無茎鏃	埋没土	4.2	(2.5)	0.5	3.3	完成状態。薄手、大形の石鏃。左辺側「返し部」を大きく欠損する。	黒色安山岩
第74図 PL.43	83	11号住居	石皿?	無縁	埋没土	(11.0)	(7.9)	(5.1)	2,207.1	ごく浅く礫面が窪む点を重視して器種認定してみた。裏面側に小孔を穿つ。	粗粒輝石安山岩
第74図 PL.43	84	11号住居	磨石	扁平礫	埋没土	13.9	7.4	3.8	591.1	表裏面とも摩耗するほか、右辺側も激しく使用され、明確な棒が形成されている。	石英閃緑岩

第20表　土坑出土縄文土器観察表

図版番号 図版番号	遺物 番号	出土遺構	器形	部位	胎土	文様の特徴等	摘　要
第84図 PL.44	1	A区 8号土坑	深鉢	口縁部片	粗砂、礫礫	平口縁の口縁下に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第84図 PL.44	2	A区 8号土坑	深鉢	胴部片	粗砂	胴部下半に沈線で曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第84図 PL.44	3	B区 1号土坑	深鉢	胴部片	礫砂	口縁下に隆帯を巡らせ、以下の胴部にＬＲの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ式
第84図 PL.44	4	B区 1号土坑	深鉢	胴部片	粗砂、礫礫	胴部にＬの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ式
第84図 PL.44	5	B区 3号土坑	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で文様を描く。	加曽利Ｅ式
第84図 PL.44	6	B区 4号土坑	深鉢	胴部片	礫砂	胴部に条線を縦位に施す。	加曽利Ｅ３式
第84図 PL.44	7	B区 4号土坑	深鉢	口縁部片	粗砂	内反する平口縁の口縁下に隆帯を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部にＬＲの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ４式
第84図 PL.44	8	B区 8号土坑	深鉢	口縁部片	粗砂	波状口縁の波頂部に刺突をもつ円形の突起を有し、波頂下に刺突をもつ円形の隆帯を貼付する。口縁下の胴部には沈線で文様が描かれる。	称名寺Ⅱ式
第84図 PL.44	9	B区 9号土坑	深鉢	口縁部片	粗砂	直立する平口縁の口縁下に隆線を巡らせて口縁部無文帯を区画する。	称名寺式 加曽利Ｅ式系
第84図 PL.44	10	B区 9号土坑	深鉢	口縁部片	粗砂	胴部に沈線で先端が曲がるＶ字状の文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第84図 PL.44	11	B区 9号土坑	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で文様を描き、文様間にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅰ式
第84図 PL.44	12	B区 9号土坑	深鉢	胴部片	粗砂	胴部下半が無文の底部。	称名寺式
第84図 PL.44	13	B区 13号土坑	深鉢	胴部片	礫砂	胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様内にＲＬの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第84図 PL.44	14	B区 13号土坑	深鉢	胴部片	粗砂、礫礫	胴部に沈線を垂下させ、刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第84図 PL.44	15	B区 20号土坑	注口土器	ほぼ完形	礫砂	浅鉢の注口土器。４単位の波状口縁の波頂部に孔を有し、上端裏面側に刺突をもつ円形の貼付文を配する。この貼付文から孔の周りを沈線が巡る。表面の波頂部から横状肥手が延び、屈曲部を巡る隆帯に取り付く。口縁部文様は横状肥手の両脇に円形刺突をもつ円形の貼付文を配し、波頂部間に長方形状に沈線で描く。また、短く突き出る注口部は横状肥手下に付く。屈曲下の胴部は無文。	称名寺Ⅱ式
第84図 PL.44	16	B区 20号土坑	深鉢	胴部破片	粗砂	胴部に沈線で先端が蕨手状となる曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第84図 PL.44	17	B区 20号土坑	深鉢	胴部破片	粗砂	胴部に沈線で文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第84図 PL.44	18	B区 20号土坑	深鉢	胴部破片	粗砂	胴部に沈線で文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第84図 PL.44	19	B区 20号土坑	深鉢	胴部片	粗砂	口縁以下にＬＲの縄文を縦位に施す。	後期前葉
第84図 PL.44	20	B区 20号土坑	土製円盤		粗砂	土器片利用の土製円盤。側縁を僅かに研磨。表面は無文。径：7.0cm	称名寺式期
第84図 PL.44	21	B区 24号土坑	深鉢	口縁部片	粗砂	内反する平口縁の口縁部に幅広な低い突起をもち、突起の上部には刻みと、両脇に円形刺突を有する。口縁下は無文帯となり、その下部に２列の円形刺突が巡る。胴部には沈線で曲線的な文様を描き、ＬＲの縄文を施す。	称名寺Ⅰ式
第84図 PL.44	22	B区 24号土坑	深鉢	口縁部片	粗砂	内反する平口縁の口縁下に２条の沈線を横位に巡らせて文様帯区画し、区画内に刺突列を２段巡らせる。以下の胴部には沈線でＪ字状の文様が描かれ、Ｌの縄文が横位・縦位に施される。	加曽利Ｅ４式
第84図 PL.44	23	B区 24号土坑	深鉢	口縁部片	粗砂、礫礫	口縁部の突起で、上面にＳ字状の貼付が横位に付き、両方の中央が刺突状に凹み、その周りに曲線的に沈線が巡る。突起側面にも中央に刺突をもち、弧状の沈線を有する。若門も同様であるが、さらに縄文が施される。	称名寺Ⅰ式
第84図 PL.44	24	B区 24号土坑	深鉢	胴部片	粗砂	口縁下に隆帯を巡らせて口縁部無文帯を区画し、胴部に隆線を垂下させる。垂下する隆線間にはＬの縄文が縦位に施される。	加曽利Ｅ４式
第84図 PL.44	25	B区 24号土坑	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に隆線を垂下させ、隆線間にＬＲの縄文が縦位に施される。	加曽利Ｅ４式
第85図 PL.44	26	B区 28号土坑	深鉢	胴部片	粗砂	頸部の括れ部に沈線が巡り、以下の胴部に沈線で文様が描かれ、ＬＲの縄文が充填される。	称名寺Ⅱ式
第85図 PL.44	27	B区 29号土坑	深鉢	口縁部片	礫砂	平口縁の口唇に刺突と沈線をもち、口縁部に沈線で文様を描く。文様内にはＲの縄文が充填される。	称名寺式
第85図 PL.44	28	B区 30号土坑	深鉢	口縁部片	礫砂	平口縁の口縁下に沈線でＪ字状等の文様を描き、文様内にＲの縄文が充填される。	称名寺式
第85図 PL.44	29	B区 30号土坑	深鉢	口縁部片	礫砂	平口縁の口縁下に沈線でＪ字状等の文様を描き、文様内にＲＬの縄文が充填される。	称名寺式
第85図 PL.44	30	B区 30号土坑	深鉢	胴部片	礫砂	胴部に沈線でＪ字状等の文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第85図 PL.44	31	B区 30号土坑	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線でＪ字状等の文様を描き、文様内にＬＲの縄文が充填される。	称名寺式
第85図 PL.44	32	B区 30号土坑	深鉢	胴部片	粗砂、礫礫	胴部に沈線で曲線的な文様を描き、地文にＬＲの縄文を施し、文様内を磨消する。	称名寺式?
第85図 PL.44	33	B区 32号土坑	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口唇に突起をもち、口縁下に沈線でＪ字状等の文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第85図 PL.44	34	B区 32号土坑	深鉢	胴部片	礫砂	胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第85図 PL.44	35	B区 32号土坑	深鉢	胴部片	粗砂	内反ぎみの平口縁の口縁下に条線を縦位に施す。	加曽利Ｅ３式
第85図 PL.44	36	B区 32号土坑	深鉢	胴～底部	粗砂	胴部下半に沈線で懸垂文を垂下させる。	加曽利Ｅ３式

図版番号 図版番号	遺物番号	出土遺構	器形	部位	胎土	文様の特徴等	摘　要
第85図 PL.44	37	B区 33号土坑	深鉢	胴部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第85図 PL.44	38	B区 33号土坑	深鉢	胴部片	粗砂、礫礫	胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様間に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第85図 PL.44	39	B区 33号土坑	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に条線を縦位に施す。	加曽利Ｅ３式
第85図 PL.44	40	B区 35号土坑	深鉢	口縁部片	粗砂、礫礫	平口縁の口縁下に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第85図 PL.44	41	B区 35号土坑	深鉢	胴部片	礫砂	胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様間に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第85図 PL.44	42	B区 37号土坑	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線で文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第85図 PL.45	43	B区 39号土坑	深鉢	口縁部片	礫砂	大型の突起をもつ直立する平口縁で、口縁下に隆線を２条巡らせて口縁部無文帯と円形刺突列帯を区画する。その下に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅰ式
第85図 PL.45	44	B区 40号土坑	深鉢	胴部片	粗砂、礫礫	胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、懸垂文間にＲＬの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ３式
第85図 PL.45	45	B区 40号土坑	深鉢	胴部片	礫砂	胴部上半に沈線で波状の曲線的な文様を描き、地文にＲＬの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ３式
第85図 PL.45	46	B区 40号土坑	深鉢	胴部片	礫砂、礫礫	胴部に沈線で Ｊ字状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第85図 PL.45	47	B区 42号土坑	深鉢	口縁部片	礫砂	内反する平口縁の口縁下に円形の刺突列を巡らせ、以下の胴部上半に沈線で曲線的な文様を描き、ＬＲの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ３式
第85図 PL.45	48	B区 42号土坑	深鉢	口縁部片	粗砂	内反する平口縁の口縁下に沈線を巡らせ、以下の胴部上半に沈線で曲線的な文様を描き、ＬＲの縄文を横位・縦位に施す。	加曽利Ｅ３式
第85図 PL.45	49	B区 42号土坑	深鉢	胴部破片	粗砂	胴部に沈線で縦長な楕円やＶ字状等の文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	加曽利Ｅ４式
第85図 PL.45	50	B区 44号土坑	深鉢	口縁部片	粗砂	頭部が潰きき状となる突起を有する平口縁で、突起下に孔をもつ。	称名寺Ⅱ式
第85図 PL.45	51	B区 44号土坑	壺	口縁部片	粗砂	口縁部が肉厚となる平口縁で突起が付き、括れる頸部表面が屈曲する受け口状となる。突起は矢羽するが、突起下に橋状把手をもち、把手部の中央に孔と両端に刺突をもつ弧状の沈線を有する。	称名寺Ⅱ式
第85図 PL.45	52	B区 44号土坑	深鉢	胴部片	礫砂、礫礫	胴部の括れ部に沈線を横位に巡らせて胴部文様を区画し、沈線で斜位や両状等の文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第85図 PL.45	53	B区 44号土坑	蓋		粗砂	円形の薄い皿状で、縁寄りに孔を有する。表面は無文。径：18.0cm	称名寺式期
第85図 PL.45	54	B区 45号土坑	深鉢	胴部片	礫砂	胴部下半に沈線で曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第85図 PL.45	55	B区 49号土坑	深鉢	胴部片	礫砂	胴部に沈線で斜位やＪ字状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第85図 PL.45	56	B区 49号土坑	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線でＪ字状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第85図 PL.45	57	B区 49号土坑	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線でＪ字状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第85図 PL.45	58	B区 49号土坑	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で文様を描き、文様間に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第85図 PL.45	59	B区 49号土坑	深鉢	胴部片	粗砂、礫礫	胴部に隆線を垂下させる。	称名寺式 加曽利Ｅ式系
第85図 PL.45	60	B区 49号土坑	鉢	口縁部片	礫砂	５号住居172と同一個体。大きく内反する平口縁の口縁下に隆帯を縦横状に巡らせ、隆帯の頂部に刺突をもつ。縦横状の隆帯の内側には沈線で三角状に区画し、小さなＪ字文を描く。	称名寺Ⅱ式
第86図 PL.45	61	B区 50号土坑	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線でＪ字状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第86図 PL.45	62	B区 50号土坑	深鉢	口縁部片	粗砂	波状口縁の口縁部に刺突と沈線を巡らせ、以下の胴部に沈線でＪ字状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第86図 PL.45	63	B区 50号土坑	壺	口縁部片	粗砂	小波状口縁の口縁部が有段となり、頸部裏面が受け口状となる。波状口縁は橋状把手が付き、口縁部および橋状把手部に曲線的な沈線をもつ。頸部括れ下に刺突列をもつ隆帯が巡り、頸部無文帯を区画する。以下の胴部には橋状把手下に沈線で垂弧状の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第86図 PL.45	64	B区 55号土坑	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第86図 PL.45	65	B区 55号土坑	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第86図 PL.45	66	B区 56号土坑	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁以下にＲＬの縄文を施す。	称名寺式
第86図 PL.45	67	B区 57号土坑	深鉢	口縁部片	粗砂、礫礫	直立する平口縁の口縁下に刺突山盛をもつ隆帯を巡らせる。	称名寺式 加曽利Ｅ式系
第86図 PL.45	68	B区 57号土坑	深鉢	胴部片	粗砂、礫礫	胴部に沈線でＪ字状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第86図 PL.45	69	B区 57号土坑	深鉢	胴部片	礫砂	胴部に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第86図 PL.45	70	B区 59号土坑	深鉢	胴部片	礫砂、礫礫	胴部に沈線でＪ字状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第86図 PL.45	71	B区 60号土坑	深鉢	口縁部片	礫砂、礫礫	平口縁の口縁下に沈線で文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第86図 PL.45	72	B区 60号土坑	深鉢	胴部片	礫砂	胴部に沈線でＪ字状等の文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第86図 PL.45	73	B区 61号土坑	深鉢	口縁部片	粗砂、礫礫	平口縁の口縁下に沈線でＪ字状等の文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第86図 PL.45	74	B区 61号土坑	深鉢	口縁部片	粗砂	小波状口縁の口縁下に沈線でＪ字状等の文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式

図版番号 図版番号	遺物番号	出土遺構	器形	部位	胎土	文様の特徴等	摘　要
第86図 PL.45	75	B区 61号土坑	深鉢	胴部片	礫砂	胴部に沈線でJ字状等の文様を描き、文縁内にLRの縄文が充填される。	称名寺Ⅱ式
第86図 PL.45	76	B区 61号土坑	深鉢	口縁～胴部	粗砂	平口縁の口縁下に突出部をもつ隆帯を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部にLRの縄文を施す。	称名寺Ⅱ式
第86図 PL.45	77	B区 62号土坑	深鉢	胴部片	粗砂	82と同一個体。胴部に沈線でJ字状等の文様を描き、文縁内にLRの縄文が充填される。	称名寺Ⅱ式
第86図 PL.45	78	B区 62号土坑	深鉢	胴部片	粗砂	81と同一個体。胴部に沈線でJ字状等の文様を描き、文縁内にLRの縄文が充填される。	称名寺Ⅱ式
第86図 PL.46	79	B区 62号土坑	深鉢	胴部片	粗砂、礫礫	胴部に沈線でJ字状等の文様を描き、文縁内にLRの縄文が充填される。	称名寺Ⅱ式
第86図 PL.46	80	B区 62号土坑	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線でJ字状等の文様を描き、文縁内にLRの縄文が充填される。	称名寺Ⅱ式
第86図 PL.46	81	B区 62号土坑	深鉢	胴部片	粗砂、礫礫	胴部に沈線でJ字状等の文様を描き、文縁内にLRの縄文が充填される。	称名寺Ⅱ式
第86図 PL.46	82	B区 63号土坑	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下が無文。	称名寺式
第86図 PL.46	83	B区 63号土坑	壺	胴部片	礫砂	同部に沈線で文様を描き、その下に隆線を2条巡らせて区画し、区画内に刺突列を施す。	称名寺Ⅱ式
第86図 PL.46	84	B区 64号土坑	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線でJ字状等の文様を描き、文縁内にLRの縄文が充填される。	称名寺Ⅱ式
第86図 PL.46	85	B区 66号土坑	深鉢	胴部片	粗砂、礫礫	胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、懸垂文間にLRの縄文を縦位に施す。	称名寺式 加曽利E式系
第87図 PL.46	86	C区 1号土坑	深鉢	胴部片	粗砂、礫礫	胴部に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第87図 PL.46	87	C区 2号土坑	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文縁内にLRの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第87図 PL.46	88	C区 2号土坑	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で文様を描き、文縁内にLRの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第87図 PL.46	89	C区 3号土坑	深鉢	口縁部片	礫砂	波状口縁の波頂下に刺突と沈線をもつ弧状の隆帯を絡縄状に貼付し、口縁下に沈線で長楕円状に巡らせ、以下に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅰ式
第87図 PL.46	90	C区 3号土坑	深鉢	胴部片	粗砂、礫礫	胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文縁内にLRの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第87図 PL.46	91	C区 3号土坑	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文縁内にRLRの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第87図 PL.46	92	C区 3号土坑	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で文様を描き、文縁内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第87図 PL.46	93	C区 4号土坑	深鉢	口縁部片	礫砂	平口縁の口縁下に沈線でJ字状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第87図 PL.46	94	C区 5号土坑	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第87図 PL.46	95	C区 6号土坑	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁部が有段となり、口縁部に円形刺突列が巡る。以下の胴部には沈線で文様が描かれ、文縁内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第87図 PL.46	96	C区 6号土坑	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に隆帯を巡らせて口縁部無文帯を区画し、その隆帯が櫛状となり口縁に沿り付く。	称名寺Ⅰ式 加曽利E式系
第87図 PL.46	97	C区 7号土坑	深鉢	底部破片	粗砂	胴部下端が無文となる。	称名寺式 加曽利E式系
第87図 PL.46	98	C区 16号土坑	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線で文様を描く。	称名寺式
第87図 PL.46	99	C区 16号土坑	深鉢	胴部片	礫砂、礫礫	胴部に沈線で文様を描き、文縁内にLRの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第87図 PL.46	100	C区 16号土坑	深鉢	胴部片	粗砂	直立する口縁の口縁下に隆帯を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部にLRの縄文を縦位に施す。	称名寺Ⅱ式
第87図 PL.46	101	C区 16号土坑	深鉢	口縁～胴部	粗砂	直立する平口縁の口縁下に隆帯を巡らせて幅広な口縁部無文帯を区画し、以下の胴部にRLの縄文を横位・縦位に施す。	称名寺式 加曽利E式系

第21表　土坑出土石器観察表

図版番号 図版番号	遺物番号	出土遺構	器種	形態・素材	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	使用状況・製作状況	石材
第88図 PL.46	1	B区 1号土坑	多孔石	柱状礫	埋没土	20.4	13.0	8.8	2,754.3	背面側に漏斗状の孔5を穿つ。孔は径1cm前後のものと、径2cmを超える大型のものがある。裏面側は被熱破損。	粗粒輝石安山岩
第88図 PL.46	2	B区 9号土坑	多孔石	盤状礫	埋没土	(17.2)	(17.2)	9.7	3,125.3	表裏面とも孔多数が穿たれ、縁の巣状を呈す。被熱破損。	粗粒輝石安山岩
第88図 PL.46	3	B区 11号土坑	多孔石	柱状礫?	埋没土	22.0	16.6	12.8	5,223.4	右側面を除いた各面に孔多数を穿つ。背面側の孔は縁の巣状を呈する。	粗粒輝石安山岩
第88図 PL.46	4	B区 12号土坑	石匙?	斜め	埋没土	4.5	7.9	1.2	37.3	右辺側「摘み部」は破損して不明。刃部エッジはシャープで、製作途上破損した可能性が高い。	黒色頁岩
第88図 PL.47	5	B区 20号土坑	多孔石	盤状礫	埋没土	38.4	36.0	15.8	38,760.0	背面側に2cm前の漏斗状の孤1を穿つ。礫面は被熱して剥落する。	粗粒輝石安山岩
第88図 PL.47	6	B区 30号土坑	多孔石	楕円礫	埋没土	(23.8)	(17.2)	(8.4)	3,162.9	背面側に径1cm前の小孔を穿つ。裏面側を大きく破損。	粗粒輝石安山岩
第88図 PL.47	7	B区 28号土坑	多孔石	大型礫	埋没土	24.6	22.5	17.1	8,290.00	背面側断面壁平坦面に漏斗状の孔を穿つ。	粗粒輝石安山岩
第88図 PL.47	8	B区 32号土坑	石皿	無縁?	埋没土	32.3	23.6	7.0	9,560.0	ごく浅く背面側が窪む。被熱して破損する。	粗粒輝石安山岩
第89図 PL.47	9	B区 33号土坑	凹石	柱状礫?	埋没土	11.0	6.4	6.1	564.4	風化して不明瞭だが、表裏面・両側面ともに礫面中央付近に2カ所の集合打痕があり、浅く窪んでいる。	粗粒輝石安山岩
第89図 PL.47	10	B区 33号土坑	多孔石	楕円礫	埋没土	13.5	11.8	8.4	1,684.5	背面側中央に径1.5cmの孔1を、裏面側の径1cm前の小孔3を穿つ。このほか、背面側エッジの打痕がある。	粗粒輝石安山岩

図版番号 図版番号	遺物番号	出土遺構	器種	形態・素材	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	使用状況・製作状況	石材
第89図 PL.47	11	B区 33母土坑	石皿	有縁	埋没土	(18.8)	(14.4)	(7.2)	1,790.3	抽出部破片。機能面に粗い打痕が残る。背面側右側面に孔1があるほか、裏面側平坦面に孔多数がある。	粗粒輝石安山岩
第89図 PL.47	12	B区 35母土坑	多孔石	大型楕円礫	埋没土	23.1	18.2	16.2	7,050.0	背面側稜上に漏斗状の孔を穿つ。	粗粒輝石安山岩
第89図 PL.47	13	B区 36母土坑	多孔石	柱状礫	埋没土	20.6	13.4	11.5	4,410.7	棒状の孔が各面にある。右側面は被熱して煤付く。	粗粒輝石安山岩
第89図 PL.47	14	B区 38母土坑	多孔石	楕円礫	埋没土	16.8	15.4	6.6	2,116.5	表裏面に孔を穿つ。裏面側は平坦で、弱く摩耗する。	粗粒輝石安山岩
第89図 PL.47	15	B区 40母土坑	打製石斧	分離型	埋没土	(5.4)	(4.2)	1.6	36.5	完成状態。刃部摩耗・潰滅痕が残る。器体を大きく損。	細粒輝石安山岩
第89図 PL.47	16	B区 49母土坑	打製石斧	短冊型	埋没土	(7.4)	4.2	1.8	75.6	完成状態。刃部が弱く摩耗する。上半部欠損。	細粒輝石安山岩
第89図 PL.47	17	B区 51母土坑	打製石斧	撥型	埋没土	8.4	5.8	1.8	82.8	完成状態？剥離面は新鮮で、刃部摩耗等は不明瞭。刃部は粗く作出され、刃部再生されている可能性がある。	珪質頁岩
第89図 PL.47	18	B区 42母土坑	石皿	有縁	埋没土	(25.6)	(32.4)	(8.7)	7,775.0	石皿上半部破片。裏面側に孔を ランダムに穿つ。孔は敲打されたままで、浅く形状は不安定。被熱破損。	粗粒輝石安山岩
第89図 PL.47	19	B区 53母土坑	打製石斧	分離型	埋没土	10.2	(6.1)	2.1	129.3	未製品？剥離面がシャープで、摩耗痕等は見られない。	ホルンフェルス
第89図 PL.47	20	B区 57母土坑	石皿	無縁	埋没土	(15.5)	(9.2)	(7.9)	1,071.9	背面側平坦面が摩耗するほか、表裏面に漏斗状の孔を穿つ。裏面側は被熱して煤付る。	粗粒輝石安山岩
第89図 PL.47	21	B区 58母土坑	多孔石	楕円礫	埋没土	22.8	15.6	8.2	3,665.0	背面側礫面の中央付近に漏斗状の孔多数を、裏面側礫面に孔5を穿つ。被熱剥落痕あり。	粗粒輝石安山岩
第90図 PL.48	22	B区 58母土坑	磨石	楕円礫	埋没土	(7.2)	(9.0)	(5.9)	490.4	表裏面とも著しく摩耗して、平坦面が形成されている。	粗粒輝石安山岩
第90図 PL.48	23	B区 58母土坑	敲石	棒状礫	埋没土	10.2	5.1	3.3	205.8	小口部両端表敲打痕がある。	粗粒輝石安山岩
第90図 PL.48	24	B区 58母土坑	多孔石	扁平礫	埋没土	25.6	20.6	7.9	4,168.0	背面側に孔多数、裏面側端部に小孔5を穿つ。裏面側中央付近には打痕があり、台石として使用されている。	粗粒輝石安山岩
第90図 PL.48	25	B区 62母土坑	石錘	平基無茎錘？	埋没土	3.4	2.7	0.9	8.2	未製品。加工が粗く、機形作出も不十分。初期に製作を放棄している。	黒色安山岩
第90図 PL.48	26	B区 62母土坑	石皿	有縁	埋没土	(18.8)	(24.6)	(6.1)	2,565.7	機能部は円形に窪み、球形礫が磨石として使われたことが分かる。裏面側に漏斗状の孔を穿つ。	粗粒輝石安山岩
第90図 PL.48	27	B区 62母土坑	磨石	扁平楕円礫	埋没土	16.0	10.0	5.0	1,236.5	表裏面とも摩耗するほか、裏面側礫面に敲打痕がある。	粗粒輝石安山岩
第90図 PL.48	28	B区 62母土坑	台石	扁平礫	埋没土	22.2	20.4	5.6	3,679.4	背面側に敲打痕があるほか、光沢面が残る。	粗粒輝石安山岩
第90図 PL.48	29	B区 62母土坑	砥石？	柱状礫	埋没土	25.0	15.0	9.6	5,385.4	背面側礫面に著しい摩耗面が広がる。礫周辺は被熱して剥落が著しい。	粗粒輝石安山岩
第90図 PL.48	30	B区 61母土坑	多孔石	柱状礫	埋没土	14.4	12.8	8.6	1,954.8	表裏面に漏斗状の小孔を穿つ。被熱して煤付る。	粗粒輝石安山岩
第91図 PL.48	31	C区 1母土坑	石皿	扁平楕円礫	埋没土	24.0	15.4	7.6	3,218.2	背面側が敲打され、浅く窪む。裏面側に孔多数を穿つ。石皿の未製品として理解すべきものだろう。	粗粒輝石安山岩
第91図 PL.48	32	C区 1母土坑	多孔石	楕円礫	埋没土	20.6	18.2	10.3	4,800.9	表裏面とも平坦面に孔多数を穿つ。	粗粒輝石安山岩
第91図 PL.48	33	C区 3母土坑	磨石	棒状礫	埋没土	16.0	7.9	5.5	997.1	表裏面とも摩耗が著しい。	粗粒輝石安山岩
第91図 PL.48	34	C区 3母土坑	多孔石	大型楕円礫	埋没土	22.4	20.2	12.4	8,240.0	表裏面に孔多数を穿つ。被熱してヒビ割れ、破損する。	粗粒輝石安山岩
第91図 PL.48	35	C区 5母土坑	石皿	有縁	埋没土	(18.0)	(12.7)	7.4	1,599.1	機能部が縁縁まで広がり、側縁の孔を切る。裏面側に漏斗状の孔多数を穿つ。	粗粒輝石安山岩

第22表　その他の遺構出土縄文土器観察表

図版番号 図版番号	遺物番号	出土遺構	器形	部位	施土	文様の特徴等	摘　要
第94図 PL.49	1	B区 1号埋甕	深鉢	口縁～胴部	粗砂、細礫	平口縁の口縁部が有段となり、口縁部に3巻の円形刺突を5単位に配する。以下の胴部に沈線でJ字状等の文様を6単位に描く。	称名寺Ⅱ式
第94図 PL.49	2	B区 2号埋甕	深鉢	口縁部片	粗砂	2～4は同一個体。直立する平口縁の口縁下に隆線を巡らせて口縁部無文帯を区画し、胴部に隆線を垂下させる。	称名寺式 加曽利E式系
第94図 PL.49	3	B区 2号埋甕	深鉢	胴部片	粗砂	2～4は同一個体。口縁下に隆線を巡らせて口縁部無文帯を区画し、胴部に隆線を垂下させる。	称名寺式 加曽利E式系
第94図 PL.49	4	B区 2号埋甕	深鉢	胴部片	粗砂	2～4は同一個体。胴部に隆線を垂下させる。	称名寺式 加曽利E式系
第95図 PL.50	5	B区 5号焼土坑	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線でV字状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第95図 PL.50	6	B区 5号焼土坑	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫	突起を有する平口縁で、突起下に孔をもつ。	称名寺Ⅱ式
第95図 PL.50	7	C区 1号配石	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫	直立する平口縁の口縁下に隆帯を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部に隆帯を蛇位および斜位に文様を描き、文様内にLRの縄文を充填する。	称名寺式 加曽利E式系
第95図 PL.50	8	C区 1号配石	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線で文様を描き、文様内にRLの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第95図 PL.50	9	C区 1号配石	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で文様を描き、文様内にLRの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第95図 PL.50	10	C区 1号配石	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に隆帯と沈線で曲線的な文様を描き、文様内にLRの縄文を充填する。	加曽利E４式
第95図 PL.50	11	C区 1号配石	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に隆帯と沈線で曲線的な文様を描き、文様内にLRの縄文を充填する。	加曽利E４式

図版番号 図版番号	遺物 番号	出土遺構	器形	部位	胎土	文様の特徴等	摘　要
第95図 PL.50	12	C区 1号配石	深鉢	口縁部片	細砂	波状口縁の波頂部が円環状の突起となり、上面から表面に8字状の隆帯が付き、表面にLRの縄文を充填する。裏面には弧状の沈線をもつ。口縁下には隆帯で区画された剥突押隆をもつ。	称名寺1式
第95図 PL.50	13	C区 1号配石	土製品	耳飾り1/2	細砂	表裏両面に文様をもち、文様は左右1対の円形刺突をもつ円形の貼付文を配し、その間を剥突押突を例る長楕円の沈線を施す。上面径:6.6cm　下面径:6.2cm　内径:3.4cm　厚さ:2.1cm	称名寺式期

第23表　その他の遺構出土石器観察表

図版番号 図版番号	遺物 番号	出土遺構	器種	形態・素材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	使用状況・製作状況	石材
第95図 PL.50	1	B区 1号配石	磨石	楕円礫	埋没土	10.1	8.0	5.0	542.6	背面側に打痕がある。裏面側は著しく摩耗する。	粗粒輝石安山岩
第95図 PL.50	2	B区 1号配石	磨石	楕円礫	埋没土	10.0	9.1	6.4	897.5	表裏面とも摩耗する。裏面側に被熱剥落痕。	粗粒輝石安山岩
第95図 PL.50	3	B区 1号配石	石皿?	無縁	埋没土	(13.4)	(8.0)	(3.6)	1,704.7	背面側に浅く窪んでおり、これを重視して器種認定した。両側面には研磨面があり、砥石としての可能性も残る。	粗粒輝石安山岩
第96図 PL.50	4	B区 1号配石	石皿	有縁	埋没土	(19.0)	17.6	8.2	3,313.9	機能部は浅く円形に窪み、球形の磨石が対応する。裏面側に孔を穿つ。側縁が煤け、被熱破損した可能性が高い。	粗粒輝石安山岩
第96図 PL.50	5	B区 1号配石	凹石	大型楕円礫	埋没土	28.4	25.0	13.2	12,050.0	背面側に孔多数が穿たれ、蜂の巣状を呈する。裏面側の孔は小さく、孔より打痕が目立つ。	粗粒輝石安山岩
第96図 PL.50	6	C区 1号配石	打製石斧	短冊型	埋没土	(7.0)	3.9	1.1	47.4	刃部が弱く摩耗する。裏面側は被熱破損する。	細粒輝石安山岩
第96図 PL.50	7	C区 1号配石	凹石	楕円礫	埋没土	11.0	10.2	5.5	752.1	表裏面とも集合打痕があるほか、側縁に打痕がある。	デイサイト凝灰岩
第96図 PL.50	8	C区 1号配石	多孔石	楕円礫	埋没土	(30.0)	(18.4)	11.5	4,918.8	背面側礫面の中央付近に扁平状の孔多数を、裏面側礫面に孔3を穿つ。被熱している可能性あり。	粗粒輝石安山岩

第24表　旧河道跡出土縄文土器観察表

図版番号 図版番号	遺物 番号	出土遺構	器形	部位	胎土	文様の特徴等	摘要
第98図 PL.51	1	B区 旧河道跡	深鉢	口縁部片	粗砂	1～8は同一個体。平口縁の口唇に撚り糸文を横位に施し、口縁下に縦位、それ以下に斜位に撚り糸文を施す。	撚り糸文系
第98図 PL.51	2	B区 旧河道跡	深鉢	胴部片	粗砂	1～8は同一個体。口縁下に撚り糸文を縦位に施し、それ以下の胴部に撚り糸文を斜位に施す。	撚り糸文系
第98図 PL.51	3	B区 旧河道跡	深鉢	胴部片	粗砂	1～8は同一個体。胴部に撚り糸文を斜位に施す。	撚り糸文系
第98図 PL.51	4	B区 旧河道跡	深鉢	胴部片	粗砂	1～8は同一個体。胴部に撚り糸文を斜位に施す。	撚り糸文系
第98図 PL.51	5	B区 旧河道跡	深鉢	胴部片	粗砂	1～8は同一個体。胴部に撚り糸文を斜位に施す。	撚り糸文系
第98図 PL.51	6	B区 旧河道跡	深鉢	胴部片	粗砂	1～8は同一個体。胴部に撚り糸文を斜位に施す。	撚り糸文系
第98図 PL.51	7	B区 旧河道跡	深鉢	胴部片	粗砂	1～8は同一個体。胴部に撚り糸文を斜位に施す。	撚り糸文系
第98図 PL.51	8	B区 旧河道跡	深鉢	胴部片	粗砂	1～8は同一個体。胴部に撚り糸文を斜位に施す。	撚り糸文系

第25表　旧河道跡出土石器観察表

図版番号 図版番号	遺物 番号	器種	形態・素材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	使用状況・製作状況	石材
PL.51	1	打製石斧	分銅型	埋没土	8.6	5.1	2.0	70.9	未製品。左辺側に石斧装着部の「抉れ」が残る。石辺側のノッチ状の加工は剥離時で、石斧破損後に加工したもの。	黒色頁岩
PL.51	2	凹石	扁平楕円礫	埋没土	12.5	8.2	4.5	626.4	表裏面とも摩耗するほか、敲打され浅く窪む。	粗粒輝石安山岩
PL.51	3	多孔石	大形楕円礫	埋没土	21.6	17.0	8.0	3,736.7	表裏面とも平坦面があり、扁平状の孔多数を穿つ。孔は小形で、穿孔状態は雑。	粗粒輝石安山岩

第26表　遺構外出土縄文土器観察表

図版番号 図版番号	遺物 番号	出土地区	器形	部位	胎土	文様の特徴等	摘要
第103図 PL.51	1	B区	深鉢	L縁部片	粗砂	僅かに外反する平口縁の口唇を含めた口縁以下に撚り糸文を縦位に施す。	撚り糸文系
第103図 PL.51	2	A区	深鉢	L縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に撚り糸文を縦位に施す。	撚り糸文系
第103図 PL.51	3	A区	深鉢	L縁部片	繊維	肥厚して有段となる平口縁の口縁部に沈線で複合鋸歯状の文様を巡らせ、頸部文様帯にRの撚り糸側面圧痕を斜位に施して菱状等の文様を描く。	花積下層1式
第103図 PL.51	4	A区	深鉢	L縁部片	繊維	肥厚して有段となる平口縁の口縁部に0段多条のLの撚り糸側面圧痕を横位に数条巡らせ、段下に0段多条のRLの撚り糸側面圧痕を1条巡らせる。以下の胴部に0段多条のRLの縄文を横位・縦位に回転させて羽状縄文(異方向羽状縄文)を施す。	花積下層1式
第103図 PL.51	5	A区	深鉢	L縁部片	繊維	肥厚して有段となるL縁部に沈線で複合鋸歯状の文様を巡らせ、段下にLと0の2本組による撚り糸側面圧痕を横位に巡らせる。さらに、その下に隆帯を巡らせ、隆帯上にRLの縄文を施す。以下の胴部にはRLの縄文を縦位を基状を構成するように施す。	花積下層1式
第103図 PL.51	6	B区	深鉢	L縁部片	繊維	平L縁の口縁下に隆帯を巡らせて文様帯を区画し、L縁部および頸部文様帯にLとRの2本組による撚り糸側面圧痕を横位に巡らせる。	花積下層1式
第103図 PL.51	7	A区	深鉢	L縁部片	繊維	肥厚して有段となる平L縁の口縁下に0段多条のRLと0段多条のLRの縄文を横位および縦長な菱状に施す。	花積下層1式

図版番号 図版番号	遺物番号	出土地区	器形	部位	胎土	文様の特徴等	摘要
第103図 PL.51	8	A区	深鉢	口縁部片	繊維	肥厚して有段となる平口縁の口縁下に0段多条のＲＬと0段多条のＬＲの縄文を横位および縦長な菱状に施す。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.51	9	A区	深鉢	胴部片	繊維	胴部に0段多条のＲＬと0段多条のＬＲの縄文を縦長な菱状に施す。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.51	10	A区	深鉢	胴部片	繊維	12と同一個体。胴部にＲＬとＬＲの縄文を縦長な菱状に施す。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.51	11	A区	深鉢	胴部片	繊維	胴部に0段多条のＲＬと0段多条のＬＲの縄文を縦長な菱状に施す。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.51	12	A区	深鉢	胴部片	繊維	10と同一個体。胴部にＲＬとＬＲの縄文を縦長な菱状に施す。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.51	13	A区	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＲＬとＬＲの縄文を縦長な菱状に施す。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.51	14	C区	深鉢	胴部片	繊維	胴部に0段多条のＲＬと0段多条のＬＲの縄文を縦長な菱状に施す。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.51	15	A区	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＲＬとＬＲの縄文を縦長な菱状に施す。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.51	16	A区	深鉢	胴部片	繊維	胴部に0段多条のＲＬと0段多条のＬＲの縄文を縦長な菱状に施す。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.51	17	C区	深鉢	胴部片	繊維	胴部に0段多条のＲＬと0段多条のＬＲの縄文を縦長な菱状に施す。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.51	18	A区	深鉢	胴部片	繊維	胴部に0段多条のＲＬと0段多条のＬＲの縄文を縦長な菱状に施す。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.51	19	A区	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＲＬとＬＲの縄文を縦長な菱状に施す。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.51	20	B区	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＲＬとＬＲの縄文を縦長な菱状に施す。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.51	21	B区	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＲＬとＬＲの縄文を縦長な菱状に施す。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.51	22	B区	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＲＬとＬＲの縄文を縦長な菱状に施す。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.51	23	B区	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＲＬとＬＲの縄文を縦長な菱状に施す。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.51	24	B区	深鉢	胴部片	繊維	胴部に0段多条のＲＬと0段多条のＬＲの縄文を縦長な菱状に施す。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.51	25	B区	深鉢	胴部片	繊維	胴部に0段多条のＲＬと0段多条のＬＲの縄文を縦長な菱状に施す。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.51	26	B区	深鉢	胴部片	繊維	胴部に0段多条のＲＬと0段多条のＬＲの縄文を縦長な菱状に施す。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.51	27	B区	深鉢	胴部片	繊維	胴部に0段多条のＲＬと0段多条のＬＲの縄文を縦長な菱状に施し、下半には横位の羽状に施す。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.51	28	A区	深鉢	胴部片	繊維	胴部に0段多条のＲＬの縄文を縦長な菱状を構成するように施す。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.51	29	A区	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＲＬの縄文を縦長な菱状を構成するように施す。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.51	30	B区	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＲＬとＬＲの縄文を縦長な菱状に施す。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.51	31	A区	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＬＲの縄文を縦長な菱状を構成するように施す。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.51	32	A区	深鉢	胴部片	繊維	胴部に0段多条のＲＬの縄文を縦長な菱状を構成するように施す。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.51	33	B区	深鉢	胴部片	繊維	胴部に0段多条のＲＬの縄文を縦長な菱状を構成するように施す。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.51	34	B区	深鉢	胴部片	繊維	胴部に0段多条のＲＬの縄文を縦長な菱状を構成するように施す。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.51	35	B区	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＲＬの縄文を縦長な菱状を構成するように施す。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.51	36	A区	深鉢	胴部片	繊維	胴部上半に0段多条のＲＬの縄文を横位回転させ、下半は同様の縄文を斜位回転させて条を横位方向に施す。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.51	37	B区	深鉢	胴部片	繊維	胴部に0段多条のＬＲの縄文を横位に施す。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.51	38	B区	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＲＬとＬＲの縄文を縦長な菱状に施す。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.51	39	C区	深鉢	底部片	繊維	尖底となる底部にまずＲＬとＬＲの縄文を縦長な菱状に施す。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.51	40	A区	深鉢	底部片	繊維	尖底となる底部部分は無文。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.52	41	A区	深鉢	底部片	繊維	胴部にＲＬとＬＲの縄文を縦長な菱状に施し、尖底となる底部部分は無文。	花積下層Ｉ式
第103図 PL.52	42	B区	深鉢	口縁部片	繊維	平口縁の口縁直下に鋸歯状の刻みを巡らせ、その下に平行沈線を巡らせて区画する。口縁部文様には棒子状沈線をもつ平行沈線で円形等の文様を描き、瘤状の貼付文を配する。	関山Ⅱ式
第103図 PL.52	43	B区	深鉢	胴部片	繊維	胴部に平行沈線で波状ないしコンパス状の文様を描き、閉端環付き縄(ループ文)による幅狭施文を多段に施す。	関山Ⅱ式
第103図 PL.52	44	B区	深鉢	胴部片	繊維	胴部にコンパス文を横位に巡らせ、0段多条のＲＬの縄文を施す。	関山Ⅱ式
第103図 PL.52	45	B区	深鉢	胴部片	繊維	胴部にコンパス文を横位に巡らせ、0段多条のＲＬの閉端環付き縄(ループ文)と0段多条のＬＲの閉端環付き縄(ループ文)による羽状縄文を幅狭施す。	関山Ⅱ式
第103図 PL.52	46	B区	深鉢	胴部片	繊維	胴部に0段多条のＲＬの閉端環付き縄(ループ文)と0段多条のＬＲの閉端環付き縄(ループ文)による羽状縄文を幅狭異間隔に施す。	関山Ⅱ式

図版番号 図版番号	遺物番号	出土地区	器形	部位	胎土	文様の特徴等	摘要
第103図 PL.52	47	A区	深鉢	胴部片	繊維	胴部に0段多条のＬＲの閉端環付き縄を多段に施す。	関山Ⅰ式
第103図 PL.52	48	B区	深鉢	胴部片	繊維	胴部に0段多条のＲＬの閉端環付き縄(ループ文)と0段多条のＬＲの閉端環付き縄(ループ文)による羽状縄文を施す。	関山Ⅰ式
第103図 PL.52	49	A区	深鉢	胴部片	繊維	胴部に0段多条のＬＲの閉端環付き縄を多段に施す。	関山Ⅰ式
第103図 PL.52	50	B区	深鉢	胴部片	繊維	胴部に0段多条のＬＲの正反の合の縄を施す。	関山Ⅰ式
第103図 PL.52	51	C区	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＬＲの正反の合の縄文を施す。	関山式
第103図 PL.52	52	B区	深鉢	口縁部片	繊維	波状口縁の口縁下に爪形刺突をもつ平行沈線を巡らせ、口縁部文様に同様の平行沈線で菱形等の文様を描く。	有尾式
第104図 PL.52	53	B区	深鉢	口縁部片	繊維	波状口縁の口縁下に爪形刺突をもつ平行沈線を巡らせ、口縁部文様に同様の平行沈線で菱形等の文様を描く。	有尾式
第104図 PL.52	54	B区	深鉢	胴部片	繊維	口縁部文様に平行沈線で菱形等の文様を描き、地文にＲＬの縄文を施す。	黒浜式
第104図 PL.52	55	C区	深鉢	胴部片	繊維	頭部下の括れ部に爪形刺突をもつ平行沈線を巡らせる。	有尾式
第104図 PL.52	56	C区	深鉢	口縁部片	繊維	平口縁の口縁以下にＬＲの縄文を施す。	有尾・黒浜式
第104図 PL.52	57	A区	深鉢	口縁部片	繊維	平口縁の口縁下に0段多条のＬＲと0段多条のＲＬによる羽状縄文を施す。	有尾・黒浜式
第104図 PL.52	58	A区	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＬとＲによる羽状縄文を施す。	有尾・黒浜式
第104図 PL.52	59	C区	深鉢	胴部片	繊維	胴部に0段多条のＬＲと0段多条のＲＬによる羽状縄文を施す。	有尾・黒浜式
第104図 PL.52	60	C区	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＬＲとＲＬによる羽状縄文を施す。	有尾・黒浜式
第104図 PL.52	61	B区	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＬＲとＲＬによる羽状縄文を施す。	有尾・黒浜式
第104図 PL.52	62	C区	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＬＲと0段多条のＲＬによる羽状縄文を施す。	有尾・黒浜式
第104図 PL.52	63	B区	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＬＲとＲＬによる羽状縄文を施す。	有尾・黒浜式
第104図 PL.52	64	C区	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＬとＲによる羽状縄文を施す。	有尾・黒浜式
第104図 PL.52	65	A区	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＬとＲによる羽状縄文を施す。	有尾・黒浜式
第104図 PL.52	66	C区	深鉢	胴部片	繊維	胴部に0段多条のＬＲと0段多条のＲＬによる羽状縄文を施す。	有尾・黒浜式
第104図 PL.52	67	B区	深鉢	胴部片	繊維	胴部に0段多条のＬＲの縄文を施す。	有尾・黒浜式
第104図 PL.52	68	A区	深鉢	胴部片	繊維	胴部に0段多条のＬＲの縄文を施す。	有尾・黒浜式
第104図 PL.52	69	A区	深鉢	胴部片	繊維	胴部に0段多条のＬＲの縄文を施す。	有尾・黒浜式
第104図 PL.52	70	A区	深鉢	胴部片	繊維	胴部に0段多条のＬＲの縄文を施す。	有尾・黒浜式
第104図 PL.52	71	C区	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＬＲの縄文を施す。	有尾・黒浜式
第104図 PL.52	72	C区	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＲＬの縄文を施す。	有尾・黒浜式
第104図 PL.52	73	A区	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＲの縄文を施す。	有尾・黒浜式
第104図 PL.52	74	C区	深鉢	胴部片	繊維	胴部にＲの縄文を施す。	有尾・黒浜式
第104図 PL.52	75	C区	深鉢	胴部片	繊維	胴部に0段多条のＲＬの縄文を施す。	有尾・黒浜式
第104図 PL.52	76	C区	深鉢	胴部片	繊維	胴部に0段多条のＲＬの縄文を施す。	有尾・黒浜式
第104図 PL.52	77	B区	深鉢	胴～底部	繊維	胴部下端にＲＬの縄文を施す。	有尾・黒浜式
第104図 PL.52	78	C区	深鉢	底部片	繊維	胴部下端の底部付近に0段多条のＲＬの縄文を施し、底部は上げ底となる。	有尾・黒浜式
第104図 PL.52	79	C区	深鉢	底部片	繊維	胴部下端の底部付近にＲＬの縄文を施し、底部は上げ底となる。	有尾・黒浜式
第104図 PL.52	80	C区	深鉢	胴部片	繊維	底面に0段多条のＬＲと0段多条のＲＬによる羽状縄文を施す。	有尾・黒浜式
第104図 PL.52	81	B区	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	胴部下半に平行沈線で縦位・弧状の文様を描き、貼付文を配する。	諸磯ｃ式
第104図 PL.52	82	B区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部下半に平行沈線で縦位・弧状の文様を描き、貼付文を配する。	諸磯ｃ式
第104図 PL.52	83	B区	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	胴部下半に沈線で縦位の矢羽根状沈線を描く。	諸磯ｃ式
第104図 PL.52	84	A区	深鉢	口縁～胴部	粗砂	内反する平口縁の口縁下に隆帯を巡らせて口縁部無文帯を区画し、胴部上半に沈線でＪ字文を描き、胴部下半に逆Ｖ字状の文様を描く。文様内にはＬＲの縄文を横位・縦位に充填する。	称名寺Ⅰ式　加曽利Ｅ式系
第104図 PL.52	85	A区	深鉢	口縁部	粗砂	平口縁の口縁下に沈線で文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式

図版番号 図版番号	遺物番号	出土地区	器形	部位	胎土	文様の特徴等	摘要
第104図 PL.52	86	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	片波状口縁となるが波頂部は欠損。縁直すぐ口縁部には一部が小波状となり、その部分に環状の突起が付き、円形刺突と沈線が配される。胴部には沈線で曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第105図 PL.53	87	B区	深鉢	口縁部片	粗砂	円環状の小突起をもつ平口縁の口縁部が屈曲し、頸部は無文となる。頸部下に2条の沈線が巡り、8字状の爪付文を配する。	称名寺Ⅱ式
第105図 PL.53	88	B区	深鉢	胴～底部	粗砂	胴部下半に沈線で文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第105図 PL.53	89	A区	深鉢	口縁部片	細砂	6単位の波状口縁で、口縁部の表裏面が有段となる。波頂部には環状となる孔を有し、その周りに刺突をもつ弧状の沈線をもつ隆帯状をなす。口縁部には沈線が巡り、径部下の括れ部に2条の沈線を巡らせて頸部無文帯を区画する。この区画沈線に2単位2対の隆帯付けがあり、沈線をもつ弧状の隆帯と橋状把手の2種類である。	称名寺Ⅱ式
第105図 PL.53	90	B区	深鉢	口縁～胴部	細砂	片波状口縁となる口縁部が屈曲し、頸部が大きく括れ、括れ部に沈線を巡らせて口・頸部無文帯を区画する。以下の胴部には沈線で J 字状等の曲線的な文様を描き、文様内にＲＬの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第105図 PL.53	91	C区	壺	口縁部片	粗砂、細礫	口縁部が有段となる波状口縁の波頂部に環状の突起をもち、括れる頸部裏面が突出状に受け口となる。突起は中央の孔の周りに円形刺突と沈線をもつが欠損する。口縁部には沈線と刺突列が巡り、突起下に橋状把手をもち、頸部下に刺突をもつ隆帯と沈線が巡る。	称名寺Ⅱ式
第105図 PL.53	92	B区	深鉢	胴部片	粗砂	口縁下に隆線を巡らせて口縁部文帯を区画し、胴部は無文。	称名寺式　加曽利Ｅ式系
第105図 PL.53	93	A区	注口土器	口縁部片	細砂	注口部上位の口縁が小波状となり、口縁部が有段で頸部が括れ、胴部が大きく膨らみ屈曲する。注口部は胴部の膨らみ部から長く突き出て、波頂部から延びる把手部に接続する。括れる頸部下に沈線で曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第105図 PL.53	94	A区	注口土器	口縁部片	細砂	注口部上位の口縁が小波状となり、口縁部が有段で頸部が括れ、胴部が大きく膨らみ屈曲する。注口部は胴部の膨らみ部から長く突き出て、波頂部から延びる把手部に接続する。括れる頸部には沈線を巡らせて文様帯を区画し、以下に沈線で曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第105図 PL.53	95	B区	深鉢	口縁部片	粗砂	内反する小波状口縁の波頂下に隆帯で渦巻き状の文様を描く。	加曽利Ｅ３式
第105図 PL.53	96	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	内反する平口縁の口縁部文様に隆帯と沈線で楕円等の文様を区画し、区画内にＬＲの縄文を施す。	加曽利Ｅ３式
第105図 PL.53	97	B区	深鉢	口縁部片	粗砂	内反する平口縁の口縁部に沈線と隆帯で楕円等の文様を描き、文様内にＲＬの縄文を施す。	加曽利Ｅ３式
第105図 PL.53	98	B区	深鉢	口縁部片	粗砂	内反する平口縁の口縁部に沈線と隆帯で楕円等の文様を描き、ＲＬの縄文を施す。	加曽利Ｅ３式
第105図 PL.53	99	A区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	内反する平口縁の口縁部文様に隆帯と沈線で楕円等の文様を区画し、区画内に縦位に波状の条線を施す。	加曽利Ｅ３式
第105図 PL.53	100	B区	深鉢	胴部片	粗砂	口縁部に沈線と隆帯で楕円等の文様を描き、文様内にＲＬの縄文を施す。	加曽利Ｅ３式
第105図 PL.53	101	C区	深鉢	口縁部片	粗砂	内反する波状口縁の口縁下に隆帯を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部に隆帯と沈線で曲線的な文様を描き、地文にＲＬの縄文を横位・縦位に施す。	加曽利Ｅ３式
第105図 PL.53	102	B区	深鉢	口縁部片	粗砂	内反する平口縁の口縁部に沈線と隆帯で楕円等の文様を描き、文様内にＲＬの縄文を施す。	加曽利Ｅ３式
第105図 PL.53	103	B区	深鉢	口縁部片	粗砂	内反する平口縁の胴部上半に沈線で波状の曲線的な文様を描き、地文にＲＬの縄文を横位・縦位に施す。	加曽利Ｅ３式
第105図 PL.53	104	B区	深鉢	口縁部片	細砂	内反する平口縁の口縁下を無文帯とし、胴部上半に沈線で逆Ｊ字状の文様を描き、地文に０段多条のＲＬの縄文を横位・縦位に施す。なお、補修孔を有する。	加曽利Ｅ３式
第105図 PL.53	105	C区	深鉢	口縁部片	粗砂	内反する緩い波状口縁で、口縁下に沈線が巡り、以下にＲＬの縄文を横位・縦位に施す。	加曽利Ｅ３式
第105図 PL.53	106	B区	深鉢	口縁部片	粗砂	内反する平口縁の口縁下に沈線を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部に条線を縦位に施す。	加曽利Ｅ３式
第105図 PL.53	107	C区	双耳壺	把手	粗砂、細礫	双耳壺の橋状把手で、把手上および胴部にＲＬの縄文を施す。	加曽利Ｅ３式
第105図 PL.53	108	C区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、懸垂文間にＬＲの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ３式
第105図 PL.53	109	C区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、懸垂文間にＬＲの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ３式
第105図 PL.53	110	C区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、懸垂文間にＬＲの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ３式
第105図 PL.53	111	A区	深鉢	胴部片	細砂	胴部に沈線で波状等の曲線的な文様を描き、地文にＲＬの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ３式
第106図 PL.53	112	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、懸垂文間にＲＬの縄文を縦位に施し、さらに蕨手状の懸垂文を描く。	加曽利Ｅ３式
第106図 PL.53	113	B区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、懸垂文間にＲＬの縄文を縦位に施し、縦位に長楕円の文様を描く。	加曽利Ｅ３式
第106図 PL.53	114	C区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、懸垂文間にＬＲの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ３式
第106図 PL.54	115	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に隆帯と沈線で曲線的な文様を描き、地文にＲＬの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ３式
第106図 PL.54	116	A区	深鉢	胴部片	細砂	胴部下半に沈線で懸垂文と逆Ｕ字状の文様を描き、文様内にＲＬの縄文を充填する。	加曽利Ｅ３式
第106図 PL.54	117	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部下半に沈線で懸垂文と逆Ｕ字状の文様を描き、文様内にＲＬの縄文を充填する。	加曽利Ｅ３式
第106図 PL.54	118	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に隆帯で懸垂文を垂下させ、地文にＲＬの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ３式
第106図 PL.54	119	C区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部上半に沈線で曲線的な文様を描き、文様外にＲＬの縄文を充填する。下半には隆帯で逆Ｕ字状の連続する文様を描き、地文に太いＲＬの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ３式
第106図 PL.54	120	B区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に隆帯と沈線で曲線的な文様を描き、地文にＲＬの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ３式
第106図 PL.54	121	C区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に隆帯と沈線で対向する逆Ｕ字状や曲線的な文様を描き、地文にＬＲの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ３式

図版番号 図版番号	遺物 番号	出土地区	器形	部位	胎土	文様の特徴等	摘要
第106図 PL.54	122	C区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部に隆帯と沈線で懸垂文や曲線的な文様を描き、文様内にＬＲの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ３式
第106図 PL.54	123	A区	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫	内反する平口縁の口縁下に沈線を巡らせて幅狭な口縁部無文帯を区画し、以下に沈線で楕円等の曲線的な文様を描き、地文にＲＬの縄文を横位・縦位に施す。	加曽利Ｅ４式
第106図 PL.54	124	B区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部上半に沈線で楕円等の曲線的な文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	加曽利Ｅ４式
第106図 PL.54	125	A区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部下半に沈線で逆Ｕ字状の文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	加曽利Ｅ４式
第106図 PL.54	126	B区	深鉢	口縁部片	粗砂	内反する波状口縁の口縁下に２列の円形刺突列を横位にもち、胴部上半には沈線で曲線的な文様が描かれ、ＲＬの縄文を横位に施す。	加曽利Ｅ４式
第106図 PL.54	127	B区	深鉢	口縁部片	粗砂	内反する波状口縁の口縁下に円形刺突列を横位にもち、胴部上半には沈線で逆Ｕ字状ないしＶ字状および楕円等の曲線的な文様が描かれ、文様内にＲＬの縄文を充填する。なお、波頂部は釣り手となる可能性をもつ。	加曽利Ｅ４式
第106図 PL.54	128	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	内反する平口縁の口縁下に沈線を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下に沈線で逆Ｕ字状の文様を描き、ＬＲの縄文を充填する。	加曽利Ｅ４式
第106図 PL.54	129	C区	深鉢	口縁部片	粗砂	大きく内反する平口縁の口縁下に沈線を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下に沈線で曲線的な文様を描き、地文にＬＲの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ４式
第106図 PL.54	130	C区	深鉢	口縁部片	粗砂	内反する波状口縁の口縁下に沈線を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部に逆Ｕ字状の文様を描き、ＬＲの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ４式
第106図 PL.54	131	C区	深鉢	口縁部片	粗砂	内反する平口縁の口縁下に隆帯を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下にＬＲの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ４式
第106図 PL.54	132	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	133と同一個体。内反する平口縁の口縁下に沈線を巡らせて幅狭な口縁部無文帯を区画し、以下にＬＲの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ４式
第106図 PL.54	133	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	132と同一個体。内反する平口縁の口縁下に沈線を巡らせて幅狭な口縁部無文帯を区画し、以下にＬＲの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ４式
第106図 PL.54	134	B区	双耳壺	口縁～胴部	粗砂、細礫	135と同一個体。平口縁の口縁下が幅広の無文帯となり、隆線を巡らせて文様帯を区画する。以下の胴部には沈線で逆Ｕ字状の文様を描き、文様内にＵ段多条のＲＬの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ４式
第106図 PL.54	135	B区	双耳壺	口縁～胴部	粗砂、細礫	134と同一個体。平口縁の口縁下が幅広の無文帯となり、隆線を巡らせて文様帯を区画する。以下の胴部には沈線で逆Ｕ字状の文様を描き、文様内にＵ段多条のＲＬの縄文を縦位に施す。双耳となる把手は欠損する。	加曽利Ｅ４式
第106図 PL.54	136	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部上半に沈線で曲線的な文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	加曽利Ｅ４式
第106図 PL.54	137	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部上半に沈線で曲線的な文様を描き、文様内にＲＬの縄文を充填する。	加曽利Ｅ４式
第106図 PL.54	138	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部上半に沈線で曲線的な文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	加曽利Ｅ４式
第106図 PL.54	139	A区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部上半に沈線で曲線的な文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	加曽利Ｅ４式
第106図 PL.54	140	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部上半に沈線で曲線的な文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	加曽利Ｅ４式
第106図 PL.54	141	C区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部に沈線で逆Ｕ字状の文様を描く。	加曽利Ｅ４式
第106図 PL.54	142	A区	深鉢	胴部片	粗砂	143と同一個体。胴部に沈線で逆Ｕ字状等の文様を描き、地文にＬＲの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ４式
第106図 PL.54	143	A区	深鉢	胴部片	粗砂	142と同一個体。胴部に沈線で逆Ｕ字状等の文様を描き、地文にＬＲの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ４式
第106図 PL.54	144	C区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部に沈線で逆Ｕ字状の文様を描き、文様内にＬＲの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ４式
第106図 PL.54	145	C区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で逆Ｕ字状の文様を描き、文様内にＬＲの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ４式
第106図 PL.54	146	C区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で逆Ｕ字状の文様を描き、文様内にＬＲの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ４式
第106図 PL.54	147	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部下半に沈線で逆Ｕ字状の文様を描き、文様内にＲＬの縄文を充填する。	加曽利Ｅ４式
第106図 PL.54	148	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部下半に沈線で逆Ｕ字状の文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	加曽利Ｅ４式
第107図 PL.54	149	A区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部上半に隆帯で曲線的な文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	加曽利Ｅ４式
第107図 PL.54	150	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部上半に隆帯で曲線的な文様、下半に隆帯で逆Ｕ字状の文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	加曽利Ｅ４式
第107図 PL.54	151	C区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に隆帯と沈線で逆Ｕ字状の文様を描き、文様内にＬＲの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ４式
第107図 PL.54	152	A区	深鉢	胴部片	粗砂	内反するＬ字の胴部上半に隆帯で曲線的な文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	加曽利Ｅ４式
第107図 PL.54	153	A区	深鉢	胴部片	粗砂	内反するＬ字の胴部上半に隆帯で曲線的な文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	加曽利Ｅ４式
第107図 PL.54	154	A区	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫	内反するＬ字の口縁下に隆帯と沈線を巡らせ、以下に隆帯と沈線を垂下させる。地文にＲＬの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ４式
第107図 PL.54	155	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	内反するＬ字の口縁下に隆帯と沈線を巡らせ、以下に隆帯と沈線を垂下させる。地文にＲＬの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ４式
第107図 PL.55	156	C区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に隆帯と沈線で懸垂文を垂下させ、懸垂文間にＬＲの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ４式
第107図 PL.55	157	C区	深鉢	胴部片	細砂、細礫	胴部に隆帯と沈線で懸垂文を垂下させ、懸垂文間にＲＬの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ４式
第107図 PL.55	158	C区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部に隆帯と沈線で懸垂文を垂下させ、懸垂文間にＬＲの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ４式
第107図 PL.55	159	C区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に隆帯で懸垂文を垂下させ、懸垂文間にＬＲの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ４式

神図番号 図版番号	遺物番号	出土地区	器形	部位	胎土	文様の特徴等	摘要
第107図 PL.55	160	C区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に隆帯と沈線で懸垂文を垂下させ、懸垂文間にＬＲの縄文を縦位に施す。	加曽利Ｅ４式
第107図 PL.55	161	B区	深鉢	口縁部片	細砂、雲母	162と同一個体。内反する波状口縁の波頂部に円形刺突と弧状の沈線をもち、波頂下に孔と弧状の沈線をもつ「８」字状の隆帯を縦長に貼付する。裏面には段をもち、波頂下に弧状の沈線を有する。口縁下は無文帯と２列の円形刺突列帯を隆線で区画し、以下の胴部上半に隆線と沈線で曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅰ式
第107図 PL.55	162	B区	深鉢	口縁部片	細砂、雲母	161と同一個体。内反する波状口縁の波頂下に孔と弧状の沈線をもつ隆帯を縦長に貼付する。裏面には段をもち、孔から波頂部側面への沈線を有する。口縁下は無文帯と２列の円形刺突列帯を隆線で区画し、以下の胴部上半に隆線と沈線で曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅰ式
第107図 PL.55	163	B区	深鉢	口縁部片	細砂、雲母	内反する波状口縁と思われ、波頂下に弧状の沈線をもつ隆帯を縦長に貼付する。口縁下はＬＲの縄文を施した２列の円形刺突列帯を隆線で区画し、以下の胴部上半に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅰ式
第107図 PL.55	164	B区	深鉢	口縁部片	粗砂、雲母	波状口縁の波頂下に両端に刺突をもつ弧状の沈線を施した縦長楕円状の隆帯を貼付し、口縁下に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅰ式
第107図 PL.55	165	B区	深鉢	口縁部片	粗砂	内反する波状口縁の波頂下に中央に縦長の深い沈線と弧状の沈線をもつ隆帯を縦長に貼付する。裏面には段をもつ。口縁下は沈線を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下にＬＲの縄文を縦位に施す。	称名寺Ⅰ式
第107図 PL.55	166	B区	深鉢	口縁部片	細砂	内反する波状口縁の波頂部に円形の隆付文および円形刺突と弧状の沈線をもち、波頂下に弧状の沈線をもつ隆帯を縦長に貼付し、その中央が結節状に低くなる。口縁下は隆線を巡らせて口縁部無文帯を区画する。	称名寺Ⅰ式
第107図 PL.55	167	B区	深鉢	口縁部片	細砂	大きな突起をもつ平口縁で、突起部中央に孔を有し、その周囲に弧状の沈線と刺突を有する。裏面も同様。口縁下は無文帯と円形刺突列を隆線で区画する。	称名寺Ⅰ式
第107図 PL.55	168	B区	深鉢	口縁部片	粗砂、雲母	内反する波状口縁の波頂部が台形状になり、波頂部口側に沈線を有し、中央に突起をもつようであるが欠損する。波頂下中央には「８」字状となる隆帯が縦長に貼付され、その脇に沈線で曲線的な文様を描く。文様内にはＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅰ式
第107図 PL.55	169	A区	深鉢	口縁部片	細砂、雲母	波状口縁の波頂部が中空状となり、上面に円形刺突をもつ弧状の沈線を施す。波頂下には刺突をもつ隆帯が垂下して文様を分帯し、口縁下に沈線で文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅰ式
第107図 PL.55	170	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	小波状口縁の波頂部裏面に円形刺突をもち、波頂下には刺突をもつ隆帯が垂下して文様を分帯し、口縁下に沈線で文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅰ式
第107図 PL.55	171	B区	深鉢	口縁部片	粗砂、雲母	波状口縁と思われる波頂下に中央に孔をもち、「８」字状となる捻れた隆帯が縦長に貼付し、裏面には孔の脇に弧状の沈線を有する。	称名寺Ⅰ式
第107図 PL.55	172	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	口縁に付く突起で、捻れた「８」字状を呈し、孔を有する。裏面には刺突と弧状の沈線を施す。	称名寺Ⅰ式
第107図 PL.55	173	B区	深鉢	口縁部片	粗砂、雲母	内反する波状口縁の波頂下に「８」字状となる捻れた隆帯が縦長に貼付し、裏面にも円形の隆帯が貼付され、段をもつ。	称名寺Ⅰ式
第107図 PL.55	174	A区	深鉢	口縁部片	粗砂、雲母	口縁に付く突起で、表裏面共に捻れた渦巻き状を呈する。	称名寺Ⅰ式
第107図 PL.55	175	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	波状口縁の波頂部に動物の顔状の突起が付き、両側面に刺突をもつ円形の貼付文を配し、下部に孔を有する。口縁下には波頂から頂点に隆帯が巡る。	称名寺Ⅰ式
第107図 PL.55	176	C区	深鉢	口縁部片	細砂	平口縁の口縁裏面が有段となり、口縁下に隆帯を巡らせて口縁部無文帯と刺突列帯を区画する。	称名寺Ⅰ式
第107図 PL.55	177	C区	深鉢	口縁部片	粗砂	内反する平口縁の口縁以下に沈線で Ｊ字状等の文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅰ式
第107図 PL.55	178	A区	深鉢	口縁部片	細砂	内反する平口縁の口縁以下に沈線で文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅰ式
第107図 PL.55	179	C区	深鉢	口縁部片	粗砂	内反する平口縁の口縁以下に沈線で Ｊ字状等の文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅰ式
第107図 PL.55	180	C区	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線で Ｊ字状等の文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅰ式
第107図 PL.55	181	A区	深鉢	口縁部片	粗砂、雲母	平口縁の口縁以下に沈線で Ｊ字状等の文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅰ式
第107図 PL.55	182	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	内反する平口縁の口縁以下に沈線で文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅰ式
第107図 PL.55	183	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で Ｊ字状等の曲線的な文様を描き、文様内にＬの縄文を充填する。	称名寺Ⅰ式
第107図 PL.55	184	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅰ式
第107図 PL.55	185	A区	深鉢	胴部片	粗砂、雲母	胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅰ式
第107図 PL.55	186	C区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で Ｊ字状等の文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅰ式
第107図 PL.55	187	C区	深鉢	胴部片	細砂	胴部に沈線で Ｊ字状等の文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅰ式
第107図 PL.55	188	B区	深鉢	胴部片	粗砂、雲母	胴部に沈線で Ｊ字状等の曲線的な文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅰ式
第107図 PL.55	189	C区	深鉢	胴部片	細砂、雲母	胴部に沈線で Ｊ字状等の文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅰ式
第107図 PL.55	190	B区	深鉢	胴部片	細砂	胴部に刺突をもつ隆帯を縦位に施して文様を分帯し、沈線で Ｊ字状等の曲線的な文様を描き、文様内にはＬＲ縄文を充填する。	称名寺Ⅰ式
第107図 PL.55	191	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	小波状口縁の波頂下を縦状とし、その波頂下から隆帯を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下にＲＬの縄文を施す。	称名寺Ⅰ式　加曽利Ｅ式系
第107図 PL.55	192	C区	深鉢	口縁部片	粗砂	直立する平口縁の口縁下に隆帯をＵ字に突起条に突き出るように捻曲して巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下にＯ段多条のＲＬの縄文を縦位に施す。	称名寺Ⅰ式　加曽利Ｅ式系
第108図 PL.55	193	B区	深鉢	口縁～胴部	細砂	波状口縁の波頂部に縦位の短沈線を有し、波頂下に刺突列を縦位に施して文様を分帯し、沈線で Ｊ字状等の曲線的な文様を描く。文様内にはＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.55	194	B区	深鉢	口縁部片	細砂、雲母	波状口縁の波頂下に斜位の刻みをもつ隆帯を縦位に施して文様を分帯し、口縁以下に沈線で Ｊ字状等の文様を描く。文様内にはＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式

図版番号 図版番号	遺物番号	出土地区	器形	部位	胎土	文様の特徴等	摘要
第108図 PL.55	195	C区	深鉢	口縁部片	細砂	大きな突起をもつ波状口縁で、口縁下に沈線で文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	196	B区	深鉢	口縁部片	粗砂	小波状口縁の波頂部に突起をもち、突起の側面に孔を有する。口縁下には沈線で文様が描かれ、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	197	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	口例が僅かに屈曲した平口縁の口縁以下に沈線で文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	198	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	波状口縁の口縁部が有段となり、波頂部には刺突をもち、口縁部に沈線が巡る。胴部上半には沈線で文様が描かれ、文様内にＲＬの縄文が充填される。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	199	B区	深鉢	口縁部片	細砂	平口縁の口縁以下に沈線でＪ字状等の曲線的な文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	200	C区	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫	平口縁の口縁部裏面が有段となり、口縁下に沈線で文様を描き、文様内にＲＬの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	201	B区	深鉢	口縁～胴部	細砂、細礫	平口縁の口縁以下に沈線でＪ字状等の曲線的な文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	202	C区	深鉢	口縁部片	細砂	口例が屈曲して広くなる平口縁の口縁下に沈線で文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	203	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	口例が屈曲した平口縁の口縁以下に沈線で文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	204	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	口例が僅かに屈曲した平口縁の口縁以下に沈線でＪ字状等の曲線的な文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	205	C区	浅鉢	口縁部片	粗砂	頂部で屈曲して口縁部が内反する平口縁で、突起を有するが突起は欠損。口縁部の突起下に大きな円形の孔付文を縦に２個もち、その両側に沈線で横長な楕円が描かれ、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	206	C区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線でＪ字状等の文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	207	B区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部に沈線でＪ字状等の曲線的な文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	208	B区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線でＪ字状等の曲線的な文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	209	C区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部に沈線でＪ字状等の文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	210	B区	深鉢	胴部片	細砂	胴部に沈線でＪ字状等の曲線的な文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	211	C区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部に沈線でＪ字状等の曲線的な文様を描き、文様内にＬＲの縄文を施す。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	212	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線でＪ字状等の文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	213	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線でＪ字状等の文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	214	A区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部に沈線でＪ字状等の文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	215	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	216	A区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部に沈線でＪ字状等の文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	217	C区	深鉢	胴部片	細砂	胴部に沈線でＪ字状等の文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	218	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	219	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線でＪ字状等の文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	220	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	221	C区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線でＪ字状等の文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	222	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	223	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部下半に沈線で曲線的な文様が描かれ、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	224	C区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様内にＲＬの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	225	C区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線でＪ字状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	226	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	227	B区	深鉢	口縁部片	粗砂	小波状口縁の口縁以下に沈線でＪ字状やＶ字状等の曲線的な文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	228	B区	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁以下に隆帯を巡らせ、以下の胴部に沈線で文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	229	A区	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫	平口縁の口縁部が有段となり、口縁下に沈線で文様が描かれ、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	230	B区	深鉢	胴部片	粗砂	平口縁の口縁以下に円形刺突をもち、隆帯を巡らせ、以下の胴部に沈線で文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	231	C区	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁部が有段となり、以下の胴部に沈線で文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	232	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線でＪ字状等の文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	233	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線でＪ字状等の文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式

図版番号 図版番号	遺物番号	出土地区	器形	部位	胎土	文様の特徴等	摘要
第108図 PL.56	234	A区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	235	A区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	236	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線で丁字状等の文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	237	C区	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線で文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	238	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線で丁字状等の文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	239	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線で丁字状等の文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	240	A区	深鉢	口縁部片	細砂	平口縁の表裏に縁部が有段となり、口縁下に沈線で文様が描かれ、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	241	C区	深鉢	口縁部片	細砂	口縁の裏面が有段となる波状口縁で、口縁下に沈線で文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第108図 PL.56	242	A区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部に沈線で文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.56	243	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁部が有段となり、口縁部に沈線が巡る。以下の胴部には沈線で文様が描かれ、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.56	244	C区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で丁字状等の文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.56	245	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部上半に沈線で丁字状等の文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.56	246	A区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.56	247	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.56	248	A区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.56	249	A区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.56	250	A区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部下半に沈線で曲線的な文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	251	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	252	A区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部下半に沈線で曲線的な文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	253	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	254	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	255	A区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	256	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	257	B区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で丁字状等の曲線的な文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	258	A区	注口土器	肩部片	細砂	肩部に注口部をもち、沈線で曲線的な文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	259	C区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で丁字状等の文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	260	A区	深鉢	胴部片	細砂	胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様間に刺突を充填する。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	261	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	262	C区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で丁字状等の文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	263	C区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で丁字状等の文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	264	C区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で丁字状等の文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	265	B区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で丁字状等の曲線的な文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	266	C区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で丁字状等の文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	267	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	268	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	269	C区	深鉢	胴部片	細砂	胴部に沈線で丁字状等の文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	270	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	271	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	272	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	273	B区	壺	胴部片	粗砂	肩部に中央に沈線をもつ低い隆帯およびその両縁に刺突列と沈線を沿わせ、曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式

図版番号 図版番号	遺物番号	出土地区	器形	部位	胎土	文様の特徴等	摘要
第109図 PL.57	274	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	275	B区	深鉢	胴部片	粗砂	平口縁の口縁以下に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	276	C区	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線で J 字状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	277	C区	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁部が有段となり、以下の胴部に沈線で J 字状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	278	B区	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁以下に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	279	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線で曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	280	C区	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫	平口縁の口縁下に沈線で文様を描き、文様内に刺突を施す。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	281	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	282	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	283	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	284	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	285	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	286	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線で J 字状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	287	A区	深鉢	胴部片	細砂	胴部に沈線で曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	288	A区	深鉢	胴部片	細砂	胴部下半に沈線で曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第109図 PL.57	289	A区	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫	波状口縁の波頂部に突起を有し、口縁部が有段となる。波頂部脇の口縁部には沈線が施され、以下の胴部に V 字状等の文様が描かれる。	称名寺Ⅱ式
第110図 PL.57	290	B区	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫	平口縁の口縁部が有段となり、口縁部に円形刺突と横位の沈線を施す。胴部には沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第110図 PL.57	291	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁部が屈曲し、胴部に沈線で曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第110図 PL.57	292	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁直下に円形刺突をもつ円形の貼付文を配し、沈線が巡る。口縁下には沈線を巡らせて無文帯を区画し、以下の胴部に沈線で J 字状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第110図 PL.57	293	B区	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁部裏面が有段となり、有段部に縦位の低い突起と沈線で長楕円を描く。表面の口縁下は無文。	称名寺Ⅱ式
第110図 PL.57	294	B区	深鉢	口縁部片	細砂	平口縁の口縁部裏面が有段となり、有段部に円形刺突をもつ円形の貼付文と横位沈線を施す。表面の口縁下は無文。	称名寺Ⅱ式
第110図 PL.57	295	C区	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁部が有段となり、口縁部に3個の円形刺突を配し、沈線を巡らせる。	称名寺Ⅱ式
第110図 PL.57	296	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁部が屈曲し、口縁に小波状的な突起を有する。突起の両脇に刺突をもち、沈線を施す。胴部上半には沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第110図 PL.58	297	C区	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫	口唇が屈曲して広くなる平口縁の口唇に刻みをもつ瘤状の突起を有し、口縁下に沈線で文様を描き、文様内に LR の縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第110図 PL.58	298	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁部が有段となり、口縁部に円形刺突をもつ円形の貼付文を配し、沈線を巡らせる。	称名寺Ⅱ式
第110図 PL.58	299	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	屈曲した口唇が広くなる平口縁で、口唇に沈線が巡る。	称名寺Ⅱ式
第110図 PL.58	300	B区	深鉢	口縁部片	粗砂	屈曲して立ち上がる波状口縁の口縁下に隆帯が巡り、波長下の隆帯部が突起状となって孔を有する。以下の胴部は無文。	後期前葉
第110図 PL.58	301	B区	深鉢	口縁部片	細砂	平口縁の屈曲する口縁部に円環状の突起と縦長の突起をもち、円環状突起の口唇には沈線と両脇に刺突、表面には両端部に刺突をもつ弧状の沈線を施す。縦長突起の口唇と表面に刺突を加える。口縁部には横位の沈線を施す。	称名寺Ⅱ式
第110図 PL.58	302	B区	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁部に小波状的な突起をもち、突起の中央に孔を有し、両端部に刺突をもつ弧状の沈線を施す。口縁部は有段状の無文帯で、その下に沈線を巡らせる。	称名寺Ⅱ式
第110図 PL.58	303	B区	深鉢	口縁部片	粗砂	小波状口縁の口縁表裏面が有段となり、裏面の有段上に横位沈線と波頂下に円形刺突をもつ、表面の波頂下には瘤状の貼付をもち、頂部に沈線で逆 J 字状の文様が描かれる。頂部下の括れ部には沈線を横位に巡らせて文様帯を区画し、「8」字状の貼付をもつ。胴部は貼付文を支点として沈線で斜位に文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第110図 PL.58	304	A区	深鉢	口縁部片	細砂	305と同一個体。波状口縁の表裏口縁部が有段となり、波頂部には刺突と弧状の沈線をもつ環状の突起を有するようで、波頂部間の口縁部には沈線が巡る。	称名寺Ⅱ式
第110図 PL.58	305	A区	深鉢	口縁部片	細砂	304と同一個体。波状口縁の表裏口縁部が有段となり、波頂部には刺突と弧状の沈線をもつ環状の突起を有するようで、波頂部間の口縁部には沈線が巡る。	称名寺Ⅱ式
第110図 PL.58	306	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁部が有段となり、環状突起を有する。突起の脇に刺突を配し、口縁部に沈線が巡る。短い頸部は無文帯となり、頸部下の括れ部に3条の沈線を巡らせ、突起下に円形刺突および円形刺突をもつ円形の貼付文を配し、さらに沈線で画各を状の文様を描く。また、LR の縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第110図 PL.58	307	A区	深鉢	口縁部片	細砂	平口縁の口縁部が有段となり、環状突起を有する。口縁部には沈線が巡る。	称名寺Ⅱ式
第110図 PL.58	308	A区	深鉢	口縁部片	細砂	平口縁の口縁部が有段となり、環状突起を有する。突起裏面には両脇に円形刺突、表面に刺突と弧状の沈線を施す。	称名寺Ⅱ式
第110図 PL.58	309	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	内反する平口縁の口縁下に3条の沈線と隆帯を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部に3条の沈線で細画状の区画を し、区画内に両単位円形刺突をもつ円形の貼付文を配した J 字状の文様を描き、LR の縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第110図 PL.58	310	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式

図版番号 図版番号	遺物番号	出土地区	器形	部位	胎土	文様の特徴等	摘要
第110図 PL.58	311	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部下半に沈線で J 字状の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第110図 PL.58	312	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第110図 PL.58	313	C区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第110図 PL.58	314	A区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.58	315	C区	深鉢	胴部片	粗砂	口縁下に沈線を巡らせ、以下の胴部に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.58	316	C区	深鉢	胴部片	粗砂	326と同一個体。胴部に沈線で J 字状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.58	317	C区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.58	318	C区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部に沈線で J 字状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.58	319	C区	深鉢	胴部片	粗砂	口縁下に沈線を巡らせ、以下の胴部に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.58	320	C区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部に沈線で J 字状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.58	321	C区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で J 字状等の曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.58	322	C区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.58	323	C区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部に沈線で曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.58	324	C区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.58	325	C区	深鉢	胴部片	細砂	胴部に沈線で曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.58	326	C区	深鉢	胴部片	粗砂	316と同一個体。胴部に沈線で J 字状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.58	327	C区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部に沈線で曲線的な文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.59	328	A区	深鉢	胴部片	粗砂	329と同一個体。須部に3条の沈線と隆帯を巡らせ、刺突と弧状の沈線をもつ隆帯を貼付する。以下の胴部に3条の沈線で渦巻き状の文様を描き、斜位の沈線を連結させる。文様の交点には円形刺突をもつ円形の貼付文を配する。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.59	329	A区	深鉢	胴部片	粗砂	328と同一個体。胴部に3条の沈線で渦巻き状の文様を描き、斜位の沈線を連結させる。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.59	330	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部下半に4条の沈線で渦巻き状の文様を描き、文様間にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.59	331	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部下半に沈線で J 字状の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.59	332	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線と隆帯で渦巻き状の曲線的な文様を描き、円形刺突をもつ円形の貼付文を配する。また、ＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.59	333	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部下半に3条の沈線で渦巻き状の文様を描き、文様間にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.59	334	C区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部に沈線で斜格子状の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.59	335	C区	鉢	口縁部片	粗砂、細礫	大きく内反する平口縁で、口縁下に沈線で入り組み状や渦巻き状の文様を描き、文様内に縄らにＲＬの縄文を施す。さらに、刺突を配する。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.59	336	C区	鉢	口縁部片	粗砂	大きく内反する平口縁で、口縁下に沈線を巡らせて口縁部無文帯を区画し、屈曲部に沈線を巡らせて円形刺突列を区画する。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.59	337	B区	鉢	口縁部片	粗砂	内反する平口縁の口縁下に横位の沈線を巡らせて文様帯を区画し、文様帯内に沈線で小さな J 字状の曲線的な文様を描き、文様の隙間に刺突を充填する。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.59	338	B区	浅鉢	口縁部片	粗砂	屈曲して内反する波状口縁で、波頂下に円形刺突と弧状の沈線をもつ隆帯を縦長に貼付する。口縁下は横位の沈線で刺突列帯を区画する。屈曲下の胴部は無文。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.59	339	A区	浅鉢	口縁部片	粗砂	口縁部が大きく屈曲して内反する平口縁で、口縁下に2条の沈線を巡らせ、その間に刺突列帯をもつ。屈曲部には刻みが巡り、以下は無文。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.59	340	A区	深鉢	口縁部片	細砂	波状となる口縁の波頂部に突起をもち、裏面側に刺突と弧状の沈線および孔を有する環状突起となる。波頂下に円形刺突をもつ。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.59	341	A区	深鉢	口縁部片	細砂	波状となる口縁の波頂部に突起をもち、裏面側に刺突と弧状の沈線および孔を有する環状突起となる。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.59	342	A区	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫	波状となる口縁の波頂部に突起をもち、裏面側に刺突と弧状の沈線および孔を有する環状突起となる。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.59	343	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	波状となる口縁の波頂部に突起をもち、裏面側に刺突と弧状の沈線および孔を有する環状突起となる。波頂部の表面に両端に刺突をもつ蛇位の沈線をもつ。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.59	344	A区	深鉢	口縁部片	粗砂	波状となる口縁の波頂部裏面が環状となる。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.59	345	B区	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁部に側面が環状となる突起がけく。突起の両側面には先端に刺突をもつ弧状の沈線が巡り、突起裏面下部に孔を有する。口縁下には沈線で文様が描かれ、文様内にＲＬの縄文が充填される。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.59	346	C区	深鉢	口縁部片	細砂	平口縁の口縁に襷状の X 字状となる突起をもち、口縁部に刺突をもつ円形の貼付文が配され、沈線が巡る。裏面も同様。	称名寺Ⅱ式
第111図 PL.59	347	C区	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に隆帯を巡らせて口縁部無文帯を区画し、隆帯には瘤状の突起が配される。以下の胴部にＲＬの縄文を横位に施す。	称名寺Ⅱ式 加曽利Ｅ式系
第111図 PL.59	348	A区	深鉢	口縁部片	細砂	内傾ぎみの平口縁の口縁下に隆帯を巡らせて口縁部無文帯を区画し、以下の胴部に隆帯を弧状に垂下させ、その交点に円形刺突を配する。また、口縁下に棒状孔を有する。	称名寺Ⅱ式 加曽利Ｅ式系
第111図 PL.59	349	C区	深鉢	口縁部片	粗砂	直立する平口縁の口縁下に刺突をもつ隆帯を巡らせて口縁部無文帯を区画する。	称名寺Ⅱ式 加曽利Ｅ式系

図版番号 図版番号	遺物番号	出土地区	器形	部位	胎土	文様の特徴等	摘要
第111図 PL.59	350	C区	深鉢	L縁部片	粗砂	僅かに内反する平L縁の上縁下に刺突圧痕をもつ隆帯を巡らせてL縁部無文帯を区画する。	称名寺Ⅱ式 加曽利E式系
第111図 PL.59	351	B区	深鉢	L縁～胴部	粗砂	直立する平L縁の上縁下に隆線を巡らせてL縁部無文帯を区画し、胴部に隆線で懸垂文を垂下させ、懸垂文間に条線を縦位に施す。	称名寺Ⅱ式 加曽利E式系
第111図 PL.59	352	A区	深鉢	L縁部片	粗砂	直立する平L縁の上縁下に隆帯を巡らせてL縁部無文を区画し、以下の胴部に隆帯を垂下させ、曲線的な条線を垂下させる。	称名寺Ⅱ式 加曽利E式系
第112図 PL.59	353	A区	深鉢	L縁部片	粗砂、雲母	僅かに内傾する平L縁の上縁下を無文帯とし、胴部にLの縄文を施す。	称名寺Ⅱ式 加曽利E式系
第112図 PL.59	354	A区	深鉢	L縁部片	粗砂	直立する平L縁の上縁下に沈線を巡らせてL縁部無文を区画し、以下の胴部に縦位に波状の条線を施す。	称名寺Ⅱ式 加曽利E式系
第112図 PL.59	355	C区	深鉢	L縁部片	粗砂、雲母	僅かに内傾する平L縁の上縁下に隆帯を巡らせてL縁部無文帯を区画し、以下の胴部に隆帯で蕨状ないしは三角状等の文様を描き、文様内にLRの縄文を充填する。	称名寺式 加曽利E式系
第112図 PL.59	356	B区	深鉢	L縁～胴部	粗砂	直立する平L縁の上縁下に隆線を巡らせてL縁部無文帯を区画し、胴部に隆線で曲線的な文様を描き、0段多条のRLの縄文を横位・縦位に施す。	称名寺式 加曽利E式系
第112図 PL.59	357	C区	深鉢	L縁部片	雲母、雲母	直立する平L縁の上縁下に隆帯を巡らせてL縁部無文帯を区画し、以下の胴部にLRの縄文を横位に施す。	称名寺式 加曽利E式系
第112図 PL.59	358	C区	深鉢	L縁部片	粗砂	直立する平L縁の上縁下に隆帯を巡らせてL縁部無文帯を区画し、以下の胴部にLRの縄文を横位・縦位に施す。	称名寺式 加曽利E式系
第112図 PL.59	359	C区	深鉢	L縁部片	粗砂	直立する平L縁の上縁下に隆帯を巡らせてL縁部無文帯を区画する。	称名寺式 加曽利E式系
第112図 PL.60	360	A区	深鉢	L縁部片	粗砂	外反ぎみの平L縁の上縁下に隆帯を巡らせてL縁部無文帯を区画する。	称名寺式 加曽利E式系
第112図 PL.60	361	A区	深鉢	胴部片	粗砂	直立する平L縁の上縁下に隆帯を巡らせてL縁部無文を区画し、以下の胴部に隆帯を弧状に垂下させる。	称名寺式 加曽利E式系
第112図 PL.60	362	A区	深鉢	胴部片	粗砂	外反ぎみのL縁の上縁下に刻みをもつ隆帯を巡らせてL縁部無文帯を区画する。	称名寺式 加曽利E式系
第112図 PL.60	363	A区	深鉢	L縁部片	粗砂、雲母	直立する平L縁の上縁下に隆帯を巡らせてL縁部無文を区画する。	称名寺式 加曽利E式系
第112図 PL.60	364	A区	深鉢	胴部片	粗砂	外反ぎみのL縁の上縁下に隆帯を巡らせてL縁部無文帯を区画する。	称名寺式 加曽利E式系
第112図 PL.60	365	B区	深鉢	L縁部片	粗砂、雲母	平L縁の上縁以下に沈線を巡らせてL縁部無文帯を区画し、以下の胴部に条線で縦位に波状の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第112図 PL.60	366	A区	深鉢	L縁部片	粗砂、雲母	直立する平L縁の上縁下を無文帯とし、以下の胴部に条線を縦位に施す。	称名寺Ⅱ式
第112図 PL.60	367	A区	深鉢	胴部片	粗砂、雲母	胴部に刺突圧痕をもつ隆帯を垂下させ、条線を縦位に施す。	称名寺Ⅱ式 加曽利E式系
第112図 PL.60	368	A区	深鉢	胴部片	粗砂、雲母	胴部に刺突圧痕をもつ隆帯を垂下させる。	称名寺Ⅱ式 加曽利E式系
第112図 PL.60	369	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に隆帯を垂下させ、条線を縦位に施す。	称名寺Ⅱ式 加曽利E式系
第112図 PL.60	370	A区	深鉢	胴部片	粗砂、雲母	胴部に隆帯を垂下させる。	称名寺Ⅱ式 加曽利E式系
第112図 PL.60	371	A区	深鉢	胴部片	粗砂、雲母	胴部に隆帯を垂下させ、条線を斜位に施す。	称名寺Ⅱ式 加曽利E式系
第112図 PL.60	372	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に隆帯を垂下させ、条線を斜位に施す。	称名寺Ⅱ式 加曽利E式系
第112図 PL.60	373	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に隆帯を垂下させ、条線を縦位に施す。	称名寺Ⅱ式 加曽利E式系
第112図 PL.60	374	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に隆帯を垂下させ、Lの縄文を縦位に施らに施す。	称名寺式 加曽利E式系
第112図 PL.60	375	A区	深鉢	胴部片	粗砂、雲母	胴部に条線を斜位に施す。	称名寺Ⅱ式
第112図 PL.60	376	A区	深鉢	胴部片	雲母	胴部に条線を縦位に施す。	称名寺Ⅱ式
第112図 PL.60	377	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に条線を曲線的に施す。	称名寺Ⅱ式
第112図 PL.60	378	A区	深鉢	胴部片	粗砂、雲母	胴部に条線を斜位に施す。	称名寺Ⅱ式
第112図 PL.60	379	A区	深鉢	胴部片	雲母	胴部に隆帯を縦位に連続する弧状に垂下させ、連結部に円形刺突を配する。	称名寺Ⅱ式 加曽利E式系
第112図 PL.60	380	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に隆帯を垂下させ、LRの縄文を縦位に施す。	称名寺式 加曽利E式系
第112図 PL.60	381	A区	深鉢	L縁部片	粗砂	大きく内反する平L縁の上縁下に隆帯と沈線を巡らせて幅狭なL縁部無文帯を区画し、以下にLRの縄文を横位・縦位に施す。	称名寺式 加曽利E式系
第112図 PL.60	382	B区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に隆線で懸垂文を垂下させ、懸垂文間にLRの縄文を縦位に施す。	称名寺式 加曽利E式系
第112図 PL.60	383	B区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に隆線と沈線で曲線的な文様を描き、同様の隆線で懸垂文を垂下させ、文様内にLRの縄文を充填する。	称名寺式 加曽利E式系
第112図 PL.60	384	C区	深鉢	胴部片	粗砂、雲母	胴部に刺突を施す。	三十稲葉式
第112図 PL.60	385	B区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に刺突を施す。	三十稲葉式
第112図 PL.60	386	A区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に縦位に蛇行沈線を描く。	堀之内Ⅰ式
第112図 PL.60	387	A区	深鉢	胴部片	粗砂、雲母	胴部に2条の沈線を垂下させ、その脇に縦位に蕨状の文様を描く。	堀之内Ⅰ式
第113図 PL.60	388	B区	蓋	破片	粗砂	平坦な円形で、縁寄りに2孔を有する。表面は無文。推定径：15.0cm	称名寺式期
第113図 PL.60	389	A区	蓋	L縁部片	粗砂、雲母	円形の浅い皿状で、縁寄りに2孔を有する。表面は無文。推定径：18.0cm	称名寺式期

図版番号 図版番号	遺物 番号	出土地区	器形	部位	胎土	文様の特徴等	摘要
第113図 PL.60	390	A区	蓋	口縁部片	粗砂、細礫	円形の深い皿状で、表面は無文。推定径：15.0cm	称名寺式期
第113図 PL.60	391	B区	蓋	破片	細砂	円形で浅い皿状。表面は無文。推定径：9.5cm	称名寺式期
第113図 PL.60	392	B区	蓋	1/2	粗砂	平坦な円形であるが、裏面の縁に粘土紐が盛り高くなる。表面には内側に粘土紐が盛り、4方向に橋状把手が付く。穴側、推定径：15.0cm	称名寺式期
第113図 PL.60	393	A区	蓋	口縁部片	細砂	円形の深い皿状で、下端裏面部に受け口部が突出する。表面には沈線で曲線的な文様が描かれる。推定径：19.0cm	称名寺Ⅱ式期
第113図 PL.60	394	B区	蓋	1/4	粗砂	口縁部が直立し、頸部で屈曲して下部が開く器形で、上部中央は口が開く。一対の橋状把手を乗せ、頸部下に隆帯が盛る。無文。鬼面上下軍に研磨されている。	称名寺式期
第113図 PL.60	395	B区	土製円盤		粗砂	土器片利用の不整形な土製円盤。側縁を研磨。表面に沈線で曲線的な文様が描かれ、文様内にＲＬの縄文が施される称名寺式土器。径：6.0cm	称名寺式期
第113図 PL.61	396	B区	土製円盤		粗砂	土器片利用の土製円盤。側縁を研磨。表面に沈線で曲線的な文様が描かれる称名寺式土器。径：5.4cm	称名寺式期
第113図 PL.61	397	B区	土製円盤		粗砂	土器片利用の不整形な土製円盤。側縁を丁寧に研磨。表面に沈線で文様が描かれ、文様内に刺突を施した称名寺式土器。径：4.5cm	称名寺式期
第113図 PL.61	398	B区	土製円盤		粗砂	土器片利用のやや不整形な土製円盤。側縁を丁寧に研磨。表面に沈線で文様が描かれ、文様内に刺突を施した称名寺式土器。径：4.0cm	称名寺式期
第113図 PL.61	399	B区	土製円盤	1/2	粗砂	土器片利用の土製円盤。側縁を研磨。表面は無文。径：4.2cm	称名寺式期
第113図 PL.61	400	A区	ミニチュア	底部片	粗砂	無文のミニチュア土器の底部。	称名寺式
第113図 PL.61	401	A区	土製品		細砂	小型の環状となる土製品で、無文。	称名寺式期
第113図 PL.61	402	A区	土製品	貝輪形腕飾り	粗砂	表面にＬＲの縄文を充填する。	称名寺式期
第113図 PL.61	403	B区	土製品	貝輪形腕飾り	粗砂	円形で浅い皿状。表面は無文。推定径：9.5cm	称名寺式期
第113図 PL.61	404	B区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に爪状の刺突が施される。	三十稲場式？
第113図 PL.61	405	B区	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	胴部に３条の沈線で斜位や渦状等の曲線的な文様を描き、文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第113図 PL.61	406	B区	深鉢	胴部片	細砂	胴部に条線で縦位・波状等の文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第113図 PL.61	407	B区	深鉢	口縁部片	粗砂	平口縁の口縁下に沈線で文様を描く。	称名寺Ⅱ式
第113図 PL.61	408	C区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線でＪ字状等の文様を描き、文様内にＲＬの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第113図 PL.61	409	C区	深鉢	胴部片	細砂	胴部の文様内にＬＲの縄文を充填する。	称名寺Ⅱ式
第113図 PL.61	410	C区	深鉢	胴部片	粗砂	胴部に沈線で文様を描く。	称名寺式

第27表　遺構外出土石器観察表

図版番号 図版番号	遺物 番号	器種	形態・素材	出土地区	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	使用状況・製作状況	石材
第114図 PL.61	1	打製石斧	短冊型	C区	11.2	4.9	2.7	176.7	未製品。やや平面で、器肉は厚い。加工は形状作出段階に止まり、敲石加工には及んでいない。	黒色頁岩
第114図 PL.61	2	打製石斧	短冊型	B区	11.5	4.9	3.1	169.0	完成状態？やや平面で、刃部加工は器軸に並行。敲状剥離様を呈する。刃部角は浅い。穂の摩耗等は見られない。	黒色頁岩
第114図 PL.61	3	打製石斧	分銅型	A－1区	9.5	7.2	1.7	152.8	完成状態？扁化して不明瞭だが、側縁のエッジは摩耗するように見える。被熱。	細粒輝石安山岩
第114図 PL.61	4	磨製石斧	定角式	B区	(5.0)	(4.1)	(3.0)	91.2	全面が研磨され、光沢を帯びる。頭部破片。	変玄武岩
第114図 PL.61	5	石鏃	凸基有茎鏃	B区	(1.9)	1.3	0.3	0.9	未製品。周辺加工して概形を作出する。基部を欠損。	黒色安山岩
第114図 PL.61	6	有茎尖頭器		A－1区	(3.7)	1.7	0.6	2.9	完成状態？器体全面を丁寧な剥離が覆う。基部折断面の打点は不明瞭だが、その端部はヒンジ状を呈する。これに似た碎片類はなく、意図的製作したものとは思われない。	珪質頁岩
第114図 PL.61	7	石鏃	横型	B区	3.0	5.0	0.7	8.6	幅広剥片を縦位に用い、周辺加工して器体を作出する。刃部は弱く弧状を呈する。	チャート
第114図 PL.61	8	石鏃？	斜め	B区	1.8	3.0	0.4	1.8	サイズ的に見て、途中石鏃の製作を放棄して、「摘み部」を作出し、石錐としたものか。	黒色安山岩
第114図 PL.61	9	敲石	棒状礫	B区	(10.2)	(6.1)	(4.9)	385.0	小口部上端に敲打痕があるほか、背面が著しく摩耗して穂が形成されている。	変質安山岩
第114図 PL.61	10	敲石	棒状礫	B区	11.6	6.3	4.9	226.7	背面上端側に敲打痕、下端側に横位線条痕が残る。	細粒輝石安山岩
第114図 PL.61	11	敲石	打製石斧？	B区	15.3	8.5	3.8	587.6	打製石斧製作の初期段階で破損した加工剥片の小口部エッジが激しく摩耗する。敲打具として再利用したものか。	細粒輝石安山岩
第114図 PL.61	12	磨石	扁平棒状礫	C区	(6.4)	(6.4)	(3.0)	195.8	背面側が摩耗する。器体下端側を大きく欠損する。	粗粒輝石安山岩
第114図 PL.61	13	砥石	礫砥石	A－1区	5.5	4.3	1.5	47.6	背面側に線条痕を伴う研磨面がある。	珪質頁岩
第114図 PL.61	14	砥石	礫砥石	C区	11.5	4.6	3.8	301.5	裏面側を除く各面に面取り様の平坦面が形成されている。これに伴う線条痕は不明瞭。小口部に敲打痕が残る。	流紋岩

図版番号 図版番号	遺物 番号	器種	形態・素材	出土地区	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	使用状況・製作状況	石材
第114図 PL.61	15	石棒?	角柱状	B区	(12.5)	8.5	5.6	857.4	柱状に面取り整形して石棒状の器体を作出する。背面上端側が敲打され、浅く窪む。石棒の未製品か。	和松輝石安山岩
第114図 PL.61	16	多孔石	大型楕円礫	A－1区	32.7	32.4	18.5	17,890.0	背面側中央が浅く窪み、その周辺に孔を穿つ。裏面側に孔多数を穿ち、蜂の巣状を呈する。	和松輝石安山岩
第114図 PL.61	17	磨製石鏃	柳葉	A－1区	(3.9)	(2.3)	0.4	4.0	基部側に径2mmの孔を片側穿孔する。孔を頂点に基部側に向い浅く研ぎ澄め、装着部とする。	黒色頁岩
第114図 PL.61	18	石皿	有縁	B区	(8.0)	(8.3)	(5.4)	1,390.7	背面側・左側面が敲打され、アバラ状を呈する。状況的に見て石皿の未製品とするのが妥当だろう。裏面側に漏斗状の孔を穿つ。被熱して爆ける。	和松輝石安山岩
PL.61	19	打製石斧	短冊型	A－1区	9.3	3.8	1.2	54.0	完成状態。側縁に著しい摩耗痕が残る。刃部破損。	黒色頁岩
PL.61	20	打製石斧	短冊型	B区	(6.4)	4.3	1.0	38.9	未製品？加工は？軍だが、剥離面はシャープで摩耗痕等は見られない。上半部を欠損する。	ホルンフェルス
PL.61	21	打製石斧	短冊型	B区	10.1	4.3	1.4	73.4	完成状態。刃部摩耗が著しく、この刃部摩耗を切り、側縁加工が施されている。	黒色頁岩
PL.61	22	打製石斧	短冊型	A－1区	11.7	5.0	1.8	126.0	完成状態。刃部摩耗がある。側縁のエッジはシャープで、擦痕痕は見られない。	黒色頁岩
PL.61	23	打製石斧	短冊型	C区	(9.8)	4.6	1.4	67.1	完成状態？風化が強く、刃部摩耗・擦痕痕等は不明瞭。縦線の装着部に幅広の刃部が付く。	細粒輝石安山岩
PL.61	24	打製石斧	撥型？	A－1区	8.9	5.1	2.0	101.7	完成状態？両側縁のエッジを整える程度に浅く加工。刃部加工は見られない。裏面側は礫面で、未加工。	黒色頁岩
PL.61	25	打製石斧	短冊型？	A－1区	(8.9)	6.9	1.8	120.1	完成状態。左辺側刃部に摩耗痕が残る。右辺側刃部・上半部を欠損する。	細粒輝石安山岩
PL.61	26	打製石斧	撥型？	C区	13.6	8.3	2.5	338.2	完成状態。風化して不明瞭だが、刃部摩耗は確実。側縁は「ハ」字状に大きく開き、弧状の刃部に続く。	細粒輝石安山岩
PL.62	27	打製石斧	短冊型	A－1区	13.0	6.0	2.8	247.2	未製品。加工は概形を作出した段階に止まり、最終調整に及んでいない。	黒色頁岩
PL.62	28	打製石斧	短冊型	B区	13.2	6.0	2.9	254.8	未製品？両側縁は潰れて装着可能な状態だが、刃部エッジはシャープである。形態的には対称性に欠ける。	細粒輝石安山岩
PL.62	29	打製石斧	短冊型	B区	11.5	6.5	2.1	171.5	完成状態？風化が強く、刃部摩耗等は不明瞭。	ホルンフェルス
PL.62	30	打製石斧	分銅型？	A－1区	(10.8)	8.1	3.0	340.3	完成状態？大型で、棒状の着柄部に幅広の身は付く タイプの石斧。両側縁のエッジはシャープで、摩耗は見られないが、刃部は明らかに内加工されている。	細粒輝石安山岩
PL.62	31	打製石斧	分銅型	C区	10.7	5.2	2.2	118.7	未製品？上端部が厚すぎ、刃部が不確部に想定するのが妥当だが、幅が狭く大きく変形している。刃部摩耗・側縁の摩耗等は見られない。	ホルンフェルス
PL.62	32	打製石斧	分銅型	B区	8.7	7.0	1.8	121.5	完成状態。刃部が弱く摩耗する。糸巻状を呈する。	細粒輝石安山岩
PL.62	33	打製石斧	分銅型	A－1区	10.4	7.2	1.5	160.0	完成状態。両側縁に顕著な擦痕痕。刃部角生若干、形状は糸巻状を呈する。	細粒輝石安山岩
PL.62	34	打製石斧	分銅型	A－1区	9.2	5.7	2.0	112.3	完成状態。リダクション等で小型化したものと捉えておきたいが、明瞭な刃部摩耗・擦痕痕は見られず、使用されたものか判断が難しい。	黒色安山岩
PL.62	35	打製石斧	分銅型	B区	(5.5)	(6.5)	(1.7)	69.1	完成状態。両側縁に擦痕痕が著しい。下半側を欠損する。	ホルンフェルス
PL.62	36	打製石斧	分銅型	B区	13.1	8.1	1.7	204.8	完成状態。両側縁は著しく摩耗する。上端側刃部は再加工され、変形する。	細粒輝石安山岩
PL.62	37	打製石斧	分銅型	B区	13.1	7.8	2.5	244.6	完成状態。両側縁が摩耗するほか、刃部にも弱い摩耗痕。	ホルンフェルス
PL.62	38	打製石斧	分銅型	B区	(7.3)	8.5	1.9	132.1	完成状態。刃部が弱く摩耗する。大きく着柄部を抉る。	黒色頁岩
PL.62	39	石鏃	不明	B区	3.1	2.4	1.0	6.7	未製品。先端部の形状から石鏃の製作意図を看取することができるが、素材の厚味を減じることができず、製作を放棄したもの。	チャート
PL.62	40	石鏃	凸基有茎鏃	B区	2.4	2.0	0.4	2.3	未製品。加工が粗く、概形作出も不十分。基部欠損。	チャート
PL.62	41	石鏃	平基無茎鏃	A－1区	2.6	1.7	0.4	1.5	完成状態？概形作出には成功しているが、側縁に素材平坦面が残り、基部は不規則に窄み、当初の意図に反する出来栄え。	チャート
PL.62	42	石鏃	平基無茎鏃	B区	(4.9)	4.1	0.5	2.7	完成状態？やや大形で加工が全面を覆う。厚味が取り切れていないようである。	黒色安山岩
PL.62	43	石鏃	凹基無茎鏃	C区	2.7	1.6	0.4	1.3	完成状態。押圧剥離が器体全面を覆う。	チャート
PL.62	44	石鏃	凹基無茎鏃	A－1区	1.9	1.6	0.5	1.4	未製品？基部を狙く抉り、先端は破損したことが原因して、五角形状を呈する。	チャート
PL.62	45	石鏃	凹基無茎鏃	A－2区	(4.9)	4.3	0.5	2.9	未製品。粗い加工が全面を覆う。	珪質頁岩
PL.62	46	石鏃	凹基無茎鏃	B区	5.8	4.0	0.4	2.3	未製品。粗い加工を施し、石鏃の外形を作出した段階で破損した可能性が高い。	黒色安山岩
PL.62	47	石鏃	凹基無茎鏃	B区	6.7	(4.2)	0.6	2.6	未製品。周辺加工で概形を作出。左辺側「返し部」を欠損した段階で製作を放棄。	黒色安山岩
PL.62	48	石鏃	凹基無茎鏃	B区	(4.6)	4.8	0.3	2.4	未製品。加工は？軍で、完成状態に近い。右端先端部を欠損する。	黒色安山岩
PL.62	49	石鏃	凹基無茎鏃	B区	(0.7)	1.1	0.2	0.2	未製品。加工は粗い。概形作出段階で、先端側を破損。	チャート
PL.62	50	石鏃	凹基無茎鏃	A－1区	(2.0)	(1.6)	0.3	0.5	未製品。右辺側「返し部」を破損。基部は大きくノッチ状に抉り込まれており、破損したのち当初より小形の石鏃に再生しようとしたものか。	黒曜石
PL.62	51	石錐	小形剥片	B区	(6.3)	2.7	0.5	2.7	背面側剥離面の稜を利用して、裏面側を加工して機能部を作出する。「摘み部」は特に作出されていない。	黒色頁岩
PL.62	52	石錐	小形剥片	B区	(5.8)	4.5	0.7	4.4	機能部を根元から破損。全体形状は不明。	黒色安山岩
PL.62	53	石錐		A－1区	(3.5)	4.3	1.2	13.3	機能部を根元から破損。全体形状は不明。表裏面とも被熱剥離する。	黒色頁岩
PL.62	54	打製石斧	短冊型	B区	(3.6)	3.1	1.8	12.8	未製品。側縁加工は両極剥離気味で、対向する剥離面が形成されている。頭部破片。	黒色安山岩

図版番号 図版番号	遺物 番号	器種	形態・素材	出土地区	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	使用状況・製作状況	石材
PL.62	55	楔形石器	小形剥片	A－1区	3.4	4.1	0.6	13.1	表裏面とも器体長軸に対抗する剥離面がある。剥離は素材の厚味を減じるためのもの。	黒色頁岩
PL.62	56	楔形石器	幅広剥片	B区	4.2	5.2	1.8	57.1	表裏面とも対向する剥離面が特徴的。力最剥離を適用したものだが、形態的には行製石斧の製作を指向しているように見える。	黒色頁岩
PL.62	57	削器	幅広剥片	C区	5.8	4.5	1.8	57.4	右側縁に潰敲する小剥離痕、背面側表面に対向する剥離面を有する両極剥片を用いる。	黒色頁岩
PL.62	58	楔形石器	小形剥片	B区	5.6	6.9	0.7	7.7	表裏面とも対向剥離が特徴的。石斧の調整剥片に似る。	黒色安山岩
PL.62	59	石核	盤状剥片	B区	6.1	8.6	3.3	254.5	厚さ3cm強を測る盤状石核。表裏面で小形幅広剥片を剥離する。両側縁に礫面が残る。	黒色安山岩
PL.62	60	凹石	扁平楕円礫	A－1区	12.3	8.3	3.4	555.0	表裏面とも集合打痕を伴う摩耗痕が著しい。両側縁は敲打され、平坦面が形成されている。	粗粒輝石安山岩
PL.62	61	凹石	楕円礫	C区	9.4	8.3	5.5	605.2	表裏面とも摩耗するほか、背面側に敲打痕が残る。	粗粒輝石安山岩
PL.62	62	凹石	楕円礫	A－2区	10.7	10.0	4.5	571.2	背面側中央付近に稜と状の孔1、礫面に打痕がある。	粗粒輝石安山岩
PL.62	63	凹石	楕円礫	B区	10.8	9.3	5.1	717.8	表裏面とも摩耗するほか、集合打痕がある。	粗粒輝石安山岩
PL.63	64	凹石	扁平楕円礫	A－1区	(7.8)	8.2	4.5	412.2	表裏面とも浅い漏斗状の孔があるほか、摩耗が著しい。側縁・小口部に打痕があり、平坦面を形成する。被熱破損。	粗粒輝石安山岩
PL.63	65	凹石	楕円礫	B区	15.5	6.8	5.4	871.3	表裏面とも漏斗状の孔4が重なるようにある。小口部・両側縁に敲打痕がある。	粗粒輝石安山岩
PL.63	66	磨石	扁平楕円礫	B区	13.1	8.5	4.0	655.2	背面側が摩耗、小口部上端に敲打・摩耗痕が著しい。	粗粒輝石安山岩
PL.63	67	磨石	扁平楕円礫	B区	12.2	8.1	4.5	644.3	表裏面とも摩耗するほか、石辺側が激しく使い込まれ稜が形成されている。	粗粒輝石安山岩
PL.63	68	磨石	扁平楕円礫	C区	12.7	7.7	3.4	557.5	表裏面とも摩耗痕がある。被熱破損。	粗粒輝石安山岩
PL.63	69	磨石	扁平楕円礫	A－1区	(9.8)	9.1	4.5	577.3	表裏面とも摩耗するほか、側縁の敲打痕が著しい。	粗粒輝石安山岩
PL.63	70	磨石	球形礫	B区	9.3	8.0	7.1	761.5	背面側の摩耗が著しい。裏面側は被熱して赤化。	粗粒輝石安山岩
PL.63	71	磨石	球形礫	B区	9.6	8.8	8.1	967.5	全面摩耗するほか、部分的に敲打痕が残る。被熱。	粗粒輝石安山岩
PL.63	72	敲石	棒状礫	A－1区	12.5	5.4	4.0	327.8	小口部・側縁に敲打痕。被熱してひび割れる。	粗粒輝石安山岩
PL.63	73	敲石	扁平礫	C区	(4.8)	(4.4)	2.2	53.5	小口部上端に敲打痕がある。敲打痕は平坦面を形成し、大きな力で加撃するものではない。	黒色頁岩
PL.63	74	石皿？	扁平楕円礫	B区	16.4	16.0	6.0	2,546.2	背面側中央に著しい摩耗面がある。磨石とするには大型で誤った使用法を想定するのが妥当で、石皿と捉えた。	粗粒輝石安山岩
PL.63	75	石皿	有縁？	A－1区	(11.1)	(11.5)	(4.7)	765.2	体部側縁破片。裏面側に径7mmの小孔2がある。	粗粒輝石安山岩
PL.63	76	台石	扁平礫	B区	16.6	14.8	5.9	2,021.0	背面側礫面中央付近の平坦面に敲打痕が集中する。	粗粒輝石安山岩
PL.63	77	石皿	有縁？	A－1区	(12.2)	(10.2)	7.7	1,045.8	体部破片。使用面に1cm弱の小孔2がある。	粗粒輝石安山岩
PL.63	78	多孔石	大型楕円礫	B区	19.6	15.2	10.5	4,102.9	表裏面の平坦面に孔多数を穿つ。被熱して赤化が著しく、若干ひび割れる。	粗粒輝石安山岩
PL.63	79	多孔石	大型楕円礫	B区	36.5	23.1	13.2	13,180.0	背面側稜上に孔3、裏面側礫面の上端側に孔1を穿つ。	粗粒輝石安山岩
PL.63	80	多孔石	大型楕円礫	C区	47.7	30.3	24.7	35,920.0	背面側稜上に漏斗状の孔多数を穿つ。	粗粒輝石安山岩
PL.63	81	多孔石	大形扁平礫	B区	25.2	21.6	8.8	6,660.0	表裏面とも稜の巣状に孔を穿つ。孔の形状は漏斗状のものが少なく、孔の形状は縦して不安定。	粗粒輝石安山岩
PL.63	82	多孔石	大型楕円礫	A－1区	22.0	17.4	14.1	6,590.0	背面側の漏斗状の孔9を穿つ。	粗粒輝石安山岩
PL.63	83	石製品	草鞋状	A－2区	9.1	8.0	1.9	36.9	表裏面・両側縁とも平坦に整形、草鞋状に形状を整え、多孔質石材を用いており、整形痕は観察できない。軽石は黄白色を呈す。大朔大砂流起源。	軽石
PL.63	84	石棒？	棒状礫	A－1区	(13.1)	5.3	5.3	444.8	破損部が大部分で、礫面の状態は不明。	緑色片岩

第28表　3号住居出土遺物観察表

図版番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率		計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第116図 PL.64	1	土師器 杯	埋没土 1/2	口	12.8	高	－	細砂粒・角閃石/酸化/良好/にぶい赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間は指先の押圧。内面は撫で。	
第116図 PL.64	2	土師器 杯	埋没土 口縁部片	口	11.6	高	－	細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間は雑な撫で。内面は撫で。	
第116図 PL.64	3	須恵器 甕	覆埋没土、 貯蔵穴底面上17cm 体部～底部片	底	6.0	高	－	細砂粒/還元/灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り無調整。	
第116図 PL.64	4	須恵器 椀	覆埋没土、床上16cm 口縁～体部片	口	15.7	高	－	細砂粒/還元/灰	ロクロ整形(右回転)。体部の張りが強い。	
第116図 PL.64	5	土師器 甕	埋没土 口縁～胴部片	口	20.7	高	－	細砂粒・角閃石/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。胴部外面はヘラ削り。内面は撫で。	外面厚減

第29表　3号溝出土遺物観察表

図版番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率		計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第118図 PL.64	1	土師器 杯	表採、埋没土 口縁～部欠	口	12.9	高	3.3	細砂粒・輝石/良好/にぶい橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間は雑な撫で。内面は丁寧な撫で。	
第118図 PL.64	2	土師器 杯	埋没土 3/4	口	12.7	高	3.6	細砂粒・輝石/良好/にぶい赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間は雑な撫で。内面は丁寧な撫で。	
第118図 PL.64	3	須恵器 椀	埋没土 口縁～部欠	口 底	13.3 7.3	高	4.1	細砂粒/還元/灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り無調整。	内外面わずかに摩滅
第118図 PL.64	4	須恵器 甕	埋没土 肩部片	口 底	－	高	－	細砂粒/還元/灰	叩き整形。外面は平行叩き、内面は青海波文。	

第30表　5号竪穴状遺構出土石器観察表

図版番号 図版番号	遺物番号	器種	形態・素材	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	使用状況・製作状況	石材
第123図 PL.64	1	砥石	切り砥石	埋没土	(10.7)	3.9	5.8	332.9	四面使用。背面側は著しく研ぎ減る。裏面側に部分的な面取り整形痕が残る。	砥沢石

第31図　6号竪穴状遺構出土金属製品観察表

図版番号 図版番号	遺物番号	種類 器種	出土位置 残存率	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第124図 PL.64	1	金属製品 鉄斧	埋没土 ほぼ完形	8.9	4.5	2.8	162.5	メタルが中心部に残存するが劣化が著しく脆弱	刃状に広がる刃部を持つ斧で柄装着部は、幅2.4・厚さ1.6・深さ3cmの方形の孔になっている。柄の木質は残存していない。刃先はこの柄孔の軸方向に対し約13℃の傾斜を持つ。	

第32表　遺構外出土遺物観察表

図版番号 図版番号	遺物番号	種類 器種	出土位置 残存率	計測値					胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘　要
第130図 PL.64	1	土師器 杯	埋没土 1/2	口底	11.5 8.2	高	2.9	細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部は横撫で。体部外面は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は丁寧な撫で。	底部やや摩滅
第130図 PL.64	2	須恵器 椀	埋没土 1/4	口底	10.8 5.9	高	4.6	細砂粒/還元/灰	ロクロ整形(回転方向不明)。高台は付高台でシャープな作り。	底部から体部外面に自然釉
第130図 PL.64	3	常滑陶器 甕か	埋没土 体部下位片か	口底	-	高	-	にぶい赤褐	断面は灰色。器表はにぶい赤褐色。内面は斑状に灰釉かかる。外面に叩き目。外面に帯状多段に叩き目を施す段階の製品か。	中世。
第130図 PL.64	4	中国白磁 皿	埋没土 底部片	口底	-	高	-	白	底部外面施釉の工℃白磁皿。底部内面周縁に横線。	森田分類A群。 13世紀中頃～14世紀前半。
第130図 PL.64	5	龍泉窯系 青磁 碗	埋没土 底部片	口底	-	高	-		鎬蓮弁文碗。釉はやや厚く、貫入が入る。	Ⅱ-b・c類。13世紀前後から14世紀初頭前後。
第130図 PL.64	6	製作地不詳陶器 不詳	表土 口縁部片	口底	-	高	-	灰	胎土・焼成共に須恵に近い。口縁部は外反した後に上方に立ち上げ、受け口状をなす。	7と同一個体か。中世。
第130図 PL.64	7	製作地不詳陶器片 口鉢か	埋没土 体部片	口底	-	高	-	灰	胎土・焼成共に須恵に近い。口縁部は外反。口縁部は横撫で。体部外面は撫でで、櫛状施設が残る。体部内面は使用により平滑となる。	6と同一個体か。中世。
第130図 PL.64	8	須恵陶器 甕	表土 体部片	口底	-	高	-	灰	外面に叩き目。	9と同一個体か。12世紀～13世紀初頭。
第130図 PL.64	9	須恵陶器 甕	表土 体部片	口底	-	高	-	灰	外面に叩き目。	8と同一個体か。12世紀～13世紀初頭。
第130図 PL.64	10	常滑陶器 片口鉢	埋没土 片口部片	口底	-	高	-	にぶい赤褐	断面は暗灰色、器表はにぶい赤褐色。外面は上端から2cmほどのみ回転横撫で。口縁部外面は窄む。口縁端部内面は薄く小さく突き出る。端部上面は内面よりがやや窄む。	片口鉢Ⅱ類。14世紀前半～中頃。
第130図 PL.64	11	在地系土器 皿	表土 1/4	口底	(11.1) (8.2)	高	2.2	浅黄橙	器壁はやや厚い。底部回転糸切無調整。	江戸時代。

第33表　遺構外出土石器観察表

図版番号 図版番号	遺物番号	器種	形態・素材	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	使用状況・製作状況	石材
第130図 PL.64	1	砥石	切り砥石	B区表土	(6.6)	3.2	3.2	111.7	背面側を除いて整形痕が残る。背面側は良く使い込まれ、研ぎ減る。	砥沢石
第130図 PL.64	2	砥石	切り砥石	B区表土	(7.0)	3.6	1.1	48.1	四面使用？背面側・右側面に砥面が残る。裏面側を部理面で欠く。上端側小口に切断痕が残る。	砥沢石